

日英村落共同墓地史の対比研究

高橋基泰 著

愛媛大学法文学部総合政策学科

日英村落共同墓地史の対比研究

高橋基泰 著

愛媛大学法文学部総合政策学科

はじめに

本書は、日英村落史的対比研究の一環として、英国・ケンブリッジ州ウイリントンガム教区と日本・旧上田藩上塩尻村の共同墓地・墓相に焦点をあて、対比研究の成果公表の一部であるとともに、その推進を助ける役割を果たす。とくに、現在準備中である、研究グループによる『近世日本における市場経済化と村落の共同性－近世上田領上塩尻村の総合研究Ⅱ－』および拙著『近世英国村落社会経済史：村の相伝・対比研究編(仮)』に収録し得ない基礎データを提供する意義を有するものでもある。本経済学叢書シリーズでの拙著第18巻および第19巻と同様、新たなデータの意義づけをするために、旧稿から対応する部分を引用し編集している。引用している部分は以下の通りになる。文脈に沿わせるために、字句の表現など直している部分もあることをあらかじめお断りしておく。

ここでは、著者がこれまでおこなってきた家系譜の分析から必然となった葬儀組合、そして共同墓地および石塔群について検討することになる。従来の研究では、モノグラフとして村落の文脈で時系列的に各家・同族の状況をたどったものをほとんど見ない。それは、すでに上記経済学研究叢書第18巻（『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』）で提示したように、これまで史料として家系図が、あるいはデータとして家系情報が十分に活用されてこなかったことに原因の1つがあると思われる。家系図・家系情報も教区登録簿や宗門改帳などの関連史料・データを併せて用いる事で、家の存続・「家名」継承のための時代毎の対応を明らかにする道筋がある。とくに、葬儀組合の事例が示すように村落の共同性が発揮される場合でも、一方では家・同族のその時々「都合」を抜きにはありえなかった事も確認できる。

本研究では主として国内で、国外でも必要に応じて、家系図調査を含めた集約的聞き取り調査結果を利用し、また適宜追加調査を実施した。研究対象時期は原則として19世紀までとしているが、やはり個々の家族の事情に立ち入るこ

ともあり、きわめてデリケートな調査であるという認識を研究チーム全体で共有している。そのため、研究の実施に際し、現地共同研究者と共に個人情報保護に関する諸法令を遵守して守秘義務を徹底し、当該研究以外の目的では収集情報を利用しないことなど、調査対象者の人権・利益保護を最大限に尊重することを申し合わせて研究を遂行してきたことを確認したい。

序論では、日英村落史的対比研究のための方法および方法論を提示し、ここであつかう共同墓地・墓相に関する分析が研究全体のどういった部分に焦点をあてているのかを示す。第1章では、英国教区における共同墓地および葬儀組合としてのギルドのあり方について村落コミュニティのあり方とその学説史を概観する。第2章で日本の旧上田藩上塩尻村の共同墓地の歴史的背景とその態様類型を旧上田藩各村の悉皆調査の中で確定する。第3章では、上塩尻村内にある大小8つの共同墓地とそこにおける同族毎のまとまりに着目し、家系譜との照合をおこなう。そして第4章では墓相に立ち入って、同族毎の特性を明らかにする。

初出一覧：

序論：「日英村落史的対比研究方法論・2011」、『東北学院大学経済学論集』、177、2011年

第1章：「共同墓地から見た近世・近代期イギリス教区・コミュニティ・住民自治－日本の事例との比較を前提に－」コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』、第6号、2007年

第2章：「旧上田藩領各村共同墓地考」『国際比較研究』10、2014年

第3章 共同墓地概観：『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』愛媛大学経済学研究叢書18、2014年、第6章（136～40頁）他は書き下ろし

第4章・結論 書き下ろし

本叢書に用いられた史資料・データは、現地の人々の全面的なご協力なしでは得られなかった。英国では、ケンブリッジ州ウィリンガム教区教会役人の方々、日本では長野県上田市上塩尻村今昔の会の方々、なかんずく山崎忠男氏のご尽力にはあらためて感謝の意を表したい。さらに大河原地区、通称「あらや」での葬儀組合「おまるめ（墓掘仲間）」の現在まで残る会合に参加する便

はじめに

直を図っていただくなど、同地区春原祐治氏にも、ひとかたならぬお世話になった。くわえて、上田市博物館前館長の林和男氏には、早春の嵐を交えた3日間の旧上田藩領内各村共同墓地悉皆調査でご教導いただいたこと、この場を借りて謝辞に替えさせていただく。

他方、勤務先の先任で、現地調査のための出張経費など何かとお心遣いをいただいた松井隆幸教授、ならびに墓地関係の公刊書で手に入りにくいものについてご蔵書を適宜利用させていただいた竹内康博教授には心よりお礼申し上げます。

また、一連の墓相地図の作成には、作成時愛媛大学法文学部総合政策学科国際比較プロジェクト・アシスタントであった宮本裕子さんに大きく負っている。データ作成をしていただいたプロジェクト・アシスタント吉岡智子さんおよび砂野克美さんともに深く感謝する次第である。

なお、本叢書は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B（海外学術調査）「家・家族・世帯の『家計』に関する日欧地域史的実証対比研究」（課題番号：25301030；研究代表者：高橋基泰）平成25～27年度、および著者が連携研究者である基盤研究B（海外学術調査）「市場経済形成期における村落の共同性の社会経済史的比較研究－日本とバリー」（課題番号：25301028；東北大学大学院経済学研究科教授・長谷部弘）平成25～28年度ならびに基盤研究C「近世日本における災害甘受型防災機構の社会経済史的研究－信濃川流域を事例として－」（課題番号：25380419；東北大学大学院経済学研究科教授・長谷部弘）平成25～27年度、の成果公表の一部をなす。本叢書の公刊にあたり、勤務先である愛媛大学法文学部総合政策学科の共通経費による支援を受けたことに謝意を表する次第である。

2015年3月11日

高橋 基泰

目 次

はじめに	i
目 次	v
図表目次	vi
序 論	1
1 方法	2
2 方法論	4
3 学説史概観	15
第1章 共同墓地から見た近世期イギリス教区・コミュニティ	25
1 研究小史および対象概観	27
2 共同墓地からみたコミュニティ	33
3 中世教区宗教ギルド以来の埋葬・墓地	46
第2章 旧上田藩領各村共同墓地考	61
旧上田藩領共同墓地調査	62
第3章 上塩尻村同族と共同墓地：蚕種がつくった墓群	77
上塩尻村における共同墓地の分布	78
第4章 上塩尻村石塔・墓相分析	107
1 墓石の形態	113
2 戒名	114
3 家名と墓石	115
4 個別マケ分析	116
結 論	150
付録表 上塩尻村近世期石塔データ	152

図 表 目 次

第1章 共同墓地から見た近世期イギリス教区・コミュニティ

地図1-1	ウィリンガム教区と教区教会	32
図1-1	ケンブリッジ州ウィリンガム教区共同墓地模式図：聖別版	34
図1-2	ウィリンガム教区共同墓地模式図：非聖別版	34
表1-1	ウィリンガム教区共同墓地埋葬記録（第1集）： Few家の事例	43
表1-2	ウィリンガム教区共同墓地埋葬記録（第1集）： Ingle家の事例	45
表1-3	ウィリンガム教区遺言書に見られる宗教・教会・ 慈善への言及	49

第2章 旧上田藩領各村共同墓地考

地図2-1	旧上田藩領各村共同墓地分布	63
-------	---------------	----

第3章 上塩尻村同族と共同墓地：蚕種がつくった墓群

地図3-1	上塩尻村宗教的施設他地図	79
図3-1	上塩尻共同墓地模式図	80
図3-2	佐藤家1	82
図3-3	佐藤家2	84
図3-4	山崎家1	86
図3-5	山崎家2（忠ノ丞）	88
図3-6	清水家1	88
図3-7	清水家2	90
図3-8	清水家3	92
図3-9	馬場家1	92
図3-10	馬場家2	94
図3-11	馬場家3	94
図3-12	原家	96
図3-13	春原家1	98
図3-14	春原家2（大河原）	98

図 3 - 15	春原家 3 (大河原)	100
図 3 - 16	春原家	100
図 3 - 17	滝澤・塚田家	101
図 3 - 18	小祝家・別系統山崎家・高遠家	102
図 3 - 19	北澤家・菅沼家	104
図 3 - 20	小宮山家	105
図 3 - 21	山崎家 3 (辰ノ口)	106
図 3 - 22	山崎家 4 (辰ノ口)	106

第 4 章 上塩尻村石塔・墓相分析

表 4 - 1	上塩尻村石塔 - 形状年代順	108
表 4 - 2	上塩尻村童子墓 - 形状年代順	110
図 4 - 1	墓相・佐藤家 1	118
図 4 - 2	墓相・佐藤家 2	120
図 4 - 3	墓相・山崎家 1 (東川原)	124
図 4 - 4	墓相・山崎家 2 (忠ノ丞)	126
図 4 - 5	墓相・清水家 1	128
図 4 - 6	墓相・清水家 2	130
図 4 - 7	墓相・清水家 3	132
図 4 - 8	墓相・馬場家 1	134
図 4 - 9	墓相・馬場家 2	136
図 4 - 10	墓相・馬場家 3	138
図 4 - 11	墓相・原家	140
図 4 - 12	墓相・春原家 1 (東川原)	142
図 4 - 13	墓相・春原家 2 (大河原)	144
図 4 - 14	墓相・春原家 3 (大河原)	146

付録表	上塩尻村近世期石塔データ	152
-----	--------------	-----

序 論

はじめに

本論は、著者が取り組む日英村落史的対比研究において、どのような方法と分析視角を用いるかを考究する¹⁾。その対比（parallel and contrast）研究では、相違の強調をする比較ではなく、相似を見出そうという姿勢をとる。これまで日本と英国双方の研究チームを組織し、その対話を通じて日本では、本モノグラフの対象である旧上田藩上塩尻村を、英国ではケンブリッジ州ウィリンガム教区を中心に研究が進行中である。本書は、とくに考察対象を共同墓地および墓相に限定しているが、今後著される論考とは方法および分析視角において共通することになる。

この日英村落の対比研究という方法は、元来、対象同士に異なる特徴を見出すことにはではなく、むしろ相互の独自性を認めた上で相互の相違・共通性を発見していこうという問題意識に由来するものである。人は違う点よりも共通する・似ている点の方が多いからである。比較して優劣を競うものではなく、対比による認識の共有・相互理解を通して創造にむすびつけるものになることを望んでいる。

1) 日英村落それぞれのモノグラフはすでに、日本では最近モノグラフシリーズの第1巻および別巻を刊行した上塩尻村研究グループ（長谷部弘・高橋基泰・山内太編著『近世日本の地域社会と共同性－近世上田領上塩尻村の総合研究Ⅰ－』刀水書房、2009年；同編著『飢饉・市場経済・村落社会－天保の凶作からみた上塩尻村－』刀水書房、2010年、英国では拙著『村の相伝：近代英国編－親族構造・相続慣行・世代継承－』（刀水書房、1999年）がある。

1 方 法

ここではまず、方法を示し、日英対比という点でどのような基準を持ち込むかを簡単に整理する。その上で、よってきたるところを方法論およびその背景となる学説史概観として述べていきたい。具体的手順としては2段階になる。まず第1段階としていわゆるモノグラフの叙述。通史および社会経済史を描く。次いで、第2段階としてそれぞれのモノグラフをもとに対比用のフレームワーク（準拠枠）にあてはめる。そこで見出される事柄を、共通・相似・相違の順で叙述する。

第1段階：一般的叙述（通史・モノグラフ）

ここでは、束ねれば人々の生活風景そのもの、あるいは生活世界ということになるであろうが、項目として個別に見ていくと一般に用いられている事柄である。

- ・ 人間
- ・ 人間集団
- ・ 領主
- ・ (物理的な) 家屋
- ・ 共同利益地ないし共有地（入会地）
- ・ 集落そのもの
- ・ 自然環境
- ・ 社会・経済組織
- ・ 親族集団
- ・ 相続・相続慣行

これらを一般的な対照表にする本書結論のようになるのである。

第2段階：対比可能なフレームワークにあてはめ、共通・相似・相違の順に叙述

これらの事象を、対比可能な一定のフレームワークにあてはめる。この場合、上塩尻研究を通じて醸成され、長谷部弘氏により整理された、行政・経済・社

会それぞれの側面における村落の共同性の多層性を前提とした準拠枠を援用するのが、最も適合的である。

「村落的共同性の三層構造」－比較研究の基準として－

〔A〕層：領主支配に関わる村落行政・社会生活

- ・村請制＝領主の「支配行政」に関わる「自治」組織
- ・特徴：領主から観た村落の共同構造、行政空間的まとまり
- 〔B〕層：経済生活（生業）における経済的「共同性」
- ・耕地・山林・河川・海の利用（労働）と保全→機能ごとの家連合
- ・機能組織の文化拡張 〔A〕層の行政空間に収まらないネットワーク
- ・市場経済対応性→市場対応型生業における家連合
- ・市場対応組織の共同性、自然環境と人間労働の「物権化」「債権化」
- ・「生業」の市場経済的処理→「家計」と「家」の一般的成立
- 〔C〕層：同族の家連合集団における「私」的「共同性」
- ・「血縁」原理→家（家族）と同族→同心円的家連合
- ・本家と分家の同族組織、婚姻を仲立ちとする姻戚関係²⁾

これでもって、対象とその文脈を対比する。第1段階での理解をさらに高次の観点から再検討し、新たな知見を得ることを期待できる。とくに本書では、〔C〕層の「血縁」原理の家族に関する共同性に焦点をあてた叙述になるのである。

対比研究は、互いの歴史的現実を互いに理解し合うための技法であり、既存・既知史料の新解釈・再活用に始まる広義のコミュニケーションである。広義のコミュニケーションというのは、進行する市場経済化とそれに対応する人と人とのつながりについて共感をうながすからであり、互いの歴史的独自性を尊重し理解するための技法を身につける筋道を示すからである。さらに、対比研究は、相手との「翻訳」可能性を最大限に利用する。「翻訳」はそれぞれの「現実」についての認識を深める。そして、相手を理解していることを伝えるため

2) 長谷部弘「村の再編－近世村落から近代村落へ」日本村落研究会年報『村落社会研究 50 市町村合併と村の再編－その歴史的变化と連続性』第一章、農文協、2014年、41頁。

に、各対象において、既知・既存のものを最適の組み合わせ・順番で表現することにより、全く新たな意味を生み出すのである。それゆえ、対比項目もその都度深化し、多様になる。

以下の項目は、とくに文脈全体の中におくことで新たな光をなげかけることになる女性について、上塩尻の状況において想定されるものである。

- ・ 婚姻や移住による移入
- ・ 働き手として。労働の内容。家事労働は労働全体でどの程度のウェイトを占めるか
- ・ 世代の違い（例：姑はどういったことについて嫁に語ったか）
- ・ 子どもへの態度・取り扱い
- ・ 奉公人への態度・取り扱い
- ・ 生産 自家生産の割合
- ・ 技術習得 学校・家庭
- ・ 相続・形見分け
- ・ 家畜の扱い
- ・ 日常の食事・採光、余暇の過ごし方・祝祭・語り

項目は、もっと多くもできるが、それぞれの項目で光を投げかけることで、相互に連結する部分もありうるし、また、いずれにせよ研究の深化によりその都度設定する必要がでてくるはずである。

2 方 法 論

対比研究は、既存・既知史料の新解釈・再活用に始まる、啓発性の高いコミュニケーションである。まず、歴史史料の新解釈・再活用は、対比可能な共同性の構造と不可分である。そして家系譜を含む既知・既存史料の新解釈・再活用という点で、日英双方には豊富な情報源が認められる。さらに、対比研究の基礎をなす学説史間・史料間・データベース間の照合は、多様な文脈を多層なものとしてそのまま示す。また、近年の技術の進展によるデータベース・データ

セット構築はこうした照合を対比研究として必然化させるし、前提ともなる。今や、この分野での技術の進歩もハードからソフトに重点を移す時機になったといえる。

1 広義のコミュニケーション

1) 相互理解の技法を身につける筋道

ここでは、それぞれの歴史的な「現実」を相互に理解し合うための技法を身につける筋道を示したい。大局的には、進行する市場経済化とそれに対応する人と人とのつながり、という点において過去から現在に通じる共同性の位相を探る。そのために考案されたのが本論で述べる対比研究である。転じてみると、現代の問題に歴史的経験を活用するための方法、とも見なしうる。対比研究は、共感し理解するための技法であるため、分析視角・分析方法そのものが相対化されているからである。

互いの歴史的独自性を尊重し理解するための技法を身につける筋道をたどるべく、ここで対象とするのは、差しあたり日英村落であるが、理解のための技法を修得できれば、それは他にも広く通用するはずである。それゆえ、各国・各地域ないし各コミュニティの歴史を理解する、というよりは、それらの歴史を理解する技法を身につけるための道筋を模索することになる。

まず行うべきこととして個性を一般的に語る。歴史であるから、時系列上の個性を語る。言い換えると歴史的独自性を一般的に語る。生硬な物言いを許されたい。これまでに提唱されたことがないからである。強いて近いものをあげると、故森本芳樹名誉教授の提唱する「類推の比較史」が近い³⁾が、ここでは方法をより明確にすることを目している。対比研究ではそれぞれの研究史の蓄積を互いに適用する。すると、それぞれには既知の事柄も、もう一つの対象に適用すれば自然に異なる観点・立場から新たな光を投げかけることになる。その際にも相違点を強調するというのではなく、共通・相似を見出すという姿勢

3) 森本芳樹「序論 史料論の確立と国際比較への途」、鶴島博和・春田直紀編著『日英中世史料論』日本経済評論社、2008年、13頁。

で対象にあたるので、従来の比較史と同じ対象であっても、より高次な知見が得られる。歴史資源のリサイクル、と言ってもよい。

2) 翻訳可能：対比研究は、相手との「翻訳」可能性を最大限に利用する

比較の場合、差異がむしろ強調される。したがって、翻訳不可能な事象に焦点があてられる傾向が強い。ところが、実際には確かに珍奇なもの・翻訳不可能なものもあるが、全体から見ればそれは少ない。そしてその少ないものに注視していたのが従来の差異を強調する比較であり、優劣の価値判断につながったのである。それゆえ対比研究ではその反対に、大部分をなす翻訳可能な部分に力点を置く。対比項目は翻訳可能であり、用語集で整理できる（高橋 HP 参照⁴⁾：進化形歴史用語集）。

なお、対比研究は学際的であるとともに国際的である。そのため研究公表は日本語のみならず英語（外国語）でもおこなう。このときは、極めて一般的な知識のうえに、用語の説明などをしたうえで、研究の概要を紹介する。できれば英語で同様の枠組みを持つ研究があればよい。それをなぞった文章を全体の3分の1くらいあててもかまわないほどである。

3) それぞれの「現実」

歴史的独自性は、「それぞれの現実」と深く関わる。そして日々の暮らし・家族・健康・食べ物などともに年中行事に代表される季節性が、当時の人にとっての現実であり、あるいは現代に生きるわれわれにとっての現実である。他方、自然に左右されることの多い生活であったがために、意外にも非常時とは、少なくとも不自然あるいは非自然なものではないのである。自然環境の「異常」はあくまでも人間にとってのものであるからである。例をあげれば、英国本国でのモノグラフ研究は、首都ロンドンに接したエセックスを中心に史料が大量に残りやすい比較的豊かな村落を対象にしている⁵⁾。したがって、現象として凶作はあったにせよ、飢饉は実感がなかった、というのが通例になる。日本の場合になるが上塩尻今昔の会でも、居合わせた現地住民の方々は、そもそも

4) <http://www.cpm.chime-u.ac.jp/cpm/staff/index.html>

5) 本章・学説史を見よ。

上塩尻では飢饉の影響は無かった、という認識で共通していた。

4) 既存既知のものを最適の組み合わせ・順番で表現

ここで述べたいのは、すべてを新たに生み出すのではなく、生産資源・資本・習慣を含めて既存既知のものを最大限に利用することで新たな状況に対処するのが、最も効率がよいということである。進化と言い換えてもよい。そこには最適の組み合わせと順番で表現する筋道がある。これは、対比研究を行う際、分析軸となる共同性の構造とは不可離の視点である。すなわち、共同性の構造を対比するため必要な史料自体の対比作業に導くのが歴史史料の再解釈なのである。その際着手しやすいのが、地図ないし年表あるいは系統図において各史料の所在を明示する試みである。歴史分析のための理想的な世界を設定し、それに上塩尻の史料群がどのくらいあてはまるのかを、対比することになる。これはそのまま西洋社会にも適用できるだろうし、用語集や建築史とも関連させることも可能である。現実対象－史料界－歴史表現界、というように媒介項に史料界を設けることにより、現実対象と歴史表現世界との往來をスムーズにする。

英国の、日本との際立つ違いを示すデータは日本にない史料からのものである。私的所有のあり方と家族との関係は日本と際立つ違いを特徴としていたが、まさにその点が教会検認記録、なかんずく遺言書・検認会計記録という日本には存在しない史料を中心になされたものだからである。もっとも英国では主要史料である遺言書は日本でも全く無縁でもなく、意外に要所要所で現れてくる。

また、英国社会経済史からの問いかけとして次節の学説史で詳しく触れるM. スパフォドの著作にも、歴史資料の再解釈が認められる。対比研究史の見地では、スパフォドの研究は、既存既知史料の新解釈・再活用により、人間の現実を描くために必要な立体的アプローチを実現したことで、評価できる。先に述べてしまえば、本対比研究は、スパフォドの貢献である「歴史史料の再解釈」を発展させるもので、既存データの新活用という側面をもつ。くわえて、英国においても家系譜を用いて得られる親族集団（同族）についての知見が期

待できる。

2 データベース間の照合

データベース・データセット構築はその照合を対比研究として必然化させるし、前提である。このことは、技術の進歩において、重点をハードからソフトに移すということでもある。研究においても個別史料・個別事例のみならず、総力戦すなわちデータベースの組み合わせが求められるようになってきている。これは、PC技術の発展・低価格化に支えられる。だが、社会経済史の分野でも研究スタイルとして主流となりつつあるデータベース構築型研究は、必ずしも当事者たちがそのように自認しているわけでもない。対比研究に従事する筆者だからこその認識とも言えるかもしれない。いや、筆者にしても、データベースやデータセットの組み合わせ方について十分に表現し、論じるといったことを自覚的におこなってきたとはいいたい。すなわち、近年の技術進歩の速さもあって、ほとんど前例がないのである。それゆえ、方法としての対比は、データベース間の照合が前提となる。さらにデータセットないしデータベース間の照合が対比研究には必要であるため、相互の理解および利用が要となる。

分析枠のそれぞれの枠組みについて検討する中で、とくに対比研究が効果を発揮すると予期しうるのが「家」・婦人層・人口変動の文脈である。

事項1：「家」

日本の「家」について論じるときに、家名・家業・家産そして家格の4つの要素は重要であり、それらの現れ方の強弱はあれ、西洋社会でもこれらの要素を各地域において拾い上げることができる⁶⁾。他方、相続の見地からも今一度接点を見出すことを試みる。英国では単独相続から分割相続まで一続きのヴァリエーションがあることがわかっており、他方、日本の分家にも、あるいは相続慣行の実践において、やはり一続きのヴァリエーションがあるからである。

6) 「家」については、すでに國方敬司・永野由紀子・長谷部弘編著『家の存続戦略と婚姻 - 日本・アジア・ヨーロッパ-』、刀水書房、2009年において、婚姻戦略と存続との観点から国際比較の試みがなされている。

まず、それぞれの史料上の相続・分家のタイミングの差異を観察する。系譜学での主要資料である家系図ないし家系情報上の相続・別家（分家）のタイミングと歴史人口学の主要資料であり、社会経済史上重要史料である宗門改帳上の単位分けとの時間差をたどりながら、縁組のなされ方を総合的に把握するのである。また、貫高や土地保有規模など経済的要因も考察する。相続・分家とのタイミングも測る必要がある。それらが、家系図にどうあらわれるのか、宗門改帳の「分家」とどう重なり、どう食い違うのか、を総体として見る。英国の場合でも同様である。

事項2：婦人層

歴史資料上の存在としては、資料を生み出す社会を反映し、女性は男性に比して劣格である。このことは、程度の差はあれ、日英双方に通じる。したがって容易に想起するのは、教区登録簿もそうであるように、宗門改帳の場合にも女子であることで記録から漏れやすい状況があったのではないかということである。英国で言えば、非国教徒の社会経済階層的分析がそのことを示唆している。とくに、婦人層に顕著に見られる非国教徒の社会横断・世代連続的ネットワークの存在が新たに実証されている⁷⁾。そして、これらの事象は対比研究において対象になりうる。たとえば、女性が関与しているものとしては宗教ギルドー講がある。英国においては宗教改革において断絶を見、その後機能は分化した。貧民救済は救貧法で、小口金融は遺言書での遺贈などを経て専門職によりなされる一方で、エール醸造はホップ醸造に次第に代替されるとともに醸造業者が専ら生産の中心となる。ところが、日本では少なくとも名称としてはその組織は現代にまで続く。それゆえその歴史を供することで英国の事例に新たな分析視角を提供する。文脈をもとらえることでこれまで限界上にあった対象をも浮かび上がらせるのである。

7) M. Spufford, ed., *The World of the Dissenters* (Cambridge, 1995).

事項3：人口変動

さらに人口変動も、最近の歴史人口学国際シンポジウムのテーマが如実に示すように、その文脈とともに浮かび上がらせる段階に来ている⁸⁾。上塩尻では、すでに「生産人口」「従属人口」のデータがあり、それを従弟や姻戚とも関わらせて考えることも可能である⁹⁾。たとえば、本来社会的存在としての分家は経済的にはどのように現れるのか。この点は本来社会的存在としての従弟が労働組織として把握されるのと同様である。cousinage は方法論においても用いることができそうである。従弟については、日本でも柳田国男の「オヤコ・イトコ」論以来、家のあり方と関連して論じられることはあっても、実は決着を得ていない¹⁰⁾。労働組織の有り方とも関わるからであり、労働組織という他方で奉公人の存在があるので、労働経済学だけでも十分な説明ができず、社会学だけでも扱える問題ではなかった。まして、近世期に遡るとなると社会経済史の領域になるが、当該分野では家系図はほとんど導入されていないというのが現状である。なぜなら、歴史人口学的アプローチでさえもが市民権を認められてきたのがここ20年ほどのことだからである。ところが、現況の歴史人口学が最も不得手とするのが、この「従弟」の扱いなのである。

3 多層共同性と多様性の態様（パターン）抽出

1) 多層性・多様性の扱い

対比とは、上記のように軸ないし準拠枠を設けて照合することである。そして、他に新たな地域でも同じ手続きをすることができるようにしたい。そこに準拠枠を設けることの意義があるし、もともと対比は狭い意味において、軸を決めて照合するパターン認識だからである。そのために、重要なのは適当な対

8) S. Kurosu, T. Bengtsson and C. Campbell, eds., *Demographic Responses to Economic and Environmental Crises* (経済および環境的危機への人口学的対応), Reitaku University, 2010 は、2009年に行われた麗澤大学国際人口学セミナー（組織者：黒須里美）でのペーパーをまとめたものである。

9) 長谷部・高橋・山内編著『飢饉・市場経済・村落社会』19-22頁。

10) 柳田国男「家閑談」『柳田国男全集』ちくま文庫12（1990年）所収、328-30頁。

比項目をたてることである。その対比項目は、相互の研究の深化・データベースの拡大により増加することになる。

日英村落においては共通・相似点が指摘でき、対比のための基準・項目はむしろ多い。それらを束ねれば、方法のところで述べたように、おそらく人々の生活風景そのもの、あるいは生活世界をとらえることになる。他方、個別に見ていくと一般に用いられているような意味で比較が可能な事柄になる。対比項目は、相対化されるので、従来の項目に加えて、相対的分析視角と対象の多層性から自然に導出される社会横断と慣行とが、考察の範囲に入ってくる。

生きており、存続しゆくネットワークであるコミュニティは、多層であり、多様・多機能である。community は communities なのである。それは、人と人とのつながりを意味する共同性の重なりである。言うまでもなく、生きている人間によってつくられているコミュニティはやはり生きている。生きているから多層多機能である。市場経済化により観察が可能になるコミュニティなのだが、ひるがえればまさに市場経済化がその多層性・多機能性を進展させる。ネットワークも家族という再生産の基礎が抜け落ちれば、時系列的展開はたどれない。また、家族を数世代という長い時間でたどるには、やはりコミュニティを対象にするほか無い。家族がなくともネットワークはありうるが、家族を構成要素としないコミュニティは考えられないからである。家族を構成要素とした多層ネットワークであるコミュニティは、存続のための種々の技法が相伝えられる舞台である。これは、縦の関係のみならず横の関係でとらえて現れてくるものであるし、それゆえに対比可能なのである。

2) 「家」の存続およびコミュニティにおける世代継承の理解

学説史でも、「家」の存続ということで、すでに先行研究としてミドルのゴフにおいては「家」の存在は確認できる¹¹⁾日英に共通する要素として、家系を目しているわけだが、その場合にやはり対比研究が有効である。「家」が共通・類似するのは存続を基本原理とするからである。そして世代継承では、家

11) R. Gough, *The History of Myddle* (Hammondsworth, 1979).

名・家産・家業の永続性を根幹とする「家」ないし家族の継承とともに村・コミュニティにおける世代の継承を扱う。

3) 重層構造を時系列上に措定すると重層時間としてみてとることができる
重層する「家」「セミ・ネットワーク」「村」「広域ネットワーク」を時系列上にたどる。個々の「家」のみを追いかけてきたのが系譜学であるが、それでは村やネットワークは視野に入らない。他方、系譜学・家族史的視点を導入しない経済史でも閑却してしまう。ここで求められるのは、重層構造をそのまま把握するということなのである。その重層性は、農業生産におけるタイム・マネジメントとしても年中行事と絡めて照射される。また、拙著の3要素である親族構造・相続慣行・世代継承も捉えかえすことができる。共同性も、共感のスキルという見方でやはり重層的に論じうる。これまで、そうした対比やパターン認識のようなアプローチが十分に発達していないために研究対象としても十分に取り上げられることがなかった素材にも照射がなされるようになる。上述の姻戚関係や家系譜がそうであるし、世帯単位で分析が必要な労働人口・消費人口、年中行事（時間）、そして遺言書でも同様である。

4) 多様な多層体は一定の態様（パターン）に収束する

このようにして、個々の教区の多様性が前面に出てはくるだろうが、それでも多様性には一定の態様（パターン）がある。あるいは、最終的にいくつかの態様には収束する。家系譜研究を社会経済構造に措定し、パターン認識として抽出しようというのであれば、社会的遺伝とは切り離せない。

4 展開1：縁組・姻戚・市場経済

1) 社会的存在である同族・姻戚・奉公人は市場経済化の労働力市場・近距離移動の文脈で考察する必要がある

社会的存在としての分家は労働組織においては従弟として現れる。これは英国でも共通するだろうか。あるいは、本来社会的存在としての分家は経済的にはどのように現れるのか。この点は本来社会的存在としての従弟が労働組織として把握されるのと同様である。同族というと日本だけの様な感覚にも陥り

がちだが、英国の場合でさえ、上述したように旧新大陸間の親族のつながりでのイメージ化は可能になる。その際のキーワードは従弟 *cousins* である。もっとも表記上は従弟とあってもそれが現代と同じように4親等だとは限らない。これは東西を問わずそうではないか。

2) 商品経済化の文脈で同族とその補完としての姻戚をとらえていく

縁組に関して、家単位で分析を行う場合でも、通常は宗門改帳のみを用いることになるため、家・同族、すなわち本家一分家を軸とする系譜関係にまで論究した研究は管見の限りでは見あたらない。さらに「姻戚」がある。実際には婚姻史の関係から論じられることが多いが、それを同族との補完関係において商品経済化の文脈で論じる必要がある。同族の研究はその補完として姻戚関係をも分析対象として意味を持ちそうだが、ということをおわが研究グループは最近共通の認識としている。世間からすれば当たり前のことのようだが、実際には同族という観点で村落社会を対比研究しようなどという発想は研究者間にもほとんど絶えてなくなっているのである。

3) 縁組・近距離移動・労働力市場とはどの程度重なるのかを探る

縁組について、とくに嫁取りは労働力獲得としての分析が中心である。ただ、上塩尻の場合には実際にどれほど重要であったのか。この点は、季節労働・近隣の労働力市場との関係でも再考する必要がある。なぜなら「社交圏＝世間」の地理空間の広がり、研究の深化を待っている。この場合に対比という見地で共通性・相似が認められるのは、人々の「社交圏＝世間」の地理空間の範囲である。これを系譜データと組み合わせる事でおそらく親族関係ネットワークが重層をなして現れると予測される。現段階ではすでにある程度分布はつかめているものの、親族関係網の調査は未着手である。これを近距離移動の議論とつなげる。

5 展開2：慣行の二重性を時系列で

市場経済におけるタイム・マネジメントの変遷を、慣行に関する一定のスケールでたどる。英国の最近の研究では、年中行事は太古からのものと思われて

きたが、実のところは僅かな例外を除いてほとんどすべてがせいぜい一六世紀初頭以降のものであり、それは、市場経済の進展と密接に関わるのである。年中行事としての対比は可能であり、時間の使い方にしても然りである。タイム・マネジメントというとならえ方が近世期にもそのまま適用可能であるかどうかはまた議論があるだろうが。タイムスケールという点では、3日・3月・3年・30年(1世代)・3世代、とおそらく最大でも3世代で十分であろう。この「慣行化スケール」(仮称)をあてはめてみていく(注 日本の子孫一身の法や英国の俚言「紳士を作るには3代かかる」など3世代でくくる物の見方というのは古今東西種々観察できる)。時々の経済状況により農業上の、あるいは日常生活の慣行が意外なほどに急速に生成もしくは変容するという事態は相続上の慣行でも生じていた。相続慣行には慣行のまさにその静と動の両面をみることができる。制度としての相続慣行と実際の運用である相続実践とである。このような慣行の二重性について人々は通常区別をしない。それこそ、家族について広くも狭くも言うように。それゆえ相続慣行を含めた慣行の二重性は家族と同様に概念広狭をも生むゆえんであると筆者は考えている。

まとめ

こうした状況を踏まえ、方法としての対比は、データセットおよびデータベース間の照合が前提となる。まず、史料間の対比が、村落社会と家族との観点では、相続・分家、同族の創出・変容・多様化を示す。また、これまで実態がよくわからなかった講も含め、婦人層社会横断・世代継承ネットワークも新たに照射される。そして人口変動も、その文脈とともに扱う段階に来ている。とくに家の存続・コミュニティの世代継承は多層をなし、多様であるため、時系列上の対比研究が有効である。対比の項目が示すように、生きており存続しゆくネットワークであるコミュニティは、多層であり、多様・多機能である。だからこそ community は communities なのである。それは、人と人とのつながりを意味する共同性の重なりである。それゆえ、「家」の存続およびコミュニティにおける世代継承の理解についても対比研究が有効である。

さらに重層構造を時系列上に措定すると重層時間としてみてとることができる。重層する「家」「セミ・ネットワーク」「村」「広域ネットワーク」を時系列上にたどるのである。従来ほとんど個々の「家」のみを追いかけてきたのが系譜学であるが、それでは村やネットワークは視野に入らない。他方、系譜学・家族史的視点を導入しなければ経済史でも閑却してしまう。したがって、求められるのは重層構造をそのまま把握するということである。その過程で、社会的存在である同族・姻戚・奉公人は市場経済化の労働力市場・近距離移動の文脈で考察する必要がある。キーとなる慣行は、制度と運用という二重性を内包し、概念の振幅もあるため、一定のタイムスケールで測る。相続慣行も含め、慣行はできあがった「制度」としてだけでなく、生成し変化するプロセスもたどる必要がある。

3 学説史概観

1 対比研究導出の経緯

対比研究ではそれぞれの研究史における蓄積を互いに適用する。すると、それぞれには既知の事柄も、自然に異なる観点・立場から新たな光を投げかけることになる。その際にも相違点を強調するというのではなく、共通・相似を見出すという姿勢で対象にあたるので、従来の比較史と同じ対象であっても、異なる解釈が得られるのである。

もともと本対比研究は日英村落研究チーム内の対話中に始まった。そして直接の契機は英国チームの代表であるマーガレット・スパフォドとのやり取りに求められる。また、対比研究史の見地では、スパフォドの研究は、既存・既知史料の新解釈・再活用により、人間の現実を描くために必要な立体的アプローチを実現したことで、評価できる。そこで対比研究は、スパフォドの貢献である「歴史史料の再解釈」を発展させ、既存データの新活用という側面をもつのである。

1974年にスパフォドは *Contrasting Communities* においてケンブリッジ州にお

ける3つの対照をなす教区の社会経済史を描いた¹²⁾ 同書は、「レスター学派」の学風に沿い、それまでの近世農村社会経済史に関する議論を集約し、対照をなすケンブリッジ州の三教区を対象に、農村に生活する人々について家族・親族関係のレベルまで深めて洞察した。それ以前の研究で描かれたのは平均的人物、経済人であった。たとえばレスター学派の創始者の一人 W. G. ホスキンスによる『ミッドランド農民 *The Midland Peasant*』は、村落コミュニティの連続性を示したが、そこに描かれる農民は当時の書評によれば抽象的な abstract 経済人であった¹³⁾ また、J. サースクの『16世紀の農業問題 *The Peasant Farming*』でのリンカン州の農業経営について、各時代に個有の地域類型を示した¹⁴⁾ その主要史料であった遺産目録からの数量データは、平均値もしくは中位値の分析を主にしていたため、ホスキンスと同様の抽象化により、「経済人」ではない人間像、その人間や家族が示す共同性の明示はほとんどなかった。

スパフォードは、より具体的な生活者としての農民を描こうとする¹⁵⁾ 地域コミュニティである村落の社会経済史の研究は、人体を構築するような作業が必要であり、まず骨格を作る。その骨格は、租税記録および土地調査記録などからなる教区住民の経済・社会的階層を示すデータ集であり、管区巡察記録 *visitation records* をもとにケンブリッジ州全体の横断的分析データ集である¹⁶⁾ これらのデータ集の併用は前例がなく、従来ほとんど未知であった宗教改革期における農民レベルの対応を包括して示した。

さらに骨格に肉付けをするのに大きな役割を果たすのが教会検認記録、である。とくに M. スパフォードが嚆矢となった遺言書の教区全体での体系的分析は、

12) M. Spufford, *Contrasting Communities* (Cambridge, 1974)

13) W. G. Hoskins, *The Midland Peasant* (Leicester, 1957); E. Moir, 'Review of *The Midland Peasant*', *The Cambridge Review* (1957), pp. 148-9; M. Spufford, 'The scope of the enquiry', in do., *Figures in the Landscape* (Aldershot, 2000) (拙訳「調査の範囲」国際比較研究会編『国際比較研究』第6号 2010年), pp. 2-3.

14) J. Thirsk, *The Peasant Farming* (Leicester, 1957):

15) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p. 3.

16) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p. 10.

家系図の採用ともあいまって家族、親族関係と相続慣行の理解におおきく寄与している。教会検認記録では、一見数値化しやすい遺産目録の方がJ.サーズクを代表にレスター学派でもよく用いられていた。遺言書の方は、教会登録簿とともに系譜学の分野では古くから用いられていたものの、社会経済史の分野の体系的使用はスパフォードが最初であった。その後、遺言書は地域社会経済史では必須史料となるが、それでも家系図を組み込み従弟など近親以外の親族関係にまで俯瞰した研究は、後述のケントの研究を例外としてほとんど見あたらない。

社会経済史の伝統を継承し、深化・拡大を自認するスパフォードにとっては意外かもしれないが、教区レベルでの遺言書の体系的利用とともに家系図を作成し従弟をも含む親族関係網により村落の社会・経済生活を説明するという着想は、むしろ社会人類学的である。レスター学派の実地調査・フィールドワーク重視の伝統も関連する。かくして、家系図の社会経済史的分析への採用は、スパフォードを先駆とする。家系譜を用いて得られる親族集団（同族）についての知見は、必ずしも家系図が残されていないイギリスの農民層においても家系情報を系譜に仕立て上げ、さらに親族集団と村落社会の文脈において相互連関を調査する際にすこぶる有用である。

2 *Contrasting Communities* 以後とその影響

他方、スパフォード自身、前掲書には2点主要な過ちがあるとする¹⁷⁾。1つは対象3教区をあたかも各々孤立した小宇宙のように描出したことであった。相互連関を欠いていたのである。もう1つは読者に退屈だろうと方法論にあえて頁を割かなかつたことである。これらの過ちはその後の研究を地に着かない社会史に偏するのに一助となつたし、典型性の議論を拡散させた、というのがスパフォードの反省である。当時の農村に暮らす人たちの現実を描くには農業・経済の諸状況・制約から離れて考えることはありえない。この意図からすると、

17) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p. 7.

その後の農村社会経済史の動向は、必ずしも納得のいくものではない。動向は大きく3つの流れに分けられる。

第一にあげるべきは、「ターリング・インパクト」(中野忠)現象を生んだライトソニアン(K. ライトソンの社会史の流れを組む研究者)の動きである¹⁸⁾ 地域史研究は、1970年代のいわゆる新社会史研究の流れを見、K. ライトソンおよびD. レヴァイン著『貧困と敬虔 *Poverty and Piety*』以降社会史へ傾いた¹⁹⁾ 農民の社会を扱うのに、必ずしも農業・土地経済によらずに議論する傾向が目立つ。また社会階層分化の観点から大衆政治・文化史や犯罪などにも議論が及ぶものの、経済過程、とくに土地保有の変遷および農業経営の分析には史料の欠落もあり限界がある。ターリング教区で決定的なのは、教区が5つのマナーに分割され、共同用益地もなければ開放耕地制度もなかったことである。次いで、ライトソン以降の研究では、人口動態についてはその都度の歴史人口学の水準に準拠した上で相当分量を割くようになっている。*Contrasting Communities* では、人口動態については人口の推移を示すにとどまった。そして第3の流れは、地域社会経済史の分野への社会人類学の急速な接近である。この点では歴史人類学を標榜するA. マクファーレンが代表となる。

そして、以上の3つの流れはいずれもエセックス州の研究成果が主である。エセックス学派というくくりはないが、上記ターリングやマクファーレンの『ラルフ・ジョスリンの家族生活』の舞台となったアールズ・カウン(Earls Colne)教区もやはりエセックス州に属する²⁰⁾ その後J. フレンチおよびR. W. ホイルによる同教区の研究は、マクファーレンの研究チームがウェブ上に公開したデータベースに依拠し、その影響力の大きさは今後も続くはずである²¹⁾ さらに早期囲い込みが概ね完了した16世紀初めまで、大黒死病(the Black Death)以

18) 中野忠『前工業化ヨーロッパの都市と農村』成文堂 2000年、19-48頁。

19) K. Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety in an English Village: Terling, 1525-1700* (London, 1979)

20) A. Macfarlane, *The Family Life of Ralph Josselin* (Cambridge, 1970)

21) H. R. French and R. W. Hoyle, *The Character of English Rural Society: Earls Colne, 1550-1750* (Manchester, 2007)

後16世紀初頭までのエセックス州全体の研究は、L. R. プースがまとめている²²⁾ その姿は、他州で17世紀以降進行する事態を先取りしている。この点では、王領地という特殊事情を抱えるロンドン近郊のヘイヴァリング教区も同じである。本教区については、M. K. マッキントッシュがまず1200年から1500年までを研究し、引き続き1500年から1620年までの近代初期期を継続して優れた包括的地域研究を著している²³⁾

1つの教区を中世から近代まで通して観察する研究は依然として僅少である。上のマッキントッシュを除くと、めぼしいものとしてレスター州の研究があげられる。一つは古典としてすでに紹介した W. G. ホスキンスのウイグストン・マグナ教区の事例であり、もう一つが C. ハウエルのレスター州のキプワース・ハーコート (Kibworth Harcourt) 教区の研究である²⁴⁾ 当教区ではオックスフォード大学のマートン学寮の所領の、1270年から1700年までの長期にわたり、ミドランド農民の家族・土地・相続慣行の研究をした。遺言者の家族扶養義務とともに各々の遺言者とその家族の置かれたライフ・サイクルの重要性を指摘した上で、一定程度の家族が保有地を保つことを実証した。農業経営の内容と近親間の協働・相続の実態の分析もあるものの、横断的な親族関係や共同耕作あるいは共同用益地に関する記述に乏しい。加えて、中世後期から近世までを意識的に架橋したものとして、J. ウィットルの研究も挙げておきたい²⁵⁾ 1440年から1580年までのノーフォーク州東部ヘヴィンガム・マナー (Hevingham Bishops) のマーシャム (Marsham) 村を中心に土地市場および労働者・労働力市場に関して著した。農業資本主義の発展をテーマに、共同性については家族の土地保有に付随する共同用益権に言及はあるものの、そもそもそうした視点がないからだと思うが、ハウエル同様横断的親族関係や共同耕作については立

22) L. R. Poos, *A Rural Society after the Black Death ; Essex 1350-1525* (Cambridge, 1991)

23) M. McIntosh, *Autonomy and Community* (Cambridge, 1986) ; do., *A Community Transformed* (Cambridge, 1991).

24) C. Howell, *Land, Family and Inheritance in Transition* (Leicester, 1983)

25) J. Whittle, *The Development of Agrarian Capitalism : Land and Labour in Norfolk* (Oxford, 2000)

ち入った分析はない。だが、遺言書を集中的に用い家族の土地保有と相続慣行の詳細なデータが収録され、今後の比較研究に有益である。

一方、スパフォドの2つの「過ち」に対する反省は、炉税記録の全国的レベルでの翻刻・研究分析計画という炉税調査記録プロジェクトを生む²⁶⁾ 炉税記録は17世紀後半の教区民の経済的社会的状況を容易に鳥瞰できる史料である。近代統計学の祖グレゴリ・キングもこの炉税に深く関わった。炉税は直截簡明さを特徴とする。家屋の外に出ている排気口（煙突）の本数から、その家屋ないし世帯の炉の数を割り出し、富裕度すなわち担税度を測るからである。炉税はこれまで有名でありながらも、十分に活用されてきてはいない。本炉税プロジェクトの完成による全国的俯瞰は、歴史地理学者 H. C. ダービーによるドゥムズデイ・ブック時代の経済地理全国誌に比肩し得る意義をもち、情報量でははるかに多いデータ・ベースとなる。これは日本にはないので、学ぶところが大きい。

他方、*Contasting Communities* では示唆にとどまった相互連関と結びつのが、「社交圏＝世間」の地理空間の広がりである。対比という見地で共通性・相似が認められるのは、人々の「社交圏＝世間」の地理空間の範囲である。これを系譜データと組み合わせる事で親族関係ネットワークが重層をなして現れると予測される。

加えて、スパフォドとその研究グループによる非国教徒社会経済階層分析は、地域史研究者にとっては自明であっても、宗教史・教会史家にとってはそうでもなかった。この分析は婦人層ネットワークをも見出した。中世後期から近代初期にかけての女性の経済的社会的位置づけに関して、系統だった包括的研究が著されてきている。ここでも新史料の利用とともに既知史料の新たな利用法の開発によるところが大きい。北部教区の親族関係と世帯について女性の視点から論じた M. チェイタ、寡婦産相続と女性の財産を扱った B. トッド、

26) 現在、英国学術炉税プロジェクト British Academy Hearth Tax Project との連携で公開されている最新のものは、*Warwickshire Hearth Tax*, British Record Society, *Index Library*, 126, 2010.

女性の法的権利について慣行および法律の相互可変性を中心に論じた T. ストレットンなどはその好例である²⁷⁾。そして、A. エリクソン『近代初期英国における女性と財産』は、法律と実践との関係を、とくに女性と財産とを中心に論ずる²⁸⁾。

スパフォードは、歴史人口学への違和感を次第に認めるようになってきているものの、日英村落対比研究にあたっては、歴史人口学的分析も用い方によっては極めて有効である。片方では同時代人にとっての現実をとらえる姿勢を保ちながらも、同時代人の気づかなかつた、かつ後代のわれわれだからこそ見渡すことのできる事象があるからである。対象間の比較には人口学的データは、とっかかりとしては大いに有用なのである。日英双方で全国を教区・村単位にデータ・ベース化が最も進むのはこの分野である。その一環として農業・地理データとの重ね合わせはたとえば、農業奉公人研究で著名な A. クスマウル²⁹⁾によって、工業化以前のイングランドにおいては結婚の季節性と牧畜・穀作の分布パターンと概ねの合致をみるとする著作によって既に用いられている³⁰⁾。炉税データがこれに加わることでより立体的な検討を予期できる。

M. スパフォードとはあらゆる点で対照的な A. マクファーレンは、もともとは歴史家としての訓練をオックスフォード大学で受け、その後ケンブリッジ大学で社会人類学を専攻するようになるが、その最初の論文で出した産業革命の原因についての着想を発展させ、結実したのが『イギリスと日本 *The Savage War of Peace*』である³¹⁾。工業化がはじまる前にイングランドは出生率および死亡率の低下をみせ、それが来る産業革命の前提条件のひとつとなったのはなぜか、

27) M. Chaytor, 'Household and Kinship: Ryton in the Late 16th and Early 17th Centuries', *History Workshop*, 10 (1980); B. Todd, 'Free Bench and Free Enterprise: Widows and their Property in two Berkshire villages', J. Chartres and D. Hey, eds., *English Rural Society, 1500-1800* (Cambridge, 1990); T. Stretton, *Women Waging Law in Elizabethan England* (Cambridge, 1998).

28) A. L. Erickson, *Women and Property in Early Modern England* (London, 1993).

29) A. Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge, 1981)

30) A. Kussmaul, *A General View of the Rural Economy of England, 1538-1840* (Cambridge, 1990).

という問題については、日本との比較を経て解明の糸口を見出せるとする。イギリスと日本という二つの島国を比較し、環境および健康というマクロおよびミクロ的アプローチを結合させ、とくにイングランドにおけるエールとそれに続く茶の飲用と日本での同時期の茶の飲用という習慣づけを含め、生活習慣全般での共通性を見出す。最終的には文化習慣の文脈で家族・相続にいたって、経路はちがうものの同様の結果を生むにいたった複雑多岐なメカニズムの存在を指摘している。マクファーレンは全国的範囲で二次歴史文献を遍く渉猟し用いながらも、やはり社会人類学の著作となっている。

マクファーレンの基本姿勢には問題がある。『イギリスと日本』で二つの島国を比較し環境と個人との双方の連関をメカニズムとして説く際に、家族および「家」をあくまで文化習慣としてとらえるものの、それをコミュニティの文脈に措定して議論するということがないからである。マクファーレンは中世からすでにイギリスにおいては個人および個人を成り立たせる土地保有権も個人に帰属するように早くから確立していたとする³²⁾ 彼は、小農 *peasant* は存在しないとし、その存在基盤である「家族の土地」の親族関係内での循環的性格 *cycling nature* についても否定的である。まして家族を村落・コミュニティの文脈で可變的にとらえるということもしていなかった。

マクファーレンは、イギリスでは所有が血縁に優先するようになり、日本では「イエ」という人為的に構築された連続体として後継者戦略を決定したとする。後者では「イエ」の存続のために養子制度を活用したが、前者ではそもそも養子制度がない。だが、イギリス農村にも「家」が18世紀までごく普通に存在したことは R. ゴフの「ミドゥル史」にもあらわれている³³⁾ D. ヘイは1970年代の研究水準でこのゴフを主幹史料として描き、ゴフのミドゥル史を住民の移動・リエイジ・アイデンティティの関係から再考している³⁴⁾ ここで、家の

31) A. Macfarlane, *The Savage Wars of Peace*, pp. 365-6 (日本語訳『イギリスと日本 マルサスの畏から近代への跳躍』)。

32) A. Macfarlane, *The Origins of English Individualism* (London, 1978) (酒田利夫訳『イギリス個人主義の起源』リポート 1993年)。

33) R. Gough, *The History of Myddle*.

観点からこれらを読み返してみるとまた発見があるはずである。とくに家系・人口移動・地域特有の相続慣行・土地保有状況、さらにコミュニティそのものについて異様に詳しい。

他方、ケント州ウィールド地帯の小邑クランブルック (Cranbrook) およびその隣接村教区における17世紀後半期の横断図を描いた A. プールの著作は、教区境を超えておよそ半径10キロメートル程度の形成される地縁-血縁関係網の働きを明らかにした³⁵⁾

なお、1978年に V. スキップが『発展と危機』でフォレスト・オブ・アーデン (Forest of Arden) における5つの教区を主として人口と環境との相関関係を著したが、生態学的アプローチによる特殊研究という色合いが濃い³⁶⁾ 遺産目録を集中的に用いて農業生産・自然環境・生活資源との連動性を描き、あわせて教区登録簿により家族構成・家族構造分析を行ったが、遺言書はほとんど用いられておらず、教区内・教区間の親族関係も含め危機の局面で発現したはずの共同性についての視点が無い。むしろ、翌1979年に刊行された A. B. アップルビーのイングランド北西端部のカンバーランドおよびウェストモアランド両州における凶作 (飢饉) および人口・環境の動態研究の方が、方向づけとしては共同性についての観点を内包していたが、アップルビーの急逝によりそれは果たされていない³⁷⁾ さらに、最近では J・ブロードが1540年から1920年までの期間をとり、英国農村富裕層が土地所領と家屋を含む景観の構築をどのように果たしていくかをバッキンガム州ミドル・クレイドン地域において観察している³⁸⁾

34) D. G. Hey, *An English Rural Community. Myddle under the Tudors and Stuarts* (Leicester, 1974); C. Dyer, ed., *The Self-contained Village?: The social history of rural communities 1250-1900* (Hatfield, 2010)

35) A. Poole, *A Market Town and its Surrounding Villages: Cranbrook, Kent in the Later Seventeenth Century* (Chichester, 2005)

36) V. Skipp, *Crisis and Development* (Cambridge, 1978).

37) A. B. Appleby, *Famine in Tudor and Stuart England* (Stanford, 1978)

38) J. Broad, *Transforming English Rural Society, The Verneys and Claydons, 1600-1820* (Cambridge, 2004).

第1章 共同墓地から見た近世期イギリス教区・コミュニティ

はじめに

本章は、共同墓地から見た近世・近代期イギリスにおける教区・コミュニティ・住民自治について論ずるものである。ひとくちにコミュニティといっても、たとえば社会人類学者 A. マクファーレンの言う通り研究者の数だけ定義はありうるであろう (Macfarlane 1977: 1)。だが、ここで扱うテーマからすればコミュニティも 'community' として単一のものというよりも、'communities' と表現した方がより適切な、重層的なものにとらえた方がより良く説明ができると思われる (Archer 1992)。それは、この場合枠組みとしては教区、切り口としては住民自治を置き、共同墓地という史料を用いてコミュニティの歴史を遡行するからである。目に見える存在であり今でも知覚できる共同墓地を手がかりとして、中世教区宗教ギルド (parish guild, religious guild) に起源をさかのぼる。その教区の役割・活動内容として一貫していた葬送・埋葬・公衆衛生・慈善・救貧について事例をたどることで、教区と区別も曖昧であった中世教区ギルドの役割が近代宗教改革を経て、いかに専門分化ないしは特化して近現代にいたるかを探る。

本章では副題として付したように、日本の事例との比較を前提にする。筆者は日英村落史的対比研究に長らく従事してきており、イギリスにおいてはケンブリッジ州ウィリングム教区、日本では長野県旧上田藩上塩尻村という2つの村落を研究対象にしている。日英いずれでも村落を論ずるにはその構成員である家族についても論じざるをえない。また、共同墓地を扱えばごく自然に村落の住民家族に目がいくことにもなる。実際そこに暮らす住民は、通常自分達の村落の歴史書を現すことはつい最近までほとんどなく、むしろ人々の記憶は各

家族の家系譜を頭に置くことで成り立っていたと思われるからである (Williams, 1956 and 1963)。そしてその記憶のよりどころのひとつとして共同墓地はあったと言える。イギリスの場合、農村レベルで家系譜を残す階層は裕福なヨーマン層 (日本の本百姓に相当する) 以上であったため、それより下の階層の農民家族の家系情報源は教区登録簿と遺言書とが主である (高橋 2000 : 48-9)。とくに1538年の教区登録制度開始以前となれば、ほとんど遺言書のみとなる。日本の事例であれば農民レベルでも、真贋の程度はともかく庄屋など上層であれば本家筋に備えていることはそれほど珍しくもない。筆者の扱う上塩尻村では、家系図作成にあたり作成者たちは宗門改帳や村政文書などを用いながらも、基本データは共同墓地の石塔とそれと対応するはずの位牌の碑文、そして同時代人からの聞き語り・伝聞から得ていたようである (高橋基泰 2003 : 2)。ここで重要なのは、そうした情報は村単位であれば確かに多種多様であり量も相当になるのだが、ある程度時間と労力をかければ扱いきれるということである。また、都市に比べれば村落の生活構造はごく簡単である。国際比較を手がける上でもその簡単さをいかしたい。幸いにもウィリンガム教区は、イギリスにおいて中世から近代までの時期を対象におそらく最もよく研究されている教区の1つであり、史料も豊富である (Spufford 1974 ; Evans 1980 ; 伊藤1997a, 1997b, 1998, 1999, 2001a, 2001b, 2003, etc.)。とりわけ筆者は当教区村落のほぼ全家族・世帯の親族関係・系譜関係をデータベース化しており、共同墓地を扱う上でも便宜となる。

以上を前提に本章は、まず研究小史と対象の概観をしたうえで、ウィリンガム教区共同墓地の分析をおこなう。その際分析視角はコミュニティとしての教区における住民自治のあり方である。そして近代の共同墓地の様相から知覚できる項目は、とくに相互扶助であり弱者および貧民救済の伝統なのである。そこから教区の歴史を葬送・埋葬の歴史をさかのぼり、その住民自治は古くから教会役人を中心として教区宗教ギルドにその活動の原型を探ることができることを見出す。さらにウィリンガム教区における共同墓地を中心視座に、宗教改革による教区ギルド解散を経て旧救貧法までの足取りを、教区の諸々の機能の

変容に則してたどる。最後に、現に存在する共同墓地を生み出した19世紀、新救貧法およびその後の公衆衛生法制定までの時期までの展開を追うことにしたい。

1 研究小史および対象概観

1.1 研究小史

最近では、葬送・埋葬・墳墓に関する研究が従来の民俗学の枠組みを超えて広がり社会学あるいはとくに比較史的観点から葬送・埋葬・墳墓に関する研究が集積されてきている¹⁾。なお、本章では日本の事例について、柳田国男(1946)以降の墳墓・葬送に関する膨大な蓄積には焦点をあてることはせず、別稿で取り組むことにしたい。

墓という目に見える存在は一般の読者にもイメージしやすい(岩田重則2006: i - ii)。他方で、これほど学際的アプローチが必然となる分野もないため、各分野における研究水準の高まりが結果して総合的研究が現れている、とも思われる。もっとも、日本においても同様だが、イギリスではコミュニティや村落レベルで時系列をたどる総合的モノグラフはそれほど多くはなく、まして墓地とその住民家族・組織との関わりで社会経済史的研究となるとまず見当たらない。通常はモノグラフを物すだけで優に10年・20年はかかるために、さらに墓までも、となると1人の力ではとてもこなせないというのが実情であろう。もちろん、そうしたモノグラフが見当たらないというだけで、モノグラフの構成要素の各々については重厚な研究蓄積がある。まず、いわゆるレスター学派の1950年代における作品である W. G. ホスキンス『ミドランド農民』および J. サースク『イングランド農民の農業経営』などが先駆である(Hoskins

1) 現代的意義を踏まえての最近の著作としては、井上(2003)、岩田(2003)など。また、比較史的考察としては森(1993)、鯖田(1990)など。また江川(2007)は、比較文明史という壮大なスケールでの試みである。そこに収録される指昭博「死とイングランド宗教改革-研究史整理-」は宗教史・美術史を含む西洋史全般での広い範囲でのサーヴェイであり、きわめて有用である。

1957; Thirsk 1957)。1970年代には現時点でも影響力を保つ傑出した著作が現れている。その1つは1974年登場のM. スパフォドの『対照をなす諸共同体 *Contrasting Communities*』である (Spufford 1974)。この著作は、本章でも対象とするウィリンガム教区を含む近代初期ケンブリッジ州の対照的な三つの村落教区 (他はチペナム Chippenham・オーウェル Orwell) を扱った。遺言書を史料として本格的に採用するとともに家系図を社会経済史研究の領域に取り入れた点でも画期的であり、家族の定量的側面のみならず定性的側面の理解における深化の契機となった (Spufford 1976: 168-72)。その点で問題意識を共有するK. ライトソンそしてD. レヴァインのエセックス州ターリング (Terling) 教区における研究は、親族関係の弛緩および核家族化の趨勢をマイクロコスモスとして明らかにした (Wrightson and Levine 1979)。他にもエセックス州では、英国における個人主義の起源を探ろうと幾多の論争をひきおこしているA. マクファーレンの『ラルフ・ジョスリンの家族生活』の舞台となったアールズ・コウン (Earls Colne) や (Macfarlane 1970)、M. K. マッキントッシュのロンドン近郊のヘイヴァリング (Havering) など優れた包括的地域研究があいついで登場している (McIntosh 1986 and 1991)。もっともエセックスは、16・7世紀に急速に拡大したロンドンに隣接し、その先進性と都会性がとみに知られている。その社会的流動の激しさは、いきおいコミュニティとしての教区の変質を余儀なくさせ、共同墓地とそこに存続する家族とのつながりも著しく流動化させたことは免れない。それゆえ、史料の豊富さから地域研究が輩出するエセックスではあるが、共同墓地の研究には著しく困難であることも考慮しなくてはならない。レスター州キブワース・ハーコート (Kibworth Harcourt) 教区を選び、1270年から1700年までの長期にわたりミドランド農民の家族・土地・相続慣行を研究したのがC. ハウエルである (Howell 1983)。この教区であれば共同墓地の研究にも可能性がありうる。あるいは、時期的には1800年から1930年までと新しく、独自の地域性を保つケント州グリーン地域においてオーラル・ヒストリーを取り入れながら歴史人口学的研究をおこなったB. リエイに学ぶのが、本章の趣旨にはより則しているとも考えられる (Reay 1996)。

テーマとして、葬儀と埋葬に関しては、R. ホウルブルックの著作が基準となるであろう。あまたの史料とともに遺言書を重点的に用い、近代初期における死と宗教ならびに家族についてまとめている (Houlbrooke 1998)。また歴史人類学的考察もまじえながら中世から宗教改革期までを著したC. ダニエルと、それに時代として引き続く近代初期から近代までを著したC. ギッティングズらをおこなうことができる (Daniell 1997; Gittings 1984)。後者は、女性の財産を論じるために検認会計記録 (probate accounts) 3万件余を用いたA. L. エリクソンに先んじて、バーク州・ケント州・サマセット州・リンカン州における検認会計記録を史料として採択し葬儀・埋葬費用その他を詳細に掘り起こした (Erickson 1993)。

葬儀に関しては文献があるため比較的理解しやすい。しかしながら、16・7世紀の墓群は宗教改革の影響により、全国的に見てもほとんど残存しない。さりながら歴史的背景を閑却して言えば、現存する墓石を踏査してみると古くてもせいぜい16世紀のもので、あるいは17世紀からという状況は日本と歩を一に比較可能であるとすることもできる。

教区については、キリスト教会組織の最末端単位として、N. J. G. パウンズの包括的研究『イギリス教区の歴史』に見られるようにイギリス住民との関わりにおいても長い歴史がある (Pounds 2000)。宗教改革期を含む長い時間を経てその性格・機能に変化がみられる一方、度重なる管轄区域・教区域の変更・統廃合を経ながらも制度としては現在にいたっている。日本では最近の指昭博の論考が簡潔ながらも、教区制度の存在しない日本の側から教区をどのようにとらえたら良いかを示している (指 2005: 72-7)。教会の基本的単位であるにもかかわらず地域・時代で多種多様なあり方を示し、総数およそ1万と算定されるイギリスの教区は、それ抜きではおよそ彼地の生活空間を理解することはできない。見方を変えればそれほどにその実相は多岐にわたるのである。指は教区になじみのない日本人ならば少なくとも可視的な建築物としての教会・聖堂、聖堂で聖務をとりおこなう聖職者 (教区司祭) および世俗的に教会・聖堂を維持する教区民を要点としておさえるべき、とする。

住民自治についてはどうか。近現代においてであれば、イギリス住民自治制度の枠組みとその歴史的展開については岡田章弘『近代イギリス地方自治制度の形成』が詳しい²⁾。地方住民自治の全般的概要は、公衆衛生も含めそこで見つかるのだが、同書で論じられるのは産業革命ないし工業化の時期、18世紀中葉以降として19世紀がもっぱらの観察期間となっている。だが、本来の住民自治の源流を講じるならば、教区宗教ギルドの歴史をたどらなくてはならない。教区宗教ギルドは、日本で言えば講に相当するもので、聖者などを祀る形で組織された。おそらく中世後期、14世紀ごろから文献資料によく現れるようになり、16世紀中葉の修道院領解散を含む一連の宗教改革期に廃絶されるまで、教区民間の相互扶助・慈善活動などの中心的役割を担っていた。1919年に物されたH. F. ウェストレークの著書がながらく古典として、それに続く研究もなかなか現れないでいたが、遺言書や教会役人会計記録などの史料を用いることで地域研究としてすぐれたものが1990年代以降陸続と現れている（Westlake 1919）。それらは、宗教的意義のみならず政治・社会・経済各側面にも光を投げかけているのが特徴である。E. ダフィの規範的作品に加え、B. キュミン、K. ファーンヒル、V. R. バインブリッジらが挙げられる（Duffy 2001；Kumin 1996；Bainbridge 1996；Farnhill 2001）。とくにバインブリッジはケンブリッジ州の宗教ギルドの歴史を描いた。教区に1つと定まったものでもなく間教区で広い領域にまたがる場合もあり、あるいは同じ教区にも複数存在することもまれではなかった。宗教改革で修道院領解散にともない、聖者を祀る宗教ギルドも廃止された。それゆえ教区における相互扶助や貧者・弱者救済などの福祉的機能を担っていた宗教ギルドが禁止となり、代替として救貧法が制定・施行されるようになると通常理解されている。ところがこれもよく知られるように、16世紀から17世紀初めにかけて救貧法は幾度も制定され改変されている。これは実効性が低かったことの傍証である。実際のところ救貧法がどの程度地域レ

2) 岡田（2005）。とくに第3章は近代的地方政府の始動について、1848年公衆衛生法以降の自治的活動を1854年・1866年・1875年と改正状況とともにたどっている。そこでは墓地の管理（213頁）死者埋葬の管理（257頁）についても論及がある。

ベルで執行されていたのか、あるいは宗教ギルドが担っていたような相互扶助・弱者救済がどのようになされていたのかについては17世紀、あるいは18世紀にいたるまでまだまだ研究の余地があると言った方が適当と思われる。救貧法の地方における実施に関しての古典的作品 E. M. ハンプソン著『ケンブリッジ州における貧困の取り扱い *The Treatment of Poverty in Cambridgeshire*』においても確たる変化は18世紀になるまで見出せない (Hampson 1934)。

教区レベルでは最近18世紀60歳以上の高齢者についての研究を著した S. R. オタウェイが、有名なターリング教区を含め全国4教区における豊富な史料群とあわせて救貧監督会計記録を用い成果をあげている。新旧救貧法の地域レベルでの施行について詳細に地方差を含めて論じるものである (Ottaway 2004)。筆者の独見であるものの、教区単位で観察すると宗教改革期から救貧法制定・施行の時期に近親以外の親族関係への言及が増えているため、宗教ギルドでも教区隣人関係のみならず親族関係も区別しがたい形でコミュニティを形成していたものがそのまま機能していたと考えることができる。遺言書はその移行過程を垣間見させてくれる史料である (高橋 1999 : 7・8章)。だが、まさにこの16・17世紀という時期に、実は遺言書そのものが遺贈・相続行為という場面を通じて中世教区宗教ギルドにおいて形成されたものを受け継いでいたのがあった。

1.2 対象概観：ケンブリッジ州ウィリンガム教区

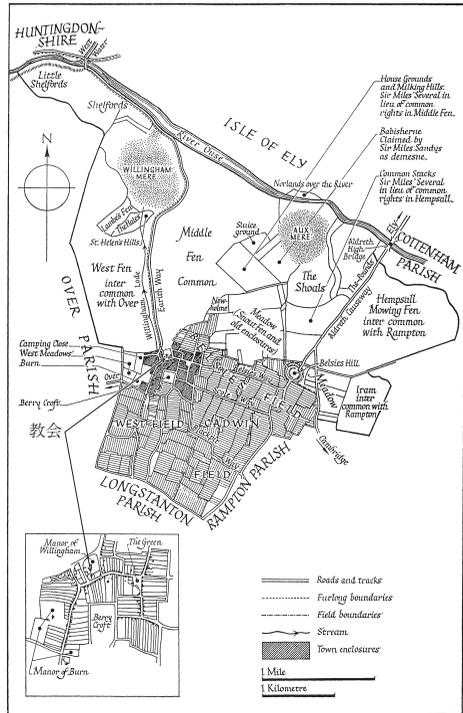
本章で扱うウィリンガム教区はイングランド東部イースト・アングリア地域のケンブリッジ州に属し、大学町ケンブリッジ市の北西9マイル(約15キロ)に位置している。海拔8メートルの低地で沼沢地縁り (Fen-edged) 地域にあって、The Fenland と称される東部大沼沢地帯 (面積1,300平方キロメートル) に教区北辺のウーズ川 (the Ouse) とその堤を隔てて接している (Darby 1983)。ウーズ川より北は、当教区が属するケンブリッジ州本部とは古来行政区域を異にするアイル・オブ・イーリーである。沼沢地縁り地帯の教区は総じて大型で、ウィリンガム教区も半径2マイル以上ある。教区全体を踏査しようすれば

優に半日はかかる。教区の形は大雑把にいて扇型をしており、教区全体4,500エーカーのうち約3,000エーカーは主に沼沢地 (fen) と分類されるコモンズ (共同用益地) である。この沼沢コモンズは夏期には乾き、冬期には河川からの水であふれる。古来幾度となく生じた洪水 (flood) により肥沃な土地柄であり、17世紀に国家主導で飛躍的に進んだ灌漑・干拓事業により当教区を含むこの一帯は豊かな農業生産地帯となった。16・17世紀には人口4-500名程度であったが、囲い込みも含め保有地を失い流亡する民が全国的に社会問題となった時代でもあり、その人口流入の受入先として18世紀

初頭には6-700名となる (Spufford 1974: 24)。1801年の最初のセンサスでは約800名であり、さらに1853年の議会制囲い込みをはさみながらも人口は増加を続けた (伊藤栄晃 2001b: 5-7)。

16・17世紀にかけて当教区において人口が増加するのは、流入が主たる要因と思われる。流入経路としては、河川交通を提供するウーズ川と、生活資源を提供するとともに冬期には相当部分が沼沢と化し水運を促すコモンズ-共同用益地の存在はきわめて重要であった (高橋 2005)。しかし、現実に流入する際には放浪の果てに徒手空拳で流れてくるというよりも、何らかのとして縁 (よすが) が役割を果たしていたことが多かったと思われる。その際に伝手として最も一般的なのは親族関係であったろうが、それをも含めた教区のあり方も

地図1-1 ウィリಂಗム教区と教区教会



※M. Spufford, *Contrasting Communities* (Cambridge, 1974) p. 120より転載。

深く関わるのである。

元来イーリイ修道院領であったウィリンガム教区は宗教改革による修道院解散後、1600年に新たな世俗領主であるサー・マイルズ・サンディス（サンズ）（Sir Miles Sandis）を迎えていた。新領主はいわゆる進取の気性に富んだ人物で沼沢地域における国家事業としての大灌漑にも取り組むが、やがてそれによる負債がもとで破産する。それゆえ17世紀中葉までには当教区の領主は事実上存在しなくなるのである（Spufford 1974：121-5, 127）。その間この世俗新領主が共同牧草地の囲い込みを住民の意向に反して行った際には、主立った住民による騒擾が1602年に起こっている（*ibid*：123-7；高橋 1999：6章2節）。また、同じ教区民の拠金によりこの地域あるいは全国的にも先駆とってよい村立学校がそれに先立つ10年前にできていたことは、むろん共同墓地に直接その痕跡をとどめはしないものの、あらかじめ念頭に置いてもらいたい³⁾。

2 共同墓地からみたコミュニティ

2.1 ウィリンガム教区共同墓地

村落部では家族の歴史をたどると共同墓地への関心が募り、共同墓地を訪れると転じて埋葬される家族に注意を向けることになる。ウィリンガム教区教会は集落の北辺に位置し、共同墓地はその敷地内にある。集落は教区中心より幾分西に偏し、東南に耕地が連続する。もともと当村落は教会を基点にしており、大通りは教会から伸びている。N. ペプスナー著英国建築シリーズ・ケンブリッジ州編では、ウィリンガム教区教会はノルマン期の特徴を備えた建築物として紹介されている（Pevsner 2002）。教区景観としては、ひたすら平坦な沼沢地を眼前に教区教会が際立つのである。

ウィリンガム教区共同墓地は現在では教会敷地内とは言え、19世紀以降人口急増への対処として本来の境内を西方の共同用益地方向に拡大してできあがっ

3) 学校設立に関しては高橋基泰（1999：6章1節）。また、Spufford（1974：193-5）および Cottenham Village Local History Group（1968：5-7）。

図 1-1 ケンブリッジ州ウィリンガム教区共同墓地模式図：聖別版

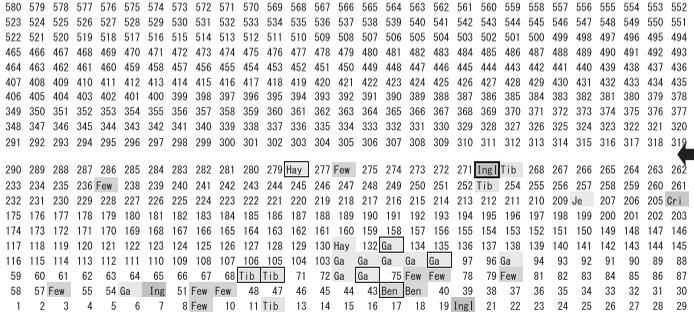
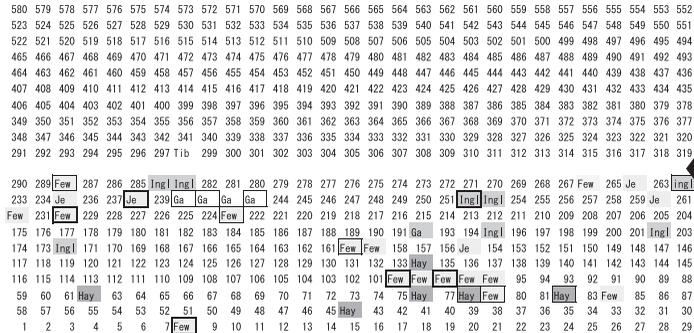


図 1-2 ウィリンガム教区共同墓地模式図：非聖別版



注：北が上。
 Ing: 同一地番に3名以上 Je: 同一地番に2名 Ga: 同一地番に1名

16・7世紀以降のウィリンガム教区に登場する家族

- Ben Benton
- Cr Crispe
- Few Few
- Ga Garner
- Hay Haydon
- Ing Ing le
- Je Jeeps
- Kidd Kidd
- Os Osborne
- Read Read
- Tib Tibbit

552	553	Je	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	Ben	575	576	577	578	579	580
551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541	540	539	538	537	536	535	534	533	532	531	530	529	528	527	526	525	524	523
Je	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522
Je	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	Read	468	467	466	465	
436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	Read	459	460	461	462	463	464	
435	434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415	414	413	412	411	410	409	408	407
378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	Hay	402	403	404	405	406
377	376	Ben	Ben	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	Deb	362	361	360	359	Krad	357	356	355	354	353	352	351	350	349
Ben	Hay	322	323	Je	Je	326	327	328	329	330	331	332	333	334	Deb	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348
319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291

262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290
261	260	259	258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233
204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232
203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175
146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174
145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117
88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

552	Deb	554	555	556	557	558	Hay	560	561	562	563	564	565	566	567	Hay	Few	Hay	571	572	573	574	Ga	Few	577	578	Hay	580
Ga	550	Je	548	547	546	545	544	543	542	541	540	539	538	537	536	IngLe	534	533	532	531	530	529	528	527	526	525	524	Cri
Ga	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	Few	513	514	515	516	517	Few	519	520	521	522	
Ing	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	Few	477	IngLe	IngLe	IngLe	IngLe	472	471	470	Few	468	467	466	465
436	437	438	439	Je	441	Few	443	Few	445	446	447	448	449	450	451	IngLe	453	Few	455	Few	457	Few	Few	Few	461	462	463	464
435	434	433	432	Je	429	428	Hay	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	IngLe	IngLe	IngLe	412	411	410	Ga	408	407	
378	379	380	Few	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	Few	Few	395	396	397	Tib	399	400	Tib	402	403	404	405	406
377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	Read	363	362	361	360	359	358	357	356	355	Deb	353	352	351	350	349
320	321	Tib	Tib	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	Tib	341	342	343	344	Few	Few	347	348
319	318	317	316	Few	314	313	312	IngLe	310	309	308	307	306	305	Read	Read	Read	Read	Tib	Tib	297	296	Few	294	293	292	291	

262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290
261	260	259	258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233
204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232
203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175
146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174
145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117
88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

た模様である。中世であれば聖俗で埋葬の高低が決定した。聖堂内の高聖卓（high altar）が東隅に設定され、西に向かうごとにその聖化が減じ、教会内の敷地へといたるといふ順序であった。もっとも聖的な範囲は共同墓地の域内に限られたのであるが（Houlbrooke 1998：364-5）⁴⁾

ウィリಂಗム教区教会評議会（Willingham parish church council）は、埋葬記録（Willingham Burial Records）とともに共同墓地の見取り図を保管している。本章ではこれらの資料を調査の足がかりとする。ただ、埋葬記録は19世紀後半、それも1870年代以降がほとんどである。そのため、19世紀以前を遡ろうとすると、利用できるのは本来の教会敷地内に立存する墓石群に限定される。これらは17世紀のものもあるが、判読不可能のものも多い。したがって17世紀以来の教区住民の状況を共同墓地から解明していこうとする際には、教区登録簿や遺言書を含む文書史料からのデータで補うことを余儀なくされるのである。

共同墓地見取り図は、長らく当教区教会評議会委員であり、また在地の地方史家であった故 M. ホプキンス（Mike Hopkins）氏の作製したものである。本来他見無用のものなのかもしれないが、撮影とともにコピーの取得、加えて利用にあたっては好意的に教会評議会から許可を得ている。なお、氏は当教区におけるニックネームの歴史を上梓している（Hopkins 1992）⁵⁾

教区民であるということは、教区共同墓地に埋葬される権利を有するということであった（Pounds 2000：428）。その時期の遺言書を通覧すると魂の遺贈の次には書かれるのは遺体埋葬場所の指定であることが多い。全体の趨勢には影響が少ないがさしあたり念頭に置くべきこととして、非国教徒の扱いはある。それは遺言書における埋葬場所の指定にも現れる。1650年代以降の重要な変化として、慣わしである「教会境内に」（in the churchyard）という文言の代

4) 墓守（sexton）という「専門職」の存在についてはウィリングムの場合現在までのところ不明である。まれに墓掘り記録などが残る場合もある。他方、墓の見取り図についてもこの教区の場合には20世紀の作成であるが、19世紀初頭サリー州ホーレイ（Horley）教区の教会敷地図は異例に詳しい地図となっている。およそ500基が家族名で確認でき、それらのうち幾つかは大きな塊として群集するが多くは2ないし5基でまとまって見出さる。時期は多少新しくなるがウィリングムも同様である。

わりに、遺言執行者の自由な判断にまかせる、あるいは「キリスト教徒の」埋葬をとする事例が散見されるようになっているのである (Spufford 1974 : 331)。もっとも、それまでも「教会境内」としない選択はあった。そこには教会回廊に既に埋葬されている家族のそばに、というように相応の事情があったのである (*ibid* : 108-9)。しかし、指定はあくまで教会敷地内の範囲内であり、それはむしろ中世教区ギルドがあった頃の名残であったのだが、17世紀後半からの変化は教会敷地外の可能性もありえたのである。だが、いずれにせよウィリಂಗム教区遺言書では埋葬場所の指定があるのがほとんどであり、教会境内を埋葬場所としている。当時は教会における席次とともに埋葬場所がそのまま教区社会における位置を目に見える形で示したのである (Pounds 2000 : 191-242-4, 473)⁵⁾ 教区住民社会の実相が埋葬場所においても際立った差異のない状況を生んだのであろう。それにもかかわらずウィリಂಗム埋葬記録は、19世紀以降も少なくとも聖別・非聖別の区分はしている。墓石だけからは判断できないが、次節で詳述する見取り図でその扱いの違いが明らかとなる。

2.2 ウィリಂಗム教区共同墓地初期埋葬記録の分析

ウィリಂಗム教区共同墓地埋葬登録簿 (Willingham cemetery register of burials book) は2004年現在までで第6集を重ねている。記載事項は登録番号・埋葬日付・名前・年齢・死亡場所・死亡日付・埋葬場所地番である。第6集は3,148番から始まり、埋葬記録は1998年である。さかのぼって第5集は、1975年以降

5) 実際、家族史研究において最大の障壁の1つが同姓同名の多さである。とくに教区登録簿や教会裁判宣誓証人記録などの大量データ研究の結果、17世紀後半以降父と子とが同姓同名である割合が高まると同時に名前の選択肢がごく限られたものになることが確認されている。たとえばイギリスの男子の代表的な名前はジョン・ウィリアム・トマス・ジョージであるが、この4つで男子全員の半分以上を占めていたのである。したがって、ジョン・スミスがいたところにおり、同じ村に同時に複数存在するとなれば実際同時代人でもなんらかの区別が必要になったはずである。ホプキンスの研究は聞き語りをもとにしている。実際に代々の住人であれば可能な作業であろう。その研究方法を援用し、共同墓地見取り図にはときにニックネームを含め、埋葬されている人物の情報がわかる限り書き込まれている。ここでもスミスが多いが、その中には外来者であるジブシーも含まれる。

6) 教会における席次については高橋 (2000 : 53-5)。

のもので登録番号は2,731番からである。この時期までには登録開始期以来の記載として隠居 (retired) や乳児 (baby, infant) などの事項があった。4半世紀で419件を数える。第4集は1929年、世界大恐慌期の年度からのもので、登録番号1,711番から第2次世界大戦を経て1,000件登録されている。第3集は埋葬時で1907年を基点に500件、第1次世界大戦も経る。さらに第2集は起点を1890年代とし、393件をかぞえる。そして本章で分析の対象となるのはもっぱら第1集である。日本の事例の比較も考慮し19世紀以前の記録を主とするからである。

2.2.1 埋葬記録第1集の構成

本史料第1集は、共同墓地に対応するものとしては最も初期の埋葬記録である。それでも1860年代が最古であり、19世紀前半の記録はない。教会の敷地内にも Ingle 家や Few 家のように長らく続く家系の墓が文字通り散見できるのだが、それらは本埋葬記録のように系統だったものではないのである。登録番号1は Phineas Few で Few 家の1人である。Few 家は別稿でもふれたように、全体の家族の概ね3分の1が16世紀から18世紀まで続いた当ウィリಂಗム教区において、その典型となる細く長く続いた家系である⁷⁾日雇い労働者 (labourer) で1867年2月13日に79歳で死亡し、埋葬は4日後の2月17日である。彼は1788ないし9年生まれということになる。

模式図を示した。ウィリಂಗム教区共同墓地は埋葬場所に関してまず東西の敷地で二分される。次いで、その東西の敷地毎で聖別化されたもの (consecrated) とそうでないもの (unconsecrated) とに細分されるのである。中世であれば聖別されていない地面への埋葬は一般民衆にとって恐怖であったのだが、ここではそうしたものはほとんど感じられない (Morgan 1999 : 125)。宗教改革において、埋葬地の聖別・非聖別という区分は払拭された。それが最も明確な画期であるが、実際にはその区分自体は現代にまで残存している。そ

7) Few 家については高橋 (2005 : 15-26)。また、Gawtre (1972)。

れゆえ図1は同じ地番を上下で聖別・非聖別とに区分した。加えて社会的な諸々の要因、たとえば遺言書に反映される故人の希望および遺族の観点、故人の友人あるいは敵方、そして聖職にあるかどうかなどの諸々の要素が、埋葬の地理学とでも称すべきものをもたらしたのである (Daniell 1997 : 87)⁸⁾ 上の Phineas Few の場合には、聖別されない者として西の敷地に埋葬されている。聖別されない、ということで彼は少なくとも国教徒ではなかったのではないか。一族内でもこの時期になれば信仰は様々である。もっとも、16世紀以後の当沼沢地縁り地帯一帯の傾向からはずれることなく、いやむしろウィリンガム教区は非国教徒が早い時期から幅を利かせる土地であったのだが (Spufford 1974 : 300-6)。

2.2.2 埋葬記録の内訳

1867年から1891年までの約四半世紀で766件の埋葬があった。職業・身分の記載があるのでそれを見ると、96件が日雇い労働者で244件が日雇い労働者の子ども、加えて日雇いの妻が45件に日雇いの寡婦が9件であった。合わせて394件、全体の51%を占めている。さらに奉公人や奉公人の子ども、貧民なども15件ある。時代背景について論ずれば、1853年には議会制囲い込みが当教区でも行われている。もっとも、伊藤の論考にも見られる通り、ウィリンガムにおけるそれまでの農業のあり方や全般として零細農が多く目立った大地主がいないという状況はその後、1870年代に至ってもなおさして変わらなかったのである (伊藤栄晃 1997a ; 1999 : 1-2 ; Shaw-Taylor 2001 : 649-54)。だが、19世紀前半から人口増加は着実に進行していたのも確かである。すなわち、それ以前の教区全体の零細農化とは異なり、土地を持たない日雇い階層がウィリンガムで

8) もちろん、いったん埋葬されるとその後遺体が同じ箇所に残り続けるという保証はまったくなかった (Ibid., 93)。ギッティングズも検認会計記録を読み込むと、生と死を分離する新教の教義が順調に一般の埋葬に浸透していくというようにはとれないという。むしろ社会的な諸要因が埋葬についても大きく働くことを論じる。そして18世紀にはその世俗化は決定的となっていた (Gittings 1984 : 50-7)。

も過剰人口として急速に増えていたのであった。

なお、上記日雇い労働者の子どもは息子 (son)・娘 (daughter) を含めている。本記録では子ども (child) と息子・娘とは相違がある。子ども、という場合には原則として15歳以下で死亡しているのだが、息子・娘といった場合にはその限りではない。誰その子どもという事例でくるとそれだけで348件となり、45%を占める。もっとも息子・娘の場合でも15歳以下の者がいるため、幼少での死亡はきわめて多かったと言えるだろう。とくに乳幼児ということでみれば、死産 (stillborn) が8件、生後24時間から1歳までの乳児は200件である。この時期のウィリングム教区共同墓地に埋葬される者の4人に1人は1歳以下の乳児であったことは、同時期のイギリス全国あるいは日本でも同様の事態ではあったと思うが、墓前に立つとあらためて痛ましい。

登録が聖別されたものとそうでないものとで二分されることは既にふれた。聖別されたものは246件であるから、全体の32%、3分の1程度ということになる。1歳以下で死亡した事例でも200件中66件、とほぼ比例する。日雇い労働者の子ども224件でいうと74件であり、やはり比例している。聖別に関して貧富・身分階層による区別は、この時期のウィリングムではあまり大きな意味を持たなかったようである。いや、16・7世紀からすでにそのような状態であったとも考えられる。他方、同姓であっても聖別・非聖別に分かれる。もともと同姓とはいえ、一族が多人数を抱えるようになれば経済・社会的階層の分化も著しく、信仰に関しても多様化する傾向は必然であった (高橋 1999: 5章; Spufford and Takahashi 1996)。

同姓毎に分類し、図1-1~2の上で対応させると明らかである。なお、あらかじめ注意が必要なのは、本共同墓地における東西580ずつの番号が付せられているものは墓石の番号ではなく、あくまで地番であるということである。それゆえ同じ地番でありながらも複数の個人が埋葬されているし、また同じ地番に聖別されているものとそうでないものが共存することも珍しくない。図1では、16・7世紀以来の記録に登場し、長らく続いた同姓集団の分布を表わした。なお、Smith や Brown・White などのありふれた姓の事例は含めない。

日本では、上塩尻弥勒堂共同墓地のようにマケ・一族の墓群がまとまりとして墓地の大きな区域を占める事例は多い。だが英国では、同姓集団で大きく区域を占めるということはあまり見られない。それでも、このウィリングラムの場合には、Garner 姓や Read 姓などは聖別・非聖別それぞれに横一列でまとまって4ないし5地番を占有し、またその近隣にも得ている。これはいわば先を見越して一族の者がまとめて入手したと思われる。その時点である程度の財力があつたものであろう。どちらも17世紀からはウィリングラム教区の諸記録に登場する姓であり、ある程度の人数を抱える。ところが、Few 家や Ingle 家などのように15世紀からその存在が確認される大きな親族集団であると、系統がいくつかでき、系統それぞれでまとまり、同じ地番で詰め込む努力が認められる。それでも一族全体でまとまるということはない。Few 姓は聖別化の方では地番が重なることもなく9件あり、南西区域に散らばる。非聖別化の方はずいぶん件数を増し、50件をかぞえるのである(表1-1)。これらは北東区域および南西区域双方に広がるものの、複数が同一地番で共存するものが11地番、なかんずく3件以上が同一地番であるものが5地番ある。たとえば南西区域第100地番には William (1885年埋葬)・Edith および Hannah (1887年埋葬) 3名が埋葬されている。Few 家の家祖は借地農ではあつたがそこそこの耕地面積を有していたのである。だがこの頃までには教区全体の傾向に沿いほぼ極限まで保有高が細分化したため、ついにはこの時期総勢59名のうち33名が日雇い労働者とその家族という状況に及んでいた。他にも農業経営者 (farmer) を何人かは数えるものの、奉公人や新しい職種でも鉄道荷役 (railway porter) などあまり羽振りの良い感じではない。他方 Few 家に匹敵して長らく続く Ingle 家の場合には、聖別化では5件、非聖別化は26件である(表1-2)⁹⁾。聖別化された方では5件中3件が1地番を共有し、非聖別化の方では、幾つかの系統が横並びでまとまるため、1つの地番での共有は2名が地番共有と3名の場合とが2件ずつにとどまっている。Few 家にくらべ半分強の人数ではあるが日雇労働

9) Ingle 家については、新大陸へ移住した一族関係者が著した家族史がある (Wright 1989)。

者は1人だけで、その近親（妻・子ども）を含めても9名であり、職業分布でも肉屋・商人（merchant）など手堅くやっている、という印象である。

他方で、事例として件数はそれほど多くはないが、同一地番で姓が異なる場合もある。聖別化の場合には6件、非聖別化の場合には12件である。たとえば聖別化されている墓地で、北東区域第492地番は Hankin Jeeps（1881年没）と Sarah Smith（1869年没）とが共存する。Smith は聖別化でも別に1件、非聖別化においては3件で現れる。実際全国普遍的存在である姓の Smith 氏が登場すると、それ以上の調査は断念せざるを得ないが、親族・姻戚でも、あるいは奉公人でもないような場合も含まれるのではないだろうか。その想念はとくに聖別化されたものと非聖別化されたものとが同一地番を共有している事例が大半であることに由来する。同じ地番に聖別と非聖別が混在するのがむしろ常態なのである。当事者でないため断じることもしないのだが、日本での宗旨の異なる場合よりも大きな隔たりではないか。つまるところは、文字通りの共同墓地なのである。それゆえ、教区が住民の一切切を束ねる存在としてあることをあらためて認識する。とくに教区の聖俗両面でいえば俗事を担う教会役人組織が果たした役割が大きいとみなすべきであろう。

2.3 土葬と火葬

江戸期を通して土葬・火葬併用であった日本でいえば、農村部では昭和40年代ごろまで土葬は珍しくなかった。あるいは浄土真宗などで行われていた火葬の方が特異であり、一般には「焼かれるのはいやだ」という感覚もごく近年までの農村住民には見られたようである。その点では長らくヨーロッパでも同様であった（鯖田 1990：12, 14-21）。もっとも行路病者、いわゆるゆきだおれは、その身許がわかりそれが遠方であれば火葬にして遺骨を送り届けるということもあった。あるいは、明治以降コレラ流行などを契機に伝染病隔離など公衆衛生上の理由から火葬がすすめられるようになったのである¹⁰⁾

10) 明治17・8年埋葬・火葬条例。この時期の埋葬については東北学院大学経済学部岩本由輝教授より御教示いただいた。この場を借りて謝意を表する次第である。

表1-1 ウィリングラム教区共同墓地埋葬記録(第1集): Few家の事例

登録番号	姓名	享年	身分・職業	死亡年月日	死亡場所	埋葬地番	埋葬年月日
1	Few Phineas	79	Labourer	13 February 1867	Willingham	UW79	17 February 1867
20	Few Lydia	63	Widow of shoemaker	5 April 1868	Willingham	UE315	10 April 1868
22	Few Harry	1 day	Child of blacksmith	24 April 1868	Willingham	UE469	28 April 1868
23	Few Charles	3 days	Child of blacksmith	26 April 1868	Willingham	UE469	28 April 1868
30	Few Ruth Caroline	1 year 8 months	Child of labourer	2 September 1868	Willingham	UW79	6 September 1868
56	Few George	17	Labourer	9 February 1870	Willingham	UW96	13 February 1870
63	Few Jane	7 weeks	Child of shoemaker	19 July 1870	Willingham	UW266	22 July 1870
64	Few Sarah Ann	1	Child of labourer	25 July 1870	Willingham	UE518	27 July 1870
78	Few Jones	3	Child of labourer	17 December 1870	Willingham	UE444	20 December 1870
84	Few Eli	6 months	Child of shoemaker	7 January 1871	Willingham	CW50	12 January 1871
112	Few Albert Edward	16 months	Child of farmer	12 June 1871	Willingham	UE458	16 June 1871
168	Few Lee	21	Butcher	20 May 1873	Willingham	UE459	25 March 1873
185	Few Margaret	65	Wife of labourer	24 January 1874	Willingham	CW237	30 January 1874
190	Few Ebenezer	79	Thatcher	25 April 1874	Willingham	UE456	30 April 1874
208	Few Ann	44	Wife of farmer	24 January 1874	Willingham	UE458	29 January 1875
213	Few Isaiah	66	Labourer	30 March 1875	Willingham	UE442	4 April 1875
218	Few Sarah	31	Wife of labourer	5 June 1875	Willingham	UW97	8 June 1875
223	Few Wright	76	Farmer	1 November 1875	Willingham	UE454	5 November 1875
243	Few George	39	Shoemaker	22 April 1876	Swavesey	CW56	26 April 1876
249	Few Susan	76	Wife of labourer	22 July 1876	Willingham	CW76	24 July 1876
267	Few Arthur William	3	Child of shoemaker	15 February 1877	Willingham	CW49	18 February 1877
277	Few Ruth	2	Child of labourer	20 April 1877	Willingham	UW98	23 April 1877
278	Few Samuel	80	Shoemaker	23 April 1877	Haddesham	CW77	26 April 1877
281	Few Andrew	6 weeks	Child of labourer	25 May 1877	Willingham	UW288	27 May 1877
283	Few Rebecca	7 weeks	Child of labourer	31 May 1877	Willingham	UW288	2 June 1877
328	Few stillborn no name		Child of blacksmith		Willingham	UE469	3 October 1878
360	Few Harry	1 day	Child of labourer	22 September 1879	Willingham	UE381	24 September 1879
368	Few Mary Elizabeth	5 months	Child of labourer	14 February 1880	Willingham	UW223	18 February 1880
372	Few Rebecca	77	Spinster	23 March 1880	Willingham	UE345	27 March 1880
444	Few Mary Elizabeth	1	Child of labourer	16 July 1880	Willingham	UW98	19 July 1880
471	Few Louisa Jane	5 weeks	Child of shoemaker	13 March 1881	Willingham	CW9	16 March 1881
493	Few infant child	4 weeks	Child of Ingle Few labourer	13 January 1882	Willingham	UW223	16 January 1882
505	Few Richard	76	Labourer	12 June 1882	Willingham	UW232	17 June 1882
522	Few Naomi	18	Servant	18 January 1883	Willingham	UE478	22 January 1883
523	Few Norman	54	Farmer and dealer	17 January 1883	Willingham	UE459	21 January 1883
532	Few John Thomas	1 week	Child of labourer	22 April 1883	Willingham	UW8	25 April 1883
540	Few Jonas	81	Retired farmer	21 July 1883	Willingham	UE295	26 July 1883
546	Few Hannah Rebecca	14 days	Child of labourer	22 August 1883	Willingham	UW230	26 August 1883
591	Few Mabel Lucy	4 months	Child of labourer	31 March 1884	Willingham	UE569	4 April 1884
594	Few Mary	14 days	Child of labourer	26 April 1884	Willingham	UW8	30 April 1884
598	Few Rose Jane	17 months	Child of farmer	9 June 1884	Willingham	UE394	13 June 1884
601	Few Ann Maria	23	Daughter of farmer	21 June 1884	Willingham	UE393	25 June 1884
612	Few Jonas Victor	4 months	Child of labourer	21 November 1884	Willingham	UW230	24 November 1884
632	Few William	6	Child of labourer	17 April 1885	Willingham	UW100	22 April 1885
633	Few Tom	8 weeks	Child of labourer	20 June 1885	Willingham	UW8	24 June 1885
683	Few Esther	70	Widow	15 January 1887	Willingham	CW80	20 January 1887
692	Few Edith	13 days	Child of labourer	21 March 1887	Willingham	UW100	21 March 1887
699	Few Herbert Aaron	3 months	Child of labourer	19 June 1887	Willingham	UW84	22 June 1887
702	Few Ingle	53	Pensioner	Don't know	Over	UW159	5 August 1887
704	Few Tom	24	Draper	7 September 1887	Willingham	UE460	11 September 1887

登録番号	姓名	享年	身分・職業	死亡年月日	死亡場所	埋葬地番	埋葬年月日
707	Few Hannah Jane	12	Child of labourer	14 September 1887	Willingham	UW100	18 September 1887
714	Few Ann	57	Wife of labourer	10 February 1888	Willingham Fen	UE512	14 February 1888
715	Few Alfred	9 weeks	Child of labourer	5 February 1888	Willingham	CW276	9 February 1888
724	Few Samuel John	4	Child of labourer	15 May 1888	Willingham	UW98	20 May 1888
727	Few Benjamin	27	Labourer	4 June 1888	Willingham	UW230	8 June 1888
766	Few Maria	79	Wife of labourer	22 October 1889	Willingham	UW160	25 October 1889
773	Few no name	Stillborn	Child of H G Few		Willingham	UE346	27 January 1890
779	Few Grant	17	Railway porter	7 April 1890	Enfield	UW99	13 April 1890
801	Few George	83	Labourer	23 September 1890	Willingham	UW160	27 September 1890

注1 Few Phineas 網掛けの事例は日雇い労働者もしくはその近親

注2 CW：聖別、西側に埋葬 UE：非聖別、東側に埋葬

イギリスにおいては火葬の法令化は20世紀初頭であるが、習俗としては常ながら、必ずしも即座に遵守されたわけでもない。キリスト教信仰退行にともない公衆衛生的観点により前面に出てきたために、土葬の代替として火葬が推奨されるようになったのが1870年代であった。時期としてもウィリಂಗム教区共同墓地埋葬記録開始と一致する。イタリア・ドイツ・オランダ・ベルギーなど諸国の動きと歩を合わせ、イギリスでも外科医を中心として1874年に英国火葬協会が設立された。火葬の推奨理由としては、埋葬場からの空気および水分が病原菌を周囲にもたらし死亡率を上げているため、それを防ぐというものである。もっとも、火葬の受容はイギリスにおいては一般に極めて遅かった。最初の合法的火葬が1885年であり、火葬法の制定が1902年であったが、1908年までの時期でみると年間800件程度をかぞえるのみで、第一次世界大戦の終わった1918年でも火葬による葬儀は全体の0.3%に留まったのである。いや、1960年代であっても死者の半数は依然として土葬であった（Jalland 1999：249-50）。現在のウィリングム教区共同墓地でも、19世紀に埋葬された事例でとくに初期の100番ほどまでのものは、墓石さえ消失している。一般に墓は動くと考えた方がよいが、土葬はとくにスペースを食ううえに、後代がその上に新たな遺骨を埋葬していくため、時間がたつほどに消散の度合いが強まるのである。この点は日本の状況と大差ないと言える。この極端な受容の遅さについての理由は幾つか挙げられるだろうが、なんといっても伝統的なキリスト教信仰の影響が最も大きかったはずである。必ずしも毎週日曜日に教会へ通うわけではないにせよ。

表1-2 ウィリングラム教区共同墓地埋葬記録(第1集): Ingle家の事例

登録番号	姓名	享年	身分・職業	死亡年月日	死亡場所	埋葬地番	埋葬年月日
47	Ingle Lizzie Jane	10	Daughter of butcher	14 September 1869	Willingham	UE473	19 September 1869
109	Ingle William Jakes	1	Child of labourer	5 June 1871	Willingham	UE535	8 June 1871
119	Ingle James	79	Labourer	6 July 1871	Chesterton	CW20	8 July 1871
159	Ingle Sarah	60	Wife of butcher	7 December 1872	Willingham	UE493	10 December 1872
179	Ingle Sarah	84	Wife of labourer	3 December 1873	Willingham	CW52	7 December 1873
200	Ingle Bessie Louisa	1	Child of merchant	11 October 1874	Putney	UE414	15 October 1874
204	Ingle Edmund	2	Child of butcher	4 December 1874	Willingham	UE475	9 December 1874
247	Ingle Rebecca	71	Widow of merchant	27 May 1876	Willingham	UE415	30 May 1876
250	Ingle Elizabeth	75	Wife of labourer	27 July 1876	Willingham	UW253	29 July 1876
297	Ingle Robert	54	Butcher	14 December 1877	Willingham	UE474	18 December 1877
315	Ingle Norman	33	Farmer and butcher	10 July 1878	Willingham	UE476	14 July 1878
353	Ingle Ralph	11 months	Child of labourer	31 July 1879	Willingham	UW252	4 August 1879
371	Ingle William	75	Baker	17 March 1880	Willingham	UW290	24 March 1880
438	Ingle Agnes Mary	3	Child of merchant	7 June 1880	Willingham	UE414	12 June 1880
452	Ingle Emmeline Daisy	1	Child of merchant	25 September 1880	Willingham	UE414	?
504	Ingle Elizabeth	72	Widow of butcher	1 June 1882	Willingham	UE452	6 June 1882
528	Ingle Naomi	56	Spinster	26 February 1883	Willingham	UW283	2 March 1883
572	Ingle Arthur	9 days	Child of widow	12 January 1884	Willingham	UW262	15 January 1884
574	Ingle Grace	1	Child of butcher	25 January 1884	Willingham	UE311	28 January 1884
587	Ingle Ernest	9 weeks	Child of widow	11 March 1884	Willingham	UW262	14 March 1884
647	Ingle Percy William	2	Child of labourer	21 December 1885	Willingham	UW252	27 December 1885
657	Ingle Sam	15 months	Child of grocer	28 April 1886	Willingham	UW202	2 May 1886
701	Ingle Annie Elizabeth	37	Wife of merchant	22 July 1887	Willingham	UE413	28 July 1887
709	Ingle Elizabeth	43	Widow	17 October 1887	Willingham	UE476	21 October 1887
718	Ingle Jonathan	71	Butcher	13 March 1888	Willingham	UW284	18 March 1888
726	Ingle no name	Stillborn	Child of W Ingle farmer		Willingham	CW270	30 May 1888
756	Ingle Sarah Lydia	5 days	Child of labourer	1 May 1889	Willingham	CW270	4 May 1889
760	Ingle Harry	3	Son of labourer	17 July 1889	Willingham	UW252	21 July 1889
768	Ingle Tiny	14 days	Daughter of farmer	5 November 1889	Willingham	CW270	6 November 1889
788	Ingle Harriet	25	Wife of labourer	18 June 1890	Cambridge	UW195	22 June 1890
798	Ingle Dora Christabel	10 months	Daughter of farmer	31 August 1890	Willingham	UW172	3 September 1890

湿潤温暖な日本であれば、とくに夏期には埋葬はいわば待ったなしである。そのため上塩尻村でも常日頃墓堀仲間による講(例:念仏講通称まるめ講)をつくり、仲違いすると極めて事態がむずかしくなるため、つとめて仲良くするようにしていた。上塩尻村でも明和8年(1771)以降の墓堀仲間の記録が現在に至るまで続いている¹¹⁾ イギリスにおいては気候としては比較的乾燥してお

11) この情報は、上塩尻今昔会との共同研究会において参加者である土地の古老から得た。また通称「まるめ講」念仏講史料(念仏講中帳 明和八年卯十月)の閲覧に関しては上塩尻在住山崎忠男氏および東福寺住職の御協力によるものである。この場で謝意を表したい。詳細な分析は、拙著『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』愛媛大学研究叢書18、2014年 第5章3、を参照のこと。

り、遺体も比較的長く放置しておけるが、それでもいずれは処分しなければならない。墓堀人足の手配は必用であるし、墓守 (sexton) も存在する。そこには中世ギルド以来の流れがあるはずである。それは、教区における社会生活のぎりぎりのところで機能する住民の組織でもある。その管理・運営の主体は、他地でも同様であるがウィリングラムでは住民から選出された教区役人であった。その現在の名乗りが、前記の教区教会審議会なのである。

3 中世教区宗教ギルド以来の埋葬・墓地 —近世期教区住民自治を遡って—

3.1 教区宗教ギルドと葬送・埋葬

中世以来、宗教ギルドはまぎれもなく教区住民組織として機能していた。イギリスに限らずヨーロッパ全体に存在していた教区宗教ギルドは、日本の講に匹敵する相互扶助組織である。日本で大衆に親しまれる神々（伊勢講・恵比寿講など）を祀ることを名目に組織されると同様、聖ヨハネ、聖アンドリューなどと聖者を祀るところから出発している。教区教会の下部組織として、宗教的な側面のみならず経済的・社会的側面における村落教区社会の多面性をも反映する。

教会税 (church rates) がイギリスで一般に取り入れられるようになるのは中世以後である。ケンブリッジ州教会役人の会計記録 (1497-1538年: Bassingbourn 教区) には、教会エール (church ales)・祝節のスポーツ催し・教区財産 (とくに家畜) の貸し出しや売却・村の演劇などの項目がその経費とともに記されている。これらは半ば自発的に行われるものもあり、概ね定期になされるものでもあったが単発のものも少なくなかった。この教会税は、ギルドへの寄付金と区別し難かった。それゆえその徴収は善意の喜捨として教会での参集時に帽子を回して徴収されるというのが通常であった。また、遺言書にも反映されるが、種々の遺贈も教会役人が会計簿に記録している。だが、教会役人により貧民のために運営されるものとしては慈善金による救貧院がケンブリッジ州で

は最もよく知られており、早くも14世紀には見出しうる。そしてこの教会役人の業務は教区ギルド役員によってなされる場合もあり、あるいは教会役人とギルド役員とが兼任という場合もあった。それは教区とギルドとの関係がもともと分別しがたいものであったからである (Hampson 1934 : 1-2)。

教区宗教ギルドは当時「埋葬クラブ」(burial club)と一般には言われ、構成員の死後、葬儀・埋葬に関して取り仕切ることを第一義とした (Daniell 1997 : 19-20, 42 ; Hampson 1934 : 3)。とくに宗教改革以前は、魂の救済に引き続き、その亡骸をどのように扱うかが重要であったために、教区ギルドの役割は少なからず大きかった (Daniell 1997 : 45)。遺体の埋葬はキリスト教徒の義務であり、貧しいものの埋葬は慈悲の価値ある働きなのであった (Houlbrooke 1998 : 330)。日本の上塩尻で現存する江戸期以来の墓掘り仲間も、いわば人間生活におけるぎりぎりの局面で待たなしの共同作業であるため、つとめて仲良くするようにしている、ということも参考にすればギルド成員間の親交も「埋葬クラブ」としてのものであったろうと思われる。

中世の葬儀を振り返ると、とくに富裕階層では一連の儀式・灯明などとともに食事の提供を含め貧者への施しが重要であった (Gittings 1984 : 28-9 ; Daniell 1997 : 52, 56-7 ; Houlbrooke 1998 : 263-4)。教区宗教ギルドは、食宴・病氣見舞・礼拝堂付き司祭 (chaplain)・祈禱等を行うといった点からして家族の延長とも見做しえた。くわえて、もしも子どもを含む肉親が、年老いた遺言者の靈魂 (soul) のために祈りを捧げることを怠りそうであれば、このギルドの「兄弟姉妹」(brethren) が祈ってくれると期待されていた。また、法人組織としての側面も持ち合わせ、灯明 (ろうそく) の維持・エール醸造および販売をおこなう、羊群など家畜飼育・牧畜経営をすることで利益をあげる、固有の不動産をもって賃貸し財政の基盤とするなどの活動をおこなった。

ウィリンガム教区の遺言書でも16世紀初期のものに宗教ギルドへの言及が見られる (Mullinger 1897)¹²⁾。たとえば、1529年の遺言書でハズバンドマン William Boll (Bell) は魂の遺贈と遺体の埋葬場所を教会の境内 “the churchyard of Saynt Mathews” にと指定した後に、まず最初におこなった遺贈は三位一体ギルド

“Corpus Christi Gilde”へ5シリング、というものであった。これは当ギルドに彼が負っていた金額の弁済のためである。宗教ギルドへの遺贈に続いて従弟たち“cosyns”3名 Harry, William and Amies (Annes) に現金を遺贈している。その後ようやく彼には妻と子どもが登場するのでその存在を知る。まず娘が雌牛を、次いで妻が遺言書作成時点で住んでいた家屋を遺贈されることとなっていた。その家屋は妻が生涯不動産権を保持し、その死後は娘が、さらにその死後は親族のジョン“Jhon (John) my kinsman”の手に渡ることとされていた。経過はどうあれ、それらの内で、最も長命した者あるいはその係累が当該家屋を売却し彼と彼の妻の魂のため祈る寄進礼拝堂“chantry”を建てるべし、というのが遺言者の遺志であった。ところが彼の子どもはさらに2人いた。次の遺贈として教会の鐘の修繕費用のためのものと併記で「私の哀れな子どもたち“my poore children Jhon (John) and Herome (Jeremy)”めいめいに彼らが結婚できるようになった時点で支払われるべきものとして20シリング」遺していたのである。それゆえ彼には子どもが少なくとも3名いたのだが、ギルド構成員であり教会にも、家族と同等あるいはそれ以上に深い関心を寄せていたことがその遺贈順位にもあらわれているのである¹³⁾ さらに救貧院の支援も当州では宗教ギルドによってなされるのが通常であり、その設立もギルド構成員の遺贈によるものがほとんどであった。

16世紀半ばまで、民衆レベルにおいてはカトリック信仰がなかなか堅固であったとするのが最近の宗教史における定説となりつつあるが、その証左の一つがこの教区ギルドの威勢なのである。さらに、1教区1宗教ギルドとはかぎらなかった。複数教区にまたがる宗教ギルドがある一方で一つの教区に複数の

12) Mullinger (1897) は19世紀末にケンブリッジ州における教区ギルドについて州内教区のサーヴェイをおこなっている。労作である。ただし、ウィリントン教区については、ついに委細不明なまま1547年修道院領売却にもなう廃止の際に初めて現れるものとして一覧にあがっているのみである (ibid. : p. 401)。なお、そのときの特記事項として、ここで売却されるギルドには家屋および土地16エーカーが付属していた。

13) Cambridgeshire Archives (以下 CA. と略記), EPR Consistory registered wills, VC8: 153; William Boll, 1529.

表1-3 ウィリಂಗム教区遺言書に見られる宗教・教会・慈善への言及

年代	遺言書数	未納十分の一税の弁済	高聖卓 high Altars のため	教会施設維持	教区宗教ギルド	貧民への喜捨・寄付	公道普請・維持
1530年まで	22	13	19	9	4	3	1
1531-1555	36		7	5		12	2
1556-1560	36			3		9	
1561-1580	42			1		10	2
1581-1605	58					14	1

宗教ギルドが重なることもまれではなかった¹⁴⁾ イースト・アングリア地域、とくに沼沢地内、あるいは本教区のようにその縁に存在する土地では多数の宗教ギルドが存在したことが確認されているが、一般的にも機構・構成員の重複はありきたりのことで、両者は不可分でさえあった (Scarbrick 1984 : 19-39 ; Duffy 1992 : 142, 149-50)。教区そのものが兄弟団 (fraternity) であったともみなせよう。その諸活動は教区最古の役人組織である教会役人 (churchwarden) によって記録された。他方、その構成員には親族と隣人とが厳密に区別されることなく混然としていたのである。16世紀以前の時期、教区ギルドや「兄弟団」のはたらきは、提供物の平等なる分配だけでなく職業集団なども含む教区の境界も超えた諸関係の形成の一端として機能していた。

3.2 相互扶助および慈善・貧民救済の変容

よく知られるように宗教改革以後教区宗教ギルドが廃され、教区は教区民の連帯を祭礼・慈善事業などを通して補完する中間項を制度としては一気に失った。それまでは埋葬・葬儀にあたって、喜捨という意味合いで貧民への施しがなされていた。それは食事であり衣服であり、また金銭であった。だが、宗教改革の影響はウィリಂಗム教区においても明白である。たとえば1515年から1605年までの時期における当教区における遺言書を分析すると、貧民への遺贈など慈善行為は存続するものの、教区ギルドを含め教会関係へ言及が消失する (表1-3)。

14) 広域ないし間教区ギルドについては Pounds (2000 : 273-6)。

しかし、制度が変わろうとも教区に現実として弱者・貧民は存在し、その数はウィリಂಗム教区では必ずしも史料には完全に現れるわけでもないが着実に増えていた。当時の全国的人口移動で流入先になったのがこの沼沢地縁地帯であり、ウィリングムもその例にもれない。そして、比較的問題が表面化せずにそうした人口増加に対処していったものと思われる。その経過は教区全体として零細保有農化していく状況に示されている (Spfford 1974: 134-59)。もっとも、19世紀中葉の議会制囲い込みの前までは、沼沢を含むその広大な共同用益地で得られる資源で土地を十分に持たずとも生計を立てることが可能であったという条件があったからともみなし得る。そして、19世紀後半から末までの時期、共同墓地に埋葬される者の半数が、土地無しやその子弟であったとしても、教区に在住する限りにおいてはたとえば酪農や果樹園栽培など比較的労働集約的農業における労働力提供で可能になった。かつかつの生計は維持できていたということになる。加えて、親族あるいは非親族であつてさえも縁者の屋敷地内に小屋を建てて住み込むこともあり得ることであった (伊藤栄晃 2001b)。

ウィリングム教区でも慈善金によって運営される私設の救貧院は、16世紀の文書にその存在を確認できる。その救貧院とは、別稿で詳述したウィリングム村立学校設立の指導をした William Smith 博士の名を村落との併記で冠したもの “Dr. Smith’s Charity & the Town House” であった¹⁵⁾ 4名の寡婦がそこに居を定めている。1616年に遺言書を残している Alice Fromond は救貧院女 (almswoman) であった¹⁶⁾ もっとも、彼女の遺言書では息子が2名 (Jonas Fromond, William Fromond) 娘が1名 (Agnes Fromond) おり、おのおの30シリングずつという当時としてはまとまった額を現金で遺している。娘のアグネスが遺言執行者 (executrix) として救貧院の婦人達に調理器具や家畜などを供するようにしたところが注意をひく¹⁷⁾

親族内の弱者については遺言書にも見られる通り親族紐帯網が対応していた

15) CA., R59/4/1, Dr. Smith’s Charity & the Town House, Willingham. 文書は博士により創立された養老院兼救貧院のための基金をシリーズとして記載したものである。

16) CA., EPR Consistory registered wills, VC24: 133; Alice Fromond, 1616.

と思われる。時期としては16世紀後半期であり、教区宗教ギルドが廃止され、救貧法が施行されるまでの期間である（高橋 1999：7章）。だが、身寄りのない高齢者については教区が面倒を見ていた。その面倒を見るのは誰であったかといえば具体的には教区役人である。教区役人は持ち回りで主たる教区民から選出された。それゆえ、旧宗教ギルド監督と教会役人、そして教区役人は同じ顔ぶれの住民が担っていたのである。土地柄ゆえ、ウィリングム教区は沼沢役人（Fen Reeves）を耕地役人（Field Reeves）と対で配置していた。現在残存するのは沼沢役人会計簿（Fen Reeves account）である。1567年から1605年までの時期における教区の共同用益地である沼沢を中心にでき上がった会計簿で、そこには教区民の多くが日常生活上の必要に応じて多様に関与する状況が明らかである¹⁸⁾。その基金の出処は村落（まち、まち場）（town）である。売却（sales）・受け取り（receipt）・支払い（payments）の項目に分かれている。たとえば1590年の会計簿支払いの項目では、村落は沼沢役人を通して教区民に小口金融もおこなっていた。たとえば番号76 John Greave Jnr. は日雇い労働者で labourer であり、過去からの負債として20ペンスを村落に負っていることになっている。1590年の会計簿ではこの John Greave Jnr. は引き続き村落に負債をがあるとされ、しかもその額は利子もあるのだろうが7シリング6ペンス（90シリング）と4.5倍に増えている。会計簿であるから支払いもあり、たとえば1590年番号91 Christopher Bowle には、雌馬群（mares）を共同用益地である中の沼沢“Midelfen”から溝辺の沼沢“diche fenn”に移動させて2週間世話をしたということで5シリング4ペンス支払っている。

教区内での小口金融も、遺言書における遺贈の意味合いで負債の帳消しもしばしばは見られ、必ずしも常に弁済が完遂されたものとは考えにくい。しかし、負債は負債であり、1615年の単年度史料であるが仮差し押さえ財産保管者会計簿（Sequestrators' account）がその事実を証明する¹⁹⁾。その内実は教会十分の一税

17) ‘...her to suffer the women of the Almshouse quietly to enjoy and have a Bakin Tubbe and baking panne betwene them three kyne and three mares and one hen for’.

18) CA. P177/28/1 Fen Reeve's Accounts 1567-1605.

にあたるものであり、独身者および奉公人 (singulars and servants) も含む教区住民はほぼ全てに現金・現物の支払いを求めるものであった。現物は家畜から卵までも含む多様さを示す。宗教改革期以前の遺言書では十分の一税を未納であったとして、その納付を遺言する文言も見られたが改革以後は全く見られなくなる。この、他ではあまり聞かれない役職名も、教区役人が中世ギルド期以来の教会税徴収のために設置したものと思われる。この時仮差し押さえ財産保管者としてあったのは Richard Pearson であった。彼1人の行跡をたどるだけでも教区役人の果たした役割が知れる。1575年の土地調査記録では土地無しとして教会に面した区域に家屋を構えていた彼、リチャード・ピアソンは1602年の騒擾の際にはリーダー格3人のうちの1人であり「前神父 (教区司祭)」となっている。1590年に沼沢役人として任じていたときにも教会聖職者として関与したものと思う。そして1615年のこの役職である。

長期の趨勢として教区全体が人口が増え経済的には貧困化する状況の中で、当事者である住民は既存の組織を新たな事態へと対応させるためにその都度機能させていたのである。ウィリಂಗム教区の場合、宗教改革以前のこうした記録は残存を確認できない。だが、以上のように沼沢役人会計記録と仮差し押さえ財産保管者会計簿という教区における共同組織に関する記録と、その前後の教区学校設立および旧領主であるイーリィ大司教に代わって新領主となったサー・マイルズ・サンディス (サンズ) の不当な共同牧草地囲い込みへの騒擾という経緯が、宗教改革における修道員領解散・宗教ギルド廃止後の当教区における共同性を物語るのである。

3.3 救貧法時代の葬送・埋葬

社会の最下層にある貧民がどのように葬送・埋葬されていたかを知ることで近代初期において正しいとされていた儀礼のあり方がわかる。この場合に貧民は、救貧法での定義づけに準拠して身体障害者・疫病の罹災者・幼弱者をも含

19) CA. P177/3/1 Sequestrator's Accounts 1615.

むものとなっていたと考えるべきである。これら貧民の葬儀費用は居住する教区の負担であった。そして負担は教区に土地財産を持つ全ての者に課された救貧税 (rate) によってまかなわれた。ギッティングズが検認会計記録などを精査した結果、通常その内容は必要最小限ではとどまらず、費用もそれなりのものであったことがわかっている。余裕のある時代であれば飲食の供与もやはり教区の負担でなされていたのである。さらに日本では「行き倒れ」となる無名のおそ者 (nameless strangers) も貧民と同様の扱いを受けた (Gittings 1984 : 61-5)。

大局からすると、イギリスの救貧法-制度はアジア諸国あるいは他のヨーロッパ諸国の状況と比べても独特のものである。救貧法それ自体も時間の経過とともにしばしば内容を変えており、さらにそれがどの程度実効したのかに関しては不明な点が多い。E. M. ハンプソンはケンブリッジ州における貧民の取り扱いに関して新救貧法 (1834年のこの法令で有名な救貧院-作業場 *workhouse* がそれまでの救貧院 *almshouse* に取って代わった) 成立の100年後の1934年に著作を上梓した。その中でエリザベス1世までのチューダー期、救貧に関する一連の実験的法令についてはほとんどが実効していなかったとする (Hampson 1934 : 5)²⁰ しかし、少なくとも貧民とはどういったものと認識されていたか、教区がどのような役割を期待されていたかはわかるのである。

さかのぼれば1536年の法令の内容は、5歳より上の浮浪の児童全てを対象として、各地方当局は奉公先を斡旋するというものであった。また1590年代後半の飢饉もあり貧民の状況が著しく悪かった1598年および1601年の法令は、両親が養えない子供はすべて教区徒弟 (*parish apprentices*) として対象とするものであった。救貧監督がこの法令で定められ救貧行政上の第一の責任を負うものとされた。教会役人と2ないし4名のしっかりした世帯主 (*substantial householders*)

20) 日本のイギリス史研究においても研究蓄積は多いが代表的なものとして新井 (2005)、大沢 (1986)、18世紀エクセタ市の救貧社 (エクセタを含めた14地方都市における地域救貧行政をとりしきるための地方公共団体) における係争問題をとりあげた坂下 (2002) は、ローカルな問題をナショナルな場で論じたとする点で興味深い。市民革命期のロンドンの事例ではあるが、菅原 (1999)。

がその任にあたる (43Eliz., c2)。この時期から1630年ごろまで、就労可能な貧民は作業場で働くようにさせていた。1660年から1760年ごろまではしかし高齢者が救貧の主たる対象であった。1662年にはいわゆる定住法 (Settlement Law ; 13 and 14 Chas. II) が制定となった。これにより貧民への供与は強制的な救貧税負担として教区が負うことになった。ウィリಂಗムも決してこの法律の埒外ではなく、1667年独身女性 (spinster) マーガレット・パリー (Margaret Palley) がウィリングム村落への定住を熱望している旨、この法令の文言を用いた四季裁判所記録が残っている (Hampson 1934 : 124-6)。あるいは1663年に当教区およびオーヴァーおよびスウェイヴシーの3つの教区でアン・バロン (Ann Baron) なる女性がそのうちいずれの懸りとなるかを決定すべしと四季裁判所において判決が出ているのである (*Ibid.* : 133)。1660年から1831年までの時期ケンブリッジ州では945件の訴訟が数えられる (*Ibid.* : 139)。全国的状況に戻ると、その後1780年以降には再び若年の者が対象となる。それは環境劣悪な救貧院の設立ともあいまって、院外救済から院内救済へという悪名高き改制を経ていく。

その間埋葬・墓地の状況はどうなっていったのか。救貧監督官 (overseer) は通常教会役人が兼ねることが多かった。その救貧監督会計記録でも貧民の埋葬、とくに遺体を包む白布 (shroud) と墓所 (grave) のための弁済が時代を下るごとに件数を増やしていくのが全国的趨勢であった。あるいは遺体の担ぎ手への手間賃も記録されるかもしれないが、葬儀後の食事代への言及はまれである (Houlbrooke 1998 : 277)。救貧法による貧民救済の実効が増すとともに、葬儀への貧民の参加は漸減し、最終的には排除となる。社会階級の分極化が葬儀においても極まり、かつては貧者の善意が死者の魂が安らかになるのを助けた時代とは異なり、もはや貧民が提供するものはない状態になっていたのであった (*Ibid.* : 294)。

近代初期・近代英国における家族と死に関する歴史を著した R. ホウルブルックが1660年から1760年までの時期を簡潔に「礼儀正しさの時代」(the age of decency) と言い表している (Houlbrooke 1999 : 174)。全国的には人口停滞

の時期であるが、疫病により大量の死亡者を出すという事態もそれ以前にくらべると減じていたし、起こったとしても地域的に限定され、また被害規模も小さくなっていた (Wrigley and Schofield 1981 : 532-3, 664-9, 680-5 ; Slack 1985 : 151)。「礼儀正しさ」は埋葬においても理想とされ、より良識に添ったものとなっていった。だがその過程で、かつては貧者への施しも葬儀の一連の要素であったものが、その伝統が次第に後退していった。少なくとも貧者一般ではなく選ばれた個人への施しとなっていたのである (Houlbroke 1999 : 188-92)。ウィリಂಗム教区遺言書でもそのことは示される。また、16世紀中葉からのゆっくりとした普及ではあったが、やはり18世紀の初めまでには棺(桶) (coffin) が貧しい者においてさえも礼儀正しい葬儀の不可欠の要素となっていた (Houlbrooke 1998 : 339)。さらに、ウィリングムでも古い墓には骸骨や髑髏が刻まれているが、そうしたものも18世紀を通して消えていき、よりシンプルな墓石 (headstone) が一般となっていく (Ibid. : 363)。

むすびにかえて

本章はケンブリッジ州ウィリングム教区の共同墓地埋葬記録と現存共同墓地見取図を基本資料として、近世・近代の英国教区をコミュニティおよび住民自治という観点から歴史的に遡行するというおよそ前例のない試みをおこなった。イギリスを含む西洋社会の基層にある教会の最末端単位として、教区はおそらくこれを理解しないことには彼の地の仕組みもまた十分には理解しがたい。だが、コミュニティ・住民自治という切り口で、さらに可具体的存在であり日本の事例との比較も可能であると考えられる共同墓地について論じるためにも、研究史を含め準備段階に予想外に紙面をさかねばならないことがわかった。とくに墓については家族観と表裏の関係にあり、いわゆる「家」の有無が現在にいたるまで決定的な影響をもたらしていることが墓の残存状況を左右しているとも考えられる。他方で、強固であるはずの日本でさえも「家」の定着は予想外に新しいことも最近の研究が指摘するところでもある。そしてイギリ

スにおいても「家」そのものはなくとも、意外に一族のまとまりはとくに農村部では長らく続く事例も確認されている。それゆえ、共同墓地の比較も単なる相違の比較というよりも、対比、すなわち互いの歴史的な脈を踏まえたうえで、むしろ相似性・共通性を見出していくことにより実りがありそうである。そのことこそが共同性の国際比較を意義あるものにすると思われる。

現在の共同墓地にしる、それを管理する教区役人の後裔である教区教会審議会にしても、制度そのものは数百年を経ているにせよ、その住民自治に関する機能はコミュニティにおける諸々の側面あるいはその重層構造が変化するとともに大きく変質してきている。とくに中世において教区宗教ギルドが教区と混然一体としていたころ主として担っていた葬送・埋葬・相互扶助・救貧活動については16世紀の宗教改革で形としては断絶をみたものもある。だが実際にはこれらの機能はやはりコミュニティにおける住民自治の柱となるものであり、必ずしも教会色は保たずとも、生活に必用な事柄として教区にそれぞれの痕跡を残していた。遺言書はその残存を16・17世紀の転換期において最も良く示す。だが、18世紀になると、とくに救貧行政が人口増加および産業革命ないしは工業化による階級分化による困窮貧民に対処する過程を示す。その課程は、教区コミュニティにおける住民自治に質的変換を迫っていった。共同墓地はその変換の結果を現在にまで示す文字通りの具体的なものである。さりながら、それほどの質的変換を経たとしても、19世紀後半共同墓地においてほぼ半数を占める貧民の存在、宗教改革で一度は否定されたはずの中世以来の聖別・非聖別の区分、区分を容易に乗り越えての家族・親族関係を軸とした共存、これらはコミュニティとしての教区が依然として続いていることを物語るものでもある。

文 献

- 新井由起夫、2005、『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』、刀水書房、とくに第5章「ジェントリとフラニティ」121-54頁。
- Archer, I., 1992, *Pursuit to the Stability*, Oxford: Oxford University Press.
- Bainbridge, V. R., 1996, *Gilds in the Medieval Countryside: Social and Religious Change in Cambridgeshire, C. 1350-1558*, Woodbridge: Boydell.

- Cottenham Village Local History Group, 1968, *Charity School to Village College*, Loughborough.
- Daniell, C., 1997, *Death and Burial in Medieval England 1066-1550*, London: Routledge.
- Darby, H. C., 1983, *The Changing Fenland*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Duffy, E., 1992, *The Stripping of Altars*, London and New York: Yale University Press.
- , 2001, *The Voices of Morebath: Reformation and rebellion in an English Village*, London and New York: Yale University Press.
- 江川温編, 2007, 「死者の葬送と記念に関する比較文明史－親族・近隣社会・国家－」(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A):平成16年度～平成18年度).
- Erickson, A. L., 1993, *Women and Poverty in Early Modern England*, London: Routledge.
- Evans, N., 1980, "Testators, Literacy, Education and Religious Belief", *Local Population Studies*, 25.
- Farnhill, K., 2001, *Guilds and the Parish Community in Late Medieval East Anglia c. 1470-1550*, Woodbridge: Boydell.
- Gawtre, A. G., 1972, *The Fews of Cambridgeshire: A Family History*, Eastbourne.
- Gittings, C., 1984, *Death, Burial and the Individual in Early Modern England*, London: Routledge.
- Hampson, E. M., 1934, *The Treatment of Poverty in Cambridgeshire*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, M., 1992, *The Nicknames of Willingham: a Retrospective View*, Willingham.
- Hoskins, W. G., 1957, *The Midland Peasants*, London.
- Houlbrooke, R., 1998, *Death, Religion and the Family in England 1480-1750*, Oxford: Oxford University Press.
- , 1999, "The age of decency: 1660-176", in C. Jupp and C. Gittings, eds., *Death in England*, Manchester: Manchester United Press
- Howell, C., 1983, *Land, Family and Inheritance in Transition*, Leicester: Leicester University Press.
- 井上治代, 2003, 『墓と家族の変容』岩波書店.
- 伊藤栄晃, 1997a, "A Comparison of Socio-Economic Structure of Two Fen Edge Communities in the Mid-nineteenth Century Cambridgeshire", 『松平記念経済・文化研究所紀要』15.
- , 1997b, 「19世紀中葉のケムブリッジ州ウィリンガム教区における経済・社会・そして制度－十分の一税査定記録とセンサス・リターンの検討を中心として」東北大学経済学会『研究年報 経済学』59/3.
- , 1998, 「19世紀英国ウィリンガム教区における人口と社会」『関東学園大学紀要』25.
- , 1999, 2001a and 2003, 「議会囲い込み直前期のウィリンガム教区における開放耕地制(1)(2)(3)－ウェスト・フィールドの農地と土地所有」『関東学園大学経済学紀要』26/2, 28/1 and 30/1.
- , 2001b, 「19世紀後半のケムブリッジ州の農業村落」『関東学園大学紀要 Liberal

- Arts] 9.
- 岩田重則, 2003, 『墓の民俗学』吉川弘文館.
- , 2006, 『「お墓」の誕生－死者祭祀の民俗誌』岩波書店, 岩波新書.
- Jalland, P., 1999, "Victorian death and its decline: 1850-1918", in P. C. Jupp and C. Gittings, eds., *Death in England*.
- Kumin, B., 1996, *The Shaping of a Community: The Rise and Reformation of the English Parish c. 1400-1560*, Aldershot.
- Macfarlane, A., 1970, *The Family Life of Ralph Josselin*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 1977, *Reconstructing Communities*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McIntosh, M. M., 1986, *Autonomy and Community: the Royal Manor of Havering 1200-1500*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 1991, *A Community Transformed*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Morgan, P., 1999, "Of worms and war: 1380-1558", in C. Jupp and C. Gittings, eds., *Death in England, Manchester*: Manchester University Press.
- 森謙二, 1993, 『墓と葬送の社会史』講談社, 講談社現代選書.
- Mullingher, J. B., 1897, "The Gilds of Cambridgeshire", *Proceedings of Cambridgeshire Archaeology Society* 9.
- 岡田章弘, 2005, 『近代イギリス地方自治制度の形成』桜井書店.
- 大沢真理, 1986, 『イギリス社会政策史』東京大学出版会.
- Ottaway, S. R., 2004, *The Decline of Life: Old Age in Eighteenth-Century England*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pevsner, 2002, *The Buildings of England: Cambridgeshire* (1st. ed., Penguin, 1954); London and New York: Yale University Press.
- Pounds, N. J. G., 2000, *A History of the English Parish*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Reay, B., 1996, *Microhistories: Demography, society and culture in rural England, 1800-1930*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 鯖田豊之, 1990, 『火葬の文化』新潮社, 新潮選書.
- 坂下史, 2002, 「地域社会のダイナミズム」近藤和彦編『長い18世紀のイギリス その政治社会』(第2章)山川出版社.
- 指昭博, 2005, 「教区という空間」川北稔・藤川隆男編『空間のイギリス史』山川出版社.
- Scarbrick, J. J., 1984, *The Reformation and the English People*, Oxford: Oxford University Press.
- Shaw-Taylor, L., 2001, "Parliamentary Enclosure and the Emergence of an English Agricultural Proletariat", *The Journal of Economic History*, 61/3.
- Slack, P., 1985, *The Impact of Plague in Tudor and Stuart England*, Oxford: Oxford University Press.
- Spufford, M., 1974, *Contrasting Communities*, Cambridge: Cambridge University Press.

- , 1976, "Peasant Inheritance Customs and Land Distribution in Cambridgeshire from the Sixteenth to the Eighteenth Centuries", in J. R. Goody, J. Thirsk and E. P. Thompson, eds, *Family and Inheritance*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Spufford, M and Takahashi, M., 1996, "Families, Will Witnesses and Economic Structure in the Fens and On the Chalk: Sixteenth and Seventeenth-Century Willingham and Chippenham", *Albion*, 28/3.
- 菅原秀二, 1999, 「イギリス革命期ウェストミンスターにおける教区政治をめぐって—セント・マーティン教区の救貧行政を中心に」イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』刀水書房.
- 高橋基泰, 1999, 『村の相伝：近代英国編—親族構造・相続慣行・世代継承』刀水書房.
- , 2000, 「近代英国社会における家系図」歴史学研究会編『歴史学研究』74.
- , 2003, 「近世上田藩上塩尻村における家系図の『家族』と宗門改帳の『家族』—系譜関係・親族関係・世代継承」, 日本村落研究学会『村落社会研究』, 19.
- , 2005, 「ケンブリッジ州ウィリಂಗム教区再訪—『外』から見た沼沢地縁り fen-edged 村落」『愛媛大学法文学部論集』総合政策学科編19.
- Thirsk, J., 1957, *English Peasant Farming*, London.
- Westlake, H. F., 1919, *The Parish Gilds of Medieval England*, London.
- William, W. M., 1956, *The Sociology of an English Village: Gosforth*, London.
- , 1963, *A West Country Village Ashworthy: Family, Kinship and Land*, London.
- 柳田國男, 1946, 『先祖の話』筑摩書房.
- Wright, F., 1989, *The Book of Ingles and Associated Families*, Willingham,
- Wrightson, K. and Levine, D., 1979, *Poverty and Piety in an English Village - Terling 1525-1700*, London: Academic Press.
- Wrigley, E. A., and Schofield, R. S., 1981, *The Population History of England 1541-1871: A Re-construction*, London: Arnold

Understanding the Parish and Community in Early Modern and Modern England from the Perspective of the Cemetery

TAKAHASHI Motoyasu

This article aims to trace back the history of English parishes as communities in the light of self-governance, using the burial records and the plan map of the parish cemetery of Willingham, Cambridgeshire. The current cemetery and the parish church council, the direct successor of the medieval religious parish guild, of Willingham have been significantly changing their self-governance features throughout the long history, over several centuries, of these institutions. The changes are attributed to the transformation of multiple functions of the communities. In reality, the parish religious guilds could not be clearly differentiated from the parishes themselves.

In particular, some functions of the medieval parish religious guild, such as funerals, burials, mutual aids and philanthropic activities formally disappeared during the Reformation in the mid sixteenth century. However, some functions such as burials were so important for the community and therefore in reality continued in a less formal or religious way. Nevertheless, in the eighteenth century national poor law systems gradually changed due to the rapid growth of the population and the diversification of classes caused by the Industrial Revolution or Industrialisation.

However, Willingham cemetery in the late nineteenth century illustrates how the parish continued as a community with features which had existed since the medieval period. These features include the divisions of consecration, coexistence of family and kin relationships crossing the social and economic strata and the poor people's gravestones occupying more or less half of the total. These findings would be useful for contrasting and paralleling with Japanese cases. (276 words)

第2章 旧上田藩領各村共同墓地考

はじめに

本章の基となる調査は、2012年4月2日から4月4日までの3日間に行われた。案内および車の運転には上田市博物館前館長の林和男氏にお願いした。氏は、学生時代にはマーケティングを専攻されたが、考古学に傾倒され、また上田市市役所員として40年近く、文字通り市内隅々まで熟知していらっしゃるため、今回の調査には最適であった。

対象は、旧上田藩であり上田市内の地域に限定した。また、日程の都合から旧丸子、旧真田町、別所温泉を省いた。だが、上田市内に限定して3日間フルに車で61地域（うち53は旧村）を踏査しただけでも、共同墓地には村毎の個性があることを知るにいたったのである。

本調査の前段階として、すでに筆者がおこなった上塩尻共同墓地悉皆調査がある。これは、本村の共同墓地における墓石を個別に調査し、模式地図化したものである。それにより、同族（マケ）毎に墓地の区画としてまとめたものの集合体として共同墓地ができあがっていることから、家-同族による村の共同性の具現ととらえた。ところが、果たしてこの共同墓地における共同性の発露が、果たしてどれほど普遍的なものなのか、先行研究もなく、不明なままであった。そこで、昨年データベース化が完了していた上田市地籍の中から、上記範囲の上田市全墓籍データを3,000件余市役所において閲覧し入手した。そのデータをすでに悉皆墓石調査の済んでいる上塩尻村を基準に分析すると、隣接する秋和村と下塩尻村とは対照的であることが判明したのである。

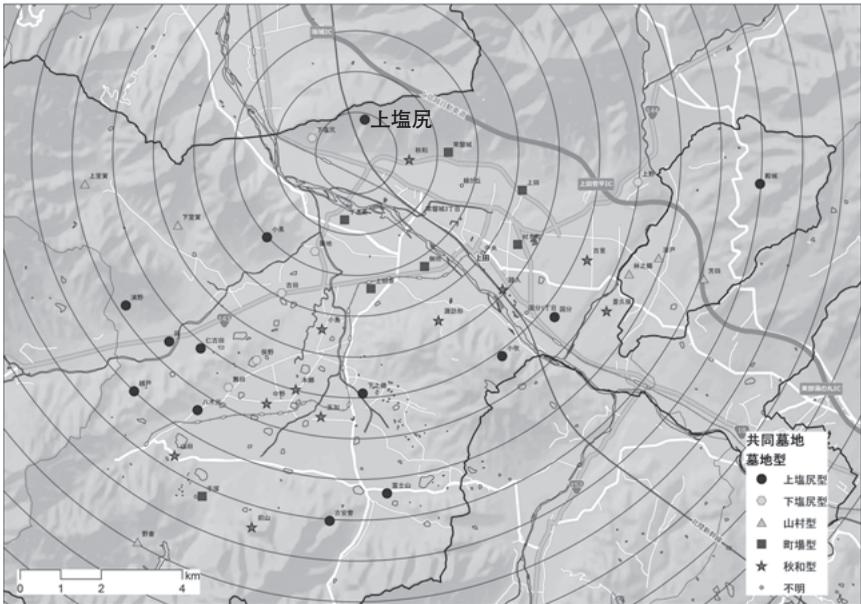
旧上田藩領共同墓地調査

本旧上田藩領共同墓地調査は2012年4月2日から4日までの3日間、朝8時から夕方までおこなわれた。本調査の主要目的は上塩尻村共同墓地が同族毎にまとまっているありかたは、家・同族が示す共同性が具現化したものであるとして、それが上塩尻に特異なものなのか、あるいはより一般的なのか、を判断する、ということである。それゆえ墓相調査の基準として、あらかじめ上塩尻と下塩尻・秋和の母群の状況が、上田城への距離に比例して、下塩尻が「在(郡村部)」、秋和が「町場型」、上塩尻はその混合型、と作業仮説をたてた。

そのため、調査の第一歩は案内同行者の林和男氏との共通認識を得るという意図もあり、まず基点となる上塩尻・下塩尻・秋和の順で調査した。

調査中を通じて得た所感をあらかじめ簡単に述べる。今回の調査は3日間で市役所員を38年間勤め上げ市博物館長として定年退職した直後の林和男氏という、土地勘および本調査への理解の深い、これ以上望むべくもない案内者(運転も含む)の同行を得た利点は計り知れない。他方、行政による区画整理が現在進行中である一方、元の状況を知悉している80歳台の古老(90歳台は難しい)およびその話を理解でき、部外者に通訳できる一回り若い年齢層(60・70歳台)のインフォーマントが生存している今は時機としても好適であるとともに、最後の機会を活かしているというべきであろう。他方、個々の墓石の調査は墓地の調査をせねば意味をなさず、個々の墓地についても、その位置づけは地域、とくに旧藩領全域を鳥瞰して初めてわかるのである。そして、墓石・墓地のみ求めてもわからず、墓石を整え、墓地を整備・維持するには一定程度の経済的裏付けが必要である。さらに、経済的影響が大きいということはわかっているが、家族・村のありかたがわからなければ、その配置やでき方の説明はできない。とくに家と村とをつなげるには系譜関係にもとづく同族(英語の表現では家連合および親族関係とするのが理解されうるように思われるが、この系譜関係については日本同様系譜学と歴史学との接合が十分であるとはいいたい)の理解が必要であることを、今回の調査で強く認識した。なぜなら、旧上田藩

領の各村の多くが、同族毎のまとまりを持つ共同墓地を村のはずれという境界意識の際に置いていたからである。近世の村の境は漠然としていることが通常で、その境に接しておかれたと思われる共同墓地も位置が固定していたとはいえない。村が入り組んでいるところに共同墓地が置かれている事例も複数見つかると、あるいは、隣村に面した山上に同族の墓が累々とならび隣村を威圧するかの相貌を示す事例もやはり複数見られるのである。村人の共同意識の有り様を地理的にも村はずれにある墓地が具体化している。また、清水・山崎の墓群が入り込んでいるところでは、なぜかその村の共同墓地は一族毎のまとまりを持ち、かつ大規模である場合が多く、あたかも接着剤のような機能を結果として果たしている。度合いは小さいが滝澤や春原も同様である。その点で見るとやはりこの清水・山崎・滝澤・春原を含み、なおかつ旧上田藩領の共同墓地墓相パターンを一村で集約させているかのごとき上塩尻村については、地域全体で盛んであった蚕種業の集結点であったことを反映するものと考えている。



地図2-1 旧上田藩領各村共同墓地分布

18世紀から19世紀にかけて建築史において見られた現象が共同墓地にもやはり見られるのである。蚕種業がつくりあげた共同墓地相ということになる。すなわち、蚕種という家業が墓地に示される家名につながる。そしてその現象は一般通念よりも新しく、18世紀以降のものなのである。

◎2012年4月2日

調査地0 上塩尻

上塩尻村の共同墓地については、別稿で述べたように大きなものとして弥勒堂共同墓地があり、それに隣接する東川原とが、村の東橋の山の斜面に陽当たり良く広がっている。さらに、東福寺裏の馬場家墓地群が中規模程度で山腹にあり、他方河原沿いに横長く春原家墓地群が伸びる。やはり春原家墓地を含む小規模なものが村内に3つ、そして弥勒堂・東川原とは反対の西端である辰の口に、山崎家墓群がある。これらのあり方は、旧上田藩領内の墓のあり方が見事に集約されている。主たる共同墓地が村のはずれの山の斜面に一族毎にまとまっている、という態様は、18世紀中葉からある時期に経済的に余裕が出来たと思われる他の村々と共通している。他方、馬場家のように寺の裏の山の少し深く、特定の一族がまとまって墓群としている、という態様も幾つか見つかる。さらに、山村で多いのが共同ではなく個別の家毎に、しかも概ね道沿いに自分の家の敷地内でまとまるという態様も山崎家群や春原家小墓地群などの事例で共通する。

今でこそ陽当たり良好の共同墓地として映じるが、半世紀ほど前であればうっそうとした木々に覆われていた。とくに蚕種業が盛んなときには、墓群は概ね桑の木々に覆われていた。現在60歳の記憶でもそうであろうし、現在70歳代の山崎忠男氏も同様の印象をわれわれに伝えるのである。

調査地1 下塩尻

調査以前では、下塩尻は城下である秋和と比べてより在方であり、郡部農村の特徴が強いと見なしていた。上塩尻はそれゆえ、その中間である、と簡単に考えたのである。ところが、下塩尻は旧北国街道沿いの山根と千曲川

に近い中島との2つの集落がかつてはそれぞれに村を形成し、気風も同じではないことを現地での聞き取り調査の過程で知った。具体的には街道沿いの山根の人々は、中島から見るとより街場的である（「こすっからい」という。そして、その墓地のあり方も、往来に面した山の斜面に、個々の家々の墓が小さくまとまるものの、ばらばらと散在している。他方、中島の方は、母袋(もたい)姓のうちで、自分の敷地に墓を設けている場合もあるが、ほとんどは、集落の中にある共同墓地にまとまっている。もっとも、かつては別のところにあったが、戌の満水で墓も流されてしまい、その後にした墓地であるため「最近」できた、と土地の人は表現することとなる（母袋剛介氏談）。もっともこの態様はその後旧上田藩領で塩田を含む各村で見られるものである。ここで全体の調査と関わる注意点として、村の中心格となる一族の姓が必ずしも墓地所有者として記載されているとは限らないということが挙げられる。上塩尻では指折りの佐藤家墓群の一画が弥勒堂の中心にあるのにもかかわらず、所有者としては登場しない。これと下塩尻で同格の地位にあると思われるのが庄屋も出している母袋家であるが、これまた表に出てこない。尾崎姓の所有者他57名となっているその共同墓地の大半が母袋であることが好例である。

調査地2 秋和

作業仮説としては、城下の範囲内にある秋和を街場型として、同族毎のまとまりを欠いた個々ばらばらの墓地であるとしていた。なぜなら、少なくとも墓地所収者データを見る限りにおいて、その所有が168件に細分化されており、同族毎のまとまりは見られないからである。そして、同じ所有地分布で見ると、この秋和168件に対して下塩尻は11件と極端に少なく、上塩尻はその中間の65件であるから、冒頭に書いた仮説が導かれたのであった。だが、ここでもインフォーマントの案内で実地調査をする必要があることを痛感した。

まず秋和は3つの主たる共同墓地がある。そして、それらは、概ね同族毎のまとまりを見せる。そのため、街場であれば必ず個別ばらばらになるのでもないことが示された。最初の墓群は林氏自身の家の墓が存在する。この墓は、林氏が伝手をたどって、「相場」の価格で所有者から購入したものである。この

ように購入できる場合もあるが、後の例で見るように、なかなか新規に入手できない場合もありうるのである。

ここは、かつての林（現変電所）の裏にパチンコ屋造成のために移転した墓地である。一族ごとのまとまりはあるが、ごく狭い区画に墓石を納めるために密集している。そして、所有者が個別なために、説明がなければ完全な都市型の墓地と見間違えるはずである。もっとも、秋和では滝澤・小林、と言われるが、中島の場合には勢威を示したのが幕末であったためか、指折りの筆頭というわけではない。また、秋和全体が上塩尻と比較して、諸史料において村としてのまとまりに欠けるように映ることとこの墓地所有が個別であることもこの事例が示すのである。

中島家の墓群は実は所有者名よりもずっと多く、あるいは寺の所有となっているものの紛れている場合も少なくない。それゆえ、所有者は個別だが、一族としてのまとまりもある。もっとも、「中島本家」とする墓石があるが、これは山崎五郎右衛門の「本家」争いが示すような分家にとっての本家、と同様であろうか。総じて、上塩尻の弥勒堂・東川原のような大規模なものではないが、中規模程度で同族毎にまとまりがあると言える。あるいは、弥勒堂と東河原とが連結してあのように大規模になっているだけで、それ以前には桑畑であったことを考えると桑畑の広がりに応じて各村の共同墓地の規模も決まったと見るべきであろうか。

調査地3 下之条

整然としていて分譲地の如くである。河川近くにあり、氾濫があって川流れにあっても、区画整理により修復・整備は早いと言えるであろうが、上記3村とくらべて、興趣に欠けるというのが正直な感想である。同族としてのまとまりもない。寺からも離れている。これも分譲地としての性格を表している。この後の調査で、幾つか、同様の村があった。いずれも蚕種と結びつきの弱い村であったという点で共通するものと考えており、下之条型とする。

調査地4 築地（ついじ）

ここは、そもそも共同でまとめた墓地がない。ほとんど家の敷地内にあり、

隠れているとのことである。林氏が現地の人にたずねた結果判明した。その後も村の中を走ったが、ときどき山裾に見える墓地も小さな墓地が点在するものであり、むしろ下塩尻山根（杓掛）型としたい。

調査地5 小泉

上塩尻型である。調査時のコメントでは原型としたが、どちらが先になるかは不明である。いずれにしてもきれいにまとまる。ここも蚕種で賑わったはずである。墓地が広がる高仙寺では築地の有力姓が大提灯を奉納していた。

調査地6 下室賀

ここは、旧上田藩領でも山際にある。そして、道沿いに小規模に連なる。山村でまとまっている、とみるべきであるか。あるいはばらばらとすべきか。現時点では山村型とした方が適当と考えている。池下姓が多い。また、「倉澤分家」と銘のある墓石は、注意を引いた。本家がよほどの名家でなければわざわざその分家は名乗らないだろうから。

調査地7 上室賀

基本的には下室賀と同様だが、より山沿いに散開している。山村型というべき。このスタイルは上塩尻の辰之口山崎家墓群と通じると考える。

調査地8 岡

岡城があった場所である。寺域内(宗安寺)でまとまりがいい。とくに清水・山崎がある。この後も、清水・山崎が揃ってある場合には、同族毎のまとまりがあり、また規模も比較的大きくなっているという現象を観察する。小平他で所有となっているが、小平の墓は見あたらない。

調査地9 浦野

岡と同様である。浦野城があった。寺域内（大宝寺）でまとまりがよい。

調査地10 越戸（こうど）

丘陵上に井澤家墓群があり、ここは、すでに史料調査（「萬覚帳」「収納奉公人帳」「年貢高掛帳」など）で宇佐美龍夫教授らが来訪している。これも馬場家墓地群に相当するとも言える。また、村内に上塩尻型の共同墓地がある。

調査地11 仁古田

上塩尻と同じタイプである。清水・山崎もある。寺が焼けないでいたのではないか。

調査地12 福田

保屋・吉田などとの入り組みの強い土地である。もともと共同墓地は村のはずれに置かれるのが通例だが、入り組みの強いところでは、したがって、その現れ方も複雑になる。墓地所有がほとんど上田市となっているのもそのような複雑な経緯があるからと推測する。

宮崎姓でまとまる墓群が見つかるが、これはどうやら保屋らしい。福田の墓地としては、池村・小林・石井など家としてまとまるが、横に散らばる。簡単にいうとばらばらである。もともと、このあたりは山が浅く、降雨の少ないところである。蚕種についてはどうか。あまりなかったのではないか。

調査地13 中之条

完全にばらばらである。下之条型とする。

調査地14 御所

ばらばらである。下之条型とする。

調査地15 諏訪形

この村は範囲が広大で、村中の寺域内の宮下姓などの墓群は、整理はされているものの、古い形でまとまっている。むしろ秋和のあり方に近い。他方、山を登ったところにある墓群は手塚を中心に同族としてまとまる。「らんとう」も多いため、古くからの墓地のあり方である。そのため、上塩尻馬場家のあり方に近い。

調査地16 小牧山

墓地の脇を小川が流れており(木戸沢)、西入・山崎・横井などでまとまり、印象も上塩尻弥勒堂・東河原に通じる。

◎2012年4月3日

本日は、塩田方面を調査することにした。林氏の印象では、塩田の人は塩田

の人を大事にする、とのことである。同郷意識が強いということであろうか。

調査地1 (通算17) 下之郷

本日は最初から驚かされたのがこの村であった。この土地の共同墓地を調査しに歩き、まず目に入ったのが緑色の金属製フェンスに囲まれた小区画の墓地である。道を隔てて広がる墓地群はその地で近世以来有力な横関氏墓地群が広く格式をよく示す形で堅固に造られている。家格などが目に見えるかのようで、「共同意識」が内と外に現れているひとつの例である。印象深い。また、村の中心部から離れたところに、伊藤氏などの墓があった。墓域は広いが、墓石は少ない。本村とは隔たりを感じた。

調査地2 (通算18) 富士山 (ふじやま)

コンパクトながら松井など古くからの家の墓がまとまる(富士山185)。また、もう一つの墓地では室賀などが多い。いったいに富士山あたりは、水が少なく、貧しい土地である。そのため、土地は広いが共同で暮らしを立てる必要がある。墓は一族毎にまとまるのもその現れである、と考えられる。林氏の故ご母堂は上田城下の常田の人であるが、彼女が林氏に連れられてこの地に来たときに、「人が住んでるんだ」と驚いたということである。252番地の墓地の裏山には蚕影神社がある。繰り返しになるが、広いので意識してまとまる必要があったものと思われる。ここでは例によって清水・山崎姓も多く見られる。さらに古くからの墓地に多い「らんとう」もここではまれにみる多さを示す。303番地の西光寺の竹花氏以下の墓群もよく整っている。また、霊場札所(325)に隣接する墓地は峯村および清水が多く、道沿いにも「らんとう」があり、まとまっている。さらに383番地および423番地も上塩尻弥勒堂を思わせる。蚕影神社と対になり、上塩尻村と相似である。上塩尻は古風を強く残している、と見るべきかも知れない。

調査地3 (通算19) 古安曾 (こあそ)

富士山同様、広いので墓地も多様である。まず、全体に山際に並んでいるところに行った(731)。そのあたりは上下室賀を彷彿させる。その後、801番地の鈴木自治会のところは清水は多いものの、個別に離れてまとまっているため

下塩尻山根に近いが、1156番地や1189番地などでは溜池沿いに、古風な共同墓地が立ち並ぶ。そして、その次に行った1723番地から2229番地までは、「墓地街道」とでも呼ぶべき状態で、扇状地の一番上のところで、道沿いに個別性の墓地が並ぶのが壮観である。番地で最後にあたる4097番地の柳澤組所有になる墓地は、集成学校・柳沢支校跡とステンレスの四角史跡銘標が真新しく立っている。他の土地でも時々見受けられるように、いわゆるバブル期に整理したもののと思われる。宮川・桜井姓のものが多い。

全体としては、上塩尻とは表現形態こそ違い、同種と見てよい。

このあたりから、春の嵐が吹き始める。

調査地 4 (通算20) 前山

本日は最初から驚かされた。この地には、林氏の表現を借用すれば「全国区」の前山寺（ぜんさんじ）があり、墓地も塩田の他の土地で地元同族が見せるような一体感はない。近くの龍光院は北条氏信の墓もあつたりする（551）ものの、地元名家の菩提寺であり、竹内・福澤・滝澤などが揃う。こちらは上塩尻弥勒堂に近い。あるいは秋和の山際の墓地か。

調査地 5 (通算21) 手塚

バブル期に完全に霊園化しており（飯沼霊園・榛名霊園）、古くからのものもぼつぼつあるが、外部からのものが多い。

調査地 6 (通算22) 山田

543番地の金窓寺霊園は広大であるが、「全国区」である。他方、1232番地に芳坂「ほうさか」・東川家などの墓が満願寺裏の山の道筋に奥まで伸びているのは上塩尻東福寺裏の馬場家墓群を連想する。竹内・斎藤なども多い。

調査地 7 (通算23) 野倉

林氏の表現を再び借用すると、ここは「別天地」である。もっとも、山村であるために墓地は個人別になっている。

調査地 8 (通算24) 八木沢

ここでも、強い印象を抱いた。ここは、小安曾の「墓地街道」が丘陵上にあ

るとも言えるが、見方によっては、隣村（山田村）に墓が面して列しており、「墓の砦」とも見なしうるからである。馬場家群も入っており、上塩尻との関係を知りたく思った。1254番などは霊園化している。

調査地9（通算25） 舞田

荒れた山上で下塩尻山根型の墓地が散開しているという感がある。789番地芳樹院は平和な感じがする。1008番地では龍昌院が信玄公を弔う。

調査地10（通算26） 中野

小規模なものがまとまる。河原沿いなので、上塩尻の河原沿いの春原家墓群と対比しうる。清水はあるが、山崎などはなく大きくはない。

調査地11（通算27） 本郷

墓石自体は古いものが多いようである。あるいは手入れがよくないのか、碑銘の判読できないものがほとんどである。散在しているものを集めたものも(45)、1つ甲田氏とあるが、あとはすべて読めない。265番地も同様である。また、414番地の共同墓地は田中姓ばかりであるが、近所に現在、田中はいないようである。入り組みということもあるが、整理をできてしまっていたり(1352)、まとまりがない。

調査地12（通算28） 五加

ここは、本郷では部分的にまとまって見えた甲田の本村であると言える。下之郷の横関家に匹敵する存在と考える。131番地の最も大きな墓地に甲田家の本村での格式の高さを示す現れ方を認めた。1105番地・1321番地にも甲田家を確認できる。縁組みなどで甲田とのつながりも深いと思われる横関家、そして和田家などもまとまりを示す。529番地では長谷川・小池・堀内がまとまっているというべきである。

調査地13（通算29） 小島

69番地に和田家がまとまるが、大規模な共同墓地としてある225番地は整理済みである。総じて、秋和型。

この日は午後から嵐となり、早めに切り上げる。

◎2012年4月4日

本日は上田市東部を中心に調査した。

調査地 1 (通算30) 常田 (ときた)

町場型の墓地である。同族毎のまとまりはない。

調査地 2 (通算31) 踏入 (ふみいり)

上田城の入り口にあり、やはり町場型の墓地である。もつとも、河原沿いにあり、人が住まないような、川に流されても良いように共同墓地を設けた、と見ている。同族毎のまとまりはない。林氏の言では諏訪部・西脇あたりはまた異なるようである。

調査地 3 (通算32) 国分

町場にあり、新幹線開通のため整理されているものの、緩やかな谷間に位置し、まとまりはいい。まとまりの良さの経験的指標である山崎家も見られる。また、竹内・山邊もある。とくに、他の土地でも見かけるが「山」で韻を踏むかのように「山邊」「山崎」「山浦」とまとまっている。また、同じ姓ではあっても漢字の使い分けをして連なる、という場合もまたここでも見られる。「山邊」「山辺」「山部」などである。また、1944番からの墓地は山越・今井など国分の住民として認識される姓が、山上に上塩尻馬場家墓地群が大規模化した形で存在を確認できる。

調査地 4 (通算33) 岩下

上田市所有とはなるが、一山使って共同墓地の形で同族ごとにまとまっている。地元民によれば、岩下では、墓の権利が手に入らないとのことであった。もともとは村の所有であったろうが、そのまま市の所有となっているので（管理ではない）手をつけられない。多いのは、太田・長谷川・土肥などである。

調査地 5 (通算34) 大屋

都市・町場型である。猟犬の墓が隣接されているのは墓地に隣接した畑の持ち主が飼い犬の墓をたてたものと推測する。ここは交通の要衝であり、出入りが多いことが町場型の説明である。

調査地6 (通算35) 蒼久保

ここは尾崎が強い。龍洞院の域内で、河岸段丘に尾崎姓の墓石でいっぱいである(219~237)。村の中の下青木組所有の墓地(1,609)は、中規模程度(485平米)の墓地であるが、押金(鐘)家などでまとまる。整理はされている。秋和型、となるか。

調査地7 (通算36) 芳田(ほうだ)

荒れた山1833番地あたりは河岸段丘の墓でばらけている。蚕種はやっていなかったのだろうか。もっとも、この芳田も広い村であり、分譲はあるけれども、2606番から2668番地まで、六川・吉池・清水などでまとまってはいる。ここは、かつての小井田村も含む。総じて、村ごとのまとまりはなく、文字通り点在する。共同墓地とはいいがたい。

調査地8 (通算37) 林之郷(はやしのごう)

滝沢などで、まとまりはある。さびしい山の斜面では渡辺姓が多い。

調査地9 (通算38) 漆戸(うるしど)

個人墓である。

調査地10 (通算39) 殿城(とのしろ)

この地で最大の墓地は6,105平米であり、良泉寺所有である。実は、矢沢薩摩守一族の墓(藩主の菩提寺である)ので、対象から外れる。だが、それに次ぐ大きさの瀧水寺域内の墓地(5,552平米)は、一山使って、金子家の大した勢威を示すものになっている。宮下・「清水」も入る。他方、この土地は個々人の、階層で言えば下の者が個人墓を散在させているので、格差が目に見える形になっている。

調査地11 (通算40) 上野(伊勢山)

上野は、上田の地元では伊勢山で知られる土地である。464・467番地など、陽泰寺の寺域の墓では、共同墓地でない。住職一家の墓であったりする。他方、2686番地以降2770番地まで小田中姓を1つ除くだけですべて清水姓である。集落を見下ろす丘陵に墓地ができていく。旧藩時代、この区域は真田町であり、住民の意識としては、松代藩真田の住人であるというものである。後者を母袋

の多い中島と比定すれば、総じて下塩尻型となるか。

調査地12 (通算41) 住吉 (金剛寺北部)

金剛寺自治会・大久保組が墓地所有者のほとんどで、もともと共同性が強いことは予測していたし、その通りであると言える。山上に墓石が同族毎にまとまる。倉島 (1,728)、唐沢・滝沢・春原 (1,756) などが目につく。あるいは六川・金井 (2,740) である。

調査地13 (通算42) 古里 (こさと)

この村については、川辺の河岸段丘に墓が並んでいる。中曽根が目立つ (258)。概してまとまりは弱いかも知れない。

むすびにかえて

以上、旧上田藩領主要部分の墓地調査を遂行した。共同性という観点からすれば、5つの態様に分けられる。古来、山がちの墓地のあり方としては、むしろこうした個別の墓であったのではないと思われるものを山村型 (5) とした。その山村の形態と村の集落内の共同墓地との組み合わせが、川沿いの下塩尻村でよく現れているので下塩尻型 (4) とする。上塩尻村は、その点で共同性が強く残る。形態も大規模な共同墓地を中心に、他の型も集約されるが、総じて同族の共同性がよく残る (3)。そして、概ね共同性も中規模程度の共同墓地にいくつか残存が確認できるが、部分的に整理がすすみ、町場型の片鱗をみせる秋和村の態様。これは秋和型 (2) である。そして、町場型である (1)。もともと、都市内の共同墓地ということで、同族の共同性など検出しにくいと思われる地区の墓地であったり、あるいは行政区画整理などで、整理がすすんでおり過去の共同性の片鱗を見出せない事例でまとめた。

旧上田藩領全体として、共同性の感じられない、ばらばらな墓地というのはほとんどない。墓石そのものだけでなく、規模を含めてどのような墓地か、あるいは墓地の中で同族ないし本家-分家の系譜関係としてのまとまり、および墓地内での位置づけ、も人々の意識の端にある観念が、実際に空間的にも村は

ずれにあって具現化されている状況をそれぞれの村に見た。したがって、墓のあり方は各村の歴史的個性を発揮している。その歴史的個性は、各々の村の共同意識およびそれと対応関係にある、多層構造のあり方を示す。共同とはいえ、上下関係もあり、また「内」と「外」の差異も包含される。ここで言えるのは、共同性を見出そうという場合、墓石・墓地も残されてきているものを失えば、それを新たに作りあげることにはできない、ということである。今回の調査では、依然として家・同族による共同性を示す地域は、その態様を分類するに十分なほどに残っていた。だが、現在のタイミングだから可能であったのであって、行政による区画整理とともに墓地・墓石に象徴される家族観・家意識の急速な変転（衰滅）は近い将来、こうした歴史的個性を村毎にたどるといふ試みを不可能にさせるはずである。あるいは、もはや他の地域ではできないことを、かろうじてできる数少ない地域の1つとして本報告者は上塩尻村を含む旧上田藩領を選んだのかもしれない。

「家」を成り立たせる要素としては、家業・家産・家名、そして家格を挙げることができる。順序としても、まず家業で稼ぎ、それにより家産を築き、その上で家名ができ、家格を形成する、となる。奉公人はこの家業、生産活動に関与し、墓・墓石・墓地は家名に関わる。現代社会と異なり、ものが少ない時代には、余裕があれば消費活動として土地・家屋の次に仏壇や墓の獲得・整備を通し、家名の顕揚・維持をはかり家の継承を心掛けた。したがって、経済的余裕ができたときに現在にまで残存する墓地の原型が成り立ったのである。

奉公人の出自については事例をもっと多く見つける必要があり、即断はできない。だが、1803年から1809年までと短い期間の、しかも嘉平次家のみという小さい標本では、奉公人筆頭者のほとんどが10キロ弱の距離があるとはいえ同様の共同墓地のあり方をもつ村から来ていた。建築史において、蚕種・蚕糸業と家屋建築とについて18世紀中葉から19世紀にかけての相関関係が見つかったのと同様に、むしろ近隣接ではない領内の村が、蚕種業の「センター」である上塩尻村が、奉公人を媒介に生産と消費とで共通させていった過程を見ているのではあるまいか。この点については縁組の地理的分布も支持しているのである。

第3章 上塩尻村同族と共同墓地： 蚕種がつくった墓群

はじめに

日英村落家族史的対比研究の一環として、第1章ですでに英国の対象地であるケンブリッジ州ウィリンガム教区における共同墓地のあり方について共同性および住民自治の観点から論じている¹⁾。その際比較の前提となるのが、本章で扱う旧上田藩上塩尻村における共同墓地であった。ここでは、家の継承に関して、墓地および石塔という観点からの分析を試みる。とくに近世日本の人々の「死」のとらえ方と「家名」とを切り口として墓地における墓碑名や石塔の配置構造を分析すれば、村内の家格や同族をめぐる本家分家関係による系譜と「家」とに新たな照射する可能性を探るという意図を出発点としている。

研究史をひもとけば、本書のように、共同墓地・墓相をモノグラフレベルで時系列的に家族・同族および村落全体の文脈で検討していったものは、ほとんど見当たらない²⁾。また、地方史レベルであれば、取り上げることも可能であると思われる墓・墓地について、『上田市誌』も原則として取り扱っていない³⁾。その原因は、ひとえに研究の蓄積を待つしかなかった、という一事に尽きる。全国的に見ても屈指の史料残存を示す本上塩尻村にあってさえも、同族・家と墓相との関連性は、十分にたどれなかったのである。その理由はいくつもあるが、同族と家とを脈絡づける系譜関係とその構成員の個人データを最も多く提供する宗門改帳との照合が天明年間までしかなしえなかったことが挙げられる。しかし、村全体の家々の家系図があり、このたび18世紀中葉の宗門改帳お

1) 拙稿「共同墓地から見た近世・近代期イギリス教区・コミュニティ・住民自治－日本の事例との比較を前提に－」コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』、第6号、2007年。

よび蚕種商人鑑札（御注進帳）など新史料・データが揃い、本家・分家の系譜からなる同族と「家」の生成過程が明らかになった。

また、前章（第2章）において確認できたように、上塩尻の事例は、旧上田藩領の範囲に限定してできえ、類型の1つを代表はしえても、藩領全体の典型とはなりえないことも念頭におくべきと心得る。本章は、家系譜分析との関連で墓地のあり方を論じるものとする。

上塩尻村における共同墓地の分布

上塩尻には、目につく範囲で大小8つの共同墓地があり、そのうち最大のものは、弥勒堂墓地である。村域では現在高速道路に臨む東端で山のふもとにある（地図2①）。小さい川をはさんで東側が東川原といい、かつては一帯が木に覆われてうっそうとしていたのが、墓地として開発が広がる。ここを訪れると、南向きの明るい斜面として目の前に広がるのである（②）。第3番目に大きいのは東福寺裏の馬場家墓群である（③）。やはり1つのマケでできている

2) 墓と葬送については、柳田国男の「葬制の沿革について」（1929）以来『先祖の話』（1946）を経て、「両墓制」（遺体埋葬地点を「埋め墓」、石塔を「詣り墓」とし霊肉分離、靈魂＝石塔重視）が、その系統の民俗学の墓制研究の中心であり続けている。最上孝敬『詣り墓』（古今書院、1956）はその1つの到達点である。だが、近年、野外調査により眼前の事象をあらためてとらえ直すべきとする岩田重則『墓の民俗学』（吉川弘文館、2003年）・『お墓』の誕生』（岩波新書、2006）から、「両墓制」も柳田の個人体験や当時の社会常識がそのまま学説として定着したところに問題があるとする。法社会学では森謙二が『墓と葬送の社会史』（講談社現代新書、1993）・『墓と葬送の現在』（東京堂出版、2000）でヨーロッパ大陸の状況との比較史的観点から論じている。また社会学では井上治代『墓と家族の変容』（岩波書店、2003）で戦後の墓の「脱家」現象について論じている。さらに比較家族史学会による『家族と墓』（早稲田大学出版会、1993）では、田中真砂子による三重県管島の共同墓地や村山谿のニーダーライン地方ヴッパータールの事例研究などが見られる。だが、いずれにせよ、本報告のような、モノグラフの一環として時系列上、家系譜を用いて村落と家・同族に関する総合的な研究は求めるのは困難であろう。なお、家名については位牌を用いた上野和男の一連の研究があり、とくに祖名継承法の議論は学ぶべきであるが（比較家族史学会編『名前と社会』（2000））、別稿を期されたい。

3) 墳墓については欠落している旨、副委員長桜井松夫氏から電話でうかがった（2006年11月13日）。その際、氏は「はかない市誌で」と枯れた笑いをもらしている。

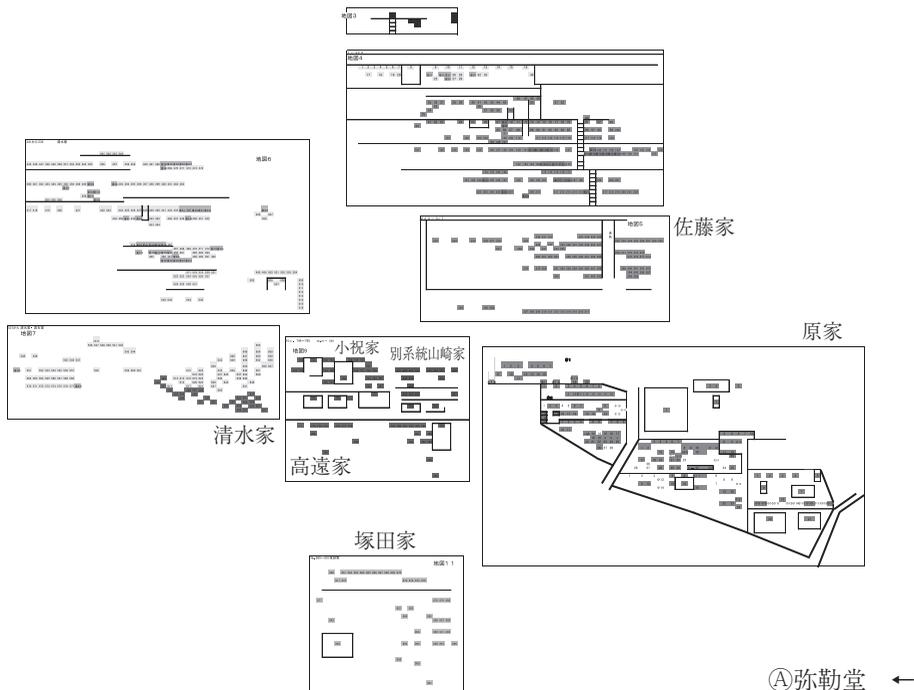
地図3-1 上塩尻村宗教的施設他地図



千曲川河原沿いの春原家墓群（④）、また春原家の一部が本宿と新屋の間に小墓地をつくっている（⑤・⑥）⁴⁾。さらに、辰の口といわれる大村西端で、北国街道沿いとに山崎家を中心に墓群がある（⑦）。他にもいくつかの小規模墓地が上塩尻にはあるが、詳細なデータがないためにここでは省く。

4) 下塩尻村在住母袋剛介氏へのインタビューで、下塩尻は大きく、山際の山根地区と川沿いの中島とに分かれるが、中島の方には墓掘仲間である「おまるめ」はないことがわかった。山沿いの沓掛家墓石が多くを占める山根地区は、岩盤の固い地層をも含む山の斜面に墓地が細長くできている。こちらでは、土葬のために穴掘り作業もなかなかの労働であり、1週間ほどかけて穴を掘る必要があるため、平素から連帯意識を強めるべく「おまるめ」があるという。中島の「新しい」（洪水で幾度か墓地が流されており、現在あるものは、比較的新しく、幕末のもの、という意味で新しいのだが）墓地は村の集落の真ん中にあり、地盤も軟らかく、即座に掘れるため、「おまるめ」組織形成の必要がなく、存在しないとのことである。

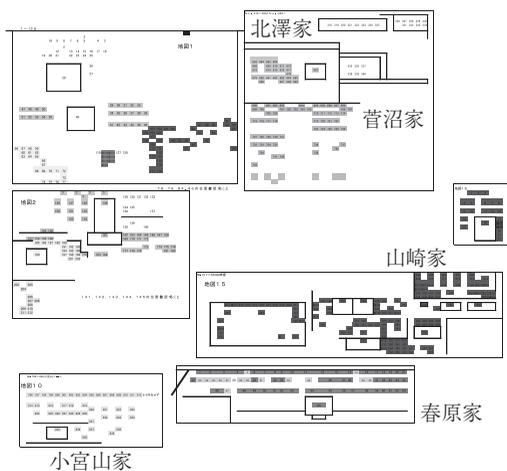
図3-1 上塩尻共同墓地模式図



【佐藤家】

佐藤家の区画は、弥勒堂墓地の中央にある。三味場を横に、入り口に立つと原家墓群があり、その背後に広がる墓群がそれである。家祖の石塔という趣旨であると想定するが、碑銘のない「らんとう」が11基、並んで置かれている(図3-3 佐藤家2右側307~317)。

佐藤家の場合、家系情報集積および家系図編纂は代々の筆頭分家佐藤八郎右衛門によってなされており、その情報量は当然ながら上塩尻で最も充実している。それでも、総本家善右衛門家の現存する石塔中、最古のものとして遡れるのは、第11代目善右衛門信利、又兵衛の代からなのである(図3-3)。その没年は1723年である。最近の新史料は、18世紀中期、あるいは前期まで上塩尻

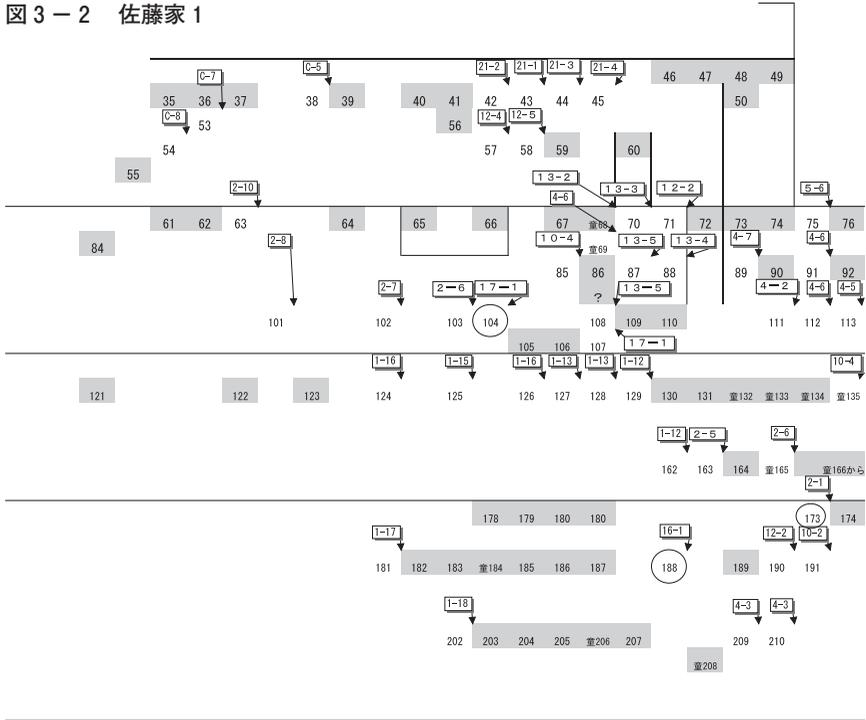


→ ⑧東川原

村の各家々の様子を探ることを可能にしている。宗門改帳では1757年すなわち宝暦7年まで遡れるがその時点での善右衛門は次の12代目で、63歳である。家系系統では第11番目になるのだが、18世紀から19世紀にかけて上塩尻村で庄屋役をつとめたのが、この嘉平治家であった。宗門改帳で単位を同じくし、まだ別家していない嘉平次である（第13代目）。このときの嘉平次は、善右衛門の弟（55歳）である。

結論からすると、佐藤マケの墓相は、佐藤家の家系図によく対応し、総本家から分家、その分家というように石塔もまとまる。そして、その墓群形成も意図的になされるようになったのは、蚕種業が順調に稼働し、経済的基盤もでき、一族のあり方を振り返る余裕ができてきた頃ではないかと思われる。それは、

図3-2 佐藤家1



凡例

252 (色無し・参照番号)家系:確認

271 (塗りつぶし・参照番号)家系 未確認

230 (丸囲み) 系統の初代(例:家系図5-1)

童49 (童子墓・参照番号)

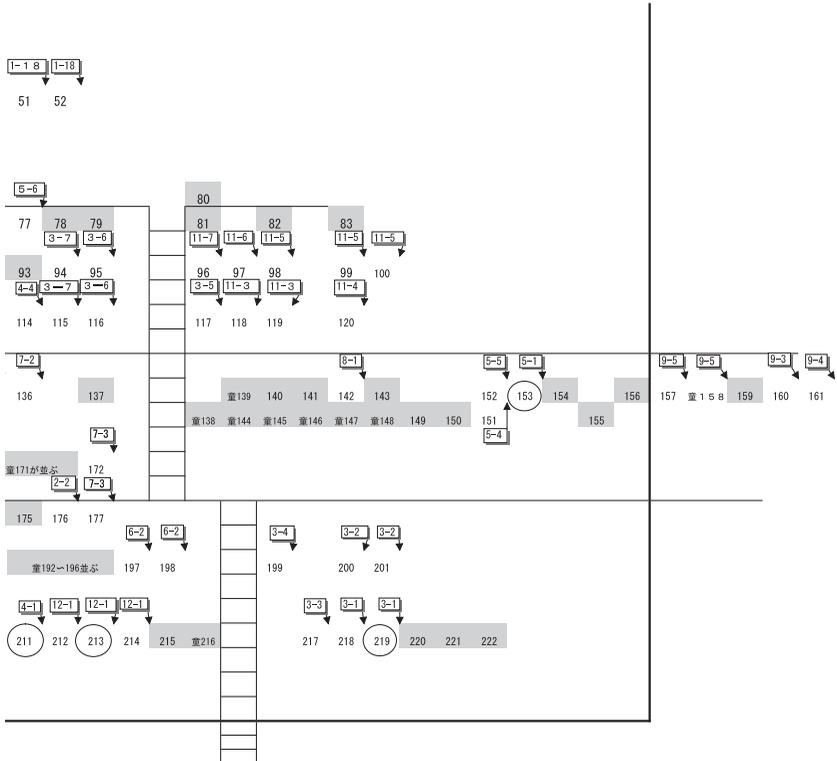
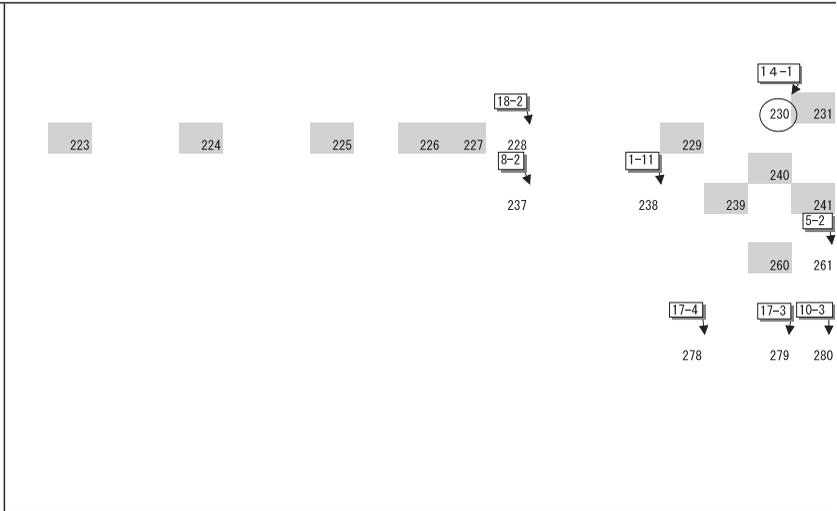


図 3 - 3 佐藤家 2



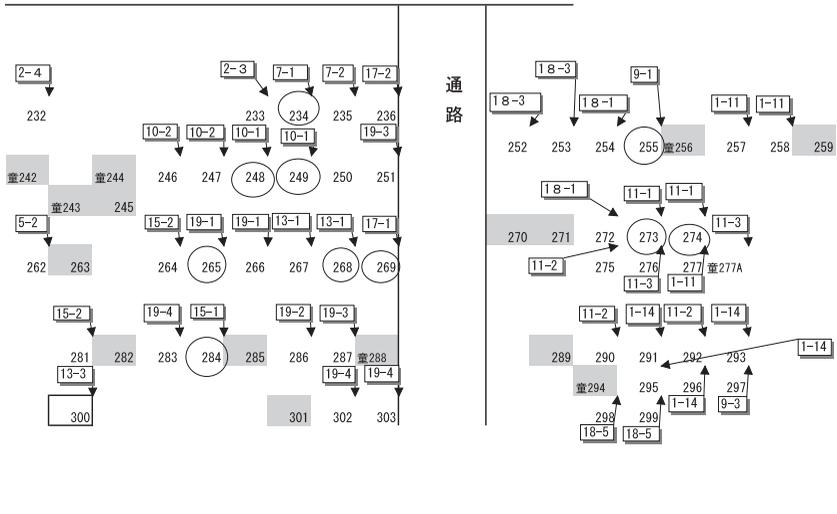
14-2
↓
304

14-3 2-5
↓ ↓
305 306

307 308 309 310

凡例

- 252 (色無し・参照番号)家系:確認
- 271 (塗りつぶし・参照番号)家系 未確認
- 230 (○) 系統の初代(例:家系図5-1)
- 童49 (童子墓・参照番号)



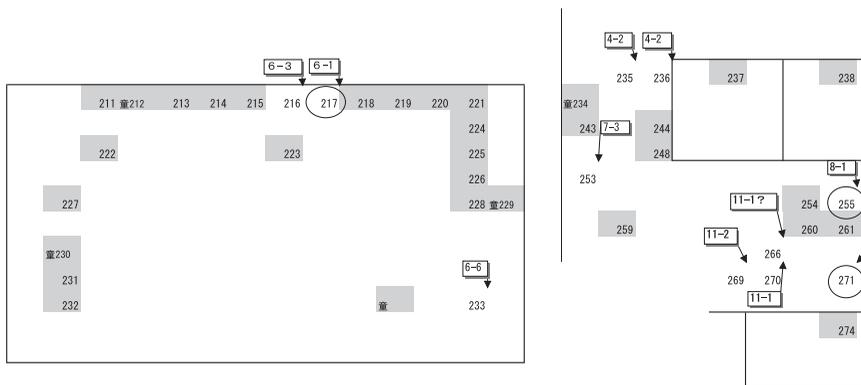
311 312 313 314 315 316 317

時期的にはやはり18世紀中葉以降ということになる。

奥まって最も密集している墓域には、筆頭分家であり、代々で家系図編纂を進めた八郎右衛門家である第2系統とその分家第4系統（清左衛門）・第12系統（八郎兵衛）、また階段を隔てて東南に第3系統（半弥）と第5系統（善左衛門）とが家祖を中心に代々の墓石を展開させている（図3-2）。

上記のように佐藤家墓群の最前面には「らんとう」として高祖の石塔を一列に並べている。その後背に総本家善右衛門家の中興をなした第11代目の墓石、さらに第11系統で庄屋を輩出した嘉平治家の一統、またその周辺に比較的新しい分家である第18系統（清次郎）、通路を隔て第7系統（平左衛門）・第10系統（曾兵衛）・第13系統（八郎兵衛）・第14系統（悦信）・第15系統（信遠）・第17系統（忠二郎）・第19系統（園右衛門）がそれぞれの家祖として散開している。情報量が多いために、これらの墓石の配置がその同族の席次にごく忠実にしたがうということがよくわかるのである。

図3-4 山崎家1



【山崎家】

山崎家は、高祖左内－彦兵衛直系の助之丞家の系統が途中で不明となり、4流がそれぞれ本家としてあり、現在に至っている。3代助之丞家の娘から出ている覚兵衛家系統と、3代助之丞末子の源之丞から出ている九郎介家系統および五郎右衛門家緒系統である。この3つに、彦兵衛（新八郎）家からの左源太－忠之丞家および佐五右衛門家らの系統が加わるが、左源太系統は、清水忠蔵系統との縁組などを通じて縁が深く、他の山崎系統とは割合早い段階から一線を引いている観がある。墓地区画のあり方もそのことを端的に示す。元来、左源太－忠之丞家および佐五右衛門家の墓石は後述の大村西端、辰ノ口にあったが、それを東川原でも新たな区域にまとめて移している（図3－5）。他方、他の3流は、その西に位置し、密な墓域を形成する（図3－4）。これは、大きく東部・中部・西部の3つの区域に分かれる。東部は、五郎右衛門家の墓群であり、2代から8代までそこに収まっている。分家の新右衛門家家祖の新右

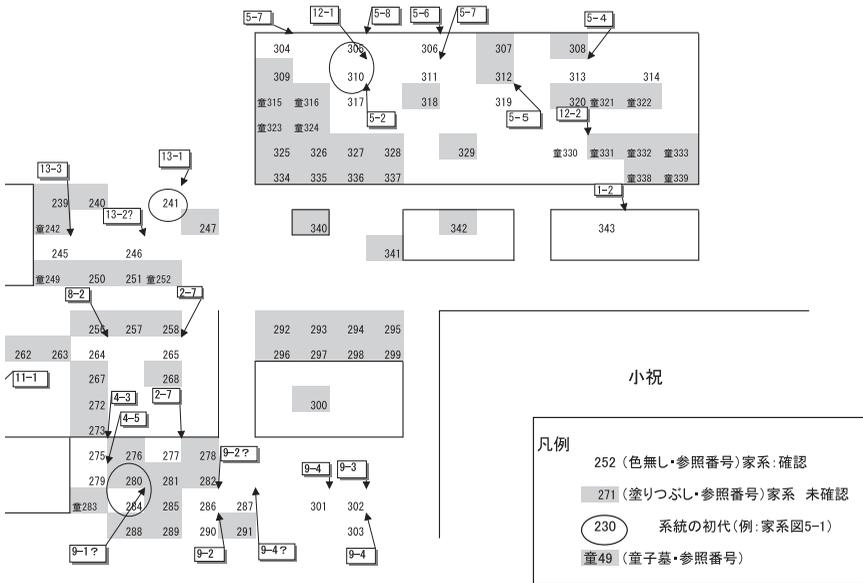
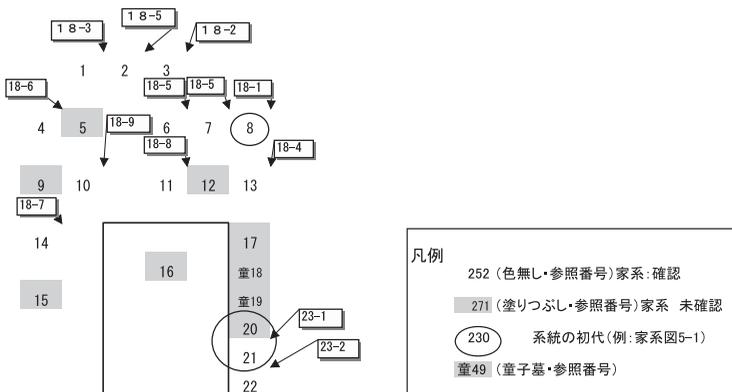
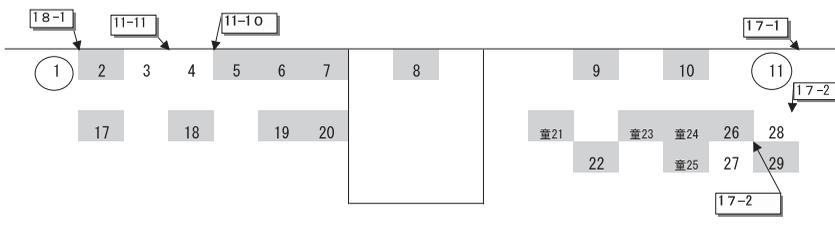


図3-5 山崎家2 (忠ノ丞)



衛門(家系図12-1)もここに入る。中部は、東部と隣接するように、しかし一線をも画すように、五郎右衛門家筆頭分家の五郎左衛門家が家祖五郎左衛門(家系図13-1)の墓から3代までの墓石をまとめている。この中部域には他にも第8系統(善四郎)・第9系統(治助)・第11系統(戊次郎)、比較的新しい家の家祖が墓を建てているのである。これらの家祖も、五郎右衛門家と同様に蚕種業で産をなしたことが推察できる。西部は中心に、山崎家の古名である助之丞を蚕種商人として名乗った第6系統家祖銀七の石塔を起き左右に展開している。

図3-6 清水家1



【清水家】

清水家も前の山崎家あるいは次の馬場家と同様に総本家がいつのまにか勢威を失い、動向を把握できない。とくに、清水家は3流あると言われていて、その流れの違いは墓域の違い、そして墓域は同じであっても、墓の向きにも現れているのである。別系統の清水家もあり、仁兵衛家であり、それは除く。高祖藤蔵の次代が新左衛門とその弟の新右衛門であり、大きくその2流がある。また、新地から引越してきたとされる小平次家が第3の流れである。

弥勒堂墓地で佐藤家墓群の北辺と接する比較的小規模の清水家墓域には、第17系統喜惣次が家祖としてその次代および第18系統家祖信右衛門の石塔がある（図3-6）。この系統からは18世紀中葉の宝暦期から19世紀初めの文化期に蚕種商人鑑札願いは出ていない。

弥勒堂墓地西部に清水家墓域は広がる（図3-7）。奥の方に広がるのは新左衛門の流れの長左衛門から派生した家系群墓である。第5系統（銀右衛門）・第6系統（四郎右衛門）・第7系統（十左衛門）・第8系統（久左衛門）・第9系統（三左衛門）・第10系統（金左衛門）という主立った系統の家祖が墓石を残している。これらの系統は、18世紀および19世紀において、清水マケが蚕種業への取り組みが熱心に行われていたときに成立した家々なのであった。

さらに南面に区画を出張らせてきているのが新右衛門の系統だが、流祖である新右衛門の墓石は、時代を遡る古いものであるからか、特定できない。他の

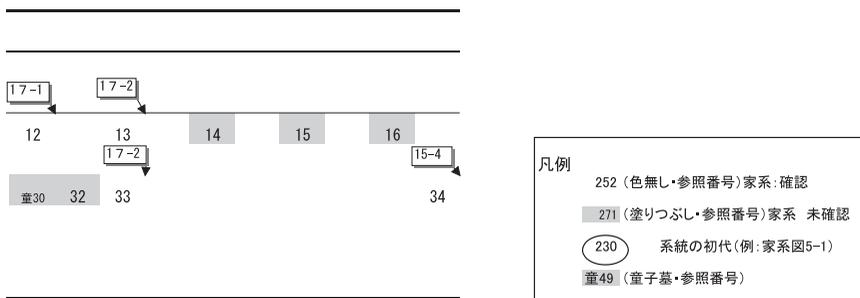
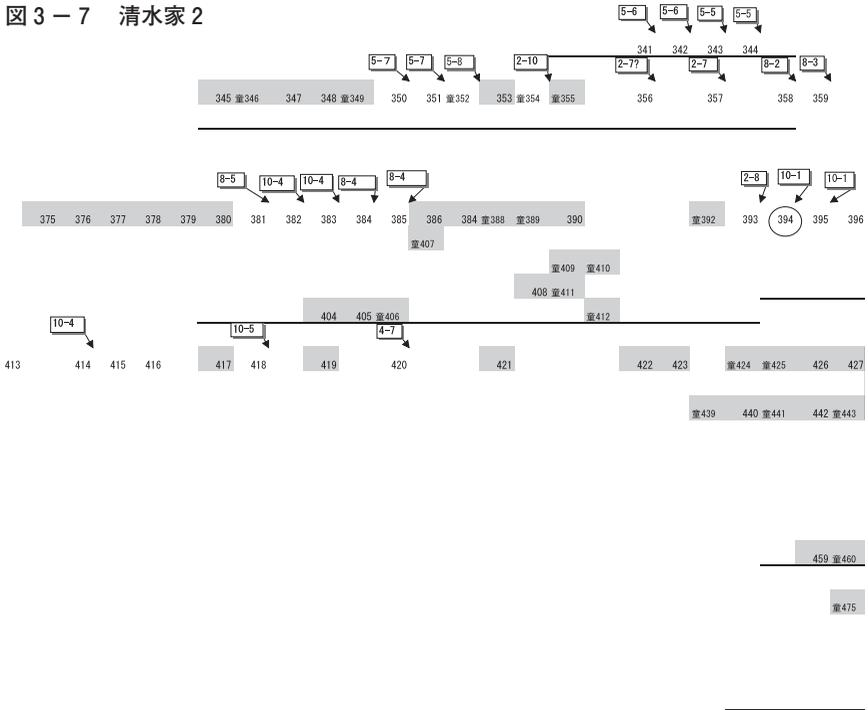


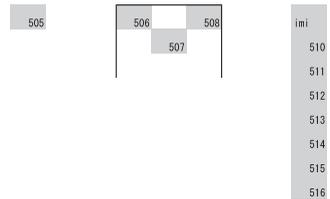
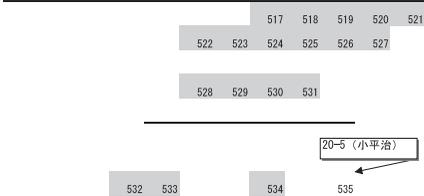
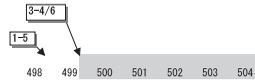
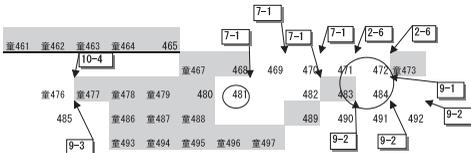
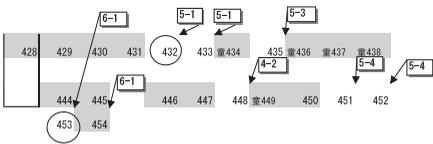
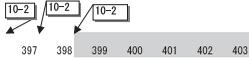
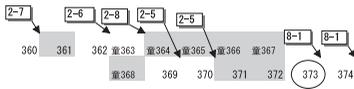
図 3-7 清水家 2



凡例

- 252 (色無し・参照番号) 家系: 確認
- 271 (塗りつぶし・参照番号) 家系: 未確認
- 230 (丸囲み) システムの初代(例: 家系図5-1)
- 童49 (童子墓・参照番号)

ものも、判別しにくい石塔が多い。いずれも疑問符がつくが、第12系統(文弥)・第16系統(玄ゆう)・第18系統(信右衛門)の家祖の墓石があり、蚕種商人として届けを出した第11系統の8代目喜惣次・第15系統3代目九郎八・第16系統2代目市郎治などの墓もある。



【馬場家】

馬場家墓群は、先に簡単に紹介した通り、村内唯一の寺である東福寺裏の斜面に、東向きで造営した区域を占める。現在は十分に切り開かれているが、ひところはそれぞれ鬱蒼と草木が生い茂り、昼でも暗かったのではないかと思います。横に細長い墓域の中央に、「らんとう」型の石塔が並び、その左右に各家

図3-8 清水家3

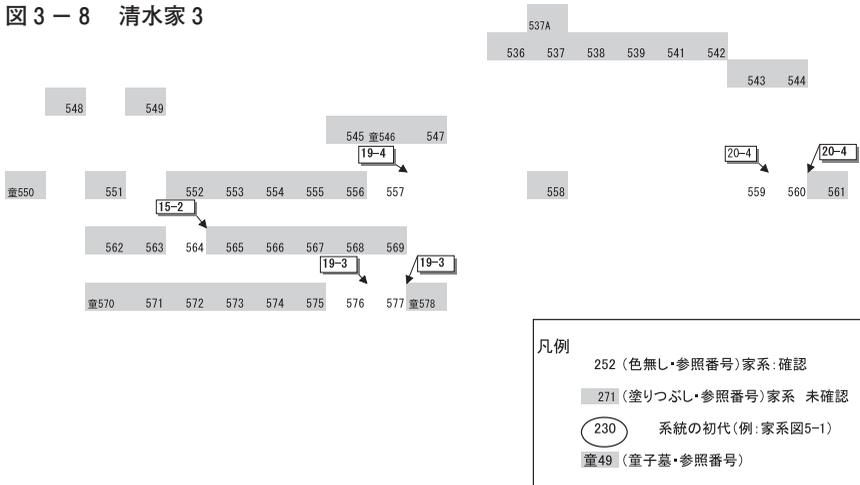
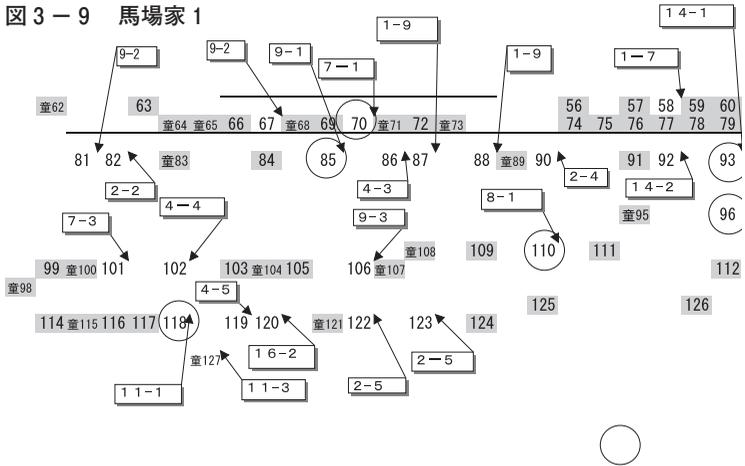
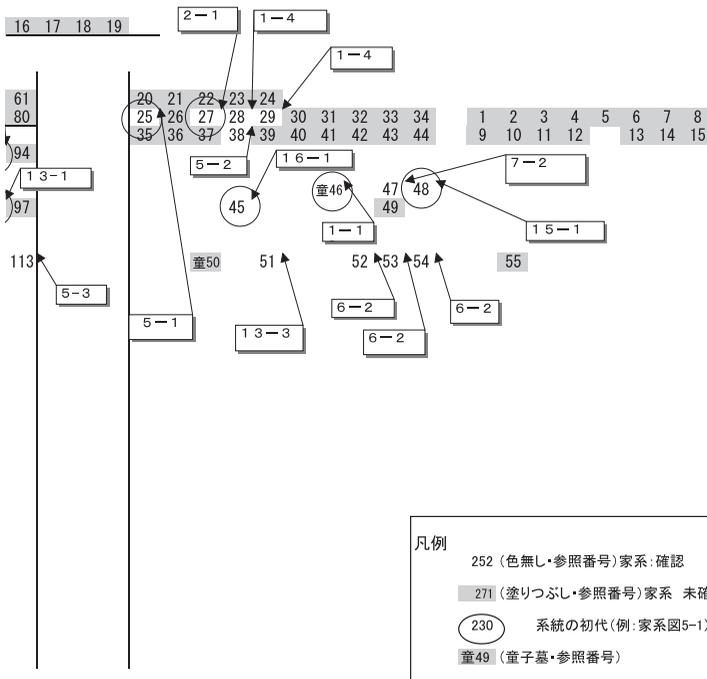
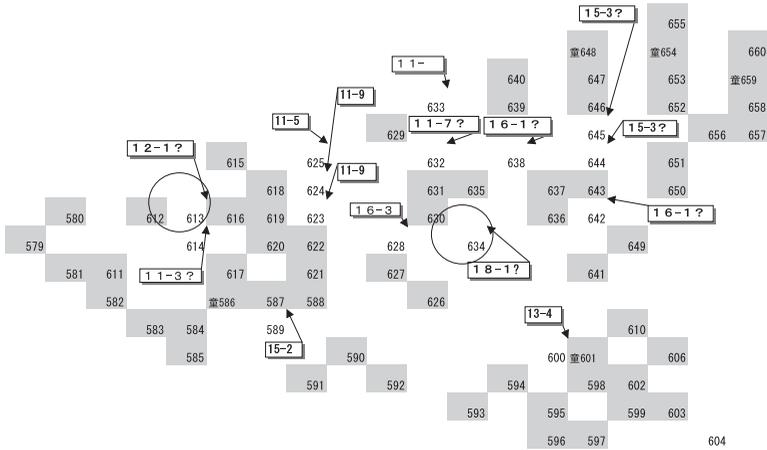


図3-9 馬場家1





系系統が散開している（図3-9）。とくに家祖が東半分には第2系統（儀右衛門）・第5系統（猪右衛門）・第15系統（金兵衛）・第16系統（市郎兵衛）、西半分には第13系統（藤四郎）・第14系統（太右衛門）・第8系統（弥五左衛門）・第7系統（忠兵衛）・第9系統（仲右衛門）・第11系統（政之右衛門）と点じるのである。これらは、当代が宝暦期から文化期の間、あるいは次代が蚕種商人として鑑札を得るべく御注進帳に名を連ねているのである。この区域は、どちらかという家祖を象徴的にまとめている、という印象が強い。ここから南に

図3-10 馬場家2

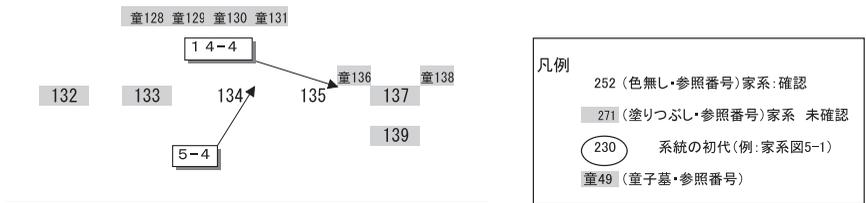
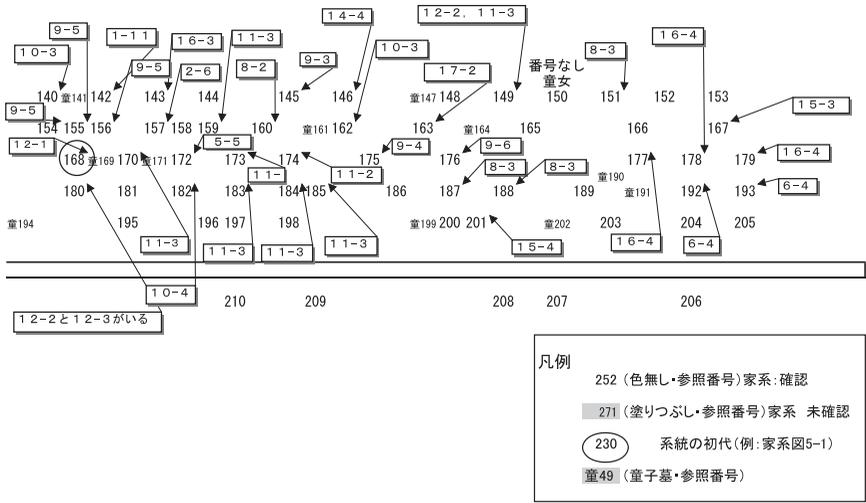


図3-11 馬場家3



のび、角を形作るところ（図3-10）を結節にし、さらに南に広がる区域に新しい代の系統を集めている（図3-11）。

【原家】

原家は、規模こそ控え目であるが、総本家の與左衛門家を中心に、代々まともりがよく、その墓域も弥勒堂墓地で佐藤家墓地群の前面として好位置にある。実際、弥勒堂の入り口に立ち、そのまますぐに目に入ってくるのはこの原家墓群なのである。墓群の成立と維持・拡張については既に述べたので、ここでは立ち入らない⁵⁾。

18世紀中葉の宝暦期から19世紀初めにかけての文化期にかけて、このマケの構成員は、家系の系統でいえば総本家の第1系統から第10系統まで、ほぼすべての家系から蚕種商人を出している（第6系統を除く）。見方を変えれば蚕種という稼業により効果的に従事するために、ごく短期間に分家を輩出し、まとめて産をなした、と言える。墓群もその反映と見る事が可能である。

図3-12は、上田上塩尻原家弥勒堂墓地関係文書「昭和50年秋調査集録 原與左衛門一族墓地記録」をもとにしている⁶⁾。当事者により調査され、分家系統および石塔形式などを彩色記号で描かれた絵図のため、その記載は詳細にして正確である。区域毎に番号がついているのも、この絵図に拠っている。なお#8の部分は絵図作成後の造営ということになり、昭和期以降のものであるため省いてある。

同族が墓を守るという意識で墓石の管理も含めて現代に至るまで続いている好例である。

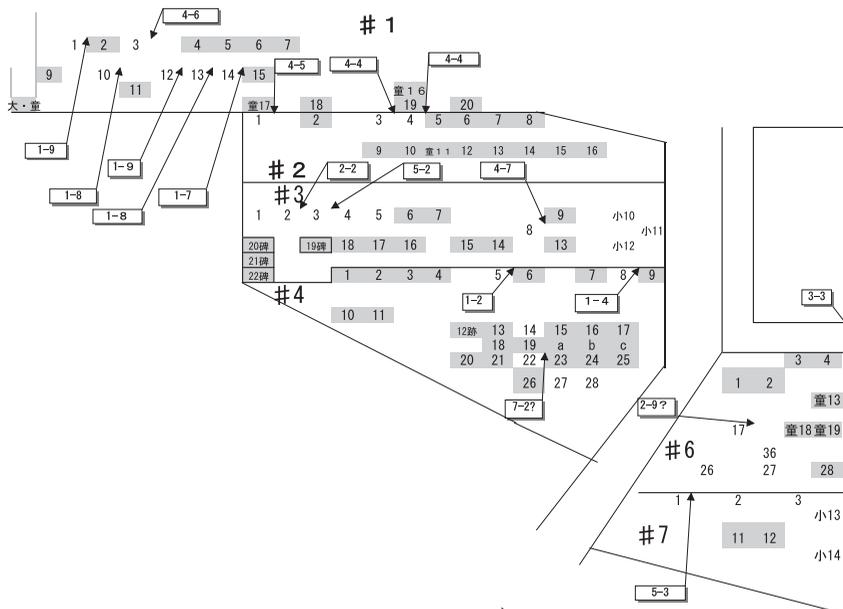
【春原家】

春原マケの墓群は、大半は川沿いにあり、少なくとも「あらや」の方にまと

5) 拙著『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』、142-4頁。

6) 上田上塩尻原家弥勒堂墓地関係文書（不撮）。本書のため、閲覧を許可していただいた原與氏には、この場を借りて謝意を表したい。

図3-12 原家



凡例

252 (色無し・参照番号)家系: 確認

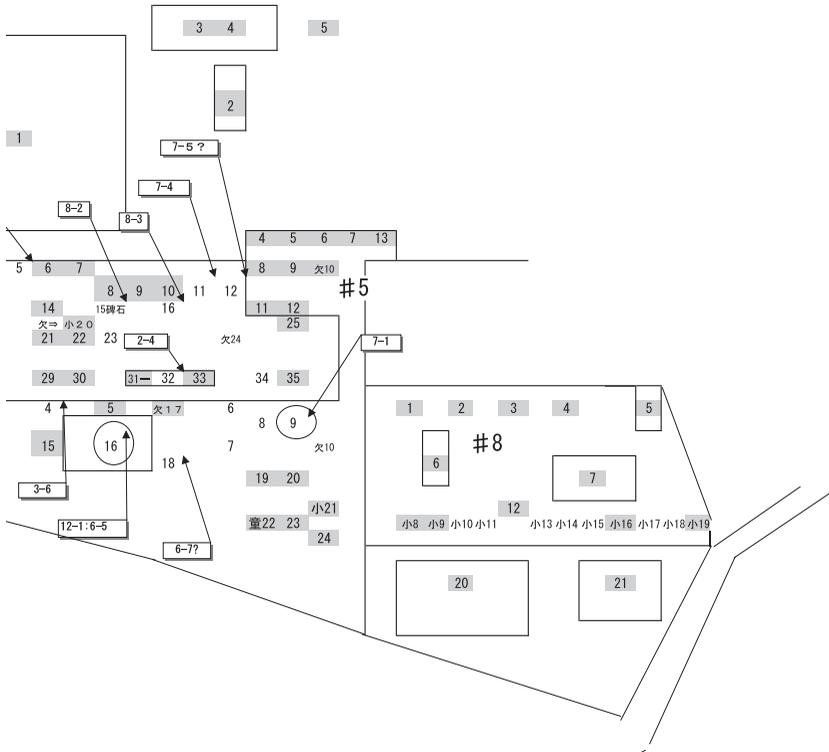
271 (塗りつぶし・参照番号)家系: 未確認

230 (丸) 系統の初代(例: 家系図5-1)

童49 (童子墓・参照番号)

まるのだが、佐左衛門の系統の一部は弥勒堂に川を隔てて広がる東川原の南部に細長く位置している(図3-13)。墓石で特定可能なのは、第3系統の五左衛門および第4系統の市右衛門家で、蚕種商人を18世紀後半から19世紀にかけて出しており、経済的にも余裕があり、住居も大村にあった関係で墓所も東川原になったものと推察できる?

しかし、大部分は、あらゆるの共同墓地としては最大の千曲川沿いの墓所に集まっている(図3-14および図3-15)。ここで、より橋に近い方にある区域



(図3-14)では、佐左衛門家の本家ということになるだろうが、第1系統の5代目である孫右衛門から8代目まで墓碑を確認できる。孫右衛門は、宝暦期

7) 大河原では、2015年現在でも「おまるめ」が続いている。筆者は毎年12月第1日曜日に夕刻に開催される「おまるめ」の会合にこれまで2012年・2014年と参加し、ほとんどが春原姓である参加者から話をうかがっている。同じ名字ではあるが、同族という認識はない。家系図も幾つもの筋に分かれている。しかし、その中でもこの佐左衛門の流れは、大村を拠点にしていたが、近年大河原に在所を移しているという。とくに元々あらやには2つの「おまるめ」があったが、それが1つになっている、とも参加者複数から聞いた。

に30代の壮年であり蚕種業も営み足繁く村外にでていた。また第2系統はその2代目久之丞から認められるが、蚕種商人として捕捉できるのは6代目の久之助で、こちらの墓石は見あたらない。もっとも、その分家であり、第6系統の卯右衛門家は家祖から3代目まで並行して墓石を残す。

佐左衛門の流れとならび、名前からすると先祖を同じくするように推察できるのが佐次右衛門の系統である。この系統は、金融業を営みなかなか羽振りの

図3-13 春原家1

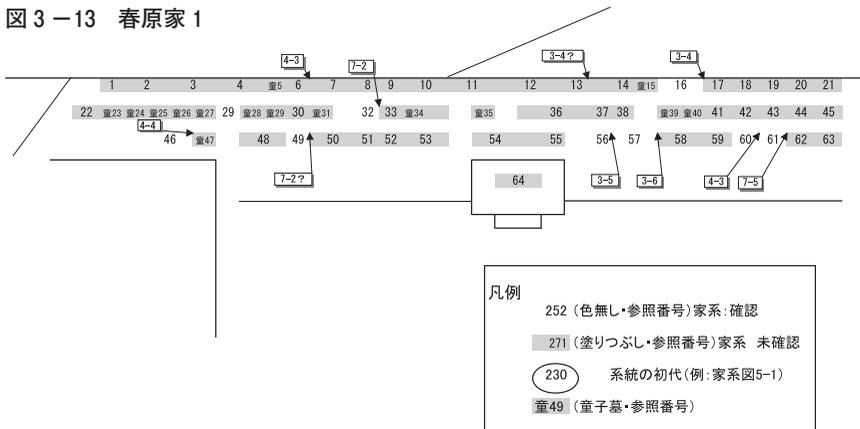
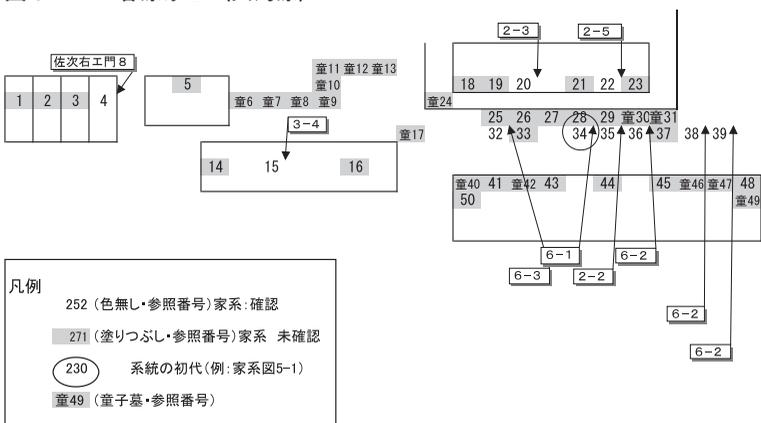


図3-14 春原家2 (大河原)



良い時期もあった。そうした事情から、佐左衛門流と対に家祖佐次右衛門喜八から6代目まで墓石が並んでいる。

また、図3-15の区域は、図3-14の区域とそのまま一続きになっている。こちらは、現在の春原でもう1つの家群を輩出する六助系統の墓群を中核とする。童子墓が多く、判別が難しい墓石が多いのが特徴である。

これらの墓石群はその劣化状態からして氾濫により水をかぶったことを推察させるが、比較的新しいとされる。だからこそ、他地区とくらべて整然と並んでいるとも見なせる。

この大河原の長い墓群から距離を置き、位置的には、より元宿寄りに中規模の、正形状の区域を示す墓群があり（図3-16）、その近くの墓群（図にせず）とともに、上塩尻住民の脳裏に存在している。これは、現在のあやや在住の春原家を春原四流とすると、佐左衛門流・佐次右衛門流・六助流にならぶ左衛門流の墓石群である。「金星（かなほし）」という屋号で呼ばれるこの系統は、宝暦以降、蚕種でかなりの産をなしたとされる。そのときの貫高も多い。もっとも、途中で記録がなぜか乏しくなり、追跡が難しい。もっとも追跡が難しいのは春原全体の傾向でもある。

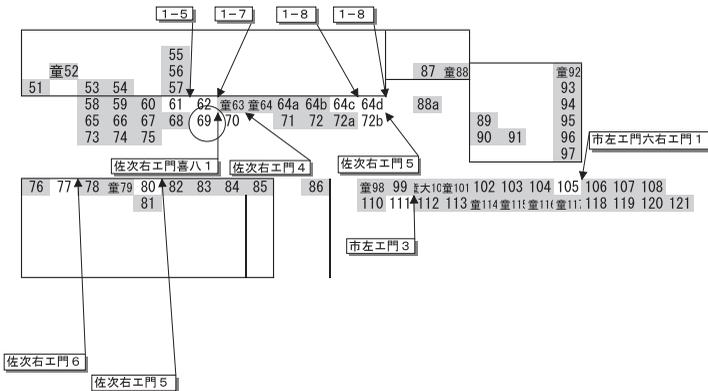


図 3-15 春原家 3 (大河原)

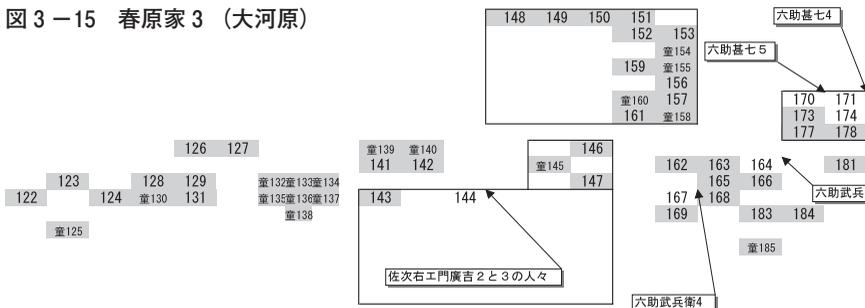
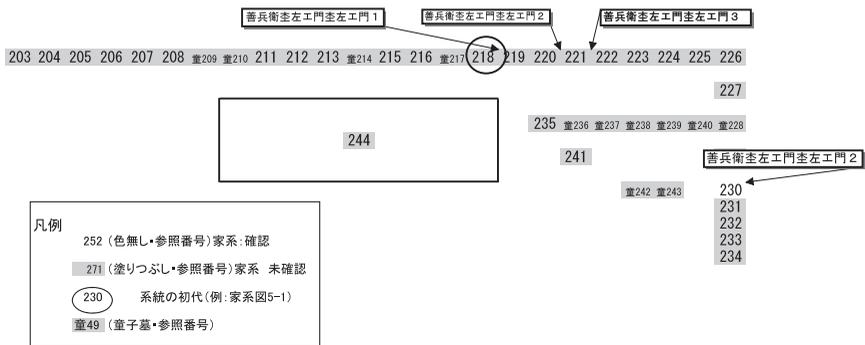


図 3-16 春原家



凡例
 252 (色無し・参照番号)家系・確認
 271 (塗りつぶし・参照番号)家系・未確認
 230 (丸囲み) 系統の初代(例:家系図5-1)
 49 (数字) (童子墓・参照番号)

【滝澤・塚田家】

上塩尻村での共同墓地は、マケ単位で蚕種業を営むことにより産をなし、経済的余裕が反映される形で造られ現在に至ると考えるとわかりやすい。それが如実に現れるのがこの滝澤・塚田家であると言える。もともと、上塩尻において「八家」とされるのが、佐藤・山崎・清水・馬場の主要4家と、準主要というべき原・春原、そしてこの滝澤と塚田である。しかしながら、両者の家系は混じり合い、区別しがたい。家系図でも、高名な塚田茂平次の系統は家系図として細長く描けるものの、他の塚田家は、滝澤との混交が著しい。もともとその区別の必要もなかったものとも考えられる。それは蚕種業では名の通った塚田で外に対すれば都合が良かったから、という理由である。そのように推察す

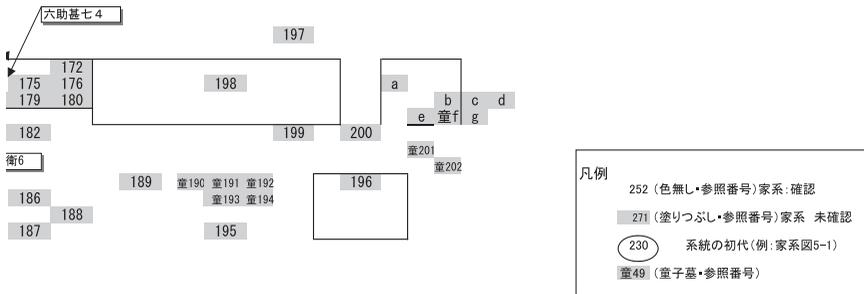
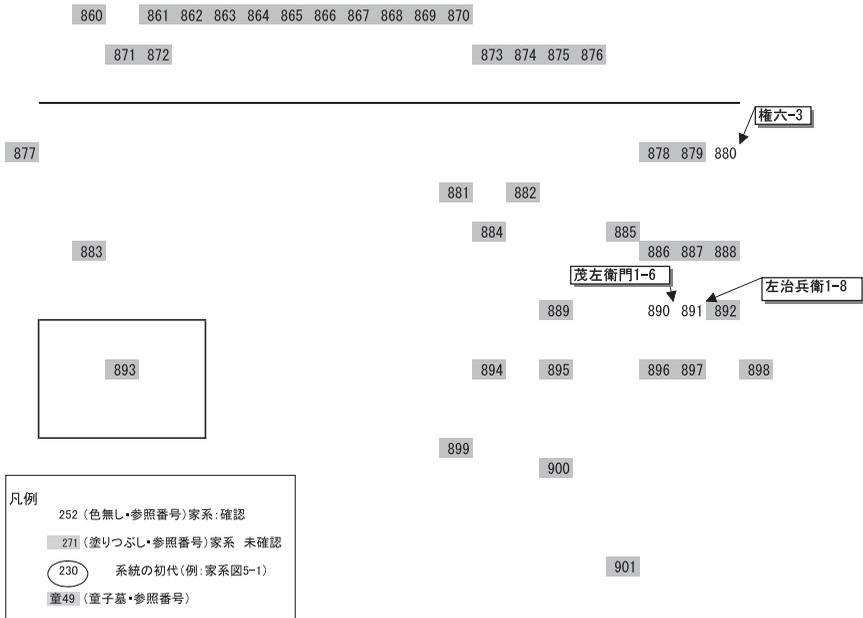


図3-17 滝澤・塚田家



るのは、塚田家墓群として、弥勒堂墓地の入り口脇にまとまって存在するからである(図3-17)。今回、図を省いたが、滝澤家の墓群も存在し、それは東川原の北西部にまとまって見える。塚田姓の方のみかためていわば表舞台に出しているのである。したがって、墓石で特定できる範囲でも滝澤・塚田家系図

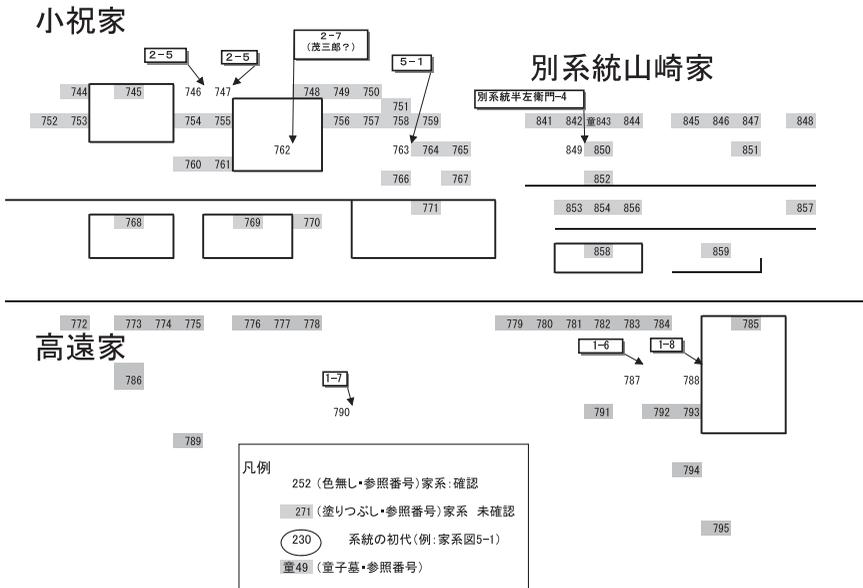
では、権六系統の3代目と茂左衛門系統の6代目、これらは蚕種商人としての鑑札記録もあり、また左治兵衛系統の8代目の先代・先々代である6代目および7代目はやはり蚕種商を営んでいた。

以上、主要マケおよびそれに準ずるマケの墓相について、同族および「家」の形成、その経済的基盤として重要な役割を果たす蚕種業の活動と高い相関にあることを確認した。比較的小規模のマケないし家々については、総じて蚕種商人を多く出していないことが傾向として言える。

【小祝家】

小祝家の墓群は、別系統山崎家と高遠家墓群とともにまとまって見える一画の中に(図3-18)、北西辺沿いを占めている。そしてこの区画は、東が原家、北西・西が清水家、南が塚田家になる。古くは庄屋役も出したことのある当家

図3-18 小祝家・別系統山崎家・高遠家



は長く続く家柄でもある。墓石で特定できているのは、第2系統の5・6・7代のものと、第5系統の初代である。18世紀中葉からの蚕種業との関わりで言えば、天明3（1783）年に33歳であった勘四郎からして孫の代にあたるため、墓の集積が家柄の古さに比べて遅かったということが、その墓群の小ささの原因と考えられる。

【別系統山崎家】

山崎という名字はついていても、実のところ主要マケの流れではなく、外からやってきて忠之丞系統の系統で姓を名乗るようになった家々であり、諸流である。一部は、このように弥勒堂にあるが（図3-18）、他は辰之口に多い。ここで特定できるのは、半左衛門家第4代の墓石にとどまる。

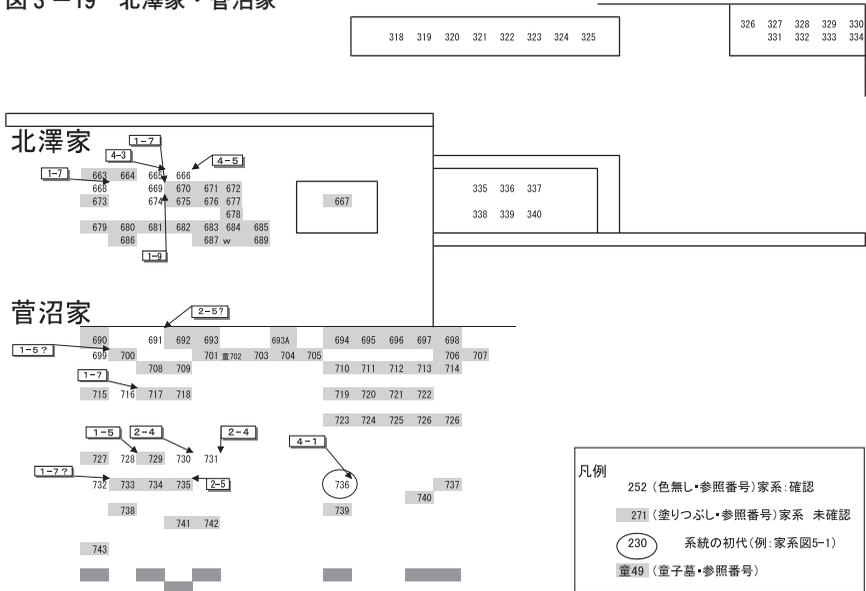
【高遠家】

高遠家も古い（図3-18）。元宿が根拠地であることで、洪水の影響もあったのか、墓地自体は相対的に小さい。墓石上では、本家系統の6代から8代目までのものが判読できる。7代目源七は、高見澤第2系統の2代目でもある。高見澤家は一説によれば、戦国時代に本村に住み着いた武家であった。その詳細は不明ながら、源七は、文化年間に蚕種商として鑑札を受けている（文化7（1810）年）。

【北澤家】

東川原に墓地の一面を持つこのマケはやはり長く続く家だが、墓地のまとまりとしては比較的小さい（図3-19）。墓石で確認しうるのは本家（第1系統）7代および9代、そして第4系統の3代・5代である。宝暦期から文化期まで北澤マケは6名の蚕種商人として鑑札を受けているが、墓石で確認できる者は見つかっていない。

図3-19 北澤家・菅沼家



【菅沼家】

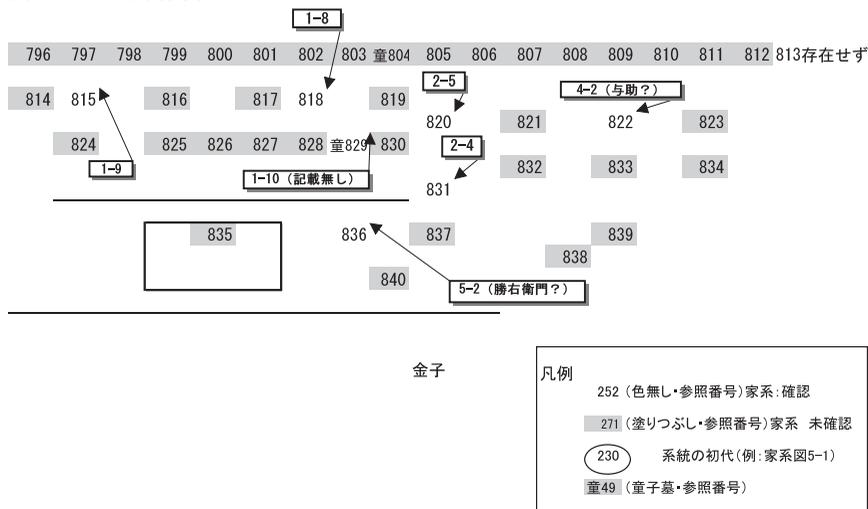
北澤家の南側に墓地区画を構えるのが菅沼家であり、さらに南には、空間を置いて山崎家の区画となる（図3-19）。どちらかという耕作・野菜作りに力を入れてきた家柄とされる。だが、往事には蚕種業も営み、第1系統は5代得兵衛、6代藤次郎、7代加次郎は蚕種商人であり、かつ墓石でも特定できる。また定右衛門家である第2系統では4代定吉が蚕種の鑑札を受けており、5代とともに墓石で特定できるのである。

【小宮山家】

小宮山家は、宗門改帳の順番としては、常に最後になる。新屋（「あらや」）を本拠にし、かつて蚕種で隆盛を見たことについて周辺の人々の述解がある⁸⁾

8) 春原祐治氏の述解では、かつて正月になると、上田城下で最も格式の高い芸者さん達がわざわざ年始の挨拶に来たほどであった、とのことである。

図3-20 小宮山家



東川原では、最も南部であり、弥勒堂入り口にも近い場所に墓地区画を占めているのは、その折に買い求めたものであったのではないかと(図3-20)。これは、先の塚田家と対称をなす位置にあるところからの類推である。石塔で確認できるのは、本家(第1系統)の8代から10代、第2系統の4代・5代、第4系統2代、第5系統2代だが、宝暦期から分化期までの蚕種商の墓石は特定していない。

【山崎家(辰ノ口)】

この辰ノ口には、山崎家総本家の家祖とされる山崎左内の墓があるとされる(図3-21および図3-22)。⁹⁾ 佐藤善右衛門家とのやり取りが多く、息子輪吉を手代として送り出した山崎七郎右衛門(家系図16-4)もここに墓がある。

9) この辰ノ口はもともと北国街道沿いにあったはずであり、そこに墓地があるということも珍しい。しかし、最近区画整理がされて、墓石も動かされ、前後左右の距離が押し詰まり、判読しようもない状態になった。もっとも、調査はそれ以前におこなわれたのであるが、その時点ですでに判読不能の墓石も多かった。

その家祖の墓もある。また、忠之丞家6代の墓もある。本体は、上記東川原にあるので、これは墓を分けたものということになる。

図3-21 山崎家3 (辰ノ口)

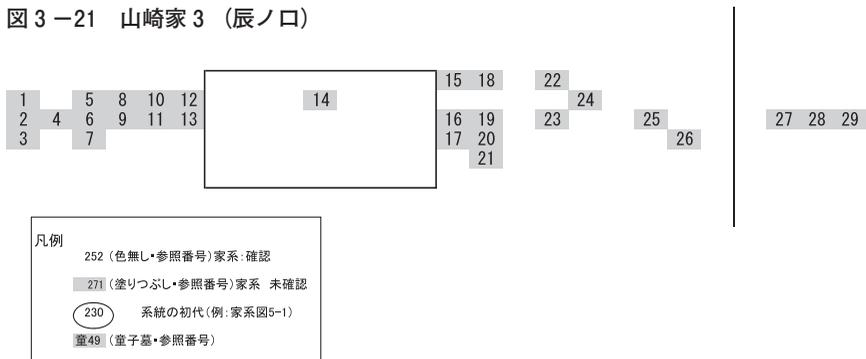
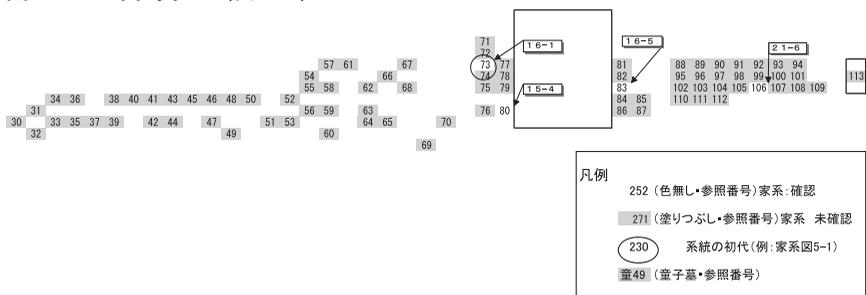


図3-22 山崎家4 (辰ノ口)



第4章 上塩尻村石塔・墓相分析

はじめに

本章では、上記上塩尻村共同墓地群の石塔の形態および碑文を含めた墓相を、同族・家の生成過程と関連させて分析していく。

著者は、資料集としてまとめた拙著『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』において1節を設け以下のような分析を施している。概要を述べよう。

幕末に誕生した者も含めその没年となる昭和初期までを対象として算定した石塔数は1,773基であり、1,140基（全体の64%）が年代を特定できる。形態の分類は、国立歴史民俗博物館研究報告による大和地方における中・近世墓地調査に準じた（表4-1）。もともと卒塔婆や仏塔が原型であったものが、時代が新しくなると宗教的要素を薄め、頭の部分が尖った状態から平らになる¹⁾。

形式別にみてみよう。近世期の和歌山地方で見られる有像舟形（a）は、当地では2世紀ほど遅れて、しかもそれほど主流ではない²⁾。他方、和歌山地方において有像舟形よりは幾分新しい板碑形（b）は、上塩尻近辺では中世のものが出土しているものの、近世では、1690年代に1基のみである。背光五輪塔（c）は見当たらない。駒形（d）は和歌山地方では18世紀以降廃れるが、上塩尻では20世紀まで続いて見られる。とはいえ、全体で283基のうち半分弱の132基（47%）が年代が特定できるだけで、他はより古い時代のもものと推測できる。櫛形（e）は、18世紀および19世紀の和歌山地方で主要形式だが、それでも全体の4分の1を占めるに過ぎない。それに対し、上塩尻では櫛形は7割・8割を占める。1,000基を超え、年代ももっとも特定率が高い（75%）。和歌山地方では、

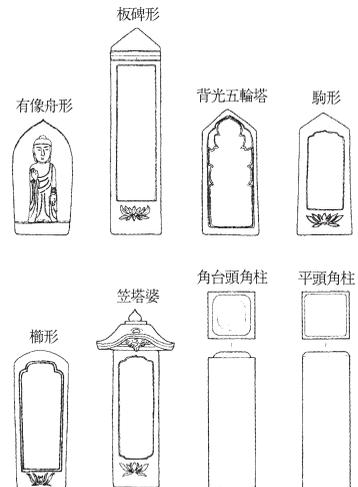
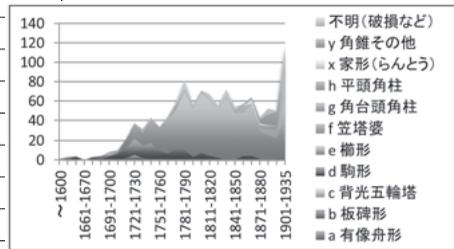
1) 土井卓治『石塔の民俗』岩崎美術社、新装版、1995年、8-9頁。

2) 風化・劣化ということから時代を遡るほどに碑文で年代を特定することも困難になるが、調査対象となった和歌山地方平岡極楽寺では総計867基をどのように採択したのか。

表 4-1 上塩尻村石塔—形状年代順

	a 有像舟形	b 板碑形	c 背光五輪塔	d 胸形	e 楕形	f 笠塔婆	g 角台頭角柱	h 平頭角柱
~1600								
1601-1650					2			
1651-1660				3				
1661-1670								
1671-1680				2				
1681-1690				1	3			
1691-1700		1		2	2			
1701-1710				6	1			
1711-1720	2			10	9			
1721-1730	5			17	12	2		
1731-1740	2			13	13			
1741-1750	1			16	22	1		
1751-1760	1			8	20	2		
1761-1770	1			5	35			
1771-1780				12	38		1	1
1781-1790				10	59			3
1791-1800				3	49		1	2
1801-1810				7	60		1	1
1811-1820				4	56	1	1	1
1821-1830				2	49			
1831-1840					62		3	
1841-1850					47		1	
1851-1860				4	43		1	7
1861-1870				4	51		1	1
1871-1880				1	28		3	3
1881-1890					25		6	3
1891-1900				1	21		8	5
1901-1935				1	41	1	21	15
計	12	1	0	132	748	7	48	42
全体	38	4		283	1,003	10	80	78
年代判明/全体	32%	25%		47%	75%	70%	60%	54%

x 家形(らんとう)	y 角錐その他	不明(破損など)		
	1			
		1		
		1		
	1			
2	1			
	1	2		
		1		
		1		
		3		
		3		
	1	1		
		3		
	4	3		
	1	8		
	1	1		
		4		
		4		
	1	6		
	2	4		
	1	1		
4	3			
2	4	2		
1	11	6		
	14	1		
1	31	6		
10	78	62	1,140	
43	131	103	1,773	
23%	60%	60%	64%	



岩田重則 『「お墓」の誕生』(岩波新書) 140頁より引用。

表 4 - 2 上塩尻村童子墓 - 形状年代順

	a 有像舟形	b 板碑形	c 背光五輪塔	d 駒形	e 橢形	f 笠塔婆
~1600						
1601 - 1650						
1651 - 1660				1		
1661 - 1670						
1671 - 1680						
1681 - 1690						
1691 - 1700						
1701 - 1710						
1711 - 1720	1				2	
1721 - 1730	3				1	
1731 - 1740				2	1	
1741 - 1750	2			1	4	
1751 - 1760				3	2	
1761 - 1770	1			1	4	
1771 - 1780				4	6	
1781 - 1790				5	7	
1791 - 1800				2	8	
1801 - 1810				1	13	
1811 - 1820					5	
1821 - 1830					4	
1831 - 1840					15	
1841 - 1850					6	
1851 - 1860					2	
1861 - 1870					6	
1871 - 1880					2	
1881 - 1890					9	
1891 - 1900				1		
1901 - 1935				1	4	
計	7	0	1	22	101	0
童子墓全体	8			31	152	
童子年代確定/童子全体	88%	0%	0%	71%	66%	0%
年代判明分計	12	1	0	132	748	7
全体	38	4		283	1,003	10
年代判明/全体	32%	25%		47%	75%	70%

g 角台頭角柱	h 平頭角柱	x 家形(らんとう)	y 角錐その他	不明(破損など)	
					1
					1
	1		1		
					1
					2
1	1				1
					1
					2
2					5
	2				11
3	4	0	20	6	164
6	7		26	15	245
50%	57%	0%	77%	40%	67%
48	42	10	78	62	1,140
80	78	43	131	103	1,773
60%	54%	23%	60%	60%	64%

近代から現代にかけて、角台頭角柱、そして平頭角柱へと移行する。それに比べると、上塩尻では、楕形が明治期に入っても後も主要形の位置を保つ。

くわえて、上塩尻では各マケで最も最古の墓と目される家あるいは祠形の「らんとう」については、大和地方では言及がない。この形態は、上塩尻に43基が現存する。そのうち2基のみ元禄期の年代が刻まれていて判読できる(佐藤家、元禄5年(1692)および7年(1694))である。これは上塩尻における各マケの系統が本家および主たる分家で概ね確立し始める時期でもある。らんとうは、個人というよりも家祖を祀るというためのものであった。

また、童子の石塔である童子墓は全体で245基をかぞえ、そのうち164基について年代を特定できる(表4-2)。大和地方では江戸期の事例がほとんど見つからない有像舟形が、上塩尻で全期を通して38基中、18世紀前中期に12基が集中する。さらに、そのうち7基が童子墓なのである。成人の石塔にくらべ童子のものは小型で、碑文も戒名以外には父親の名前とその続柄、あとは享年と没年程度が刻まれているのみで情報量が少ない。だが、3件に2件は特定できる。やはり楕形が主流であり、駒形がそれに続くという順序は成人の場合と同じである。

以上のような結果が出たことで、前掲拙著では、大和地方を墓地・墓石の先進地域と見立て、その先進地域にくらべ1世紀ほどの時間差は「遅れ」というよりも地域性としうるのかも、とした。しかし、その執筆時点では、前章で用いたような新たな史料の発見により、宝暦年間を含む18世紀中葉以降の、同族および家の生成、蚕種業の生成に関するデータ・情報は知り得ないでいた。まず、上田藩領に限定してでも共同墓地の有り様は幾つかの類型に分かれるため、単に地域性とくくってみてもあまり意味はない。そして、それは、共同墓地内の墓相でも同じ事が言えるのである。

1 墓石の形態

墓石の形態は以上のようになるが、少し立ち入ってみると

- 1 単独墓・夫婦墓・複数墓・家墓
- 2 戒名：信士・信女や居士・大姉、そして定門・定尼など

の観点からも分類される。また、梵字の有無などもある。

全体を概観する。まず、形態として、家墓は、明治以降のものであるため、ここでは算定の対象としない。供養塔や先祖代々の墓も同様である。なお、墓石の経年劣化により、存在は確認できても、形状不定でなんら情報を得られないものは勘定には入れていないことをあらかじめお断りする。あくまで傾向を示すものにとどまる。その上で、ということになるが単独墓は1,054基で、年代の判明するものは807基である。1700年までは12基（2%：12/807）、1701年から1750年までが118基（15%）、1751年から1800年までが242基（30%）、合計372基（46%）で半数弱となる。常に念頭に置くべきは、古いものほど消えて無くなっている可能性が高いというごく自然な事実である。1801年から1850年までで230基、ここまでで602基（75%）、全期を通じての807基中の4分の3になる勘定である。これに対して、夫婦・複数墓は349基が年代が特定できる。10基が1700年まで（3%：10/349）。78基が1701年から1750年までで（22%）、1751年から1800年までが99基（28%）、合計して187基（54%）、半数をいささか上回るものの、単独墓と大きくは変わらない。実のところ、墓のでき方からすれば単独墓の方が先で、次第に夫婦墓や家族などの複数墓となるのが順序であるが、件数そのものは少ない上に、上塩尻村の場合は、現存する共同墓地の大枠は、主として18世紀以降に蚕種業の進展という経済的基盤の上に同族・家連合・家の生成とともにできあがってきたものであるため、単独と夫婦（複数・家族）が当初から併存しているものと見なしうる。

2 戒 名

戒名についてはどうか。まず、村民は当初、よほどの家格でなければ居士ではなく、信士として、墓石を刻んだ。300件の信士を算え、その中で年代を特定できるのは238件である。8件（3%：8/238）が1700年以前であり、1701年から1750年までが34件（14%）、1751年から1800年までが71件（30%）であり、全時期の半数近くに及ぶ。なお、1801年から1850年までは84件（35%）なので、幕末以降は後退すると言える。それに替わるようにして割合を増やすのが居士である³⁾

全時期を通じて居士は年代のわかるもので406件ある（「基」と墓でかぞえるのではなく、複数墓の場合にも見られる件数で算えるので「件」とする）。1700年までが7件（2%：7/406）、1701年から1750年までが26件（6%）、1751年から1800年までが65件（16%）、合計98件（24%）であり、18世紀まででも相対的に少ない。他方、1801年から1850年までの時期に89件（22%）をかぞえ、幕末期までにはかなりの割合になるのは、村全体が経済的に余裕を見せているからである。居士の戒名をつけるには檀那寺にそれなりの金額を積みねばならないはずだから。

同じ事は、男性の居士に匹敵する「信女」「大姉」にも言えるだろうか。全時期を通じて信女は1700年までの時期には、信女は308件で年代の特定できるものは201件である。1700年までが4件（2%：4/201）、1701年から1750年までが33件（16%）、1751年から1800年までが57件（28%）、合計94件（47%）であり、全時期の半分近くにおよぶ、という点で信士と同様である。1801年から1850年までの時期も67件（33%）で幕末までに後退する点も、信士とワンセットの動きを示していると言わざるを得ない。

他方、大姉の方は合計で404件で、年代の特定できるのが288件である。

1700年までが4件（1%：4/288）、1701年から1750年までが19件（7%）、

3) イギリスとの対比でいえば、信士がハズバンドマンであり、居士がジェントリ（郷紳）ないしジェントルマンになる。

1751年から1800年までが54件（19%）、合計77件（27%）であり、18世紀までも居士と同じく相対的に少ない。他方、1801年から1850年までの時期に87件（30%）をかぞえ、幕末期までにはかなりの割合になる点でも、同じだが、女性の社会的地位が当時は、相対的に低かったことを考えると、墓相上のこととは言え、居士の男性を割合において凌駕するのは、印象深い。

以上、上塩尻の石塔全体でみると、戒名および単独・夫婦・複数の種類でやはり18世紀後半から19世紀中葉に推移を観察できる。戒名では、居士・大姉が特上で、信士・信女が上であろう。9割以上がこのどちらかであるが、傾向として経済的にも余裕があり戒名付けに謝礼をはずめる大きな家、そして本家・本家格であれば早い時期から居士を戒名とする。あるいは比較的小さいマケの場合で、古式を大事にする場合など信士を専らとするところもある（菅沼家）。

3 家名と墓石

家名は対領主・対世間としての公的な場面で意味を持つ。通名・実名がいわゆる襲名上の基本となる傍ら、市場経済活動の場面では「屋号」が家名としての意味を持つようになる。詳細は以下に論じるとして、あらかじめ、両者ともに社会経済的な信用機能が重要なのである。

総じて墓のあり方は「家名」の出現と連動すると考えられるが、18世紀後半から19世紀前半期と幕末・明治期という段階を緩やかに経ている。家系図を見ても、各マケで分家が多く現れるのは実は19世紀以降が多く、主立った分家をもみても概ね18世紀中葉からである。さらにその前となると数少ない。それゆえ、各分家の家祖といってもその墓は18世紀中葉以降のものである場合がほとんどである。

墓碑から読み取れる事柄として、それぞれの家名ないしマケ名を刻んだものが「家名」の出現という見地すればもっとも直接的であるが、佐藤家でも童子墓に見られる「佐藤曾兵（衛）」（家系図13-2：佐藤家石塔284）が寛保2年（1742）のもので最古である。それまでは、そしてそれ以降もほとんどの場合戒名と享

年および埋葬年月のみが刻まれるのみである。馬場家では馬場勝右衛門（家系図14-2：馬場家石塔92）のものが宝暦5年（1755）で最も古い。こうして年代をたどる場合に気をつける必要があるのは、後世の者が戒名も含めて家祖などの石塔を新たに建立する場合もしばしば見受けられる点である。多くの場合、石塔の形や摩耗状況からそれと知れるし、「俗名山崎」などという文言も18世紀末かそれ以降であると判断した方がよいようである。

4 個別マケ分析

以下、もっぱら主要マケおよび準主要マケを扱う。番号は、付録表の各家毎にふしたものである。

【佐藤家】（図4-1および図4-2）

弥勒堂墓地中央に位置する佐藤家墓群は、佐藤マケが上塩尻村でも屈指の一族として、家のあり方や稼業の発展のさせ方の指標となってきたのをそのまま反映させている。したがって、墓相の観察をする場合でも、この佐藤マケの事例をまずよく理解することで、他のマケの動きを理解するのに有効と考える。「あの佐藤家で、こうしている」という意識が他のマケにも働いたと推察するからである。

佐藤家全体、図4-1（35番～222番）と図4-2（223番～317番）双方で、年代の特定に墓石として最も古い年代が刻まれるものは、246件である。時期で見ると、17世紀は4件（2%：4/246）、1701年から1750年までの18世紀前半が25件（10%）、1751年から1800年までの18世紀後半が63件（26%）、1801年から1850年までの19世紀後半が68件（28%）となる。残りの時期が86件（35%）となる。

佐藤家の総本家は言うまでもなく佐藤善右衛門家であり、高祖信雄は戦国時代の1538年に没している。英国と同様に日本でも残存する石塔は、著名人でない限り16世紀を遡るのが限界である。本佐藤家でも同様であり、実のところ、前章でも触れたように最古のものとして遡れるのは、没年1723年の第11代目善

右衛門信利、又兵衛の代からということになる（図3-3:11-1）。

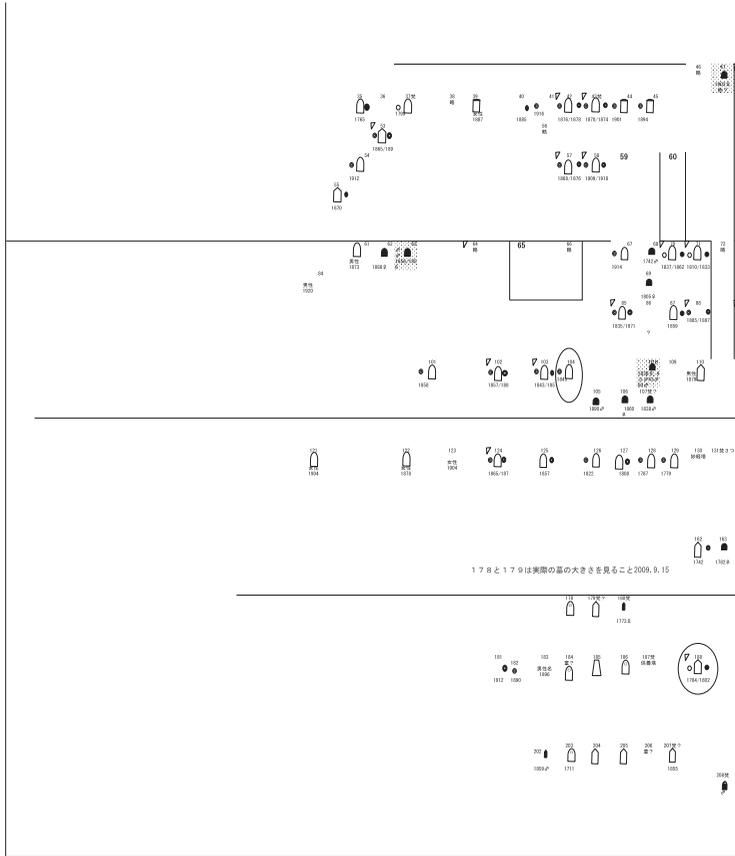
墓石として一族で最古のものは、174番の佐藤家分家筆頭佐藤八郎右衛門家祖安兵衛信近の妻（西澤弥五介娘）であり没年明暦2（1656）年である。単独墓であり、戒名は大姉であり筆頭分家の妻としてその格式に相応しい。墓石の形は古式の駒形である。そしてそれに次ぐのが妻のあとを追うようにして万治元（1658）年に物故した173番安兵衛その人の墓石である。単独で居士であり、やはり駒形で揃えてある。それ以外のものは、元禄期1690年代で、祠（ほこら）の形式をとる墓である。実のところ、上記安兵衛の墓石は、この祠形式のものが建てられた後の建造と推測している。

佐藤家は、同族形成が早くから行われた。とはいえ、分家件数が増えてくるのは18世紀なのである。享保期を含む18世紀前半、すなわち1701年から1750年までの時期、25件について年代が判明している。この時期に佐藤マケでは家祖として第3系統（家系図3-1半弥：1707年没、219番）、第4系統（家系図4-1清左衛門：1743年没、211番）、第5系統（家系図5-1善左衛門：1722年没、153番）、第8系統（家系図8-1利助：1730年没、142番）、第9系統（家系図9-1半兵衛：1723年没、255番）、が墓石を建てている。その中で最も新しく延享3（1746）年に建てた第4系統の清左衛門は夫婦墓である。格式のある家としては、その当時は「モダン」な選択だったものと思う。

佐藤家の者は、原則として戒名としては格の高い居士であり大姉がついている。だが、信士の戒名がついているのが3件であり、最古の元文4（1739）年（245番）のものは家系が特定できず、2番目のものは第5系統の2代目（1747年、262番）であり、貫高が0.032貫と小さく、身代の小ささから信士となったものと推断する。さらにもう1件の信士が第10系統の2代で次男にあたる政次郎と思われる石塔である（家系図10-2、1749年、191番）。これは、次男であり貫高も不明であるが高くはなかったと思われるところから、自然な選択だったのだろう。これらは皆墓石の形式としては比較的新しい楕形である。

童子墓についても、この17世紀前半25基のうち、6基を占め、4分の1になる。内1つは正徳元（1711）年および享保2（1717）年の年代を刻んだ複数の

図4-1 墓相・佐藤家1



凡例

一番上の番号は墓の整理番号
 男性の情報は、向かって左側に、女性のものは右側にする。

1. 戒名	2. 墓の形	3. その他
居士	a. 有像舟形	子どもの墓は、小さくして黒塗りしている
大姉	b. 板碑形	①夫婦墓
居士	c. 背先五輪塔	②複数
信女	d. 駒形	③大人と子ども混合墓
直子	e. 櫛形	例) e形の墓に大人と子どもが入っている
重女	f. 空塔婆	④死亡年は一書下に記入
定門	g. 角台鐘角柱	⑤家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
定尼	h. 平頭角柱	例) 居士と大姉の夫婦墓。梵字有り。e形で夫は1976年に、妻は1959年に死亡の場合。
定尼	i. 舟形（竊）	
	y. 角柱その他表さない	

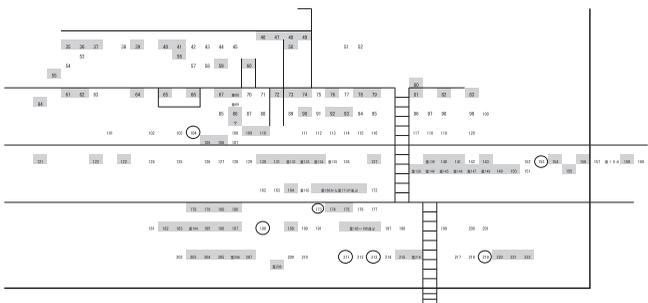
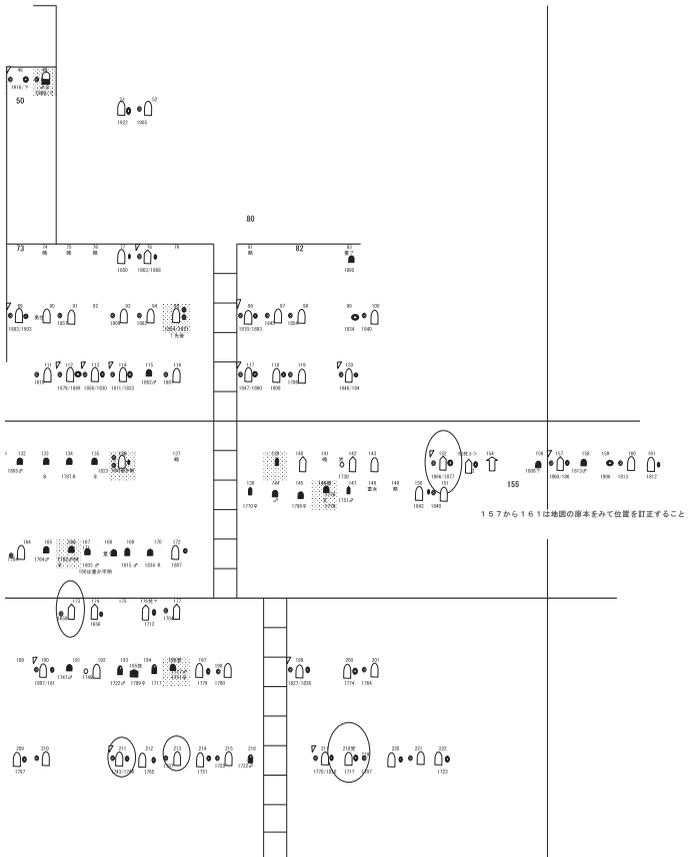
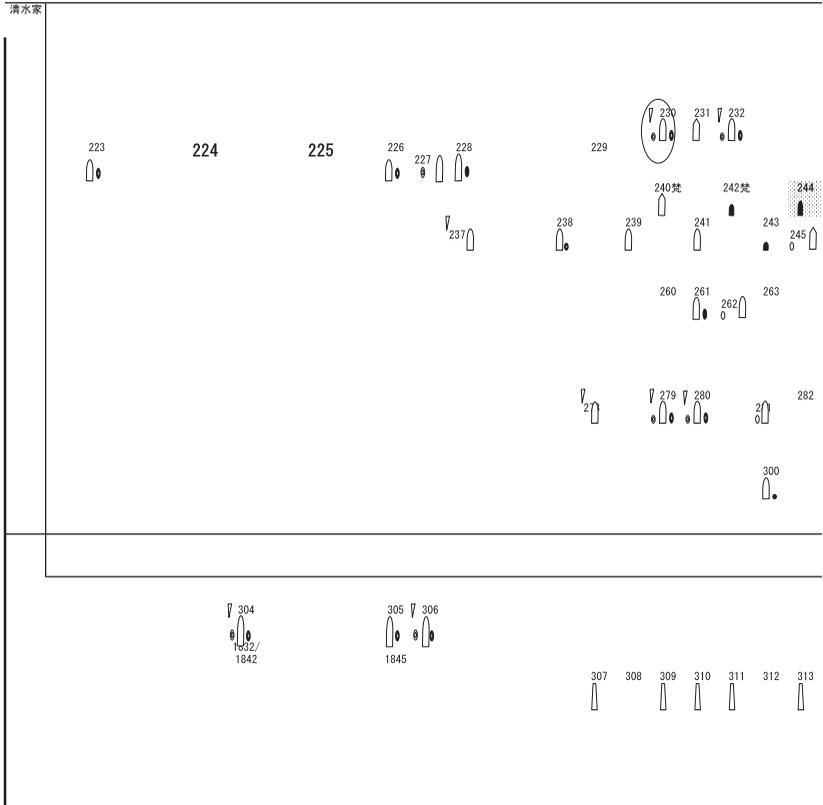


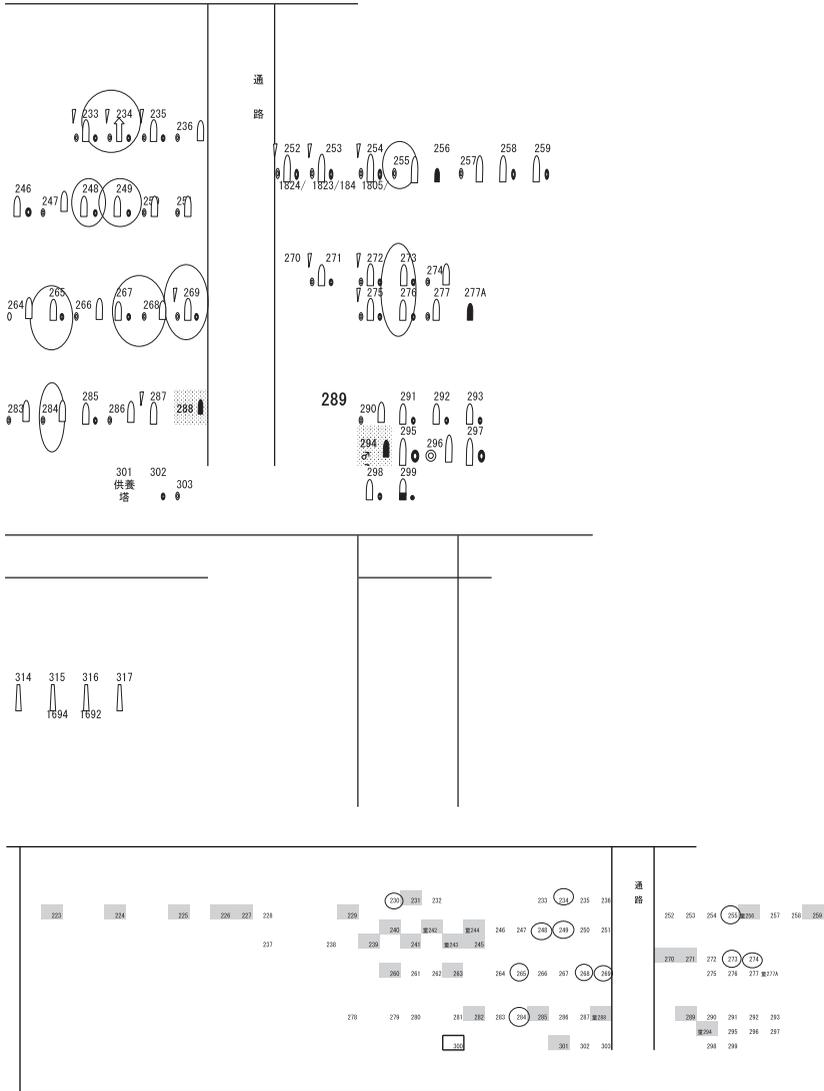
図 4-2 墓相・佐藤家 2



凡例

一番上の番号は墓の整理番号
 男性の情報、向かって左側に、女性のものは右側とする。

1. 戒名	2. 墓の形	3. その他
① 戒名 ② 戒名 ③ 戒名 ④ 戒名 ⑤ 戒名 ⑥ 戒名 ⑦ 戒名 ⑧ 戒名 ⑨ 戒名 ⑩ 戒名 ⑪ 戒名 ⑫ 戒名 ⑬ 戒名 ⑭ 戒名 ⑮ 戒名 ⑯ 戒名 ⑰ 戒名 ⑱ 戒名 ⑲ 戒名 ⑳ 戒名 ㉑ 戒名 ㉒ 戒名 ㉓ 戒名 ㉔ 戒名 ㉕ 戒名 ㉖ 戒名 ㉗ 戒名 ㉘ 戒名 ㉙ 戒名 ㉚ 戒名 ㉛ 戒名 ㉜ 戒名 ㉝ 戒名 ㉞ 戒名 ㉟ 戒名 ㊱ 戒名 ㊲ 戒名 ㊳ 戒名 ㊴ 戒名 ㊵ 戒名 ㊶ 戒名 ㊷ 戒名 ㊸ 戒名 ㊹ 戒名 ㊺ 戒名 ㊻ 戒名 ㊼ 戒名 ㊽ 戒名 ㊾ 戒名 ㊿ 戒名	① 有像舟形 ② 板碑形 ③ 背矢五輪塔 ④ 物形 ⑤ 櫛形 ⑥ 笠塔婆 ⑦ 角谷型角柱 ⑧ 平頭角柱 ⑨ 舟形(扁) ⑩ 角柱その他表さない	子どもの墓は、小さくして黒塗りしている ① 夫婦墓 ② 複数 ③ 大人と子ども混合墓 ④ 影の墓に大人と子どもが入っている ⑤ 死亡年は一筆下に記入 ⑥ 家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記 例) 居士と大姉の夫婦墓。梵字有り。e影で夫は1874年に、妻は1889年に死亡の場合。 1874/1889



童女のための小墓石である（195番：1711年・1717年）。また、地蔵が1基あり、こちらにも正徳元年と刻んである。童子の死と関わるものではないか、と推測する。

この時期を通じて、6件が駒形であるが、12件が新しい形式である楯形をしており、塔頂がより平らに近づいている。

1751年から1800年までの時期には佐藤家は63件である。この18世紀後半は、特に宝暦期になると蚕種業が本格化し、届出をし、鑑札を受けて蚕種商人として村外へ出る者が村全体で見られるようになる。わけても佐藤家は、精鋭を送り出した。他方、この時期には若い分家の家祖が鬼籍に入っている。第10系統（家系図10-1 曾兵衛：1764年没、享年64歳、250番）、第11系統（家系図11-1、嘉平次：1787年没、享年82歳、274番）、第12系統（家系図12-1 磯右衛門：1767年没、享年62歳、213番）、第13系統（家系図13-1 八郎兵衛：1781年没、享年71歳、268番）、第14系統（家系図14-1 悦信：1787年没、享年61歳、230番）、第15系統（家系図15-1 文五郎：1787年没、享年84歳、284番）、第19系統（家系図19-1 園右衛門：1795年没、享年56歳、266番）、これらは居士である。そして、信士として第16系統の家祖文五郎（家系図19-1 園文五郎：1784年没、享年66歳、188番）がある。

墓石の形式は6基が駒形だが、うち4基が童子墓であり、また1基は夫婦墓である。楯形は49件と完全に主流となった。

さらに、この時期となると信士はごく慎ましい古風となり、2件にとどまる。1つは、第15系統2代条助の享年は26歳であり、若年であったことも、信士となった理由に数えられる。もう1つは、家系図上では戦術のように第16系統の家祖である文五郎信正の墓石であり、彼は貫高帳では、彼の貫高は村の平均1貫を大きく下回る0.033貫であり、額面通りにみればかつかつであった。信士とするのも無理はない。もっとも、天明4年といえば天明の大飢饉の時期と重なるために村全体としても困窮していたはずである。信女は2件で、享年23歳とやはり若年の佐藤八五郎娘（光室智照信女：家系図13-3、1800年、300番）であり、もう1件は享年は不明で安永7（1778）年と墓碑にあるものである（家系図18-2：228番）。なお、単独墓は37墓で、夫婦墓が8基に増えてきており、よ

り近代一般の形式が現れてきている。

1801年から1850年の時期には、単独墓は19基に夫婦墓が14基と、夫婦墓の割合が増えていく。また、駒形は完全に消失し、楯形のみとなる。ここに至ると、分家もほぼ出揃っており、家祖の者の墓石は、文化9（1812）年に第17系統（家系図17-1 忠二郎：享年92歳、269番）および文化2（1805）年に第18系統（家系図18-1、清次郎：1805年没、享年82歳、254番）の家祖が、それぞれ夫婦墓で遺しているに留まる。大勢はここに定まり、佐藤マケ墓群は、弥勒堂の中央にあって、他のマケにとっての指標となっていくのである。

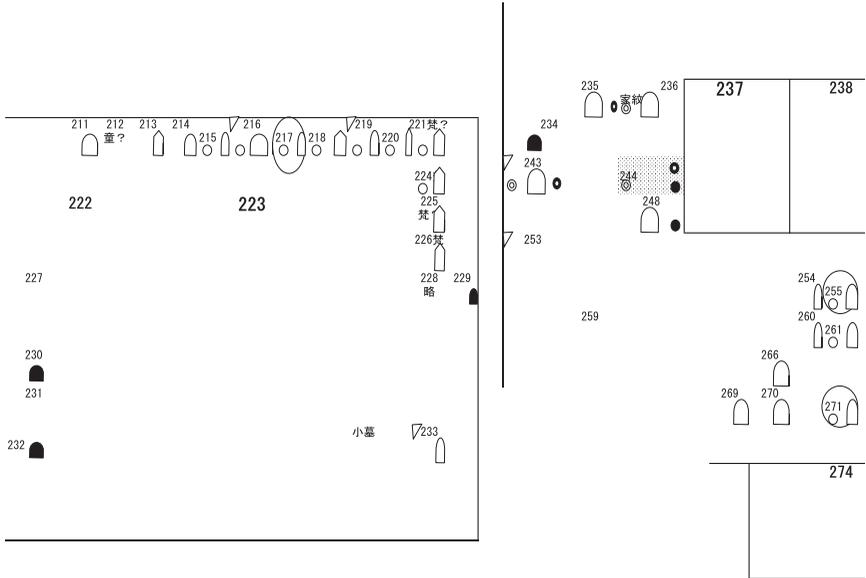
【山崎家】（図4-3および図4-4）

山崎家墓群は、もともとは高祖左内の墓があるとされる辰ノ口（大村西端）にあったが、現在では、総本家が絶えたあと本家4流が立ち、東川原に墓域を構えていることは前章で述べた通りである。なお、辰ノ口になお山崎家の石塔が残るが、別系統の山崎も含み、判読しにくいものも多いため、詳細は省く。

山崎家の実質上の家祖ともいべき山崎孫之丞の墓石（家系図1-2：340番）は時代は寛文12（1672）年と刻まれているものの先祖追悼の性格が強い。形は奈良などの石塔先進地域で18世紀で観察される笠塔婆形式であるし、「俗名山崎孫之丞」とあるからである。17世紀中には、この墓石以外には、単独墓で駒形、信士（1691年、218番）と第18系統（佐五右衛門）の家祖が居士として遺した笠塔婆の夫婦墓がある（家系図18-1、1692年、図4-4の8番）。18世紀前半、1701年から1750年までの時期でみると、16件中、9件が「信」を用いている。信士が4件、信女が5件である。それらはすべて単独墓であり駒形の墓石に刻まれており、要するに古風なのである。居士は2件で、それらは大姉とともに夫婦墓で、また楯形という「モダン」な部類である。実のところそれらは忠之丞家墓域の中心をなす墓石2基である（家系図18-2 喜兵衛、1704年、番号3；家系図18-3 平七、1747年、番号1）。

総じて大家である佐藤マケとくらべて、身代が比較的小さいということもあるだろうが、山崎家の墓相は慎ましく、古風が残り、18世紀後半になっても、

図4-3 墓相・山崎家1 (東川原)



凡例

一番上の番号は墓の整理番号
男性の傍数は、向かって左側に、女性のものは右側とする。

1. 戒名	2. 墓の形	3. その他
居士 ◎	a. 有像舟形	子どもの墓は、小さくして黒塗りしている
大姉 ●	b. 板碑形	①夫婦墓
偉士 ○	c. 背光玉輪塔	例) 子ども
偉女 ●	d. 騎形	例) 子ども
童子 ◦	e. 櫛形	②横敷
童女 ♀	f. 笠塔婆	③大人と子ども混合墓
定門 定門	g. 角台頭角柱	例) e形の墓に大人と子どもが入っている
定尼 定尼	h. 平頭角柱	④死亡年は一番下に記入
	x. 角形 (竪)	⑤家紋・梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
	y. 角柱その出表さない	例) 居士と大姉の夫婦墓。梵字有り。e形で夫は1876年に、妻は1859年に死すの場合。

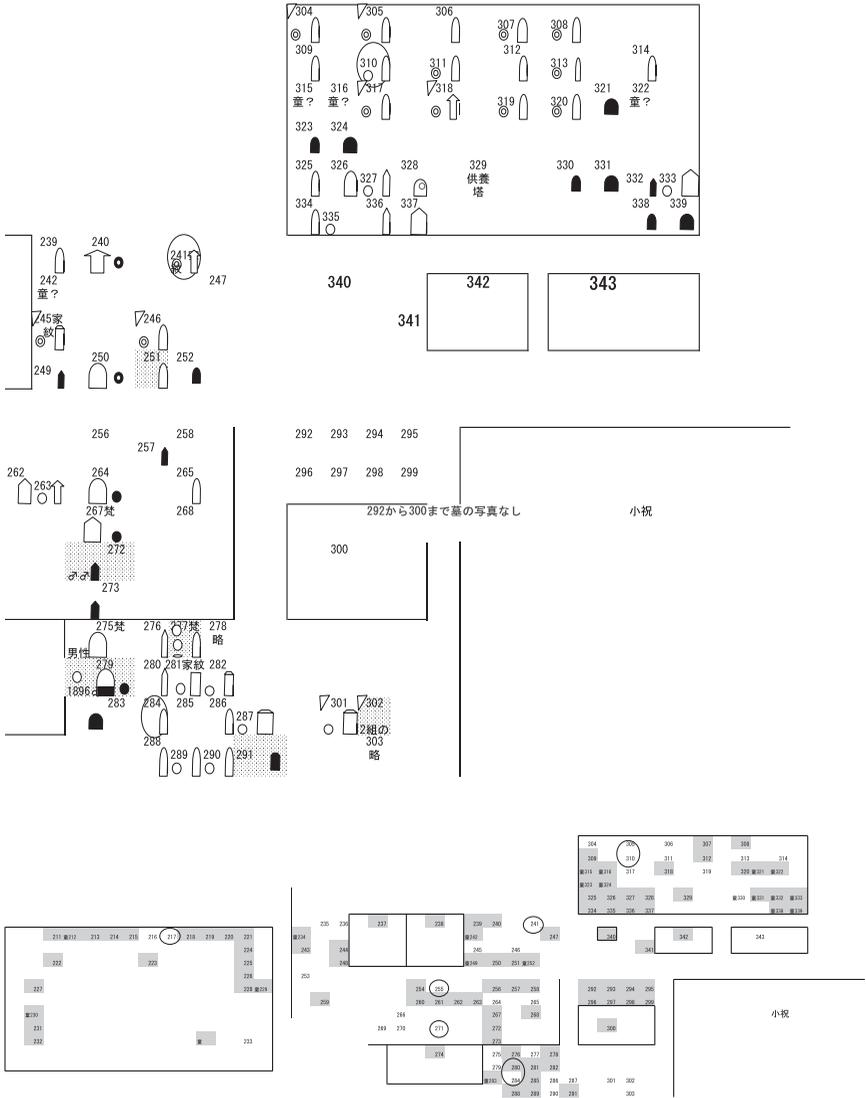
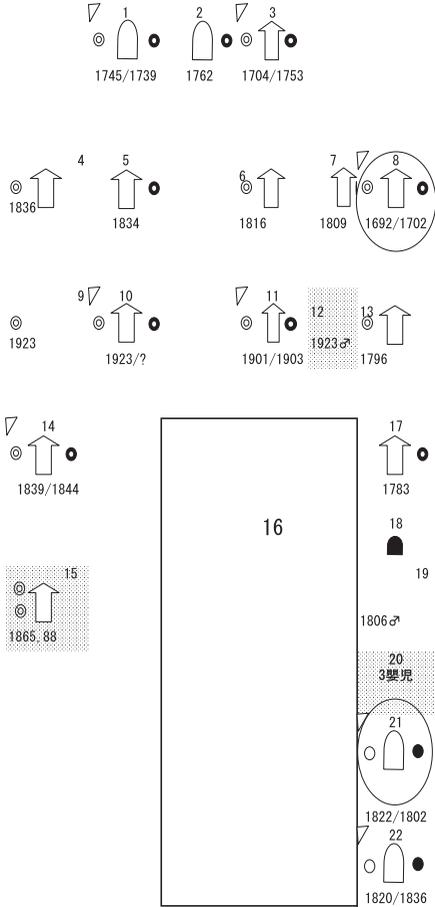


図4-4 墓相・山崎家2 (忠ノ丞)



凡例

一番上の番号は墓の階層番号
 円性の情報は、向かって左側に、女性のもは右側とする。

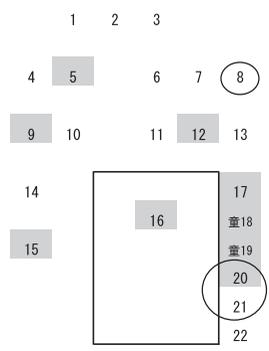
1. 氏名 2. 墓の形 3. その他

① 有蓋自形 (例) 子どもの墓は、小さくして墓入りしている
 ② 無蓋自形 (例) 子どもの墓
 ③ 有蓋互形 (例) 子どもの墓
 ④ 有蓋互形 (例) 子どもの墓
 ⑤ 有蓋自形
 ⑥ 有蓋自形
 ⑦ 有蓋自形
 ⑧ 有蓋自形
 ⑨ 有蓋自形
 ⑩ 有蓋自形
 ⑪ 有蓋自形
 ⑫ 有蓋自形
 ⑬ 有蓋自形
 ⑭ 有蓋自形
 ⑮ 有蓋自形
 ⑯ 有蓋自形
 ⑰ 有蓋自形
 ⑱ 有蓋自形
 ⑲ 有蓋自形
 ⑳ 有蓋自形
 ㉑ 有蓋自形
 ㉒ 有蓋自形

① 2階級
 ② 3階級
 ③ 4階級
 ④ 5階級
 ⑤ 6階級
 ⑥ 7階級
 ⑦ 8階級
 ⑧ 9階級
 ⑨ 10階級
 ⑩ 11階級
 ⑪ 12階級
 ⑫ 13階級
 ⑬ 14階級
 ⑭ 15階級
 ⑮ 16階級
 ⑯ 17階級
 ⑰ 18階級
 ⑱ 19階級
 ⑲ 20階級
 ⑳ 21階級
 ㉑ 22階級

① 4階の墓に次人と子どもが入っている
 ② 5階の墓に次人と子どもが入っている
 ③ 6階の墓に次人と子どもが入っている
 ④ 7階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑤ 8階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑥ 9階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑦ 10階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑧ 11階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑨ 12階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑩ 13階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑪ 14階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑫ 15階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑬ 16階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑭ 17階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑮ 18階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑯ 19階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑰ 20階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑱ 21階の墓に次人と子どもが入っている
 ⑲ 22階の墓に次人と子どもが入っている

① 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ② 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ③ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ④ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑤ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑥ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑦ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑧ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑨ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑩ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑪ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑫ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑬ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑭ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑮ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑯ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑰ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑱ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑲ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ⑳ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例
 ㉑ 例) 墓土と大踏の夫婦墓、禁字有り、8階で夫は1878年に、妻は1899年に卒した例



信士・信女が主流である。33件中、童子が4件、童女が6件、合わせて10件を除くと23件中、居士は3件にとどまる。宝暦13(1763)年および明和2(1765)年、橢形・夫婦墓の五郎右衛門家2代の三郎右衛門のものである。五郎右衛門家はとくにこの宝暦期でも蚕種商人として名を連ねるようになり、経済的な基盤も充足していたことから、主流本家として石塔を整えたものと推察する(家系図5-2、317番)。もう1件の居士は天明元(1781)年の橢形・単独で第4系統の2代善太郎であり、3.336貫と山崎マケとしては貫高も大きい(家系図4-2、236番)。78歳と高齢での死去でもあったため、居士が戒名としてつくのも無理がない。もう1件は、さらに高齢で大往生であったと思うが、寛政8(1796)年91歳を享年とする忠之丞(家系図18-4、図4-4の13番)である。先々代から居士であるため、ごく自然ななりゆきで居士としたであろうし、貫高も1.692貫と平均以上であった。なお、年代を確認できる範囲ではあるにせよ、大姉は8件と、居士の数よりも多い。信士は5件で、信女は4件である。信士の中には、第6系統の家祖である銀七の墓石が含まれる(家系図6-1、217番)。宝暦14(1764)年、88歳と米寿を迎えての逝去であったが、0.184貫であり、貫高としては高くないこともあり、相応とされたものと思われる。古風が残る山崎家ではあるが、駒形は3基のみと数を減じ、当世主流の橢形が大半を占めるようになる。

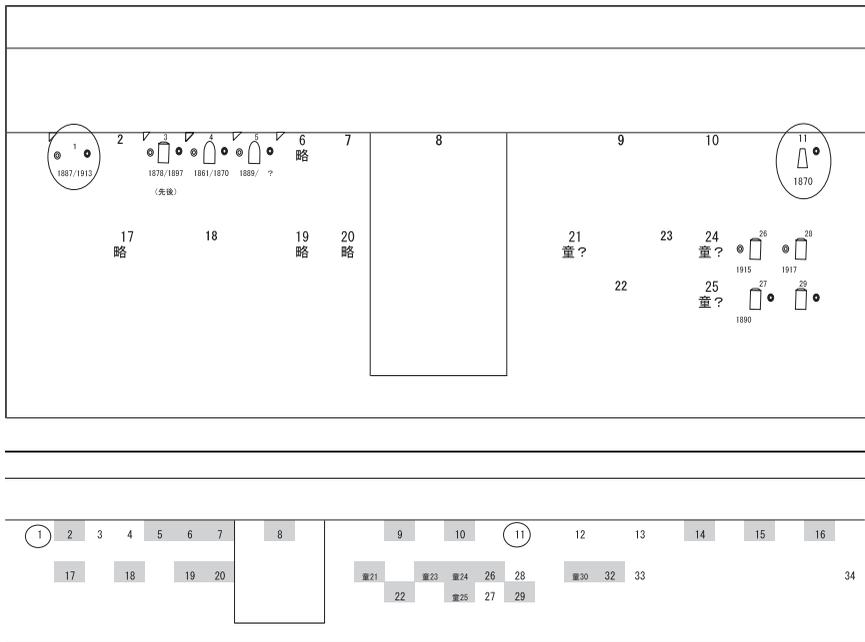
1801年から1850年の19世紀前半は、駒形はまったくなくなり、橢形が圧倒的で、38基中31基を占める。また、笠塔婆とひねった墓石も6基かぞえられる。しかし、この時期にいたっても、居士の数は限られており、9件である。その中で系統のわかるものが6件で、既に居士を出している五郎右衛門家4代から6代まで(家系図5-4五郎右衛門：享年63歳、1831年、2.831貫、313番；家系図5-5五郎右衛門：享年59歳、1849年、0.776貫、319番；家系図5-6五郎右衛門：享年33歳、1848年、0.776貫、307番)と、やはり居士を3代既に続けている忠之丞家5代から7代まで(家系図18-5忠之丞：1816年、4.835貫、図4-4の6番；家系図18-6忠之丞：享年69歳、1836年、図4-4の4番；家系図18-7忠之丞：享年45歳、1839年、3.051貫、図4-4の15番)とである。他方、信士も同数の8件をかぞえ、その中には、系

統家祖となった新たな分家のもも3件含まれる。第11系統（家系図11-1 戊次郎：享年65歳、1817年、0.748貫、271番）、第12系統（家系図12-1 新三郎：享年66歳、1822年、0.39貫、310番）、第23系統（家系図23-1 平七：享年90歳、1822年、0.124貫、図4-4の21番）これらは、いずれも貫高に照らせば標準の1貫に満たない小さいものであるために妥当とされたと思われる。

【清水家】（図4-5～図4-7）

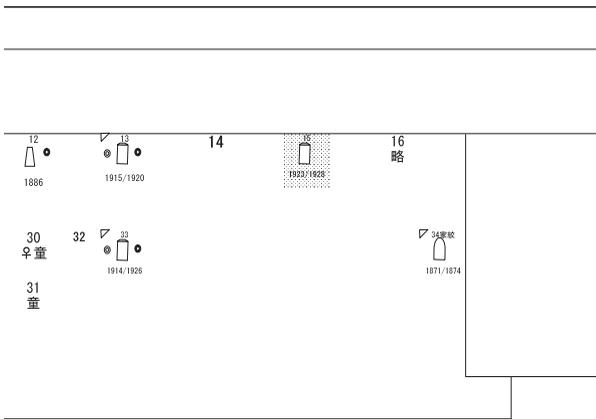
弥勒堂墓地へ至るまでの道の清掃をする順番は、上塩尻村に各家が入ってきた順番に由来するという。それでいうと、佐藤、山崎に次いで3番目が清水家である。墓石では、最も古い年代を刻むのが、建立は1987年だが、天正9（1581）

図4-5 墓相・清水家1



年の居士と天正15（1587）年の大姉との夫婦墓である。17世紀中の年代の刻まれているのは、やはり夫婦墓で「俗名清水久左衛門」とある、第11系統3代目久左衛門（家系図11-3、614番）のもので貞享3（1686）年だが、楕形でもあり、当時の墓石とは見なしがたい。

18世紀の前半（1701年～1750年）の段階で28件、清水家の墓石をかぞえる。信士はなく居士のみの墓石であるところが山崎家とは異なり、むしろ弥勒堂で隣接する佐藤家の後を追っているという印象を抱く。もっとも、大姉と信女は4件ずつで同数である。また「法尼」なども享保期に物故した女性の墓石に見られる（享保元（1716）年、581番：「清誉良意法尼」「清水助治郎嬢」。清水マケの場合、この時期の家系の特定は困難である一方で、楕形・夫婦墓なども見られ、



凡例

—墓石の形は墓の形を簡略化したものであり、実際のものとは異なる場合があります。

1. 姓名 2. 墓の形

居士 ● a. 有徳形
 大姉 ○ b. 楕形
 居士 ○ c. 清水五輪塔
 信女 ● d. 楕形
 信子 ♀ e. 楕形
 信女 ♀ f. 笠形
 信門 定門 止所石塔
 信女 定門 止所石塔

子どもの墓は、小さくして書き添えている
 ① 次期墓
 ② 子ども
 ③ 子ども
 ④ 次期墓
 ⑤ 次期墓
 ⑥ 次期墓
 ⑦ 次期墓
 ⑧ 次期墓
 ⑨ 次期墓
 ⑩ 次期墓
 ⑪ 次期墓
 ⑫ 次期墓
 ⑬ 次期墓
 ⑭ 次期墓
 ⑮ 次期墓
 ⑯ 次期墓
 ⑰ 次期墓
 ⑱ 次期墓
 ⑲ 次期墓
 ⑳ 次期墓
 ㉑ 次期墓
 ㉒ 次期墓
 ㉓ 次期墓
 ㉔ 次期墓
 ㉕ 次期墓
 ㉖ 次期墓
 ㉗ 次期墓
 ㉘ 次期墓
 ㉙ 次期墓
 ㉚ 次期墓
 ㉛ 次期墓
 ㉜ 次期墓
 ㉝ 次期墓
 ㉞ 次期墓
 ㉟ 次期墓
 ㊱ 次期墓
 ㊲ 次期墓
 ㊳ 次期墓
 ㊴ 次期墓
 ㊵ 次期墓
 ㊶ 次期墓
 ㊷ 次期墓
 ㊸ 次期墓
 ㊹ 次期墓
 ㊺ 次期墓
 ㊻ 次期墓
 ㊼ 次期墓
 ㊽ 次期墓
 ㊾ 次期墓
 ㊿ 次期墓

例) 墓石と次期の夫婦墓。墓字あり。4代目天正1587年に、墓は1899年に建立された。

图 4-6 墓相·清水家 2

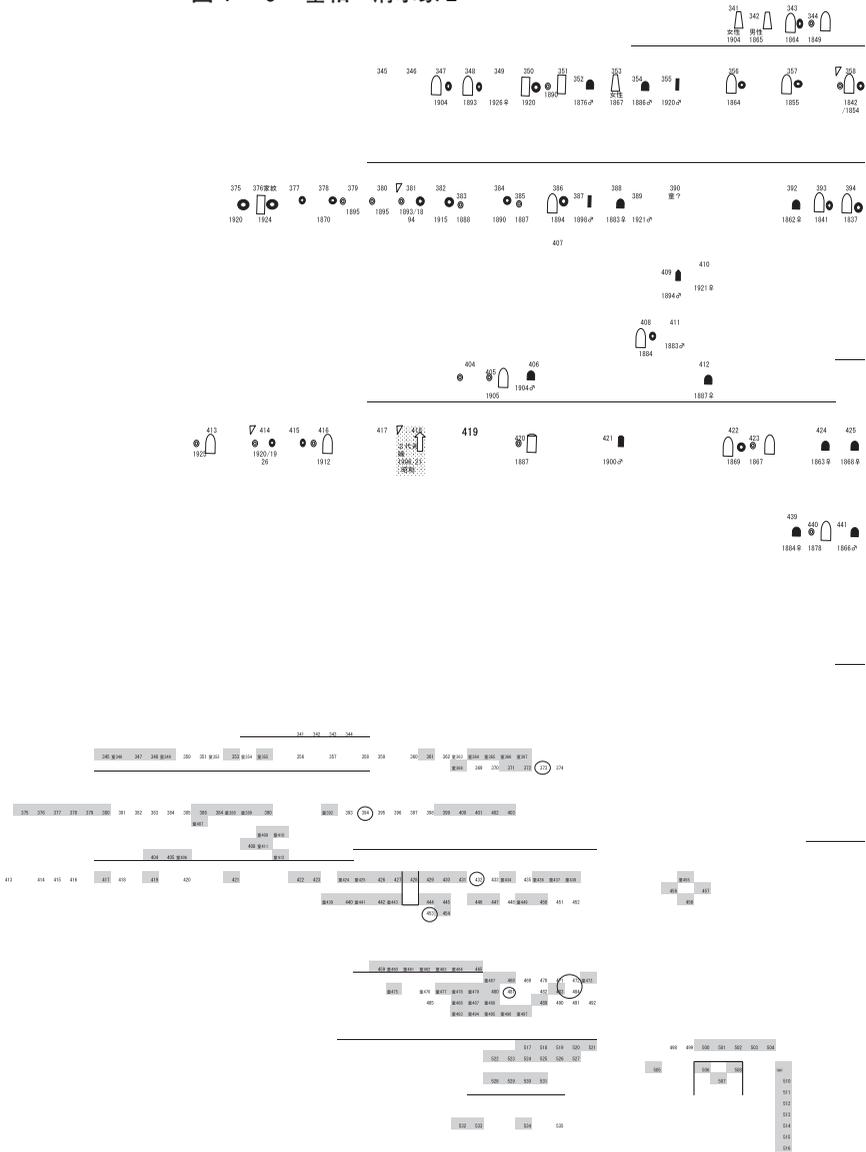
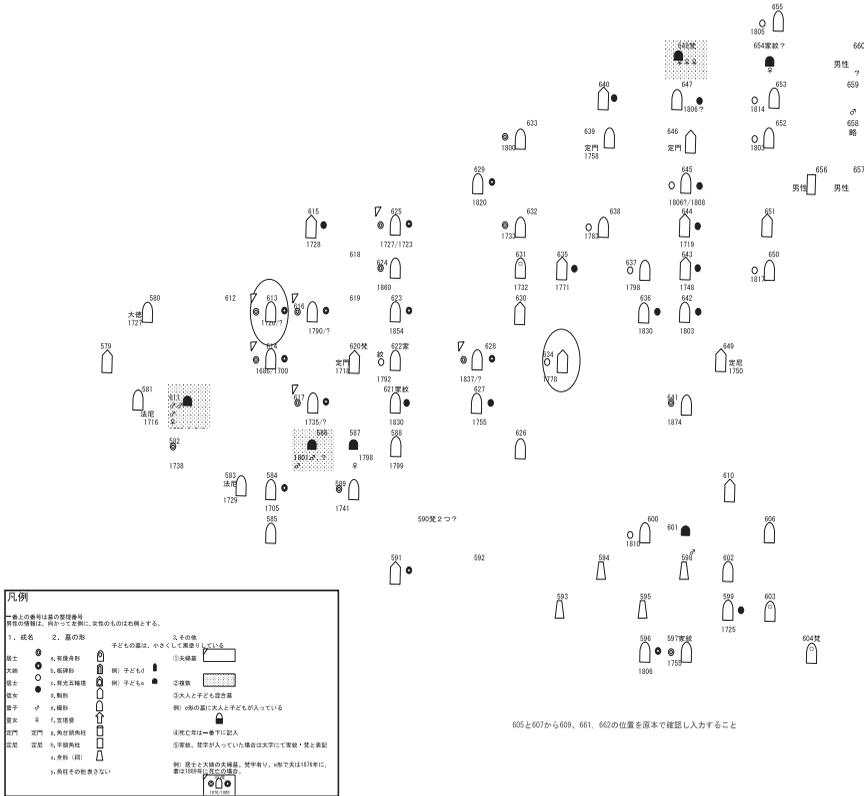


図4-7 墓相・清水家3



後の時代の建造も多いものとする。それは、18世紀後半、蚕種業が本村で本格化し、挙村といってよい状態で発達する中、清水マケでもこの時期において系統の家祖が、信士2件を含む4件、墓を遺しているからである。第5系統(家系図5-1 銀右衛門：1771年、433番)は居士だが、第6系統(家系図6-1 四郎左衛門：1757年、454番)は不明、第16系統(家系図16-1 玄ゆう：享年56歳、1783年、638番)および第18系統(家系図18-1 助弥：1778年、634番)は信士としている。この18世紀後半は、清水家では47件で、居士が15件、信士が5件である。また、女性の方で言えば、大姉が5件、信女が6件なのである。

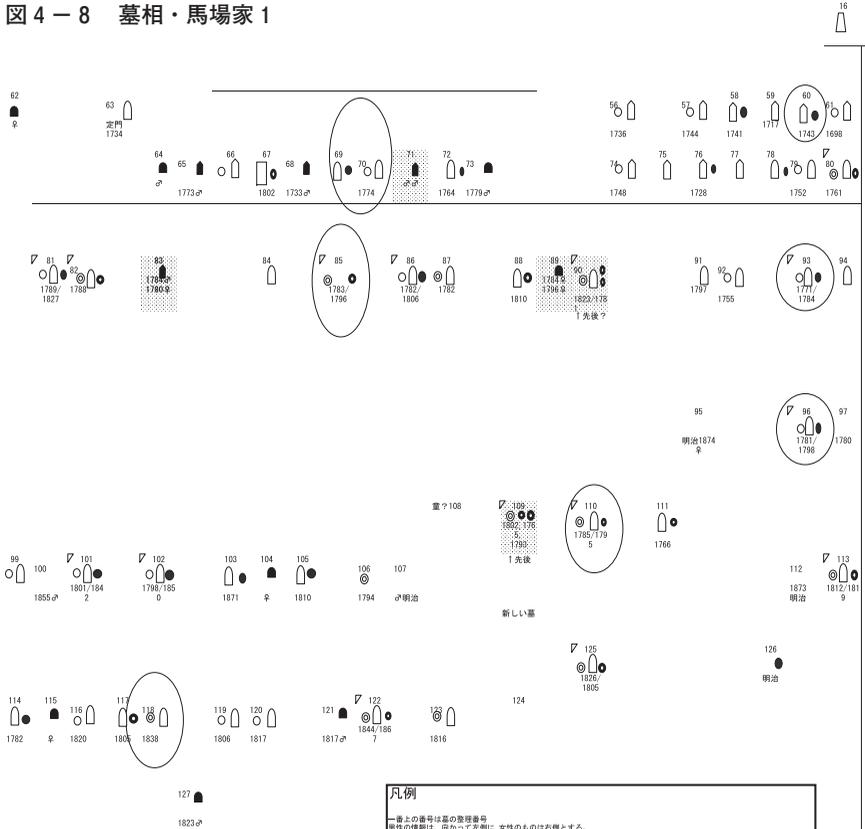


19世紀に入るとどうなるか。1801年から1850年までの期間に、清水家では45件を算える。佐藤家の後を追いつき、そして山崎家の場合と同様に、石塔の形式では古式の駒形はほとんど無くなり、楕形になる。だが、信士は山崎家ほどではないが、依然として残り、それらは全て貫高が無高である。他方、居士14件でも貫高がわかるのは8件である。この8件の貫高の平均は1.86貫であり、居士の戒名をつけるのに適した経済的余裕を感じさせる。もっとも第8系統の2代(家系図8-20十兵衛:1842年、359番)は、享年が79歳と高齢であり、その貫高は隠居分なのか、0.036貫である。夫婦墓として遺している。

【馬場家】(図4-8~図4-10)

馬場家墓群は、他のマケとは異なり、弥勒堂にはなく、東福寺斜面にある。その発生がいつからなのかは不詳であるが、らんとう形の墓石は家祖のもの

図4-8 墓相・馬場家1



凡例

一番上の番号は墓の整理番号
 性別の情報は、向かって左側に、女性のものは右側とする。

1. 氏名	2. 墓の形	3. その他
武士	◎ a. 有徳身形	① 夫婦墓
大納	○ b. 総両形	② 塚
権士	○ c. 背背玉輪塔	③ 大人と子ども混合墓
徳文	○ d. 輪形	④ 別の墓に大人と子どもが入っている
僧子	◎ e. 楕形	⑤ 家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
僧女	◎ f. 笠形	⑥ 家紋は一番下に記入
定門	g. 角柱頭身柱	⑦ 家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
定祀	h. 平頭身柱	⑧ 家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
	x. 角柱(楕)	
	y. 角柱その他表さない	

子どもの墓は、小さくして集めて示している

例) 武士と大納の夫婦墓。梵字有り。e形で奥は1076年に、妻は1079年に没したと推定。

して、4基、墓列中央の奥まった場所に据えてある(図4-8)。

17世紀以前のものは、3基であり、単独で駒形という古風を踏襲するものである。これら3基で読める碑文は限られており、年代がわかる他、戒名もわか

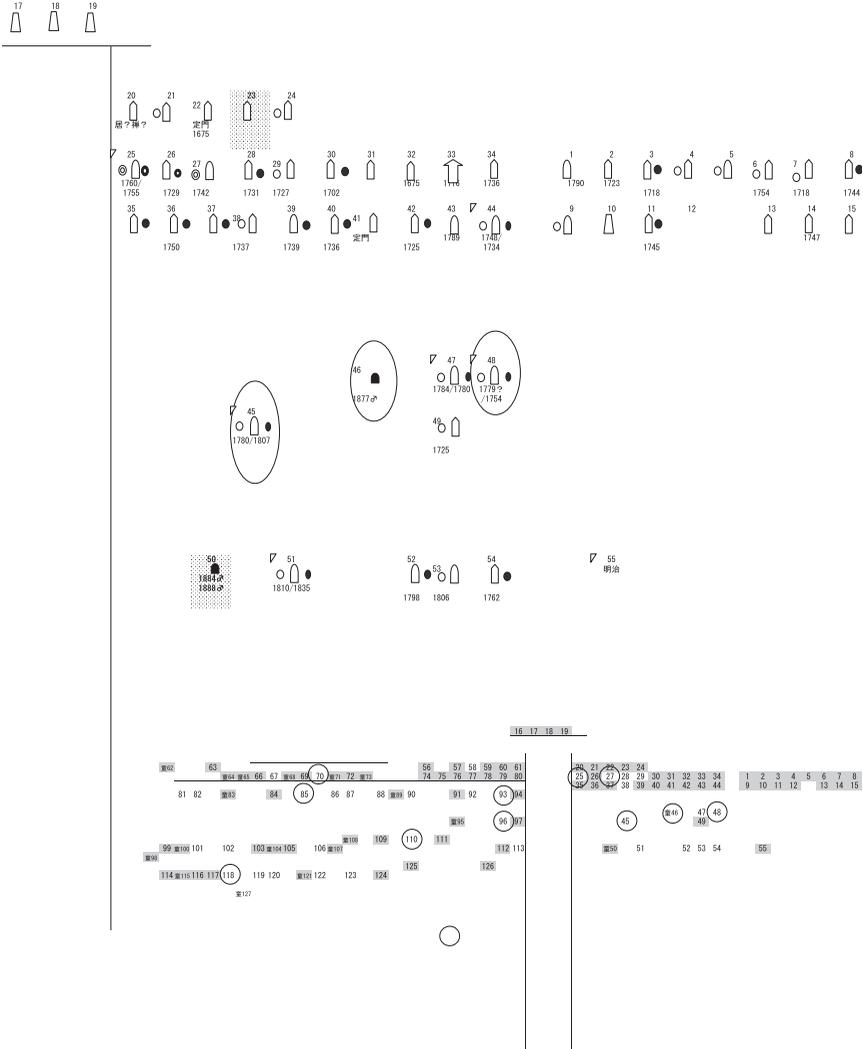
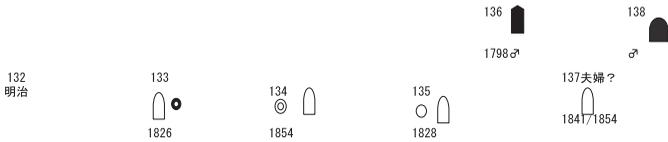


図4-9 墓相・馬場家2



凡例

一番上の番号は墓の整理番号
 男性の情報は、向かって左側に、女性のものは右側とする。

1. 戒名	2. 墓の形	3. その他
居士 ○	a. 有像舟形	① 夫婦墓
大師 ○	b. 板碑形	例) 子どもの墓は、小さくして黒塗りしている
僧士 ●	c. 背光五輪塔	例) 子ども ●
僧女 ●	d. 駒形	② 横敷
童子 ♂	e. 櫛形	③ 大人と子ども混合墓
童女 ♀	f. 笠形	例) a形の墓に大人と子どもが入っている
定門 卍	g. 角台頭角柱	④ 死に年は一律下に記入
定花 卍	h. 平頭角柱	⑤ 家紋、梵字が入っていた場合は文字にて家紋・梵と表記
	x. 舟形 (横)	例) 居士と大師の手練墓。梵字有り。a形で夫は1876年に、妻は1889年に薨じた場合。
	y. 角柱その他表さない	⑥ 死年

童128 童129 童130 童131

132

133

134

135

童136

137

童138

139

るのは、2基のみである。信士が1墓(61番)、元禄11(1698)年のものであり、もう1基は定門という珍しい戒名で延宝3(1675)年とある(22番)。

独自の墓域であるために、佐藤家を含め、他のマケの動向を追随せず古風を遺す、という特徴がある。1701年から1750年の時期で馬場家の墓石は33基をかぞえるが、櫛形は3基のみで、他は駒形である。弥勒堂・東川原の墓群では櫛

形が18世紀の始めでも主流となりつつあるのだが。18世紀前半の段階では、楕形が現れるのは、享保19（1734）年以降である。戒名は定門とある（63番）。その5年後にある信女の墓石が楕形である（1739年、39番）。そして、第2系統の家祖（儀右衛門）が居士として楕形の構えで石塔を遺すのが寛保3（1743）年であった（家系図2-1 儀右衛門、0.352貫、27番）そして、この儀右衛門が、残存する石塔で見える限りにおいて馬場家で最初の居士なのであった。それまでは信士、ないし定門が通常だった。女性もしたがってほぼおしなべて信女であった。なお、この時期の童子墓で年代の特定できるのは享保18（1733）年のもの1基にとどまる。

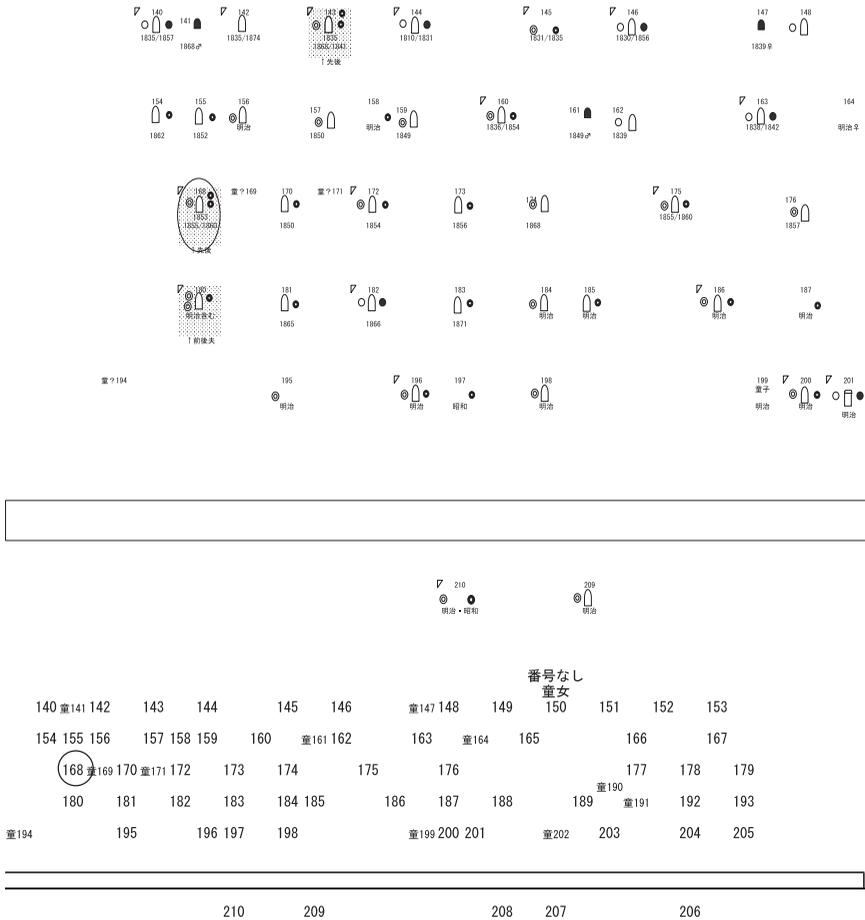
18世紀後半は、古色の強かった馬場家が刷新するという印象を受ける。1751年から1800年までの時期で42件をかぞえる。まず、各系統の家祖が7件、石塔を建てている。第5系統（家系図5-1 猪右衛門：1760年、1.431貫、25番）、第7系統（家系図7-1 忠兵衛：1774年、70番）、第8系統（家系図8-1 弥五左衛門、享年56歳、1785年、1.748貫、110番）、第9系統（家系図9-1 藤右衛門、享年76歳、1783年、1.748貫、85番）、第13系統（家系図13-1 藤四郎、1781年、0.155貫、96番）、第14系統（家系図14-1 太右衛門、1771年、1.114貫、93番）、第16系統（家系図16-1 市郎兵衛、1780年、1.114貫、45番）である。これらはすべて「モダン」な夫婦墓で、ほとんどが楕形である。蚕種経営による経済力の向上を感じさせる。この東福寺裏という場所に、これらの家祖の墓石が集中しているのは、洪水後の元宿の再開発とともに、その墓所を冠水の恐れのない場所に置きたいという一族の意志の表れと推察している。

戒名では居士と信士が混在し、系統の古い家祖は居士、新しい家祖は信士をつけている。これは、貫高とも比例するだろうが、「分」に沿った戒名づけがなされていたものと思われる。

18世紀前半では童子墓は1基のみ見つかっているが、後半には少し増えて5基になっている。

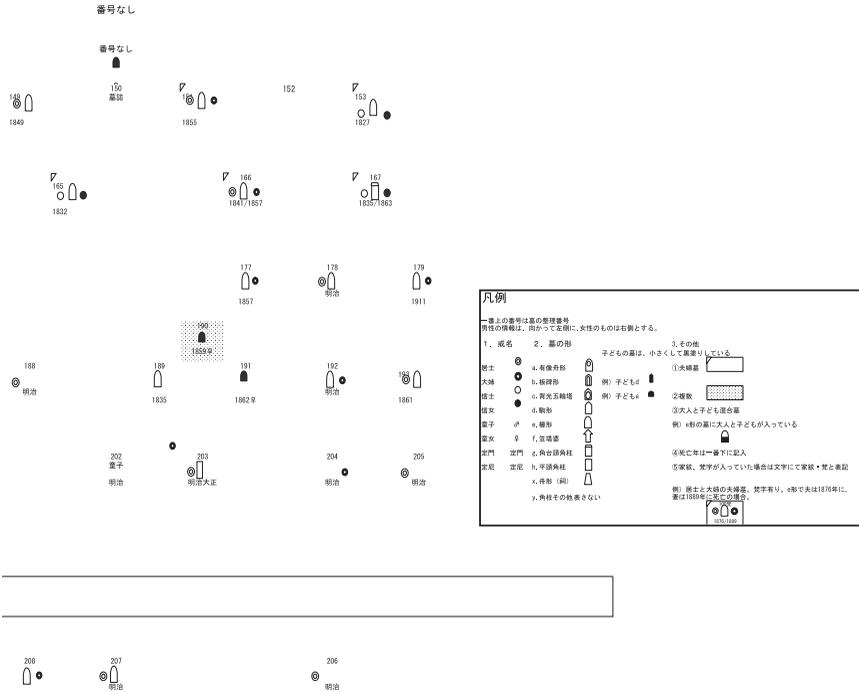
19世紀後半には、さすがに駒形石塔は馬場家でも見えなくなる。それでも、まだ信士・信女も多く残るのは、やはり馬場家の古風を感じさせる。

図4-10 墓相・馬場家3



【原家】(図4-11)

原家は、18世紀中葉の宝暦期から19世紀初めの文化期にかけての比較的短期間に分家を輩出し、蚕種業で産をなした。墓相ではそれはどのように現れるだろうか。17世紀の段階では、原家は西原姓を名乗っている。信士の戒名のつい



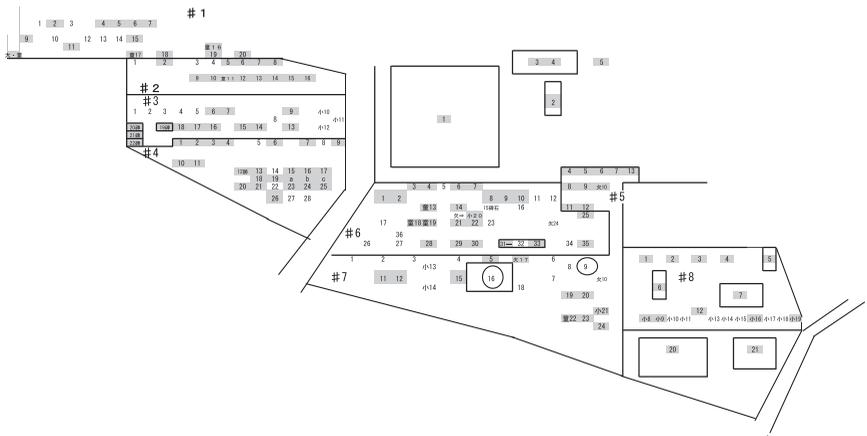
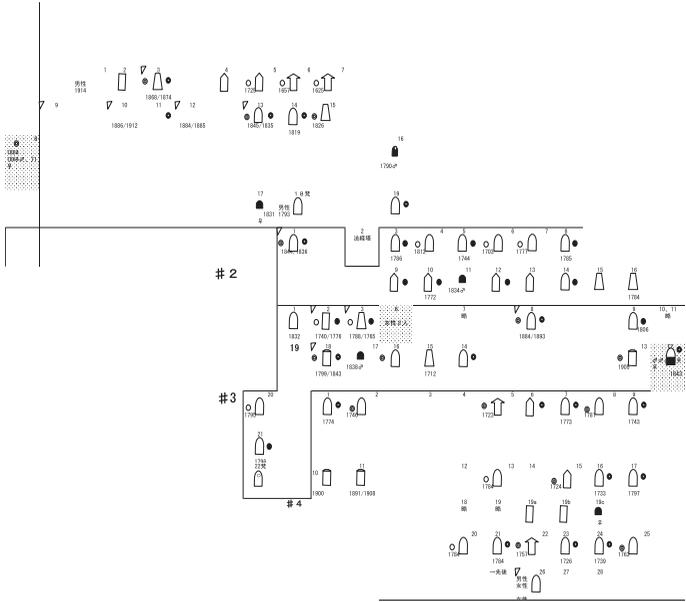
た墓石を早い時期である寛永2（1625）年のもの（1*7番）と、やはりもう1つの信士墓石である（1*6番）。18世紀の前半は、蚕種業への従事も本格化していなかったためか、18件にとどまる。総本家2代の石塔もこの期間の享保8（1723）年である。笠塔婆形式、戒名は居士をつけている（家系図1-2 興左衛門：1723年、「浄譽道清居士」、4*5番）。

18世紀後半は文字通り倍増し、35件となる。ただし、新たにできた分家はこの時期にはまだ壮健であり、墓石を遺すのは、比較的古い系統の2代などである。

19世紀前半の時期には43件をかぞえるが、その中で童子が11件で4分の1と高い割合を示すのが印象的である。

图 4-11 墓相·原家

1



凡例

一帯上の番号は墓の管理番号
男性の情報に、例が違って差額に、女性のものは右側とする。

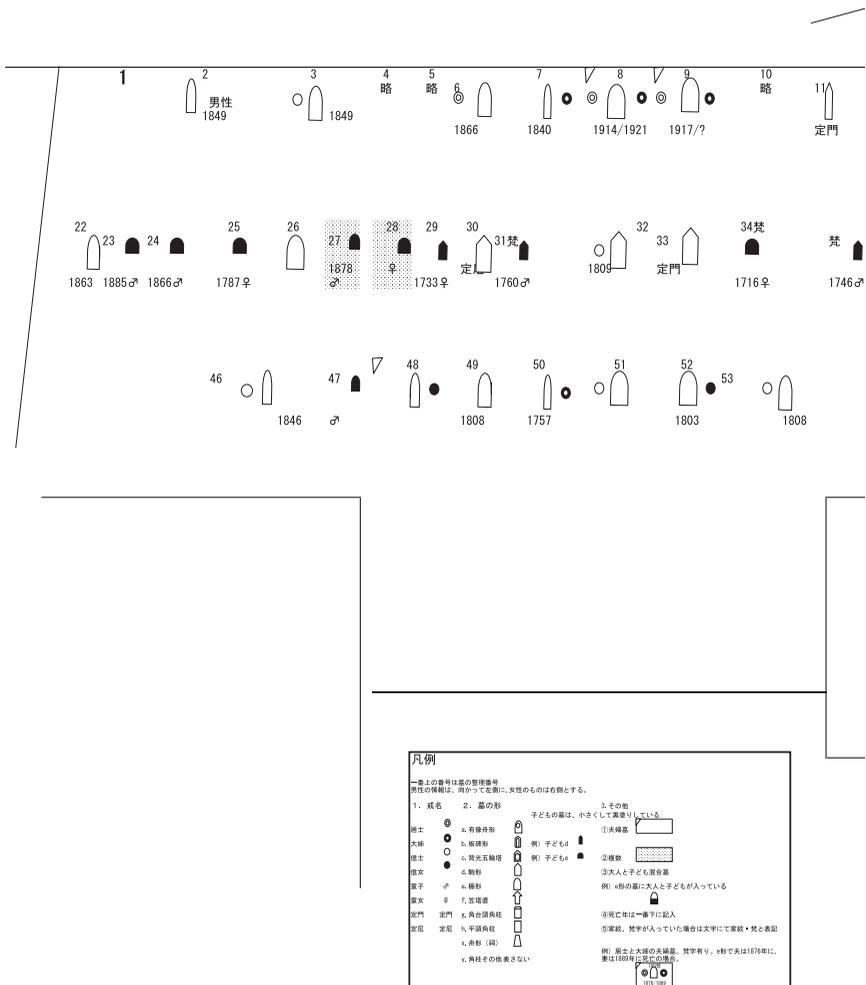
1. 氏名 2. 墓の形 3. 石塔の
子どもの墓は、小さくして書き加えている

男土	●	a. 有縁石形	例) 子どもd	①夫婦墓	例) aの墓に大人と子どもが入っている
夫婦	○	b. 板碑形	例) 子どもa	②親族	例) aの墓に大人と子どもが入っている
男土	○	c. 背法五輪塔	例) 子どもa	③大人と子ども混合墓	例) aの墓に大人と子どもが入っている
女土	●	d. 輪形			
童子	○	e. 櫛形			
墓次	○	f. 笠形塔			
塔門	○	g. 背法五輪塔			
知店	○	h. 笠形塔			
	○	i. 舟形 (横)			
	○	j. 舟形 (縦)			
	○	k. 舟形 (横)			
	○	l. 舟形 (縦)			
	○	m. 舟形 (横)			
	○	n. 舟形 (縦)			
	○	o. 舟形 (横)			
	○	p. 舟形 (縦)			
	○	q. 舟形 (横)			
	○	r. 舟形 (縦)			
	○	s. 舟形 (横)			
	○	t. 舟形 (縦)			
	○	u. 舟形 (横)			
	○	v. 舟形 (縦)			
	○	w. 舟形 (横)			
	○	x. 舟形 (縦)			
	○	y. 舟形 (横)			
	○	z. 舟形 (縦)			
	○	aa. 舟形 (横)			
	○	ab. 舟形 (縦)			
	○	ac. 舟形 (横)			
	○	ad. 舟形 (縦)			
	○	ae. 舟形 (横)			
	○	af. 舟形 (縦)			
	○	ag. 舟形 (横)			
	○	ah. 舟形 (縦)			
	○	ai. 舟形 (横)			
	○	aj. 舟形 (縦)			
	○	ak. 舟形 (横)			
	○	al. 舟形 (縦)			
	○	am. 舟形 (横)			
	○	an. 舟形 (縦)			
	○	ao. 舟形 (横)			
	○	ap. 舟形 (縦)			
	○	aq. 舟形 (横)			
	○	ar. 舟形 (縦)			
	○	as. 舟形 (横)			
	○	at. 舟形 (縦)			
	○	au. 舟形 (横)			
	○	av. 舟形 (縦)			
	○	aw. 舟形 (横)			
	○	ax. 舟形 (縦)			
	○	ay. 舟形 (横)			
	○	az. 舟形 (縦)			
	○	ba. 舟形 (横)			
	○	bb. 舟形 (縦)			
	○	bc. 舟形 (横)			
	○	bd. 舟形 (縦)			
	○	be. 舟形 (横)			
	○	bf. 舟形 (縦)			
	○	bg. 舟形 (横)			
	○	bh. 舟形 (縦)			
	○	bi. 舟形 (横)			
	○	bj. 舟形 (縦)			
	○	bk. 舟形 (横)			
	○	bl. 舟形 (縦)			
	○	bm. 舟形 (横)			
	○	bn. 舟形 (縦)			
	○	bo. 舟形 (横)			
	○	bp. 舟形 (縦)			
	○	bq. 舟形 (横)			
	○	br. 舟形 (縦)			
	○	bs. 舟形 (横)			
	○	bt. 舟形 (縦)			
	○	bu. 舟形 (横)			
	○	bv. 舟形 (縦)			
	○	bw. 舟形 (横)			
	○	bx. 舟形 (縦)			
	○	by. 舟形 (横)			
	○	bz. 舟形 (縦)			
	○	ca. 舟形 (横)			
	○	cb. 舟形 (縦)			
	○	cc. 舟形 (横)			
	○	cd. 舟形 (縦)			
	○	ce. 舟形 (横)			
	○	cf. 舟形 (縦)			
	○	cg. 舟形 (横)			
	○	ch. 舟形 (縦)			
	○	ci. 舟形 (横)			
	○	cj. 舟形 (縦)			
	○	ck. 舟形 (横)			
	○	cl. 舟形 (縦)			
	○	cm. 舟形 (横)			
	○	cn. 舟形 (縦)			
	○	co. 舟形 (横)			
	○	cp. 舟形 (縦)			
	○	cq. 舟形 (横)			
	○	cr. 舟形 (縦)			
	○	cs. 舟形 (横)			
	○	ct. 舟形 (縦)			
	○	cu. 舟形 (横)			
	○	cv. 舟形 (縦)			
	○	cw. 舟形 (横)			
	○	cx. 舟形 (縦)			
	○	cy. 舟形 (横)			
	○	cz. 舟形 (縦)			
	○	da. 舟形 (横)			
	○	db. 舟形 (縦)			
	○	dc. 舟形 (横)			
	○	dd. 舟形 (縦)			
	○	de. 舟形 (横)			
	○	df. 舟形 (縦)			
	○	dg. 舟形 (横)			
	○	dh. 舟形 (縦)			
	○	di. 舟形 (横)			
	○	dj. 舟形 (縦)			
	○	dk. 舟形 (横)			
	○	dl. 舟形 (縦)			
	○	dm. 舟形 (横)			
	○	dn. 舟形 (縦)			
	○	do. 舟形 (横)			
	○	dp. 舟形 (縦)			
	○	dq. 舟形 (横)			
	○	dr. 舟形 (縦)			
	○	ds. 舟形 (横)			
	○	dt. 舟形 (縦)			
	○	du. 舟形 (横)			
	○	dv. 舟形 (縦)			
	○	dw. 舟形 (横)			
	○	dx. 舟形 (縦)			
	○	dy. 舟形 (横)			
	○	dz. 舟形 (縦)			
	○	ea. 舟形 (横)			
	○	eb. 舟形 (縦)			
	○	ec. 舟形 (横)			
	○	ed. 舟形 (縦)			
	○	ee. 舟形 (横)			
	○	ef. 舟形 (縦)			
	○	eg. 舟形 (横)			
	○	eh. 舟形 (縦)			
	○	ei. 舟形 (横)			
	○	ej. 舟形 (縦)			
	○	ek. 舟形 (横)			
	○	el. 舟形 (縦)			
	○	em. 舟形 (横)			
	○	en. 舟形 (縦)			
	○	eo. 舟形 (横)			
	○	ep. 舟形 (縦)			
	○	eq. 舟形 (横)			
	○	er. 舟形 (縦)			
	○	es. 舟形 (横)			
	○	et. 舟形 (縦)			
	○	eu. 舟形 (横)			
	○	ev. 舟形 (縦)			
	○	ew. 舟形 (横)			
	○	ex. 舟形 (縦)			
	○	ey. 舟形 (横)			
	○	ez. 舟形 (縦)			
	○	fa. 舟形 (横)			
	○	fb. 舟形 (縦)			
	○	fc. 舟形 (横)			
	○	fd. 舟形 (縦)			
	○	fe. 舟形 (横)			
	○	ff. 舟形 (縦)			
	○	fg. 舟形 (横)			
	○	fh. 舟形 (縦)			
	○	fi. 舟形 (横)			
	○	fj. 舟形 (縦)			
	○	fk. 舟形 (横)			
	○	fl. 舟形 (縦)			
	○	fm. 舟形 (横)			
	○	fn. 舟形 (縦)			
	○	fo. 舟形 (横)			
	○	fp. 舟形 (縦)			
	○	fq. 舟形 (横)			
	○	fr. 舟形 (縦)			
	○	fs. 舟形 (横)			
	○	ft. 舟形 (縦)			
	○	fu. 舟形 (横)			
	○	fv. 舟形 (縦)			
	○	fw. 舟形 (横)			
	○	fx. 舟形 (縦)			
	○	fy. 舟形 (横)			
	○	fz. 舟形 (縦)			
	○	ga. 舟形 (横)			
	○	gb. 舟形 (縦)			
	○	gc. 舟形 (横)			
	○	gd. 舟形 (縦)			
	○	ge. 舟形 (横)			
	○	gf. 舟形 (縦)			
	○	gg. 舟形 (横)			
	○	gh. 舟形 (縦)			
	○	gi. 舟形 (横)			
	○	gj. 舟形 (縦)			
	○	gk. 舟形 (横)			
	○	gl. 舟形 (縦)			
	○	gm. 舟形 (横)			
	○	gn. 舟形 (縦)			
	○	go. 舟形 (横)			
	○	gp. 舟形 (縦)			
	○	gq. 舟形 (横)			
	○	gr. 舟形 (縦)			
	○	gs. 舟形 (横)			
	○	gt. 舟形 (縦)			
	○	gu. 舟形 (横)			
	○	gv. 舟形 (縦)			
	○	gw. 舟形 (横)			
	○	gx. 舟形 (縦)			
	○	gy. 舟形 (横)			
	○	gz. 舟形 (縦)			
	○	ha. 舟形 (横)			
	○	hb. 舟形 (縦)			
	○	hc. 舟形 (横)			
	○	hd. 舟形 (縦)			
	○	he. 舟形 (横)			
	○	hf. 舟形 (縦)			
	○	hg. 舟形 (横)			
	○	hh. 舟形 (縦)			
	○	hi. 舟形 (横)			
	○	hj. 舟形 (縦)			
	○	hk. 舟形 (横)			
	○	hl. 舟形 (縦)			
	○	hm. 舟形 (横)			
	○	hn. 舟形 (縦)			
	○	ho. 舟形 (横)			
	○	hp. 舟形 (縦)			
	○	hq. 舟形 (横)			
	○	hr. 舟形 (縦)			
	○	hs. 舟形 (横)			
	○	ht. 舟形 (縦)			
	○	hu. 舟形 (横)			
	○	hv. 舟形 (縦)			
	○	hw. 舟形 (横)			
	○	hx. 舟形 (縦)			
	○	hy. 舟形 (横)			
	○	hz. 舟形 (縦)			
	○	ia. 舟形 (横)			
	○	ib. 舟形 (縦)			
	○	ic. 舟形 (横)			
	○	id. 舟形 (縦)			
	○	ie. 舟形 (横)			
	○	if. 舟形 (縦)			
	○	ig. 舟形 (横)			
	○	ih. 舟形 (縦)			
	○	ii. 舟形 (横)			
	○	ij. 舟形 (縦)			
	○	ik. 舟形 (横)			
	○	il. 舟形 (縦)			
	○	im. 舟形 (横)			
	○	in. 舟形 (縦)			
	○	io. 舟形 (横)			
	○	ip. 舟形 (縦)			
	○	iq. 舟形 (横)			
	○	ir. 舟形 (縦)			
	○	is. 舟形 (横)			
	○	it. 舟形 (縦)			
	○	iu. 舟形 (横)			
	○	iv. 舟形 (縦)			
	○	iu. 舟形 (横)			
	○	iv			

【春原家】（図4-12～図4-14）

春原マケは、上記の同族のように、そもそもマケとしてよいのかどうか、定かでない。その最大の原因は、共通の祖先が確認できていないことにある。し

図4-12 墓相・春原家1（東川原）



かし、春原という名字であらやにまとまり、他の村民からは区別されているのである。墓群もまず弥勒堂に隣接する東川原（図4-12）と、大河原が最も大きく（図4-13および図4-14）、さらにあらやから元宿に向かう途中にある

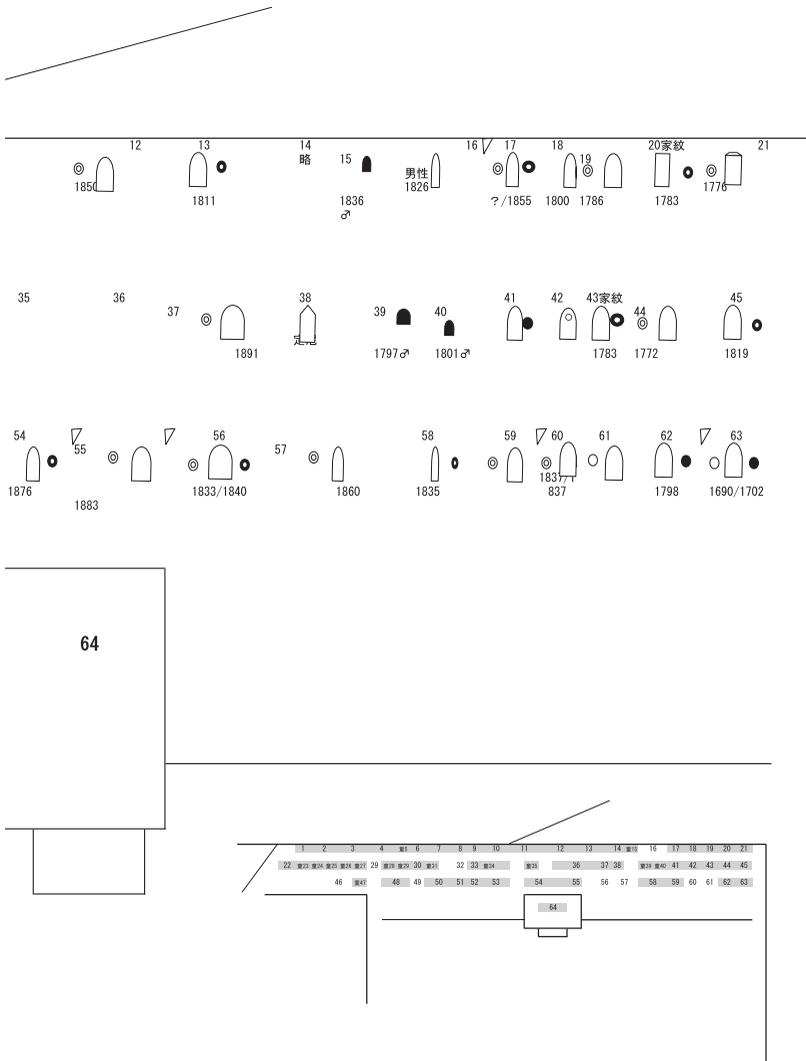
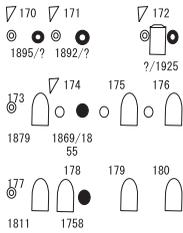


図4-14 墓相・春原家3 (大河原)



197

197から202までは墓石の位置が不明



198

a

b c d h

e f g

199

200

201
童?

202
童?



凡例

一層上の番号は墓の整理番号
男性の情報は、向かって左側に、女性のものは右側とする。

1. 姓名 2. 墓の形 子どもの墓は、小さくして書かれている

博士	◎ a. 有急身形	④ 子どもの墓は、小さくして書かれている	① 夫婦墓
大徳	○ b. 経路形	例) 子ども	② 夫婦墓
博士	○ c. 有光五輪塔	例) 子ども	③ 次入と子ども墓合墓
博士	● d. 輪形	例) 子ども	④ 移の墓に次入と子どもが入っている
童子	○ e. 輪形		
加加	▽ f. 笠形		
北門	△ g. 有急身形		
北門	▽ h. 有急身形		
花形	▽ i. 有急身形		
	▽ j. 向柱その他書きない		

⑤ その他
⑥ 夫婦墓
⑦ 次入と子ども墓合墓
⑧ 移の墓に次入と子どもが入っている
⑨ 有急身形は一層目に記入
⑩ 笠形、笠形が入っていない場合は文字にて笠形・笠も書記
例) 階上と大徳の夫婦墓、契字有り。4階で表は1879年に、裏は1879年に契字の墓。

④ 1879

空左衛門系統の中規模墓群になる。

東川原で墓石を遺す第3系統の五左衛門および第4系統の市右衛門家は、当村での蚕種業の発展とともに蚕種商人を出しており住居に引き続き墓所も東川原になったものと思われる。ここでの最古の石塔は、楕形の夫婦墓で夫が元禄3（1690）年没で信士、妻が元禄15（1702）年没の信女である。18世紀前半のものとして確認できるのは、童子墓が3基あるだけである。18世紀後半に11件の墓石をかぞえ、居士も見えてくるが、全体として、特定ができなため、家系筋もつかめない。19世紀前半になると上記第3系統や第4系統の者として特定できるのだが、2代目以降の者のみであるため、それらの先代ということになる。

大河原（空左衛門系統の墓所も含む）（図4-13および図4-14）では、17世紀の墓石も確認できる。最も、信士ではあるが、寛永7（1630）年のものも含め、楕形で実際の墓石を刻んだのはずっと後世ではないかと思われる。しかし元禄10（1697）年春原佐次兵衛・居士およびその妻元禄12（1699）年・大姉の夫婦墓・楕形となると家系は特定できないが、同時代の刻印である可能性も出てくる。

18世紀前半は、河原沿いということもあり劣化が著しく、年代を特定できるのは11件のみであり、家系まではわからない。居士も上の流れからか、入ってきている。18世紀後半の墓石の状況は、標準的で、駒形はほとんど姿を消し、楕形がほとんどを占める。夫婦墓も散見できるのも同様である。また、第6系統の家祖五郎三の墓石も居士のものとして確認できる（家系図6-1五郎三五郎兵衛：1799年、1.23貫、34番）。春原の家系図の系統がもともと分かれているために、個別の家祖として見ていく他なく、家流の数が多い。19世紀に入って、102歳という、記録的な寿命で没した佐次右衛門系統喜八（家系図佐次右衛門喜八1佐次右衛門喜八、享年102歳、1816年、1.173貫、69番）、また、あらやと元宿の間の善兵衛空左衛門空左衛門系統の家祖の墓を確認する（家系図善兵衛空左衛門空左衛門1空左衛門：1799年、享年68歳、3.649貫、218番）。

むすびにかえて

少なくとも上塩尻村の墓相・墓石のあり方は、18世紀に家業である蚕種業の発展と共に、同族が家連合として本家・分家の系譜と共に生成され、「家」が登場するようになり、家産を用いて同族毎の墓地がつくられ、墓石に家名が残されたものなのである。したがって、その同族と家の隆盛を極めた時点で標準であった墓石の形式、楕形が本村の墓石の主流形態となり、ごく近年まで残るのも、驚くにはいたらない。むしろ、「云々家」の墓というような家墓が意識的に建造されることからしても、そうした往事の隆盛をしのぶ、という心持ちの反映とも推察できるのである。

上塩尻村のように史料が豊富に残存し、また極めてわかりやすい形で同族毎に墓石がまとまって観察できる、という恵まれた研究対象が、今後他の土地でいかほど見つかるのか。期待する他ないが、少なくとも、墓相の研究には、ここで用いた経済的または社会的な要素を含めた検討が要求されることになるのである。

結 論

本書では、共同墓地および墓相について、英国はケンブリッジ州ウィリンガム教区、日本では旧上田藩上塩尻村を対象に対比研究を試みた。まず、共通点としては、墓石が一般農民レベルで現在まで残るのは16世紀、あるいは17世紀以降になるということである。それ以前には、英国では木で作った十字架であったし、日本でも土饅頭、そして木製の卒塔婆というように、やがては朽ち果てる材料でつくってあったからである。そして、原則として土葬である点でも共通していることは言うまでもない。これら墓石・石塔に関する共通項は、墓地の流動性の高さというもう1つの共通点を導き出すのである。これらのことを考え合わせれば、日英双方で、当該分野で時系列的にその変化をたどった研究をほとんど見出せないでいるのも自然なことのようにも思える。地域史、なかんずくモノグラフレベルでの研究であっても墓地・墓石についての系統だった分析が行われたものは僅少であるが、他方、家系図・教区登録簿あるいは宗門改帳といった長期間にわたる個人・家族情報がなければこうした墓地・墓石の分析も直ちに不明の壁にぶつかるのである。

比較的情報が入手できる日本の上塩尻村について、前提として旧上田藩領内での共同墓地の態様を観察したところ、領内における50程度の村に限っても概ね5つの型に分かれ、当村もその1つに過ぎないことがわかった。したがって、共同墓地のあり方の多様さについては常に念頭に置かねばならない。他方、インターネット時代の世界的な趨勢であるが、共同墓地は近年猛烈な速度で変容・消滅・造成を経験している。したがって、今後、過去からの時系列的変化を系統立ててたどる悉皆調査を広範囲でおこなうことはますます困難になる。少しでもデータを記録しておきたい。

共同墓地の多様性はそのようにして念頭に置きながらも、上田藩領においては、まさにこの上塩尻村を中心に発展した蚕種業および養蚕業の展開がもたらした経済条件の向上により、共同墓地の維持・造成および墓石・石塔の造営が

促進されたことを見出しうる。とくに、上塩尻村においては、村全体の家々の家系図と、18世紀中葉の宗門改帳および蚕種商人鑑札（御注進帳）などを照合すると、本家・分家の系譜からなる同族と「家」の生成過程が、同族毎の墓群の形成および墓石の配置にも反映されていることが確認できた。上塩尻村の墓群・墓相は蚕種が形成したものだったのである。その点で、英国のケンブリッジ州ウィリングム教区共同墓地における墓群や墓石の配置では、同姓によるまとまりは一定程度観察できたが、上塩尻村のような同族ないし家連合による結びつきは見だし得なかった。ウィリングムで16世紀以降18世紀までの基幹産業は酪農業であったが、その過程では、現在に残存する墓群・墓石の造成は見られなかったのである。この点は相違点と言える。

他方、ウィリングム教区共同墓地では、同姓であっても聖別・非聖別は混在し、墓石もまた混交している。この点で、宗派の区別が必ずしも厳密でなく入り交じる上塩尻村の墓相と相似するものと言える。

葬送・埋葬のための組織の存在は双方に確認できているが、実際にどうであったのか、ほとんど記録がない、という点でも日英は共通する。しいていえば、気候の違いもあり、より湿潤温暖で埋葬に「待ったなし」の状況となる可能性の高い日本の上塩尻では、同族を2つに割って形成される「まるめ」墓掘り仲間を近世期から史料上に確認できている。果たして16世紀の宗教改革による修道院解散で教区宗教ギルドの廃止処分を受けた後、ウィリングム教区教会役人などの組織がどのような働きをしたのか。これも今回提示したような、単一の community ではなく、重層をなす communities としてとらえることで、実態がより明らかになるものと予期している。

付録表 上塩尻村近世期石塔データ

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
図3-2										
図4-1										
35	佐藤									
35	佐藤		信女		1765			e	単独	
37	佐藤									
38	佐藤	家系図C-5	信士	46				e	単独	
39	佐藤		居 大	69	1926			e	夫婦	
40	佐藤		大	22	1885			y	単独	
41	佐藤		居	61	1916			y	単独	
42	佐藤	家系図21-2	居	52	1876	1878		e	夫婦	
		家系図21-2	大	48	1878					
43	佐藤				1870	1884		e		
44	佐藤	家系図21-3	居	41	1901			g	単独	
45	佐藤	家系図21-4		28	1894			g	単独	
46	佐藤			1						童
47	佐藤			1	1902			e		童
48	佐藤		居 大	72	1916			y		
49	佐藤		居 童子 童女	4 3		1880		e	家族	童・大人
50	佐藤								家	
51	佐藤	家系図1-18	大	75	1922			e	単独	
52	佐藤	家系図1-18	居	56	1905			e	単独	
53	佐藤	家系図C-7	居	46	1865			d	夫婦	
			大	80	1896					
54	佐藤	家系図C-8	居	80	1912			e	単独	
55	佐藤		信女		1870			d		
56	佐藤		居							
57	佐藤	家系図12-4	居 大			1868	1876	e	夫婦	
58	佐藤	家系図12-5	居		1909	1918		e	夫婦	
		家系図12-5	大		1918					
59	佐藤								家	
60	佐藤								家	
61	佐藤				1873			e	単独	
62	佐藤				1888			e	単独	童
63	佐藤	家系図2-10	童子		1856			e	複数	童
		家系図2-10	童子		1856					

正面	左側面	右側面	背面
？酉年雪光妙暗信女十月二十七日 ？			
耕月智滴信士	寛政(十一?)己未年	九月二十日？佐藤新七	
孤峯悠亀居士 梅澤淨貞大姉	昭和十四年二月二十八日 省略行年 六十九歳	大正十五年十月二十二日 ？	
鑑相自照大師之墓	明治十八年七月六日死行年二十二 年		佐藤愛良妻伊藤氏女
淨心尚□居士之墓			佐藤強？大正五？歿行年六十一歳
禪戒大真超道居士 禪戒法準知孝大姉	明治十一年 省略 佐藤治郎兵衛謹度 享年 五十二歳	明治九年丙子九月二十日 室輪勘三郎清胤女 佐藤治郎兵衛 謹度室 享年四十三歳	
祖戒準翁二老居士 法戒輝外有照大姉	明治三庚午年四月二十八日 佐藤治郎八信益	明治十七甲申年十一月二十九日 佐藤治郎八信益妻	
禪戒□山隆光居士	明治三十四年八月二十日於横浜市 歿	佐藤信光 行年四十一	
禪戒瑞應道淳居士	明治二十七年四月十三日卒	佐藤治郎兵衛享年二十八	
佐藤方子之墓	昭和七年三月十五日	佐藤明三九長女 當才	
清黄□幽 紅雪童女	明治三十五年九月十日	七二女佐藤しづ子行年一歳	
因覺見性居士 本覺妙際大姉	大正五丙辰年 佐藤(元兵衛?)	大正五丙辰年三月三日歿 (直信?)妻？七十二歳	
識想良運居士 快道禪童子 春□禪童女		明治？年七月十七日逝 同三男佐 藤興四郎 四歳 明治十三年二月十二日逝 同二女 佐藤？三歳	
佐藤家之墓			昭和建立
凌雲院温量潤忍大姉	大正十一年二月三日逝去	善右衛門信汎妻佐藤志満	享年七十五歳
凌霜院緑□晚節居士	明治三十八年一雄勝二十二日逝 佐藤本善右衛門信汎	碑文が長いため省略 享年五十六	
忍山黙翁居士 慶応元乙丑閏五月 八日 櫻室妙忍大姉 明治二十九年八月 二十六日	佐藤？兵衛		四十六歳で亡くなっているはずだ が…？⇒
宣法景壽居士	明治四十五年五月二十三日歿	佐藤市郎兵衛 行年八十歳	
鉢玉寮觀信女	明治三年四月十三日	佐藤？娘八重子	
独住直心居士	昭和なので省略		昭和建立
直相本有居士 草室妙然大姉	明治元戊辰年十月七日歿 四世佐藤磯右衛門 寛紀 享年七十七歳	明治九丙子年十一月二十七日 三世佐藤曾左エ門女 寛紀妻 丈 行年八十二歳	
壽翁道閉居士 隨潤貞心大姉	大正七年九月九日 五世佐藤磯右衛門 有信 行年 八十？	明治四十二年五月？逝去 妻 □□子 行年七十三歳	
佐藤家之墓			昭和建立
佐藤家之墓			
明治六年四月(十九?)日 ？苗二男 佐藤勝藏墓	母 藤本氏		
佐藤□子墓	明治二十年十月十六日	佐藤(八?)郎右衛門四女	素峯明雲禪童女
静(説?)禪童子 □□禪童子		佐藤？ 佐藤辰次(郎?)	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
64	佐藤		居 大	76						
65	佐藤								家	
66	佐藤		居 大	84	1913			e	夫婦	
67	佐藤		居	18	1914			e	単独	
68	佐藤	家系図13-2	童子		1742			e	単独	童
69	佐藤	家系図4-6	童女		1805			e	単独	童
70	佐藤	家系図13-3 家系図13-3	信士 信女	54 73	1837	1862	0.913	e	夫婦	
71	佐藤	家系図12-2	信士 信女	54 76	1810 1833	1833		e	夫婦	
72	佐藤		居	28						
73	佐藤								家	
74	佐藤		居 大						夫婦	
75	佐藤		大	76					単独	
76	佐藤		居 居	47	1917			e	複数	
77	佐藤	家系図5-6	大	30	1850			e	単独	
78	佐藤	家系図5-6 家系図5-6	居 大	53	1863 1868	1868		d	夫婦	
80	佐藤								家	
81	佐藤		大 居 大						夫婦 (先・後妻)	
82	佐藤								家	
83	佐藤				1895			e	単独	
84	佐藤				1920			y	単独	
85	佐藤	家系図10-4	居 大	37 68	1835 1871		1.264	e	夫婦	
86	佐藤							y		
87	佐藤	家系図13-5	信女	13	1859			e	単独	
88	佐藤	家系図13-4 家系図13-4	居 大	75 79	1885 1887	1887		y	夫婦	
89	佐藤	家系図4-7	居	44	1883	1903		e	夫婦	
90			大	64	1903					
91	佐藤							e		
92	佐藤	家系図4-6	居	31	1857			e	単独	
93	佐藤		居	48	1909			e	単独	
94	佐藤	家系図3-7	居	15	1862		1862	e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
後瀨院公誠檀堂居士 松操院徳徳懸隣大姉	長い碑文 あまり読めないので省略	長い碑文 ほとんど省略 昭和二年三月十九日卒 享年七十六歳	長い碑文 省略
佐藤八郎右衛門家之墓 墓誌:昭和から平成まで多数			昭和建立
禪戒養泉亭文居士 禪戒養堂卓順大姉	大正二年十一月十一日逝 佐藤八郎右衛門忠教行年四十四歳	昭和十五年十月十日逝 以下省略	
禪戒恭淳□應居士	大正三年九月十三日逝	佐藤八郎右衛門 恭一 行年十八歳	
秋光童子	佐藤曾兵(衛?)	寛保二戌年八月?日	一二月一二日
毘参童女	文(化?)二乙丑年	佐藤清左エ門娘	一二月一二日
格□越源信士 心峯恵照信女	(天保?)八丁酉年 佐藤八郎兵衛	文久二壬戌(霜?)月廿五日 行年七十三歳	
紋海恵照信士 文嵩智彩信女	文化七(庚午?)年 (佐藤?)八五郎 行年五十四歳	天保四癸巳年四月七日 佐藤八五郎 妻 行年 七十六歳	
圭運成性居士	佐藤 省略行年二十八歳	昭和歿	
佐藤家之墓			昭和の建立
一翁證禪居士 繁室良光大姉	昭和二十一年のため省略	昭和十七年のため省略	碑文が長いため省略
禪戒久遠實成大姉		佐藤 省略 行年七十六歳	昭和三十三年のため省略
観泉徳清居士 安清淨穩居士	大正六年六月六日歿 佐藤徳次郎 行年四十七歳	昭和のため省略	
玉容妙顔大姉	嘉永三戊辰正月廿四日	六代孫佐藤三右エ門 邦直	行年(三?)十才 妻
文久三亥癸九月六日(四日の見聞 違ひ?) 藤道重篤居士 佐藤三右衛門邦直大姉墓	本室妙元大姉 明治元戊辰十月十三		
佐藤家之墓			昭和の建立
禪戒明信智達大姉 禪戒清美道交居士 別に碑文有り;長いので略 禪戒文林賢様大姉	明治四十一年戊申年 先妻	昭和なので省略 後妻	昭和なので省略
佐藤家之墓			昭和の建立
	明治二十八年三月十一日逝	佐藤勝助	
細川千歳之分□	大正九年二月十五日逝行年三十六	佐藤(忠?)五女 細川賢一妻	
義學高寛居士 寸道明松大姉	佐藤清左衛門 ?年三十七歳	明?一月十二日没 曲尾以良 ?年六十八歳	
?			
禪室本了信女	安政六己未十月廿一日	十三歳 佐藤鶴吉女	
祖父秀賢居士 文外明章大姉	明治十八乙酉年一月二十三日逝 佐藤鶴吉信一 行年七十五	明治二十二己丑年十一月二十一日逝 信一妻 春子 行年七十九	
賢岳良友居士	明治十六癸未年九月五日歿	明治三十六癸卯年八月廿四日没	
直室良心大姉	佐藤清左衛門信進 行年四十四歳	信進妻しやう 行年六十四歳	
無?	(安永?)佐藤清左衛門	行年(三または二?)十八歳	
春山良道居士 ?	安政四年丁巳正月三日	佐藤清吾信員 行年三十一才	
禪戒?陸静安居士	明治四十二年十一月二十二日卒	佐藤重次郎 行年四十八歳	
六圓露鏡居士		? 長い碑文読みづらい	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
95	佐藤	家系図3-6	大	31	1854	1921		e	複数 (先・次妻)	
		家系図3-6	大	86	1921					
96	佐藤	家系図11-7	居	50	1870	1893		e	夫婦	
		家系図11-7	大	74	1893					
97	佐藤	家系図11-6	居	28	1845		3.123	e	単独	
98	佐藤	家系図11-6	居	41	1854			e	単独	
99	佐藤	家系図11-5	大	45	1834			y	単独	
100	佐藤	家系図11-5	居	53	1840			e	単独	
101	佐藤	家系図2-8	居	29	1858			e	単独	
102	佐藤	家系図2-7	居	57	1857			e	夫婦	
			大	77						
103	佐藤	家系図2-6			1843 1852			e		
104	佐藤	家系図17-1			1845			e		
105	佐藤				1890			e		童
106	佐藤				1860			e		童
107	佐藤	家系図17-1			1838			e		童
108	佐藤	家系図13-5		6	1838			e		童四人
				6	1843					
				4	1843					
				1	1850					
109	佐藤			73	1916			y		
110	佐藤				1879			d		
111	佐藤	家系図4-2		28	1810			e		
112	佐藤	清左・門信義4		68	1879		1.655	e	夫婦	
				60	1869					
113	佐藤	清左・門信義3		76	1856		1.655	e		
				46	1830					
114	佐藤	清左・門信義2		84	1811		1.893	e	夫婦	
				63	1833					
115	佐藤	家系図3-7	童子	4	1862			e		童
116	佐藤	家系図3-6		60	1881		0.855	e		
117	佐藤	家系図3-5		58	1847 1857		0.855	e	夫婦	
118	佐藤	家系図11-3			1808			e		
119	佐藤	家系図11-3			1796			e		
120	佐藤	家系図11-4			1846			e		

正面	左側面	右側面	背面
寶(岳)(墓石の字は山と品が上下逆であるが同じ字である)道珠大姉 法隆長寧大姉	道珠者小林直清女也嫁佐藤重次郎 長祥 生六女一男 安政元年甲寅十二月十八日病? □ 年三十一	大正十年二月十八日 (長祥次?)妻 佐藤行年八十六歳	
實德禪參居士 郭相□然大姉	明治三庚午六月廿四日 佐藤嘉平司信周 行年五十才	明治二十六年癸巳七月七日 嘉平吉信周妻 佐藤志満子 行年七十四歳	
觀山法音居士	弘化二年乙巳七月(六日?)	佐藤? 助 ? 墓 行年二十八歳也	
大峯俊雄居士	嘉永七甲寅十月四日 佐藤嘉平次信令 行年四十一		
純室貞操大姉	天保五年甲午二月十九日卒	佐藤嘉平次東枝妻	
純翁昭徳居士	天保(十一?)庚子七月十日 佐藤嘉平次東枝墓	佐藤禮助? 建	
祖翁良柏居士	安政五戊午年十二月二十六日	實小山新十郎信徴男 佐藤八郎右衛門信命 ? 歳二十九	
禪戒堅磐青苔居士 禪戒堅室苔磐大姉	安政四年丁巳十一月八日享年五十七 佐藤八郎右衛門信? 實佐藤昌信三男		
好慶良古居士 好□良玄大姉	天保十四癸卯年十一月廿九日 佐藤八郎右衛門信□ 世壽七十二歳	嘉永五年壬子十一月八日 佐藤信? 妻 世壽?	
禪岩徳誠居士	弘化二年歲次 乙巳五月十一日	佐藤安兵衛之(尋?) 世壽二十?	
俊巖雄英禪童子	明治二十三年二月十八日逝	八郎右衛門? 佐藤? 五才	
峯(岳)(墓石は山と品が上下逆だが同じ字である)了秀童女	(萬?)延元年歲次	庚申? 三月(二日?)	
□□□慧童子	天保九戊戌九月四日	?	
碧散童女 威長童子 最嚴童子 亭應童子			
朴翁良壽居士 直熈貞壽大姉	大正五年丙辰年二月十三日歿 佐藤寅平 行年七十三歳	昭和なので省略	
信汎三男 明(治?)十二年 藤本三郎墓 母 倉沢氏 三月二十二日			
無參智法信士	文化七庚午年四月十五有五日	佐藤國五郎	
體應明鏡居士 家山妙智大姉	明治十二己卯年三月二十八日歿 佐藤徳大夫運弘 行年六十八歳	明治二己巳年一月三日歿 運弘妻 貞 行年六十歳	
得源俊逸居士 輪應良機大姉	安政三年丙辰二月十二日 佐藤徳大夫信幸 行年七十六歳	文政十三年庚寅六月二十一日 佐藤? 行年四十六歳	
旬庵孟誓居士 心屋春操大姉	天保四年? 己七月十六日 行年八十四歳 佐藤安右衛門	文化八年辛未(五?)月二十五日 佐藤? 右衛門 行年六十三歳	
芳雲禪童子	長祥建	?	
禪戒松齋一湖居士	文政三年庚辰十月十五日生 明治十四年辛巳三月二十五日歿 佐藤重次郎長祥 六十年六月		
風堤惠柳居士 無学宣法大姉	弘化四年丁未歲四月六日 佐藤半弥居□		
黙應了智大姉	文化五戊辰五月廿七日	?	
玄外良雲居士	寛政八丙辰年三月六日	佐?	
山陽環翠居士 別光理傳大姉	弘化三年丙午二月十七日 佐藤嘉内信宜墓行年七十一歳也		

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
121	佐藤				1904		e		
122	佐藤				1878		e		
123	佐藤				1904		y		
124	佐藤	家系図1-16			1865		e		
125	佐藤	家系図1-15			1857		e		
126	佐藤	家系図1-16			1822		e		
127	佐藤	家系図1-13				1808	e		
128	佐藤	家系図1-13			1787		e		
129	佐藤	家系図1-12			1779		e		
130	佐藤				1774		d		
131	佐藤								
132	佐藤				1805		e		童
133	佐藤						e		童
134	佐藤				1797		e		童
135	佐藤	家系図10-4			1823		e		童
136	佐藤	家系図7-2					e		
137	佐藤								
138	佐藤				1770		d		童
139	佐藤						d		童
140	佐藤						d		
141	佐藤								
142	佐藤	家系図8-1			1730		d		
143	佐藤						e		
144	佐藤						e		童
145	佐藤						e		童
146	佐藤				1776	1778	e		童二人
147	佐藤				1751		d		童
148	佐藤						y		童
149	佐藤								
150	佐藤						e		
151	佐藤	家系図5-4			1840		e		
152	佐藤	家系図5-5			1866		d		
153	佐藤	家系図5-1			1722		d		

正面	左側面	右側面	背面
佐藤平作長女 佐藤緑子墓母木内氏	明治三十七年二月二十九日		
信汎二女 藤本礼子墓母倉澤氏	明治十一年十一月十四日		
藤本信汎三女 松田喜久子遺髪家差 母倉澤氏	明治三十七年八月十五日歿 行年二十五歳	金洞金井□恭書	
?翁?居士 禪戒逸□祖壺大姉	元治二年乙丑正月十一日 佐藤善右衛門保右	?庚午五月(二十?)十四日 佐藤善右衛門保右妻	
静室了志大姉	安政四年歳次丁巳二月二十四日	佐藤善右衛門昌信妻	
静□玄志居士	文政五年歳次壬午季春二十六…	佐藤善右衛門保右敬立	碑文?
錦織妙□大姉	長い碑文	…小泉氏重倫之女也…	
了翁玄無居士	碑文省略	…孝男佐藤和藏敬立	…天明七年?未十一月二十八日壽 六十?二
?玄詢居?	安永八年己亥正月燕城山丁…孝子 佐藤善右衛門當信立□	長い碑文なので省略	…八十六齡…
妙経塔		安永三年申年三月十六日? 佐藤八郎右衛門同 ?左衛門 ? ? 立	
?			
普仙禪童子	文化二丑年六月二十九日	佐藤?行年三才	
明和?妙香童女			
慧水童女	寛政九巳二月二十八日		
堅室幽貞禪童女	文政六癸未九月?	佐藤?	
順庵義道居士 正藏徳音居士 嵐山妙温大姉			?十六癸未年?
原□妙温大姉	昭和に歿		昭和の建立
明和七癸寅天寒月童女			
?			
寛保?物放光室貞?信?七月?			
節苑妙清大姉	昭和?		
享保十五?眺雲(玄?)峰信士之位 正月三日?			
?			
離方童子		?	
春草童女			
安永五? 性圓童女 七月(二十または 十?)六日 安永七? 寶玄童女 七月二十五日			
寛延四辛未天 映禪童子九月十九日			
泡明童女			
松翠節信居士 文海節光大姉			昭和の建立
(春?)岸忠芳大姉			
活軸了心居士	天保十一庚子年三月十二日		
慶応二? 奇相? 佐藤善左衛門胤信夫婦墓			
享保七壬寅 芳山智春大姉二月九日?			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
154	佐藤						f		
155	佐藤								童・大人
156	佐藤				1808		e		童
157	佐藤	家系図9-5 家系図9-5	居 大	70 69	1860 1866	1.36	d	夫婦	
158	佐藤	家系図9-5	童子	4	1813		e	単独	童
159	佐藤		大		1906		y	単独	
160	佐藤	家系図9-3	居	90	1813	0.955	e	単独	
161	佐藤	家系図9-4	大	44	1812		e	単独	
162	佐藤	家系図1-12	大		1742		d	単独	
163	佐藤		童女	4	1782		e	単独	童
164	佐藤	家系図2-5	居	72	1784		e	単独	
165	佐藤	家系図2-6	童子	13	1764		e	単独	童
166	佐藤		童子 童女		1782 1784	1784	e	複数	童二人
167	佐藤	家系図2-8	童子		1803		e	単独	童
168	佐藤								
169	佐藤	家系図10-4	童子		1815		e	単独	童
170	佐藤	家系図12-5	童女	2	1834		e	単独	童
171	佐藤	家系図7-4	童子		1809		e	単独	童
172	佐藤	家系図7-3	大	49	1807		e	単独	
173	佐藤	家系図2-1	居		1658		d	単独	
174	佐藤	家系図2-1	大		1656		d	単独	
175	佐藤						y		
176	佐藤	家系図2-2	大		1712		d	単独	
177	佐藤	家系図2-2	居		1704		d	単独	
178	佐藤						a		
179	佐藤						d		
180	佐藤		童女		1773		d		童
181	佐藤	家系図1-17	大	88	1912		y	単独	
182	佐藤	家系図1-17	居	76	1890	7.188	y	単独	
183	佐藤				1896		y	単独	
184	佐藤						a		
185	佐藤						x		
186	佐藤						a		
187	佐藤						d		

正面	左側面	右側面	背面
?七 大乘?十六?供養?	?泰三國土立?		
佐藤家之墓			昭和の建立
海月智芳禪童子	文化五年戊辰	閏(六?)月十四日 佐藤吉重郎	
安(政?)七申?(二または三)月四日 一連 □?恵春居士 桂林紅秋大姉			
天幻童子	文化十四十二月十二日	?	
壽法明聖大姉	明治三十九年七月一日歿	佐藤?	
波間栄心居士	文化十年癸酉十月十二日	?	
碧□高玉大姉	佐藤吉右衛門妻	文化?	
流岸貞江大姉			
不退妙倫童女	天明二壬寅八月八日	行年四才	
無?良昭居士	天明四年甲	辰 霜月二十五日	
中峯良明禪童子	宝暦十四甲申年 正月十三日	俗名 佐藤八良次信安 行年十□(二または三)	
英(夢?)童子 女慧童女	天明二寅年六月二十□一日 (夢?)	天明四辰年正月十八日 ?女	
智天禪童子	享和三(癸亥?)十二月二十七日		
?			
懷蓮童子	文化十二亥年	七月(二十?)七日	?
智□童女	天保五甲午年九月十七日	佐藤磯右衛門	?
才光童子	文化六巳年正月十六日	佐藤平左衛門?	
法山慧仙大姉	文化四丁卯八月六日	佐藤平左衛門妻	
万治元年 靈巖袖天居士十二月二十六日			
明暦二年 花屋理英大姉正月十三日			
?			
正徳二壬辰年 心月(貞?)燕大姉靈位 七月二十一日			
元禄十七甲(申?)天 (婦?)本一?徹全居士覺位 正月初四日			
?			
?			
安永(二または三?)春?童女			
紫錦韻藤堂芳光大姉	大正元?子年十一月二十九日 行年八十有八 藤本繩葛妻	孫佐藤善右衛門文夫歿立	
絳錦院藤翁繩葛居士	明治二十三年六月十八日卒年七十六歳	男藤本善右衛門信汎建立	
藤本善雄		明治二十九年四月五日死	
宝永?(お地藏)			
(祠の形) (七または八?)月?日			
(お地藏)			
(天?)□四年十二月三日 (梵字?福?百回忌供養塔)		?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
188	佐藤	家系図16-1	信士	66	1784	1802	0.033	d	夫婦	
		家系図16-1	信女	83	1802					
189	佐藤									
190	佐藤	家系図12-2	居	69	1807	1810	0.024	e	夫婦	
		家系図12-2	大	63	1810					
191	佐藤	家系図7-3	童子		1747			e	単独	童
191	佐藤	家系図10-2	信士		1749			e	単独	
192	佐藤		童子		1722			a	単独	童
193	佐藤		童女		1789			d	単独	童
194	佐藤		童子		1717			a	単独	童
195	佐藤		童女		1711	1717		e	複数	童二人
196			童子		1717					
197	佐藤	家系図6-2	大	70	1779			e	単独	
198	佐藤	家系図6-2	居	75	1780		3.673	e	単独	
199	佐藤	家系図3-4	居	64	1827	1836	0.855	e	夫婦	
		家系図3-4	大	58	1836					
200	佐藤	家系図3-2	大	83	1774			e	単独	
201	佐藤	家系図3-2	居		1764			e	単独	
202	佐藤	家系図1-18	童子		1859			d	単独	
203	佐藤				1711			a		
204	佐藤							d		
205	佐藤							d		
206	佐藤		童子							
207	佐藤				1855			d		
208	佐藤		童子					a	単独	童
209	佐藤	家系図4-3	大	75	1797			e	単独	
210	佐藤	家系図4-3	居	77	1796		0.576	e	単独	
211	佐藤	家系図4-1	居	78	1743	1746	4.867	e	夫婦	
		家系図4-1	大		1746					
212	佐藤	家系図12-1	大	52	1765			e	単独	
213	佐藤	家系図12-1	居	62	1767		0.811	e	単独	
214	佐藤		大		1751			e	単独	
215	佐藤	家系図6-1	居	89	1755		6.843	e	単独	
216	佐藤		童子		1722			a	単独	童
217	佐藤	家系図3-3	居	81	1770	1810	0.826	e	夫婦	
		家系図3-3	大		1810					

正面	左側面	右側面	背面
天明四甲辰三月朔日 佐藤喜信墓 ?外玄露 霞屋妙光 享和二年壬戌十一月? 馬場?息女			
?			
潤然是白居士 汀屋栄月大姉	文化七庚午五月十五日 佐藤儀助	同妻 文化四乙申(丁卯?)正月十二日	
玄清然童子 靈位	延享(四?)丁卯天	和吉 三月初四日	
?信士	寛延二巳年正月十四日	?佐藤政治郎	
(獲?)雲童子 具位 享保七壬子六月十三日			
寛政元己酉天(天?) 周法童女十一月四日			
智靈童子為善□			
露泉童女	正徳元?四月(二十三?)日	享保二酉九月十五日	
露泉童子 各□			
松室慧仙大姉	安永八巳亥八月八日	佐藤利左衛門直信 母	
即法了忠居士(了?良?)	?庚?	佐藤利左衛門直信 父という文字 があるのでは?	
燈外慧明居士 花雲春流大姉	文政十丁亥十一月二十八日 行年六十四歳 佐藤半弥惟恭	天保七丙申十月六日 行年五十八歳 佐藤半弥妻	
松室知寒大姉	安永三甲午年	?二月 ?妻	
一?祖?居士	?明?(二または三)月上?	?	
繩寫六男 安政六未年 佐藤午三郎家母倉沢氏 三月十二日			
? 地藏 宝永八?			
? (七月十四日?)			
?春? (正または七?)月十?日			
?			
?安政二年 (南無阿弥陀仏?)?			
? (智?)童子 ?永三?			
仙林智開大姉	寛政九丁巳年	四月九日佐藤清左衛門妻 年七十五才	
潤月宗古居士	寛政八丙辰年	十月二十四日 佐藤清左衛門 年七十七才	
無翁宗智居士 梅屋良雪大姉	延享三丙寅十二月二十四日	寛保三癸亥十二月十三日 佐藤信義	
鶴雲智達大姉	明和二乙酉年二月二十九日	佐藤磯右衛門妻	
海山了仙居士	明和四丁申年五月上二日	俗名 佐藤磯右衛門	
?清室(慧?)雲大姉	寛延四辛未年	六月二十六日	
物放 孤岸全笑居士之位(笑と鈞 読み間違いか?)	?	二月二十一日	
香林童子?不生 享保七壬(寅?)六月十三日			
直翁一□居士 静齋白雲大姉	文化七庚午四月十日	明和七庚寅十月五日 佐藤松右衛門夫婦	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
218	佐藤	家系図3-1	大		1717			e	単独	
219	佐藤	家系図3-1	居	79	1707			y	単独	
220	佐藤		大					e	単独	
221	佐藤		居					e		
222	佐藤		大		1723			e		
図3-3										
図4-2										
223	佐藤		大	25				e	単独	
224	佐藤								家	
225	佐藤								家	
226	佐藤		大					e	単独	
227	佐藤		居	28	1779			e	単独	
228	佐藤	家系図18-2	信女		1778			e	単独	
229	佐藤							y	単独	
230	佐藤	家系図14-1 家系図14-1	居 大	61 54	1787 1792	1792		e	夫婦	
231	佐藤							d		
232	佐藤	家系図2-4 家系図2-4	居 大	78	1799 1781	1799	10.12	e	夫婦	
233	佐藤	家系図2-3 家系図2-3	居 大		1742 1757	1757		e	夫婦	
234	佐藤	家系図7-1 家系図7-1	居 大		1753 1756			f	夫婦	
235	佐藤	家系図7-2 家系図7-2	居 大	71	1777 1778	1778	1.038	e	夫婦	
236	佐藤	家系図17-2	居	28	1784		1784	e	単独	
237	佐藤	家系図8-2	定門 定尼	80 63	1800		0.29	e	夫婦	
238	佐藤	家系図1-11	大	71				e	単独	
239	佐藤							e		
240	佐藤							d	単独	
241	佐藤							e	単独	
242	佐藤		童子					e	単独	童
243	佐藤		童子					e	単独	童
244	佐藤		童子					e	複数	童二人
245	佐藤		信士		1739			d	単独	
246	佐藤	家系図10-2	大	67	1817			e	単独	
247	佐藤	家系図10-2	居	59	1798		3.16	e	単独	
248	佐藤	家系図10-2	大	36	1798			e	単独	
249	佐藤	家系図10-1	大	71	1779			e	単独	
250	佐藤	家系図10-1	居	64	1764			e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
享保二丁酉歳？ (心?)覺壽見大姉之靈 七月二十五日	明(與または譽?)觀世音菩薩	?	
表に文字なし 菩薩像			(宝?)永四丁亥天 ?土?善提也 六月初二日
性叟(貞または負)本大姉	?年	佐藤氏信堅妻	
歎山良喜居士	?(戌?)年	十月十一日 佐藤氏信(利?)	
自?慧方大姉	享保八癸卯年	(七または四?)月八日	
安室良眼大姉	?	佐藤平作妻か□め 享年二十五歳八月	
佐藤家之墓			
佐藤家之墓			
報空圓化大姉	?	七月十一日 佐藤氏?	
栗山清香居士	(安?)永八己?年	十月二十一日	
梅室妙□信女	安永七?年	八月二十五日	
寶與妙珠之墓	七月十九日	山寺氏之息女	
天眞良輝居士 蓮峰妙秀大姉	天明七年丁未(十一?)月十一日 佐藤宗左衛門悦信	寛政四壬子年 四月初三日	
?			
清幹良仲居士 王峯眞運大姉	?	寛政十一己未七月十三日 天明元辛丑閏五月朔日	
海雲玄心居士 楚山慧瑛大姉	寛保二年正月十六日	宝曆七丁丑四月初八日 佐藤信邑父母	
透翁祖閔居士 桂屋慧林大姉	?九月三日	宝曆六丙子五月十六日 佐藤平左衛門父母	
一翁自休居士 頂門慧眼大姉	安永七戊戌?月?日 佐藤平左?	安永六丁酉年六月二十五日	
瀧翁惠然居士	天保?辰	二月十八日 俗名佐藤?左衛門	
榮心圓淨禪定門 明榮禪定尼	?	佐藤利八夫婦	
大光妙宗大姉	天明?巳 十二月?	佐藤吉右衛門母	
?		佐藤平?	
?女 正月			
?信 正月			
享保七 □運童子			
知淨童子			
幻□童子 知□童子	?		
元文四未年 □一花屋善向信士四月二日			
圭室妙珠大姉	?	佐藤曾左衛門後妻	
天心慧聞居士	寛政十?年六月	佐藤曾左衛門	
弘室妙誓大姉	?	四月初六日	
松雲祖柏大姉	?	?	
古峯了源居士	?	俗名藤?信明	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
251	佐藤	家系図19-3	居	66	1870			e	単独	
252	佐藤	家系図18-3	居	44	1824	1849		e	夫婦	
		家系図18-3	大	68	1849					
253	佐藤	家系図18-2	居	68	1823	1842	0.574	e	夫婦	
		家系図18-2	大	80	1842					
254	佐藤	家系図18-1	居		1805		2.014	e	夫婦	
		家系図18-1	大	79	1809					
255	佐藤	家系図9-1	居		1723			e	単独	
256	佐藤		童女		1790			e		童
257	佐藤	家系図1-11	居		1726			e	単独	
258	佐藤	家系図1-11	大		1708			e	単独	
259	佐藤		大					e	単独	
260	佐藤									
261	佐藤	家系図5-2	信女		1760			e	単独	
262	佐藤	家系図5-2	信士		1747		0.032	e	単独	
263	佐藤							e		
264	佐藤	家系図15-2	信士	26	1776			e	単独	
265	佐藤	家系図19-1	大	74	1823			e	単独	
266	佐藤	家系図19-1	居	56	1795		1.912	e	単独	
267	佐藤	家系図13-1	大	71	1790			e	単独	
268	佐藤	家系図13-1	居	71	1781		2.69	e	単独	
269	佐藤	家系図17-1	居	92	1812		0.928	e	夫婦	
		家系図17-1	大	89	1814					
270	佐藤		居						夫婦	
			大							
271	佐藤		居		1919			e	夫婦	
			大	80						
272	佐藤	家系図18-1	居	79	1878		2.014	e	夫婦	
		家系図18-1	大	60	1868					
273	佐藤	家系図11-1	大	69	1778			e	単独	
274	佐藤	家系図11-1	居	82	1787		4.165	e	単独	
275	佐藤	家系図11-2	居	27	1763	1763		e	夫婦	
		家系図11-2	大	27	1762					
276	佐藤	家系図11-3	大	22	1780			e	単独	
277	佐藤	家系図1-11	居	24	1755			e	単独	
277A	佐藤	家系図11-3	童女					e	単独	童
278	佐藤	家系図17-4			1867			e	夫婦	
				56						
279	佐藤	家系図17-3	居	67	1842		0.496	e	夫婦	
		家系図17-3	大	66	1849					
280	佐藤	家系図10-3	居	51	1820	1850	0.524	e	夫婦	
		家系図10-3	大	77	1850					
281	佐藤	家系図15-2	信士	48	1802			e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
一峯機音居士	明治三庚午十月十日	佐藤常右衛門？信□ 行年六十六	
玉□全光居士 無親慶線大師	文政七年甲申閏八月十日 佐藤清重郎 行年四十四歳	嘉永二年□酉十月三日 佐藤清重 郎 妻津祿 行年六十六歳	
珊瑚了脚居士 報開化端大師	文政六年未四月五日 佐藤清次郎 行年六十八	天保十三年寅七月八日 佐藤清次郎 妻□ 行年八十	
一会 教屋祖□居士 悦山良透大師	文(化?)三年?	佐藤清次郎墓	
釣翁祖雪居士	?	五月?	
智芳禪童女	寛政二寅戌年 正月二十五日	佐藤嘉平治 娘	
一山量無居士	?	四月	
心安智仙大師	?	二月	
流岸貞江大師	?	二月二十三日	
洞室真仙信女	?	?	
觀月宗智信士	?	?	
?		？藤	
別傳利意信士	?	?	
空□室恵丘大師	文政六年?	佐藤□右衛門信春妻 行年?	
空心了自照居士	?	行年五十六才 佐藤園右衛門	
天外了明大師	寛政(二?)庚戌九月十三日	佐藤八郎兵衛	
規外圓明居士	(応?)?	俗名 佐藤八郎兵衛 ?年七十?	
寒江釣雲居士 不空慧照大師	文化九?申?	?	
禪戒明道正眼居士 禪戒喜詮正光大師	?	昭和なので略	
禪戒金剛義鐵居士 禪戒法雲妙清大師	明? 佐藤?	大正八年七月二十五日歿 妻きよ 行年八十才	
空道素法居士 量外真恩大師	明? 佐藤清次郎□□ □七十七	明治元年戊辰十月二十六日 佐藤□□妻	
桂室智香大師	上塩尻村佐藤静依室	安永七年龍集戊閏七月二十一日行 年六十有九歳	
法性達原居士	天明七年□未申	長い碑文なので省略	
歸去 古岸玄津居士 桃源了智大師	寶曆十三癸未年 十二月十七日 俗名 佐藤勝五郎	寶曆十二壬□年 小一月十五日 俗?	
圭岸貞琳大師	安永九庚子九月三日逝	佐藤?	昭和十四年?
寒江宗源居士	宝暦五亥年十月十四日	俗名 佐藤嘉吉	
了?童女		?	
佐藤仲三正一夫婦墓		慶応三丁卯歳 八月七日歿行年五十六	
本光瑞現居士 目山妙性大師	?	嘉永? 同次?	
□秋織桂居士 料摩真淳大師	文政三庚辰八月十一日 日にちば読み間違いか 佐藤昌七? ?年五十一	嘉永三庚戌九月二十五日 同妻久 満 行年七十七歳	
孤峯秀道信士	?	?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
282	佐藤									
283	佐藤	家系図19-4	居 信女	64	1864			e	夫婦?	
284	佐藤	家系図15-1	居	84	1797		0.378	e	単独	
285	佐藤		大	72	1851			e		
286	佐藤	家系図19-2	居	51	1833		2.963	e		
287	佐藤	家系図19-3 家系図19-3	居 大	79 44	1881 1850		2.256	e		
288	佐藤		童子 童子		1901 1904	1904		e	複数	童二人
289	佐藤								家	
290	佐藤	家系図11-2	居	72	1807			e	単独	
291	佐藤	家系図1-14	大	46	1791			e	単独	
292	佐藤	家系図11-2	大		1784			e	単独	
293	佐藤	家系図1-14	大		1768			e	単独	
294	佐藤		童子 童子 童女		1881	1884		e	複数	童三人
295	佐藤	家系図1-14	大		1826			e	単独	
296	佐藤	家系図1-14	居	30	1782			e	単独	
297	佐藤	家系図9-3	大	51	1787			e	単独	
298	佐藤	家系図18-5	大	24	1861			e	単独	
299	佐藤	家系図18-5	信女 童女	2	1834 1841	1841		e	複数	童・大人
300	佐藤	家系図13-3	信女	23	1800			e	単独	
301	佐藤									
302	佐藤	家系図19-4	大	79	1909			y	単独	
303	佐藤	家系図19-4	居	69	1893			y	単独	
304	佐藤	家系図14-2 家系図14-2	居 大	70 80	1832 1842		1832	e	夫婦	
305	佐藤	家系図14-3	大	57	1845		1845	e	単独	
306	佐藤	家系図2-5 家系図2-5	居 大	85 80	1835 1834	1835		e		
307	佐藤							x		
308	佐藤							y		

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
?			
雪岩祖峯居士	?	佐藤?信女	
慧線指眼居士	寛政九?八月	佐藤平弥	
鳳屋明彩大姉	嘉永四年?	佐藤信親妻幾知 享年七十有二	
白與良真居士	天保四年癸巳九月十一日	佐藤園右衛門信親	
禪戒一翁有隣居士 禪戒獻室麗珠大姉	?四年?九月十? 佐藤園右衛門有隣 ?	嘉永三年辰戌十一月三日没 佐藤 有隣妻 片田采子 享年四十四	
崩後童子 護三童子	明治三十四年四月十七日 三?	明治三十七年八月十日 三造二男 佐藤弘一 行年四	
佐藤家之墓 墓誌:佐藤繁雄家 昭和以降			昭和の建立
善白了賢居士	文化四丁卯年十月十四日	佐藤?治義白 行年七十?	
善室了音大姉	寛政三辛亥五月二十七日	佐藤義治妻 俗名 みよ 行年四十六	
眞鏡自圓大姉	長い碑文「ほとんど読めないが、 「天明四」の表記有り	大姉俗名順…以下省略	
花月妙松大姉	(明和?)五年戊子九月二十? ?三十?	佐藤?衛門富?妻 下?倉邑宮本氏?	
智順禪童子 妙清禪童子 妙璋禪童女	佐藤? 明治十四年六月二日	佐藤康? 明治十? 佐藤? 明治?十七	
丹山玄嵐大姉	長い碑文「日付も入っているよう だが、読み取れない	長い碑文 省略	
超宗玄海居士	佐藤?信 天明(二?)壬寅三月十三日	長い碑文 佐藤? 省略	
故真性妙見大姉位	天明七年	?佐藤吉右衛門	
大室妙圓大姉	?月二日	佐藤清次郎?(妻?女?) 行年?	
竹亭虚白信女 觀眼童女	天保十二? 佐藤清次郎(娘?)?	天保五甲午?月二十七日 佐藤清次郎	
光室智照信女	?	佐藤八五郎娘	
昭和六十三年 供養塔			
心淨院圓室妙鏡大姉	明治四十二年巳酉十二月三十日歿	佐藤信睦妻園子 享年七十九	
心鏡院圓翁成覺居士	明治二十六年癸巳八月十日?	佐藤園右衛門信睦 享年六十九	
觀應良喜居士 明峰玄珠大姉		天(保?)?辰? ?	
善岳雄智大姉	? 七月八日	佐藤和平治娘 行年五十七 津祿	
泰翁良清居士 淨峰妙蓮大姉	碑文	天保六□未年二月二十九日 泰 行年八十五歳 天保五甲午年六月九日 淨 行年八十歳	
祠			
丸い石塔			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
309	佐藤						x		
310	佐藤						x		
311	佐藤						x		
312	佐藤						y		
313	佐藤						x		
314	佐藤						x		
315	佐藤				1694		x		
316	佐藤				1692		x		
317	佐藤						x		
図3-4									
図4-3									
211	山崎		信女		1804		e	単独	
212	山崎						e		
213	山崎		信女				d	単独	
214	山崎						e		
215	山崎		信士	84	1806		e	単独	
216	山崎	家系図6-3	信士 信女	71	1816 1838	0.216	e	夫婦?	
217	山崎	家系図6-1	信士	88	1764	0.184	e	単独	
218	山崎		信士		1691		d	単独	
219	山崎		信士 信女		1787 1806		e	夫婦?	
220	山崎		信士		1754		d	単独	
221	山崎		信士				d	単独	
222	山崎	家系図6-5と6-6の 人物含む						累代	
223	山崎							家	
224	山崎		信士		1703		d	単独	
225	山崎		信女		1703		d	単独	
226	山崎				1705		d	単独	
227	山崎								
228	山崎							単独	
229	山崎		童女		1773		e	単独	童
230	山崎		童女		1800		e	単独	童
231	山崎		信士		1719		d	単独	
232	山崎		童子		1779		e	単独	童
233	山崎	家系図6-6		63 46	1904 1894		e	夫婦	
234	山崎		童子		1776		e	単独	童
235	山崎	家系図4-2	大姉		1790		e	単独	
236	山崎	家系図4-2	居士	78	1781	3.336	e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
祠			
祠			
祠			
丸い石			
祠			
祠			
祠 元禄七年?月九日			
祠 元禄五? 十月五日			
祠			
? 縁喜法信女	文化元甲子年	十二月十九日	
?			
? 去妙讃信女靈位			
?	天?	?月?日	
馨岸?信士	行年八十四 山崎□石工門	文化(三?)寅年 十月(十三?)日	
徳(稚?)善功信士 因法貞順信女	天保九辰年二月二十二日 山崎助?	文(化?)十三子年 四月十九日	
□住生廓信士	宝暦十四天三月朔日	俗名 山崎銀七 八十八才	
元禄四?天 ?清心信士			
□岸智海信士 靈□妙寿信女	文化三丙寅年十月十五日 山崎彦右衛門	天明七丁戌年 十月十二日	
宝暦四甲戌年 浄譽旭清信士 □ 三月十五日		山崎清治郎珍久	
? ?信士 二月十九日			
山崎家累代之墓	小岩井兵三郎二男山崎彦次郎 妻	昭和:省略	昭和の建立
山崎家之墓 墓誌:昭和から平成			昭和の建立
元禄十六未 秋□信士 □位 六 月六日			
元禄十六未天 ?法信女四月?五 日			
宝永二乙??香信? 二月?			
?			
照光院建替喜住居士	故陸軍兵長山崎(昭和なので名は 略)	墓誌:昭和に亡くなる	昭和の建立
早世智光童女	安永二丑年	五月二十八日 山崎茂吉	
妙?童女	寛政十二年	申七月五日	
享保四己亥年 婦去常?信士靈位 九月五日			
智専童子之(靈?)	安永(八?)己亥?	?	
山崎逸作夫婦之墓	山崎彦次郎長男逸作 明治三十七年三月一日歿行年六十 三才	?片岡八右衛門長女つも 明治二十七年三月三日歿行年四十 六才	
蓮光童子	安永五?六月十一日	山崎□太郎	
明譽祐光大姉	寛政二庚戌歳	六月初八日 山崎善太郎妻	
到譽明岸居士	天明元丑年	十月初七日俗称山崎善太郎 行年七十八歳	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
237	山崎							家	
238	山崎							家	
239	山崎		信女		1745		e	単独	
240	山崎		大姉	73	1856		f	単独	
241	山崎	家系図13-1	居士	79	1856	1.23	f	単独	
242	山崎								
243	山崎		居士 大姉		1830 1838		e	夫婦?	
244	山崎		居士 大姉 童子 信女	65 4 22	1893 1876 1886		y	家族	大・童
245	山崎	家系図13-3	居士 大姉	69 67	1909 1911	1.23	g	夫婦	
246	山崎	家系図13-2?	居士 大姉	67	1867 1874		e	夫婦	
247	山崎								
248	山崎		信女		1806		e	単独	
249	山崎		童子				d	単独	童
250	山崎		大姉		1752		e	単独	
251	山崎		大姉		1751	1765	e	単独?	
252	山崎		童女		1800		e	単独	童
253	山崎	家系図7-3		60 82	1867 1899	0.941	y	夫婦	
254	山崎				1785		e		
255	山崎	家系図8-1		73	1786	0.895	e	単独	
256	山崎								
257	山崎		童子		1745		d	単独	童
258	山崎								
259	山崎						y		
260	山崎		信女		1764		e	単独	
261	山崎		信士		1710?		e	単独	
262	山崎		禪定尼		1690?		d	単独	
263	山崎		信士		1716		f	単独	
264	山崎	家系図8-2	信女		1786		e	単独	
265	山崎	家系図2-7		22	1818		e	単独	
266	山崎	家系図11-1?	信女		1787		e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
山崎家之墓 墓誌:明治から昭和			昭和の建立
山崎家之墓 墓誌:昭和から平成			昭和の建立
圓譽花光信女	延享二丑年	三月二十三日 山崎平三郎母	
念譽慈妙大姉	安政三年丙辰三月二十三日	山崎五郎左衛門妻 行年七十三歳 俗名 久満	
天譽慈念居士	安政三年丙辰十月十七日	山崎五郎左衛門義徳 行年七十九歳	
?			
徹譽壽清居士 便譽寿方大姉	文政十三?年十二月二十四日 山崎?	天保九戊戌年八月十二日 山崎?妻	
源譽□本居士 仙譽明鏡大姉	明治二十六年七月六日歿 山崎善太郎宣致行年六十五歳 妻□め	明治九年九月二十九日歿淨願善童子 宣致二男武造 行年四歳 明治十九年十二月二十日歿晴光明 雲信女 宣致長女わか 行年二十二歳	
任譽隣運居士 法譽妙慶大姉	明治四十二年四月十一日死去 山崎五郎左衛門 行年六十九歳	明治四十四年十二月二十七日死去 五郎左衛門妻きエ 行年六十七歳	
嶺譽楓山居士 弁譽智明大姉	慶応三年右十月三日 山崎五郎左衛門 享年六十七歳	明治七戌年四月十七日 山崎五郎 左衛門妻 行年三十三歳 ?津 ?	
?			
安譽貞月信女	文化三丙寅年 八月上二日	諏訪郡邑水出与兵衛娘 山崎善之丞妻	
?五辰天 祖?童子 四月二十八日			
理譽智迎大姉	宝暦二丑?	七月?二日	
紅譽秀應大姉	明和二乙酉天正月四日 山崎五良 右衛門	宝暦元辛未八月十八日	
親月童女	寛政十二申年	八月初九日	
山崎善太夫婦墓		山崎善太郎宣致建	慶応三年二月二十二日□宣賢 行 年六十二 明治三十二年十一月八日妻 □以 行年八十二
明譽了智信女位	天明五乙巳年	六月二十二日 山崎善四良妻	
峯譽善照信士位	天明六丙午年	十一月二十一日 山崎善四良	
?			
延享二?二天 去□?童子 十二月一日			
?			
?	?	?	?
林宗貞樹信女	明和元甲申年	七月二十三日 山崎九エ門?	
享保?年 □元秋祭樹信士 七月?七日	?	山崎九?	
元禄?天 ?圓?定尼?位 ?月三日			
正徳六丙申天 堀□元礼道?信士靈位 七月十五日			
利譽知還信女位	天明六丙午年	七月二十日 山崎善四良娘	
山崎吉兵衛妻		文(政?)元戊寅天 二月二十三日	?
□屋妙取信女	天明七未天	六月十九日 茂二郎妻	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
267	山崎		信女		1705			d	単独	
268	山崎									
269	山崎	家系図11-2	信女		1824			e	単独	
270	山崎	家系図11-1	信女	69	1834			e	単独	
271	山崎	家系図11-1	信士	65	1818		0.748	e	単独	
272	山崎		童子					d	単独	童
273	山崎		童子		1744			d	単独	童
274	山崎								家	
275	山崎	家系図4-3		66	1802		1.009	e	単独	
276	山崎		信女		1713			d	単独	
277	山崎	家系図2-7 家系図2-8? 家系図2-8? 家系図2-8?	信士 信士 信士 信女	70 36 75 70?	1861 1857 1889 1900		0.705	e	家族	
278	山崎		居						単独	
279	山崎	家系図4-5	信士 信女 童子	65 57 9	1896 1920 1896	1920	0.012	e	複数	童・大人
280	山崎							d		
281	山崎		信士					h	単独	
282	山崎		信士 信女		1907 1909	1909		g	夫婦	
283	山崎		童子		1789			e	単独	童
284	山崎	家系図9-1?	信女		1779			e	単独	
285	山崎									
286	山崎	家系図9-2?	信女		1809			e	単独	
287	山崎	家系図9-4?	信士	73	1925			g	単独	
288	山崎		信女		1824			e	単独	
289	山崎		信士		1822			e	単独	
290	山崎	家系図9-2	信士	73	1817		0.418	e	単独	
291	山崎			8 8	1920 1923	1923		g	複数	
301	山崎	家系図9-4	信士 信女		1884 1896	1896		g	夫婦	
302	山崎	家系図9-3	夫婦	52 77	1860 1861	1861	0.614	y	夫婦・複数	
303	山崎	家系図9-4	夫婦 夫婦	81 73 60	1860				夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
宝永二? 元福?智?信女□位 六月二日			
陸軍騎兵伍長勲八等七級山崎覚之墓			
教譽乗□信女	文政七甲申年 閏八月二十六日	山崎半左衛門妻	
?譽慈園信?	天保五辰年八月?	更科郡若宮村竹澤長兵衛女 六十九 山崎茂治郎妻	
觀譽念乘信士	文政元戊寅十二月十六日	六十五歳 山崎茂治郎 茂治郎の誤り?	
?元??達童子 ?童子			
延享元?貞□童子 ?			
山崎冢之墓 墓誌:明治から昭和			昭和の建立
施?	享和二(辰?)年	十(一?)月初九日 俗名山崎平三郎	
正徳三巳天 乘秋信女□位 六月二十八日			
寿譽善量信士 焔譽妙西信士 道譽貴光信士 琢譽貞玉信女	明治二十二年七月十九日 山崎孫太郎□行年七十五才 明治三十三年二月二十日 山崎登?□行年(七十?)才	文久元年四月?山崎吉兵衛□行年七十才 安政四年七月二十九日山崎(孫?)太郎□ 行年三十六才	
誠譽常光到岸居士	昭和に歿	昭和なので略	
浄譽良園信士 願譽淨生信女	明治二十九年十二月十四日歿 清照慈雲童子 山崎太之助 行年九歳	大正九年五月十四日歿 山崎藤次 行年六十五歳 大正七年十一月二十六日歿 妻□ □行年五十七歳	
三月十三日			
讚譽正願信士	昭和なので略		
界雲心法信士 念岸智光信女 位	明治四十年正月四日 山崎孫七 明治四十二年二月五日 妻やす	明治三十四年七月?日 念法?住信士位 ?	
寛政元?泡幻音童子 九月十七日			
光(室?盡?)妙(庭?)信女	安永八年	正月二十四日 山崎治助 妻	
?			
與室妙受信女	文化六巳年 二月二十四日	山崎和典 妻	
照雲純光信士		山崎弥市 大正十四年八月十二日歿 行年七十三歳	
秋庵理□信女	文政七申七月十九日	山崎(光?)蔵妻	
觀岳万意信士	文政五年十一月十四日	山崎光蔵	
迎山群院信士	文化十四?五月七日	行年七十三 山崎和助	
山崎英一 同 きく 墓	山崎? 山崎?一 大正九年二月十九日歿 行年八歳	山崎(弥三?)二女 山崎きく 大正十二年?月三十日歿 行年八歳	
春山龍道信士 照屋妙偏信女	山崎弥作 明治十七年二月二十九日歿 行年六十三歳	山崎弥作妻 てつ 明治二十九年一月十四日歿 行年七十七歳	
山崎次助夫婦墓	万延元申年七十七歳妻	文久元酉年五十二歳	
山崎重吉夫婦墓 山崎彌生夫婦之墓	文久元酉年八十一歳	明治?七十三歳 妻 煥譽栄繁貞鏡大姉 行年六十才	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
304	山崎	家系図5-7	居 大	50 46	1872 1877	1877	0.791	e	夫婦	
305	山崎	家系図5-8	居 大	50 746274・6	1902 1925	1925		e	夫婦	
306	山崎	家系図5-6	大	24	1841			e	単独	
307	山崎	家系図5-6	居	33	1848		0.776	e	単独	
308	山崎		居		1824			e	単独	
309	山崎		信女		1822			e	単独	
310	山崎	家系図12-1	信士	66	1822		0.39	e	単独	
311	山崎	家系図5-7	居	16	1855		0.791	e	単独	
312	山崎		大		1829			e	単独	
313	山崎	家系図5-4	居	63	1831		2.831	e	単独	
314	山崎	家系図5-4	大	42	1837			e		
315	山崎									
316	山崎									
317	山崎	家系図5-2	居 大		1763 1765	1765		e	夫婦	
318	山崎		居 大		1822 1826	1826		f	夫婦	
319	山崎	家系図5-5	居	59	1849		0.776	e	単独	
320	山崎		居	32	1920			e		
321	山崎		童女	3	1846			e	単独	童
322	山崎									
323	山崎		童女	3	1841			e	単独	童
324	山崎		童女		1800			e	単独	童
325	山崎		大		1777			e	単独	
326	山崎		大	40	1765			e		
327	山崎		信士		1754			d	単独	
328	山崎							a		
329	山崎								供養塔	
330	山崎	家系図12-2	童女	10	1801			e	単独	童
331	山崎		童女	11	1835			e	単独	童
332	山崎		童子		1776			d	単独	童
333	山崎		信士		1726			d	単独	
334	山崎		信女		1815			e	単独	
335	山崎		信士		1781			y	単独	
336	山崎		信女					d	単独	
337	山崎		信女		1745			d	単独	
338	山崎		童女		1778			e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
勤譽至真居士 □譽真大姉	明治十季丁丑六月十五日 山崎五郎右衛門直勝 卒年五十有 四	明治(五季?)壬申七月二十八日 山崎直勝妻登子 □科郡?木村内 田勝宇衛門女 行年四十六	
澄光庵透譽徹道居士 隨照庵順譽妙?大姉	明治三十五年壬寅九月七日 山崎五郎右衛門直行 行年五十有 七	大正十四年六月十八日死去神?村 山辺忠七四女 五郎右衛門妻くに 行年七十四歳	
練譽妙貴大姉	天保十二壬寅八月九日	山崎五郎右衛門嘉樂娘 嘉顯妻阿(佐?) 行年二十四才	
群譽淨生居士	嘉永元年戊申八月二十九日没	山崎源五郎嘉顯 行年三十三歳	
光譽普照居士	文政七甲申年 十一月十六日卒	山崎弥重郎□	
順譽實樹信女	文政五壬午年 九月十一日	山崎新三郎妻	
嶽譽高樹信士	文政五壬午年 六月上六日	俗名 山崎新三郎	
獨譽立明居士	安政二年□杜乙卯三月二十三日	山崎五市郎 素曙 享年十六歳	
安譽貞性大姉	文政十二己丑?六月九日	山崎五右衛門妻□□ 下吉田村左?林右衛門娘	
法譽性意居士	天保二辛卯四月十九日	俗名山崎五右衛門	
桐譽梧雲大姉	天保八丁酉年 八月六日	山崎五郎右衛門 妻 行年四十二 歳	
?			
?			
諦譽義?居士	宝暦十三癸未天二月十日 山崎三良右衛門	明(和?)二乙酉天三月三十日 妻	
大譽義雲居士 □譽真義大姉	文政五壬午年正月二十七日	文政九丙戌年五月十日	
願譽涼生居士	嘉永二年巳酉六月十九日没	山崎五郎右衛門嘉樂 行年五十九 歳	
諦譽自芳居士	大正九年七月三十一日歿	山崎五郎右衛門五男芳之助 行年 三十二(?)歳	
英玉善童女	弘化三年丙午六月十七日没	山崎藤五郎嘉? 俗名津奈 行年三 ?	
幼夢善童女	天保十二?十二月二十七日	山崎五郎右衛門娘 志奈三才?	
寿迎童女	寛政十二	八月二十三日	
願譽智讚大姉	安永六丁酉十月二十七日	山崎五郎右衛門 妻	
龍譽吟秀大姉	明和乙酉年 三月二十有九日 享年四十	原儀兵衛女 男 山崎新三郎	
宝暦四甲戌年 帰去 秀譽哲山信 士 □ 三月初五日			
?			
山崎家供養塔			
寿親善童女	享和元辛酉年十二月朔日	山崎新三郎女 十歳(ふ?)一	
桐雲禪童女	天保六乙未年 七月二十四日	山崎新右衛門娘 十一才はる	
安永五?申年 説幻童子位 ? (十四?)日			
享保十一年 雪岸心了信士 十一 月十九日			
(奇?)音麗戒信女	文化十二年乙亥十二月二十五日	山崎五右衛門女 □□の	
?譽□信士	天明元丑年	□月十三日	
(安永?)	紅?幻秀信女 九月十七日		
延享乙丑年	春室妙元信女 正月二十八日		
受幻童女	安永七?天	六月二十二日	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
339	山崎		童女		1800			e	単独	童
340	山崎	家系図1・2	信士 信女		1624 1674	1674		f	家族・複数	
341	山崎				1736から				墓誌	
342	山崎								一族	
343	山崎								家	
図3-5										
図4-4										
1	山崎	家系図18・3	居士 大姉	64 ?	1745 1739			e	夫婦	
2	山崎	家系図18・5	大姉		1762			e	単独	
3	山崎	家系図18・2	居士 大姉		1704 1753			e	夫婦 ?	
4	山崎	家系図18・6	居士	69	1836			f	単独	
5	山崎		大姉	38	1834			f	単独	
6	山崎	家系図18・5	居士		1816		4. 845	f	単独	
7	山崎	家系図18・5	大姉	67	1809			f	単独	
8	山崎	家系図18・1	居士 大姉		1692 1702			f	夫婦 ?	
9	山崎		居士	28	1923			y	単独	
10	山崎	家系図18・9	居士	65	1923		2. 024	f	夫婦 ?	
11	山崎	家系図18・8	居士 大姉	77 77	1901 1903		2. 024	f	夫婦	
12	山崎		童女 童子	7 10	1918 1923			y	複数	童二人
13	山崎	家系図18・4	居士	91	1796		1. 692	f	単独	
14	山崎		居士 居士	28 27	1865 1888			f	複数	
15	山崎	家系図18・7	居士 大姉	34	1839 1844		3. 051	f	夫婦 ?	
16	山崎								家	
17	山崎	家系図18・4	大姉	72	1783			f	単独	
18	山崎		童女		1801			e	単独	童
19	山崎		童子		1806			y	単独	童
20	山崎		嬰兒		1911			y	家族	童三人(嬰)

正面	左側面	右側面	背面
幻禪童女	寛政十二申年	七月十日	
空 高運浄西信士 心相浄安信士	寛永元庚子年十二月十三日 空潮月冷感信女 寛永二乙巳年四月六日	寛文十二壬子年六月八日 俗名山崎孫之丞(正月の間違い?) 空月慈道秀信女位 延宝二壬寅年正月十六日	
墓誌:讚譽嘆秀居士			天明七年十月十六日歿 行年二十二歳
山崎庄之助以降一族之墓			昭和:略
祖霊塔 山崎家 墓碑二つ: 昭和以降			昭和の建立
意譽本迎居士 末譽智大姉	延享二乙巳四月二十三日 山崎平七	元文四乙未年十一月十五日	
理譽智専大姉	宝暦十二壬午年三月九日	上田城戌(藏?)并善?妻 山崎忠之?女	
運譽浄閑居士 授譽天運大姉	元禄十七甲申四月十五日 山崎善兵衛	宝暦三癸酉三月十(七?)日	
義令庵礼譽善教居士	天(保?)七丙申歳 二月十一日	山崎忠之丞忠重 行年六十九	
桃雲庵永譽存紅大姉	天保五甲(午?)年三月初五日	上戸倉宿 滝沢善左衛門娘 山崎忠之丞忠重妻 行年三十八歳	
真譽叟善居士	文化十三丙子八月二十八日	山崎忠之丞墓	
發譽智善大姉	中葛村足立徳兵衛娘 行年六十七歳山崎忠之丞妻	文化六己巳天正月十七日	
念譽浄専居士 專譽忠照大姉	元禄五壬申二月十日 山崎佐五右衛門	元禄十五壬午正月二日	
清譽紀雲居士	大正十二年七月二十七日歿	山崎紀郎 行年二十八歳	
寛光庵正譽美(衛良?)勲居士 静光庵順 譽正道妙口大姉	大正十二年二月二十五日歿 山崎佐湖太 行年六十五歳		
斯光庵徹譽義順居士 慧樹庵幽譽妙香大姉	明治三十四年?月十三日没 山崎在源太徳明 行年七十七歳	明治三十六年十月九日歿 稲荷山町 小出孫左衛門娘山崎徳明妻伊與 行年七十七歳	墓石の別表とだぶっている
清雲妙英童女 臨心智光童子	大正七年八月十一日歿 山崎英 行年七歳	大正十二年二月二十一日歿 山崎? 行年十歳	
善譽道祐和叟居士	寛政八丙辰年十月十二日	行年九十? 山崎忠之丞	
礼譽義運居士 良譽智俊居士	礼 慶応元年七月十日 山崎成美二男 山崎慶重 行年二十八歳	良 明治二十一年十一月十九日 山崎徳明二男 山崎口造 行年二十七歳	
静心庵察譽寿権居士 錦秋庵紅譽口鉢大姉		天保十五年九月七日 上原村丸山 八左衛門娘 山崎成美妻 里口 行年三十四才	
山崎家之墓 墓誌:山崎忠之輔以降 昭和なので略			
光譽貞照明祐大姉		(天明?)三 丙卯七月十日 當(所?)山崎正太郎右衛門娘 山崎忠之丞妻 行年七十二口 碑口	
理迎善童女	享和元(酉?)年	十月十四日	
英竟童子	文化三丙寅天	六月十五日 山崎?	
齋藤三嬰児之墓			明治四十四年十月 父齋藤?建立

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
21	山崎	家系図23-1	信士 信女	90 74	1822 1802		0.124	e	夫婦	
22	山崎	家系図23-2	信士 信女	56 71	1820 1836		0.124	e	夫婦？	
図3-6										
図4-5										
1	清水	家系図18-1							家	
2	清水									
3	清水	家系図11-11	居 大 大		1878 1897			g	複数	
4	清水	家系図11-10	居 大	65 73	1861 1870	1870		e	夫婦	
5	清水		居		1889			e		
6			大							
7	清水									
8	清水								家	
9	清水								家	
10										
11	清水	家系図17-1	大	61	1870			x	単独	
12	清水	家系図17-1		83	1886			x	単独	
13	清水	家系図17-2	居 大	82	1915 1920	1920		g	夫婦	
14	清水								家	
15	清水		居 大		1923	1928		g	兄弟	
16	清水									
17	清水									
18	清水									
19	清水				1926			g		
20	清水									
21	清水							y		童
22	清水									
23	清水									童
24	清水				1910			y	単独	童
25	清水								単独	童
26	清水		居		1915			g	単独	
27	清水	家系図17-2	大	49	1890			g	単独	
28	清水	家系図17-2	居		1917			g	単独	
29	清水									
30	清水									童
31	清水		童女						単独	童

正面	左側面	右側面	背面
實譽了達信士 隨譽妙感信女	文政五年二月朔日 俗名山崎平七墓 行年九十才	文化二乙美十二月二十三日 ?田村 関口四郎左衛門娘山崎平 七妻行年七十四	
實譽義廣信士 ?譽惠光信女	文政三辰九月十九日 山崎(忠吉?)霊	天保七申二月五日 行年七十一	
清水信右衛門家之墓	清水新右衛門幸徳 明治二十年五月一日歿 行年七十三才	?康 妻きりよ 大正八年十月十六日歿	
	行年七十三才	行年八十九歳	
福徳院霜林貞操大姉 徳了院天慶白信居士 寶秀院大峯明英大姉	覺了院通称喜左衛門 幸慶為里正水利有傳功 明治30年3月18日病没 寶秀院通称惠津 長瀬村水谷氏出喜左衛門妻其性義烈而能		
峯峯松居士 藁妙鏡大姉	峯 文久元年辛酉五月初一日歿 明治三庚午五月初五日	清水善輔昌幸 卒年六十□五歳 昌幸妻 卒年七十□三歳	
清光院玄峯良興居士	長い碑文のため、省略。	?	
隆光院昌室明盛大姉	明治22年12月15日死□		
大智院喜岳圓明居士 淨智院喜玩良光大姉	大正15年12月17日歿 俗名 清水喜左衛門 享年57	昭和46年3月31日逝 86歳 清水喜左衛門?幸 妻	
清水家之墓			
清水家之墓			
	明治3年庚午8月3日 覺至慈正大姉	金井邑? 清水喜(惣次?)延?妻行年(六十一?)才	
	明治19年11月16日享年83歳		
禪戒独峰哲玄居士 禪戒法隣哲周大姉	大正4年12月6日歿 第2世 清水喜惣次行年 82歳	大正九年(八月九日?) ?	
清水家之墓			昭和建立
清水兄妹之墓	大正12年10月12日歿 眞如院大岳英夫居士	昭和7年 愛珠院蓮光浄量大姉	
善性院清光日祐居士 善智院妙圓日義大姉	短歌 清水喜左衛門妹、義子へ九子町長 瀬水谷家より入夫	昭和なので略	
武光院清□良翔居士		略	昭和建立
清水家之墓			昭和建立
慈成院雙室貞隣大姉 明徳院清嚴機道居士 明和院陽光妙道大姉	昭和のため省略	慈成院清水嚴先妻 上田青藤氏出 83歳 於横浜寓居歿	
益壽院玄潤知興大姉		昭和なので略	
清水正徳			
清水家之墓			昭和建立
清水四郎家	昭和のみ 4名		
清水俊男墓		明治43年2月14日卒	
清水泰袈墓	明治?	?	
禪戒徳乘道隣居士	大正四年四月一日卒	得(左エ?)門長男清水徳之助	
禪戒得室隆道大姉	明治二十三年十二月十五日	清水得左衛門妻年四十九(卒?)	
禪戒得隨裕仁居士	大正六年九月八日歿	清水得左衛門	
禪戒梅室恵芳大姉	武川字女墓	清水得左衛門?享年?六才	
清水家之墓			昭和建立
恵觀童女		清水?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
32	清水		孩児						単独	童
33	清水	家系図17-2	居 大	77 82	1914 1926	1926		g	夫婦	
34	清水	家系図15-4		80	1871	1874		e	夫婦	
図3-7										
図4-6										
341	清水	家系図5-6		82	1904			x	単独	
342	清水	家系図5-6		67	1865			x	単独	
343	清水	家系図5-5	大	63	1864			e	単独	
344	清水	家系図5-5	居	59	1849		1.55	e	単独	
345	清水								単独	
346	清水		童子		昭和			y	単独	童
347	清水		大	25	1904			e	単独	
348	清水		大	19	1893			e	単独	
349	清水		童女	3	1926			y	単独	童
350	清水	家系図5-7	大	73	1920			h	単独	
351	清水	家系図5-7	居	45	1890			h	単独	
352	清水	家系図5-8	童子		1876			e	単独	童
353	清水				1867			x		
354	清水	家系図2-10	童子		1886			e	単独	童
355	清水	家系図2-11	童子		1920			h	単独	童
356	清水	家系図2-7?	大	22	1864			e	単独	
357	清水	家系図2-7	大	84	1855			e	単独	
358	清水	家系図8-2 家系図8-2	居 大	79 83	1842 1854	1854	0.036	e	夫婦	
359	清水	家系図8-3 家系図8-3	居 大	42 32	1834 1846	1846		e	夫婦	
360	清水	家系図2-7 家系図2-7	居 大	78 55	1856 1843	1856	2.548	e	夫婦	
361	清水		大		1830			e	単独	
362	清水	家系図2-6	居	83	1822		2.151	e	単独	
363	清水	家系図2-8	童子	4	1816			e	単独	童
364	清水		童女 童女		1738				複数	童二人
365	清水							a		
366	清水		童子		1766			e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
達達禪孩兒		清水達？	
禪戒祖提温心居士 禪戒祖春長光大姉	大正三年五月二十七日没 第一世 清水茂次郎行年七十七才	大正十五年七月八日 妻美子行年八十二才？	
？	明治四年未年二月二十二日	明治七甲戌年八月十一日	
祠	明治三十七年十一月二十日歿	清水銀右衛門妻 清水はる 享年八十二歳	
祠	慶応元年己丑八月二十六日 清水銀右衛門幸質		
遊涼庵達達禪香大姉	元治元年甲子七月二十四日	清水銀右衛門幸和妻 行年六十三歳	
寛譽遊仙篤翁居士	嘉永二巳？八月二十七日	？	
徳彰院銀譽清翁仁風居士 瑞松院徳譽貞範妙鏡大姉	昭和 清水銀右衛門	昭和 清水ひさ	
研昭善童子	昭和 清水信？男 清水研？		
輝譽麗雲大姉	明治三十七年 三月九日没	清水金左衛門妻 清水美喜代 行年二十五歳	
進譽露紅大姉	明治二十六年九月二十七日	清水？女 享年十九	
孝雲善童女	大正十五年八月八日歿	清水長？享年三才	
瑞光庵莊譽貞昇大姉	大正九年八月二十六日没	清水銀右衛門妻 清水□享年七十三	
雲□庵瑞譽靈巖居士	明治二十三年九月二十三日	清水銀右衛門幸善 行年四十五歳	
□譽進香童子	明治九年？七月十一日	幸善長男 清水玉？郎 行年？	
祠	慶応三？年 十二月十三日	？水銀？エ門？妻 行年二十一才	
麗苗善童子	明治十九年？月二日	清水長工衛門二男	
豊心善童子	大正九年四月二十六日	清水長？郎三男	
愛譽清孝貞敬大姉	元治元甲子年九月十五日	清水長左衛門一女行年二十二	
梅譽壽林榮香大姉	安政二乙卯年正月十一日	清水新左衛門善？伯母 行年八十四歳	
誠譽発源居士 説譽自宣大姉	天保十三年辛寅五月十五日 清水重兵衛慶幸 行年七十九	嘉永七年甲寅八月四日 清水慶幸妻 行年八十三歳	
進譽良載居士 觀譽貞鏡大姉	天保午年五月六日 清水久左衛門 幸道 行年四十二歳	(弘？)化三年年七月九日 清水幸 道妻 行年三十二歳	
清譽壽翁浄安居士 然譽好安智相大姉	安政三丙辰二月六日 清水長左衛 門保幸 行年七十八歳	天保十四癸卯年九月三日 清水保幸妻	
明譽楽邦安光大姉	天保元庚辰歳十二月二十八日	清水長？門妻	
觀譽量道清安居士	文政五千午歳 九月二十日	清水長左衛門？幸 行年八十有三	
泰□善童子	文化十三子歳七月二十七日	清水？助	
元文三戊午九月七日 知(幻？)童 女 元文三戊午九月十五日 廓並童女 ？保十三年 地藏			
明和三丙戊天(天？) □□童子 二月初三日			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
367	清水		童子		1731		e	単独	童
368	清水		童女		1764		e	単独	童
369	清水	家系図2-5	大	70	1783		e	単独	
370	清水	家系図2-5	居	84	1788	2.423	e	単独	
371	清水				1772		y		
372	清水						y		
373	清水	家系図8-1	居	83	1818	0.921	e	単独	
374	清水	家系図8-1	大	72	1815		e	単独	
375	清水		大		1920		y	単独	
376	清水		大		1924		h	単独	
377	清水		大				y	単独	
378	清水		大		1870		y	単独	
379	清水		居	46	1895		y	単独	
380	清水		居	10	1895		y	単独	
381	清水	家系図8-5 家系図8-5	居 大	48 42	1893 1894	1894	y	夫婦	
382	清水	家系図10-4	大	86	1915		y	単独	
383	清水	家系図10-4	居	66	1888		y	単独	
384	清水	家系図8-4	大	65	1890		y	単独	
385	清水	家系図8-4	居	66	1887			単独	
386	清水		大		1894		e	単独	
387	清水		童子		1898		g	単独	童
388	清水		童女		1883		e	単独	童
389	清水		童子		1921		y	単独	童
390	清水				1875		x		
392	清水		童女	3	1862		e	単独	童
393	清水	家系図2-8	大	22	1841		e	単独	
394	清水	家系図10-1	大	55	1837		e	単独	
395	清水	家系図10-1	居	69	1844	2.419	e	単独	
396	清水	家系図10-2	大	30	1832		e	単独	
397	清水	家系図10-2	居	61+			x	単独	

正面	左側面	右側面	背面
享保十六辛酉年 誓光童子 九月二十日			
慧明童女	宝曆十四甲申年	三月二十二日	
全譽妙安大姉	天明三癸卯年	十二月十三日清水長左衛門妻	
樂譽安?	天明八申歲	九月十日	
仏像			元?十四?七月十八日?誓清? 各靈位 安永元? □真應譽淨感居士
? 立像			
評譽安澄居士	文政元戊寅天七月二十一日	行年八十五才 清水久左衛門	
穩譽明安大姉	文化十二乙亥歲三月十日没 享年七十有二	井沢傳在衛門娘 清水久左衛門妻	
智相庵端譽利正大姉	大正九年十二月三十日歿	清水武?妻	
寬照庵德譽仁光智修居士 淨香庵照譽貞心智勝大姉	大正十三年三月十一日 清水長左衛門 行年四十九才	昭和なので省略	
華香庵茶譽巧嚴貞開大姉		明?	
麗生庵雲譽妙順貞廣大姉		明治三年?	
崇徳庵讓譽礼修恵了居士	明治二十八年十二月十一日	清水長左衛門幸知 享年四十有六	
清尚庵得譽善道居士	明治二十八年二月二十六日	清水銀右衛門 享年十有才	
還譽自到居士 朗譽清然大姉	明治貳十七年九月三十日 清水久左衛門 行年四十八歲	明治貳十六年三月十七日 清水久 左衛門妻 中村富美 行年四十二歲	
慶譽貞宏大姉	大正四年三月一日卒	清水金左衛門定幸妻 清水□□ 享年八十六歲	
義譽眞乘居士	明治二十一年二月十五日卒	清水金左衛門恵? 墓 行年六十六歲	
根譽貞慧大姉	明治二十三年九月二十八日 中村 いよ譽 行年六十五歲		
顯譽□山居士	明治十九年九月十八日卒 清水久 左衛門幸慶墓 六十六年 清水重兵衛建立		
恵譽貞芳大姉	明治二十七年十一月二日		
法花善童子	明治三十一年	清水信藏三男 雄三?	
清雲知香童女	明治十六年歲癸?三月二十九日	清水?右衛門	
□幸善童子	大正十年五月十七日歿	清水官藏二男幸治行年二才	
(ほこら)	明治八年八月六日死去	清水?長男 清水?墓 ?卒三丑月	
錦譽楓月童女	文久二年戊辰年 九月二十七日	清水長左衛門女 ?三才	
艶譽露鮮大姉	天保十二辛丑年 九月十一日 清水長左衛門保幸 娘		
雄譽利貞覺音大姉	天保八丁酉年 七月二十又五日	清水金左衛門義幸妻 行年二十有二歲	
覺譽淨應意感居士	弘化元辰年 五月二十日	清水金左衛門義幸 享年六十九歲	
想譽智般大姉	天保三壬辰年 十一月十一日	清水□津平幸典妻 生年三十歲	
(ほこら)	清水平助幸典嗣		?

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
398	清水	家系図10-2	大	52	1863			e	単独	
399	清水				1865			x		
400	清水				1876			x		
401	清水		大		1906			e	単独	
402	清水		大		1741			e	単独	
403	清水		居		1738			e	単独	
404	清水		居					y	単独	
405	清水		居	32	1905			e	単独	
406	清水		童子	11	1904			y	単独	童
407	清水		童子	2	1926			y	単独	童
408	清水		大		1884			e	単独	
409	清水		童子		1894			d	単独	童
410	清水		童女	1	1921			y	単独	童
411	清水		童子		1883			y	単独	童
412	清水		童女		1887			e	単独	童
413	清水		居		1925			e	単独	
414	清水	家系図10-4 家系図10-4	居 大	66 65	1920 1926	1926		y	夫婦	
415	清水		大						単独	
416	清水		居	64	1912			e	単独	
417	清水		大 居 大						夫婦	
418	清水	家系図10-5			1906	1921		f	夫婦	
419	清水								家	
420	清水	家系図4-7	居		1887			y	単独	
421	清水?		童子		1900			g	単独	童
422	清水?		大		1869			e	単独	
423	清水		居		1867			e	単独	
424	清水		童女		1863			e	単独	童
425	清水		童女		1868			e	単独	童
426			信女		1859			e	単独	
427	清水		居 大	71	1850		0.713	e	夫婦	
428	清水				大正			g		代々
429	清水		居		1769			e	単独	
430	清水		大		1819			e	単独	
431	清水		居	77	1818			e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
貯譽貞助大師	文久3□年三月二十六日 行年五十二歳 生所栗林邑小林清吾文康女	清水以津? 又名 清水良左衛門 又名 清水平助幸典後室	生所和村栗林組 小林清吾文康女
(ほこら)		元治二年?月十八日 清水善教妻 行年二十二歳	
(ほこら)	明治九年子六月二十三日		
齡昌庵延譽禪悅貞進大師	明治三十九年一月二十一日歿 清水長左衛門叔母 久仁享七十六歳		
安譽□詮大師	寛保元辛酉年	?五月 清水長左衛門	
養譽安清居士	元文三戊午年	二月?日	
雲譽行隨居士		?戊年十二月六日?	
閑譽寂禪居士	明治三十八年四月四日歿 清水恭三	享年三十二歳	
映譽清光童子	明治三十年七月六日卒	清水長左衛門二男清水新之助 行年十一歳	
秀幸善童女	大正十五年七月八日歿	清水?三女?行年二歳	
顯譽貞秀大師	明治十七年甲申年二月十日卒	?	
明治二十七年? 香琳善童子			
紀芳善童女	大正十年五月二十四日歿	清水官藏長女 紀久 行年一歳	
惠雲照映童子	明治十六年五月六日	清水重兵衛?男	
彩雲童女	明治二十年四月三日卒	?三女	
逸譽清雲居士	大正十四年四月十九日歿		
聰譽明道智性居士 明譽智順貞商大師	大正九年十二月二十八日歿 清水金左衛門義幸 幼名千代吉 行年六十六歳	大正十五年五月十六日歿 妻けさ 通稱□き 行年六十五歳	
盛譽妙安大師	昭和なので略	清水直司妻 齋藤喜兵衛娘 とく墓	
隆譽照善居士	明治四十五年一月三十日卒	清水直司栄幸墓 享年六十四歳	
修功安譽貞憲妙藏大師 瑞昌庵積譽崇功德彰居士 徳崇庵應譽妙廣貞順大師	位 一名、昭和なので略 明治四十四年十月二十八日歿 清水てう 享年三十五歳	昭和なので略	
清水官藏夫婦之墓	初代官藏 明治三十九年九月十六日歿(金左衛門忠幸三男)	昭和なので略 二代官藏と妻、二女	
清水家之墓 墓誌2つ清水昭二家と清水虎三郎家			
開譽法道居士	明治二十年九月二十八日	清水助五郎幸成	
英善童子	明治33年8月14日	清水?次男	
□譽貞香大師	明治2巳巳年4月2日	清水??年40	
満譽香枝居士	慶応3丁卯年3月21日	清水助五郎幸吉	
□月放山童女	文久3癸□年6月15日	清水金工門?4女	
涼譽麗温童女	慶応4戊辰年5月29日	清水□姿娘	
親紅嶺察信女	安政6未年10月8日	?	
自譽涼在居士 檀譽徳妙大師	嘉永3戊辰年7月10日 清水重左衛門墓 享年70有1	?	
清水家累代之墓	7名の記載 年号は大正以外不鮮明		
本譽注善居士	明和6□廿□月廿1日	清水助工?	
寶譽□林大師	文政2巳卯年3月21日	?宣妻	
樹譽寛光居士	文化15戊寅3月5日	清水?衛門洋童 ?77才	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・子どもの区別 童のみ記す
432	清水	家系図5-1	大		1758		e	単独	
433	清水	家系図5-1	居		1771		e	単独	
434	清水		童女		1747		e	単独	童
435	清水	家系図5-3	居	24	1771		e	単独	
436	清水		童女		1775		e	単独	童
437	清水		童女		1843		e	単独	童
438	清水		童女		1782		e	単独	童
439	清水		童女		1884		e	単独	童
440	清水		居		1878		e	単独	
441	清水		童子		1866		e	単独	童
442	清水		大	57	文久4?		e	単独	
443	清水		童子				e	単独	童
444	清水		汰尼		1776		e	単独	
445	清水		居		1755		e	単独	
446	清水		居		1789		e	単独	
447	清水		信士		1810		e	単独	
448	清水	家系図4-2	信女	19	1830		e	単独	
449	清水		童子		1769		e	単独	童
450	清水		信士		1814		e	単独	
451	清水	家系図5-4	大	51	1821		e	単独	
452	清水	家系図5-4	居	59	1822		e	単独	
453	清水	家系図6-1	法尼		1771		e	単独	
454	清水	家系図6-1			1757		e	単独	
455	清水			1	1890		h	単独	
456	清水		信女				e	単独	
457	清水		信士				e	単独	
458	清水		居	71	1891		g	単独	
459	清水		居		1890		e	単独	
460	清水		童子		1866		e	単独	
461	清水		童女	3			e	単独	
462	清水		童子				e	単独	童
463	清水		童女				e	単独	童
464	清水		童女				e	単独	童
465	清水		居		1765		e	単独	
467	清水		童子				e	単独	童
468	清水		信女		1770		e	単独	
469	清水	家系図7-1	信女				e	単独	
470	清水	家系図7-1	信士				e	単独	
471	清水	家系図2-6	大	74	1821		e	単独	
472	清水	家系図2-6	居		1791		e	単独	
473	清水		童子				e	単独	童
474	清水		嬰女		1896		e	単独	
475	清水		童女				e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
林誉光樹大姉	清水銀右衛門 妻9月18日 清水銀右衛門 妻	宝暦8戌寅?	
扁誉照安居士	明和18辛卯年	清水銀右衛門 吉宣 2月13日	
早?稲□童女 延享4?			
□誉照淳居士	明和18辛卯歲 2月朔日卒	行年20有4 清水與市	
?童女	安永4年	未2月12日	
得願恵梢童女	天保14年□3月2日		
樹専□童女	天明2寅年		
知真善童女	明治17年3月3日	?	
三誉貞教居士	明治十?寅年	?	
□花善童子	慶応2丙?年3月7日	清水重左衛門	
唯誉念浄大姉	文久4子年2月朔日	清水?行年57歳	
幻哉善童子	?	?	
近誉智接汰尼	安永5丙申年	?月?日	
随誉順住居士	宝暦5□亥年	6月初7日	
運誉本隆居士	寛政元酉年	清水?	
到誉善信士	文化7午年	正月上7日 清水?三朗	
譽誉恵音信女	文政13庚?年	行年19歳 清水助五郎 妻	
早生覚夢童子	明和16年?	清水弥吉子	
顯山慧現信士	文化11甲戌戌	清水?四郎	
皆誉智照明説大姉	文政4辛巳	清水銀右衛門幸?妻	
雲誉寶山説門居士	文政5壬午歳	清水銀右衛門幸影	
本誉妙以法尼	明和18辛卯歳	12月16日清水四良左衛門妻	
専誉以説善?	宝暦7丁丑年	5月?4日	
?	明治23年11月19日	清水久左衛門三男 清水三郎 1才	
稱月自?信女	?	?	
廣□大空信士	天保□午癸7月23日	清水市十郎	
本誉乘願居士	明治24年6月8日	清水重右衛門墓 行年70有1才	
教誉善芳居士	明治23年3月16日	清水市十郎 行年?才	
正夢善童子	慶応2?	清水重左衛門	
涼月善童女	?6月18日	清水良右衛門娘 俗名?生年3歳	
麦芽童子	文?11子5月	清水?	
稚音童女	?	清水久左エ門娘	
稚?童女	?	清水長左エ門?	
?菩薩居士	明和12?	11月24日 清水□平 正幸	
秋幻童子	?文?7月	清水?	
須説相智信女	清水?	明和7?	
□誉本立信女	?	清水忠藏妻	
転誉法随信士	?この部分1枚消去	清水忠藏墓	
盛誉慧住妙生大姉	文政4癸巳	清水銀右衛門□邦妻	
照誉極住楽還居士		寛政3年□次辛吏2月26日 清水銀右衛門?墓	
玉仙童子位	安永	清水□重良	
清夢嬰女		明治29年10月3日死	
法雲童女	?	清水□く建立	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
476	清水	家系図10-4	童女				e	単独	童
477	清水		童女	2			e	単独	童
478	清水		童女	2			e	単独	童
479	清水		童子				e	単独	童
480	清水		信女		1781		e	単独	
481	清水	家系図7-1	信士				e	単独	
482	清水	家系図7-1	信女				e	単独	
483	清水		大				e	単独	
484	清水	家系図9-1 家系図9-1	居 大	81 69	1848	1.771	e	夫婦	
485	清水	家系図9-3	居	22			e	単独	
486	清水		童子		1741 ?		a	単独	童
487	清水		童子				e	単独	童
488	清水		童子				e	単独	童
489	清水		信女				d	単独	
490	清水	家系図9-2	大				d	単独	
491	清水	家系図9-2 ?	大	41	1861			単独	
492	清水	家系図9-2	居	63	1866			単独	
493	清水		童子				e	単独	童
494	清水		童子				e	単独	童
495	清水		童子					単独	童
496	清水		童子		1784		d	単独	童
497	清水		童子		1843		e	単独	童
498	清水	家系図1-5 ? 7	信士				e	単独	
499	清水	家系図3-4 ? 6	信士	69+	1798+		e	単独	
500	清水		信女				e	単独	
501	清水						e		
502	清水		信士				d	単独	
503	清水						y		
504	清水		信女				e	単独	
505	清水						h	累代	
506	清水						h	累代	
507	清水				1725 ?		a		
508	清水		信士				d	単独	
509	清水		信士				e	単独	
510	清水						x		
511	清水						x		
512	清水						x		
513	清水		信女		1708		d		
514	清水		居 大		1581 (建立1987年) 1587		y	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
幻生善童女	?	3代目 清水全左衛門娘	
稚綾善童女	天保?	清水良右衛門娘俗名キミ生年2歳	
隆憐□秋童女	?	清水長三郎娘	
? 童子	明和	清水? 三郎	
光誉良輝信女	天明元丑年	清水重?	
延誉転随信士	?	清水忠藏妻	
實□妙相信女	明宝(?)	清水忠藏妻	
頂誉智灌大姉	? 午天	正月24日清水三? 門	
到誉快元居士 快誉晴光大姉	?	嘉永元年申11月4日 清水? 妻	
忠誉義孝居士	?	清水銀之輔墓 享年20?	
華□童子 寛保元?			
説喜童子	明和?	清水?	
? 童子	明(?)	清水?	
記屋受讚信女	? 9月朔日	清水忠藏娘	
倫誉植□大姉	? 未年7月12日	清水右作妻	
緑誉深貞大姉	清水三左エ門妻? 俗名? 享年41	文久元年辛酉年	
激誉輝雲居士	?	清水三左衛門墓 享年63	
光? 童子 2月十?			
照幻童子	安永	清水久平	
稚芳善童子	?	37808	
稚□童子 天明4甲辰天 7月29日			
霞匂善童子	天保14年 37634	清水幸由二男 清水貞作 生年5歳	
邦山念道信士	?	清水源五右衛門?	
□誉得生信士	?	10月17日卒清水文右衛門	
□翁寂玄信女	天保?	37697	
?			
明和10? 寅 仙山□信士位 6月16日			
?			
安? 7□室? 生信女 5月廿?			
清水家累代之墓	?		?
清水時平累代之墓			
地藏型 享保10? 寅? 月13日			
月照靈? 窓信士			
遠空通□信士			
家型	?	?	
家型			
家型			
宝永5子年 掃真妙顯信女靈位 11月28日			
天正9年寅3月19日 時平 遠月宗玄居士 任室寿貞法尼 天正15年辰8月8日時平妻			昭和62年建立

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
515	清水		居 大					g	夫婦	
516	清水		信		1773			d	単独	
517	清水		童子					e	単独	童
518	清水		童子					e	単独	童
519	清水							d		
520	清水				1734			a	単独	
521	清水		信士 信女		1854 ?			e	夫婦	
522	清水		信士					d	単独	
523	清水		信士					d	単独	
524	清水		信士					d	単独	
525	清水		侍者		1784			d	単独	
526	清水		信女		1832			e	単独	
527	清水		信士 信女					e	夫婦	
528	清水		信女		1808			d	単独	
529	清水		信女		1780			e	単独	
530	清水		信女					e	単独	
531	清水		居 大					d	夫婦	
532	清水							e	単独	
533	清水		大					e	単独	
534	清水		大					e	単独	
535	清水	家系図20-5 (小平治)	居	18	1813			e	単独	

図3-8

図4-7

536	清水		居 大		1870			e		
537	清水							e		
538	清水							h	家	
539	清水		居					e	単独	
540	清水							e		
541	清水							d		
543	清水							y		
544	清水							a		
545	清水		居					e	単独	
546	清水		童子					e	単独	童
547	清水		大		1802			e	単独	
548	清水		大		1813			e	単独	
549	清水		居					e	単独	
550	清水		童子					e	単独	
551	清水							e	家	

正面	左側面	右側面	背面
藤登栄因精道居士 應登貞順淨恩大姉	昭和62年以下省略		
安永2 光星明受信女			
光善童子	寛政？	？	
栄春禪童子	？	清水？	
？信？			
？遷？位 享保19寅5月16日			
相登好□信士 妙善智好信女	？ 10月	安政元？3月17日 ？妻	
□？信士			
宝曆？ 木□折言信士 2月8日父助			
？光妙信士？位10月朔日			
天明4辰年 教順待者？ 8月24日			
自然□正信女	天保3	37656	
？雲諦受信士 相室妙頭信女	寛(?) 37927	俗名清水？	
文化5辰年 随覚迎真信女 正月初5日			
安永9 ？岸妙照信女 37692			
想登一住信女		清水文左エ門(?)	
檀養山寿居士 安登貞谷大姉	？	？	
？子	？	清水平？門子	
覚室貞園大姉	？	清水？左衛門 貞記妻	
松林祥翠大姉	？	清水小左衛門玖義妻	
祐山哲明居士	文化？	清水周治墓 行年18	
通達法涉居士 寒□妙威大姉	？没	明治3	
翠顔？	寛政？巳2月		
清水源家之墓			
月峯了心居士	？	清水文八	
光雪？正登知□妙？	？	延？年？月？3日	
？			
？			
？			
桃□達源居士	文政□戌4月11日	清水源助	
慧秀禪童子	？	清水(長？)	
久林妙昌大姉	享和2子？	37664	
□應心□大姉	文化10？癸酉年5月？	？	
祖峯従天居士	？	？	
智幻童子	？		
清水家之墓	？	？	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
552	清水		居 大				h	夫婦	
553	清水		居				e	単独	
554	清水		居 大				e	夫婦	
555	清水		大				e	単独	
556	清水		大	67			f	単独	
557	清水	家系図19-4	居	56	1792(1798)	11.367	f	単独	
558	清水						g	家	
559	清水	家系図20-4	居	49	1820	5.325	f	単独	
560	清水	家系図20-4	大	28	1800		e	単独	
561	清水		大				e	単独	
562	清水		童子				e	単独	童
563	清水		居				e	単独	
564	清水	家系図15-2	居	17	1762		e	単独	
565	清水		居		1761		e	単独	
566	清水		大				e	単独	
567	清水		居		1762		e	単独	
568	清水		居				e	単独	
569	清水		大 居		1917		g	夫婦	
570	清水		童子				e	単独	童
571	清水		居		1743		e	単独	
572	清水		大		1753		e	単独	
573	清水		大		1835		e	単独	
574	清水		居		1805		e	単独	
575	清水		大				e	単独	
576	清水	家系図19-3	居		1752		e	単独	
577	清水	家系図19-3	大		1764		e	単独	
578	清水		童女				e	単独	童
579	清水						d	単独	
580	清水		大徳		1727		e	単独	
581	清水		法尼		1716		e	単独	
582	清水		居		1738		?	単独	
583	清水		法尼		1729		e	単独	
584	清水		大		1705		e	単独	
585	清水						e	単独	
586	清水		童子 童子		1801		e	複数	童
587	清水		童女		1798		e	単独	童
588	清水				1799		e	単独	
589	清水	家系図15-2	居		1741		e	単独	
590	清水						?		
591	清水		大				d	単独	
592	清水						?		
593	清水						家型		
594	清水						家型		
595	清水						家型		

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
機應良親居士 寿海淨信大師	昭和なので略	同人妻かづ 行年	
月峯了心居士	?		
高岳量天居士 孤月妙園大師	?	?	
雲法慧淨大師	?	清水?明?	?
□□素光大師	行年67年	長い文	?長い文
?岳祖天居士	寛政4?	清水忠助□□	
清水家之墓			
松翁一道居士	文政3年庚辰2月?卒	清水小左衛門玖範?	
淨照清輪大師	?	清水準太玖範妻 □世28歳	
安室了忍大師	?	清水準太玖?妻	
静光禪童子	?政2?	清水保?	
法庵玄説居士	?	清水小左衛門	
雪光智月居士	宝暦12壬午年11月9日	俗名 清水長蔵	
高溪慈蓬居士	宝暦11?	俗名 清水?吉	
婦去春芳□居大師	?	37701	
別峯了雲居士	宝暦12壬午11月12日	俗名?	
秋霖玄暗居士	?	?	
蓮開妙光大師 本覚源雄居士	大正6年8月24日 清水久美 享年63	昭和なので略	
明空童子	?	清水?	
山外祐松居士	寛保3	37844	
清室慧流大師	□□4巳亥11月12日	宝暦3壬8月4日	
□林偉光大師	天保6?年?	清水(長?)	
實山圓成居士	文化丁2癸?3月とあり	長い碑文	
海南圓珠大師	寛政?10月?	清水?	
別峯圓明居士	宝暦2?	?	
慧了妙智大師	明和元年?	清水?左衛門	
智參禪童女	暦?年		
?			
覺譽□良大徳	享保12?12月15日	清水助?郎	
清譽良意法尼	享保元?月7日没	清水助治郎嬢	
覺譽本□居士	元文3戊午天	37630	
願譽良本法尼	享保14巳酉天	37669	
?相安大師	宝永2年□酉8月7日	?	
?			
良□禪童子 理幻禪童子	寛政?午 11月5日	享和元(午?)8月18日	
靈苗禪童女	寛政10年甲霜月14日	?	
?		寛政11?	
天朋林秋居士	享保元?丙申7月21日	清水清之丞	
?			
?金大師			
?			
家型			
家型			
家型			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
596	清水		大		1806			e	単独	
597	清水		居		1755			e	単独	
598	清水							家型		
599	清水		信女		1725			e	単独	
600	清水	家系図13・4	信士		1810±			e	単独	
601	清水		童子					e	単独	童
602	清水							e		
603	清水							a		
604	清水							a		
605	清水		信士					e	単独	
606	清水							e		
607	清水							d		
608	清水				1719			e	単独	
	清水		信士		1765			e		
610	清水							d		
611	清水		童子 童女 童子 童子		1785 1788			e	複数	童
612	清水							e		
613	清水	家系図12-1?	居 大		1720			e	夫婦	
614	清水	家系図11-3?	居 大		1686 1700			e	夫婦	
615	清水		信女		1728			d	単独	
616	清水		居 大		1790			e	夫婦	
617	清水		居 大		1735			e	夫婦	
618	清水							?		
619	清水							?		
620	清水		禪定門		1718			d	単独	
621	清水		信女		1830+			e	単独	
622	清水		信士		1792			e	単独	
623	清水	家系図11-9	大		1854			e	単独	
624	清水	家系図11-9	居	88	1860		2.551	e	単独	
625	清水	家系図11-5	居 大		1727 1723	1723		e	夫婦	
626	清水							e		
627	清水		信女		1755			e	単独	
628	清水	家系図16-3	居 大		1837			e	夫婦	
629	清水		大		1820			e		
630	清水							d		
631	清水				1732			a		
632	清水	家系図11-7?	居		1733			e	単独	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
誓譽栄雲大姉位	文化3丙寅年	9月4日清水長四郎妻	
王誓誓安居士	宝暦5巳亥年	37709	
家型			?
?園信女	享保10甲?天		
寶光祖子信士	文化辛未年2月朔日	清水廣治	
?童子			
?			
?			
?			
元祿?			
□去 清峰?			
?			
? 明和2巳酉年 祖翁寶燈信士 2月?	? 午?	享保4歲戊亥 清水清一	
?			
?2月19日 幻露童子 天明5 12月12日禪超童女 天明8甲7月?日満道童子 ?政?戌年 □歸童子?月21日			
三界萬靈塔			
?山宗純居士 孤月仙芳大姉	享保5年 庚子6月9日 清水□弥	?	
明山宗白居士 元法理貞大姉	俗名 清水久右衛門 貞享3年丙寅11月13日	? 元祿13? 壬午11?	
享保13戌申 綿真霜林智葉信女之□9月17日			
松雲祖天居士 定雲妙禪大姉	寛政2庚亥7月16日	?	
天了頂眼居士 天了智本大姉	享保20年清水? 巳卯2月29日	?	
?			
?			
享保3年? 隨水禪定門 靈 3月3日			
孤岸妙峯信女	天保?巳10月24日	?	
智外了雲信士	寛政4?3月?	?	
□室会寛大姉	嘉永7甲寅年5月4日	?正?妻	
雍山禪香居士	萬延元庚申年4月3日	清水?左衛門正幸 ?18卒	
智本?居士 圓月秋嶺大姉	享保12丁未年10月15日 俗名清水新之丞	享保8癸?年8月3日 ?妻	
?			
宝暦5 松室真寒信女			
本法自通居士 興屋昌隆大姉	天保8年丁酉11月17日	慶応?12月22日 ?妻 清水玄仙墓	
端山明正大姉	文政3年歲次庚辰10月3日	清水?妻	
?			
?	享保17年	?	
徹山良道居士	安永2癸巳年	7月10日 俗名清水?伊七	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
633	清水	家系図11-8?	居		1800		e	単独	
634	清水	家系図18-1?	信士		1778		d	単独	
635	清水		信女		1771		d	単独	
636	清水		信女		1830		e	単独	
637	清水		信士		1798		e	単独	
638	清水	家系図16-1?	信士	56	1783		e	単独	
639	清水				1758		e	単独	
640	清水		信女				d	単独	
641	清水		居		1874		e	単独	
642	清水	家系図16-1?	信女		1803		e	単独	
643	清水		信女		1719		d	単独	
644	清水	家系図15-3?	信士	55	1806?		e	夫婦	
645		家系図15-3?	信女	48	1808				
646	清水		定門				d	単独	
647	清水				1806?		e	単独	
648	清水		童女 童女 童女		1729		a	複数	
649	清水		禪定尼		1750		d	単独	
650	清水		信士		1817		e	単独	
651	清水						d		
652	清水		信士		1803		e	単独	
653	清水		信士		1814		e	単独	
654	清水		童女				e	単独	童
655	清水		信士		1805		e	単独	
656	清水						h	単独	
657	清水						y	単独	
658	清水				1929		h	単独	
659	清水		童子				y	単独	童
660	清水						y	単独	
661	清水	家系図13-5			1873		e	夫婦	
662	清水		居 大		1900		e	夫婦	
図3-9									
図4-8									
1	馬場				1790		e	単独	
2	馬場				1723		d	単独	
3	馬場		信女		1718		d	単独	
4	馬場		信士				d	単独	
5	馬場		信士				e	単独	
6	馬場		信士		1754		d	単独	

正面	左側面	右側面	背面
聲岳知間居士	寛政12?5月4日	?	
長江智徹信士			
明和8卯天			
異□了同信女	文政13年庚寅4月19日	?	
廓然慧性信士	寛政10戊巳 6月26日二鳥	?	
性屋道廉信士	天明3癸?	?	
宝曆8?玄界禪?			
婦去寒室真泉信女3月13日			
□岳孝道居士	明治7年?8月24日	行年	
空巖玄脱信女	享和3癸亥6月?	清水玄□妻	
享保4巳支年			
寒窓智芳信士	文化3?寅?2月16日	天?辰?	
真□妙博信女		?	
元(禄?)??元?定門?			
□短良?女	文化3?寅年7月16日	清水?妻	
?寒童女 享保?12月21日 雷智童女 ? □正童女 享保14巳酉4月11日			
寛延3?午天 慧燈禪定尼位 3月6日			
□底從松信士	文化14丁丑年8月26日	清水?右衛門	
?			
□光智□信士	享和3癸亥10月?	?	
覺翁素道信士	文化11甲?6月21日	清水?	
?明16丑天 智覺童女8月3日			
英仙良秀信士	文化2甲戌5月2日	?	
清水真三郎墓	清水侍左衛門二男 明?1月16日卒		
清水明德墓		?4月16日卒清水徳?	
昭和4年6月14日没 昭涼□子	略		
泰賢禪童子	?		
清水三郎墓		明治?11月7日卒清水文助三男	
清水権左衛門夫婦之墓	天 明治6年8月19日	?	
宣徳明伝居士 順愛明孝大師	明治33年9月20日 清水伝五郎 行年75歳	?	
□屋威神□司	寛政二庚		37765
享保八卯天 □月走林?位 四月二十日		?	
享保三?慧春信女?之靈 ?月十四日		?	
元禄??道住信士 靈位			
福法寿海信士	寛政十?年十一月十一日	馬場弥五右衛門	
宝曆四戌年		?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
7	馬場		信士		1718		d	単独	
8	馬場		信女		1744		d	単独	
9	馬場		信士				e	単独	
10	馬場						x		
11	馬場		信女		1745		d	単独	
12	馬場								
13	馬場						d		
14	馬場				1747		d	単独	
15	馬場						d		
16	馬場						x		
17	馬場						x		
18	馬場						x		
19	馬場						x		
20	馬場		禪定門？ 居士？				d	単独	
21	馬場		信士				d	単独	
22	馬場		定門		1675		d	単独	
23	馬場						d	複数	
24	馬場		信士				d	単独	
25	馬場	家系図5-1	居士 大姉		1760 1755	1.431	e	夫婦	
26	馬場		大姉		1729		d	単独	
27	馬場	家系図2-1	居士		1742	0.352	e	単独	
28	馬場	家系図1-4	信女	81	1731		d	単独	
29	馬場	家系図1-4	信士		1727	?	d	単独	
30	馬場		信女		1702		d	単独	
31	馬場						d	単独	
32	馬場				1675		d	単独	
33	馬場				1716		f	単独	
34	馬場		信女		1736		d	単独	
35	馬場		信女				d	単独	
36	馬場		信女		1750		d	単独	
37	馬場		信女				d	単独	

正面	左側面	右側面	背面
享保三戌年誓齋信士之位 三月？日		？	
寛保四子年□屋妙相信女 四月十九日	？	？	
？永三天陽(雲?)白善信士 十一月？日		？	
？			？
延享二乙丑天智屋忠圓信女 十一月六日	？	？	
？年？覚？ 八月？			
四月十一日		？	
(延?)享四 ？祖雪智？			
？			
？			
？			
？			
延宝 光榮寿禪(居?) 二月十一日			
？卒 婦？覚法道喜信士 ？月？日			
延宝三？婦元林富理現禪定門 靈十月四			
1つは？ 元？			
(元禄?)？信士靈位 六月三日			
根譽迎善居士 求譽妙迎大師	宝曆十庚辰九月十三日 俗名 馬場伊右衛門	宝曆五巳亥八月十二日 妻	
享保十四巳酉天運譽清心大師 十月三十一日			
達譽榮運居士	寛保三亥年	十月朔日	
享保十六辛亥年 婦去得譽榮心信女靈 九月二十九日			
享保十二乙未年 婦去榮譽得運信士靈位 七月十三日			
元禄十五 元富林？信女 十二月二十九日			
(寛?)？四 ？信？ 二月廿？			
延宝三？婦？運？ 靈位 五月三日			
享保元年 利譽慶運？ 十月二日			
享保二十一丙辰年 相惠運智迎信女靈 正月初六日			
親月妙光信女 ？月？日			
寛延三庚午天 婦元隔室理詮信女 正月初三日			
？見？智□信女 一月二十？			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
38	馬場	家系図5-2	信士		1737		?	d	単独	
39	馬場		信女		1739			e	単独	
40	馬場		信女		1736			d	単独	
41	馬場		定門					d	単独	
42	馬場		信女		1725			d	単独	
43	馬場				1789			e	単独	
44	馬場		信士 信女		1748 1734			e	夫婦	
45	馬場	家系図16-1 家系図16-1	信士 信女	75	1780 1807		?	e	夫婦	
46	馬場	家系図1-13	童子	13	1877			e	単独	童
47	馬場	家系図7-2 家系図7-2	信士? 信女		1784 1780		0.502	e	夫婦?	
48	馬場	家系図15-1 家系図15-1	信士 信女		1779? 1754			e	夫婦	
49	馬場		信士		1725			d	単独	
50	馬場		童子		1884	1888		e	家族	童
51	馬場	家系図13-3 家系図13-3	信士 信女	64	1810 1835		0.641	e	夫婦	
52	馬場	家系図6-2	信女	61	1798			e	単独	
53	馬場	家系図6-2	信士	80	1806		0.016	e	単独	
54	馬場	家系図6-2	信女		1762			d	単独	
55	馬場		居士 大姉	65	1888			y	夫婦	
56	馬場		信士		1736			d	単独	
57	馬場		信士		1744			d	単独	
58	馬場	家系図1-7	信女		1741			d	単独	
59	馬場				1717			d	単独	
60	馬場		信女		1743			d	単独	
61	馬場		信士		1698			d	単独	
62	馬場		童女					e	単独	童
63	馬場		定門		1734			e	単独	
64	馬場		童子					e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
元文二丁巳年 正岸達道信士靈 二月二十七日			
婦去以化月智詠信女 靈位	(元文?)四己未年	二月初四日	
元文元丙辰年 林運室□照信女靈 六月二十六日			
元??岸□禪定門 三月五日			
享保十乙巳天□去中屋妙現信女 九月二十四日			
(決?) 慶譽?	?	寛政元酉十月十二日 馬場勘之丞塚	
白譽兼光信士 本譽雲連信女	延享五戊辰二月二十日	享保十九甲寅正月十三日 馬場勘之丞塚	
感空映随信士 現室映潭信女	俗名 馬場市良兵衛 安永九庚子六月朔日	文化四年正月七日 良兵衛妻	
尋芳遊仙童子	明治十年二月?	?二 三男 行年十三	
(本?)譽鑑哲信女(信士の間違いか) 梅譽忠靈信女	天明四辰年□正月二十九日 馬場忠三?(読み間違いか?)	安永九庚子年二月(二十?)日	
花岳榮舜信士 理運受生信女	安永八?四月十七日 馬場金兵衛	宝暦四甲戌歲 三月十六日	
享保十六 六月?行覚現利信士 十二 月十三日			
清圓善童子 荷圓善童子	明治十七年一月三十日忠兵衛四男 馬場義直 ?	明治二十一年一月二十六日 忠兵衛五男 馬場(恵?)四郎 ?	
□譽香運信士 法譽知気信女	文化七庚?年四月二十七日 馬場新平	天保六未年五月二十三日 馬場新平妻 行年?十九	
春應妙全信女	寛政十戊午年 正月十八日	武宿村 □仁之丞娘 馬場半右衛門妻 行年六十一歳卒	
來雄迎全信士位	文化三寅年八月十九日	馬場半右衛門 行年八十歳	
宝暦十二?午年 寒分□榮信女 十二月三日			
典譽榮稚居士 恩譽貞鴻大師	碑文:平次~信直 明治二十一年 十二月七日卒 行年六十五歳		碑文
享保二十一丙辰 頼入利圓信士 正月二十八日			
延享元甲戌年 樹譽實雲信士 十一月十九日			
元文六?陽會妙白信女 靈位 ? 月十二日			
享保二?? ?七日			
寛保三申(または甲)午年 圓譽□急信女 十二月二十日			
元禄十一亥年 勸譽善急信士 靈位 八月二十六 日			
梅秀童女位			
享保十九年 雪峯禪定門 寅正月 十四日			
實岩童子	安永?	?月二十三日	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
65	馬場		童子		1773			d	単独	童
66	馬場		信士					d	単独	
67	馬場	家系図9-2	大姉	58	1802			h	単独	
68	馬場		童子		1733			d	単独	童
69	馬場		信女					e	単独	
70	馬場	家系図7-1	信士		1774			e	単独	
71	馬場		童子 童子					d	複数	童
72	馬場		信女		1764			e	単独	
73	馬場		童子		1779			e	単独	童
74	馬場		信士		1748			d	単独	
75	馬場							d	単独	
76	馬場		信女		1728			d	単独	
77	馬場							d		
78	馬場		信女					e	単独	
79	馬場		信士		1752			e	単独	
80	馬場		居士 大姉		1761			e	夫婦	
81	馬場	家系図9-2	信士 信女	27 81	1789 1827		1.014	e	夫婦	
82	馬場	家系図2-2	居士 大姉	75	1788 ?		0.89	e	夫婦	
83	馬場		童女 童子	2 6	1780 1784			d	家族	童
84	馬場							e		
85	馬場	家系図9-1	居士 大姉	76	1783 1796		?		夫婦	
86	馬場	家系図4-3	信士 信女	84	1782 1806		?	e	夫婦	
87	馬場	家系図1-9	居士		1782		2.537	e	単独	
88	馬場	家系図1-9	大姉		1810			e	単独	
89	馬場		童女 童女		1784	1796		e	複数	童二人
90	馬場	家系図2-4	大姉 居士 大姉	79 64	1781 1823 1821		2.418	e	家族 (夫婦+1)	
91	馬場				1797			e	夫婦	
92	馬場	家系図14-2	信士		1755			e	単独	
93	馬場	家系図14-1	信士 信女		1771 1784		1.114	e	夫婦	
94	馬場							e		
95	馬場		童女		1874			y	単独	童

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
安永二甲午 普寛童子 二月十一日			
? 亥 婦去超岳見隨信士 四月二十九日			
明譽達恵大姉	享和二壬戌年九月二十八日	馬場仲右衛門妹	
享保十八癸丑天 受覚童子之□ 十二月十六日			
往譽了生信女	宝暦?	門??妻	
誠譽頓説信士	安永三?二月十六日	馬場忠兵衛信?	
夏の童子 二十九日 幻夢童子 二十七日 各位			
應譽貞威信女	宝暦十四甲申天	四月(二十?)七日	
稚善童子	安永己亥天?三	馬場?(三子?)	
延享五?天 白翁連光信士 二月?日			
?保?(去?)本室妙蓮信?位 正月二十三日			
享保十三 是讚妙利信女靈 三月十三日			
?			
樹贊齋信女			
養山授心信士	宝暦二壬	?	
通譽善良居士 載譽良運大姉	宝暦十一辛巳六月十七日 載名 馬場□左衛門	天?妻	
根應徳善信士 霜屋貞厚信女	寛政元年八月二十二日 行年二十七	文政十亥年六月二十五日 行年八十一歳	要確認⇒
清譽受玄居士 岸譽妙清大姉	天明八一(二十七?)日 岸名 馬場儀右衛門	天明八申一月十七日 馬?妻	
桃?童女 ?一月十?日 知覚童子 天明四?年九月十五日			
?	天?	?	
載譽運教居士 正譽妙教大姉	天明三年癸卯十月上一日 馬場藤右衛門	寛政八年丙六月一日	
運譽の應信士 夾譽應感信女	天明二寅天 十月?日 馬場武兵衛	文化三寅年 八月十一日 妻	
清譽淨運居士	天(明?)二?寅年	九月十?	
繞譽智染大姉	文化七庚午歳	馬場弥平治 妻	
幼?童女 靈?童女	天明四辰天 八月二十六日	寛政八?辰年正月十六日	
智譽理貞大姉 譽宗隨居士 安譽貞宗大姉 位	天明元巳年十二月十九日 文政六未年二月六日 馬場儀右衛門婦	安 文政四寅年八月二日 次妻?	
?		寛政九丁巳年(七月?)	
超音見隨信士	宝暦五乙□四月二十九日	馬場勝右工門	
樹譽見?信? 運譽真林信?	明和八丙卯(二月?)? 天明四甲辰?月四日	馬場大右衛門	
?			
?善童女	明治七年九月十三日歿	?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
96	馬場	家系図13-1	信士 信女	60	1781 1798		0.155	e	夫婦	
97	馬場				1780			y		
98	馬場		童子		1884			y		童
99	馬場		信士					e	単独	
100	馬場		童子		1855				単独	童
101	馬場	家系図7-3	信士 信女	75	1801 1842		0.768	e	夫婦	
102	馬場	家系図4-4	信士 信女	41 93	1798 1850		0.845	e	夫婦	
103	馬場		信女	22	1871			e	単独	
104	馬場		童女					e	単独	童
105	馬場		信女		1810			e	単独	
106	馬場	家系図9-3	居士	23	1794				単独	
107	馬場		童子	1	1896			y	単独	童
108	馬場									
109	馬場		大姉 居士 大姉		1802 1793	1765			複数 (夫婦)	
110	馬場	家系図8-1	居士 大姉	56 56	1785 1795		1.786	e	夫婦	
111	馬場		大姉		1766			e	単独	
112	馬場				1873			y	単独	
113	馬場	家系図5-3	居士 大姉	66	1812 1819		0.682	e	夫婦	
114	馬場		信女		1782			e	単独	
115	馬場		童女					e	単独	童
116	馬場		信士		1820			e	単独	
117	馬場		大姉		1805			e	単独	
118	馬場	家系図11-1	居士	82	1838		2.285	e	単独	
119	馬場	家系図4-5	信士	19	1806			e	単独	
120	馬場	家系図16-2	信士	50	1817		0.017	e	単独	
121	馬場		童子		1817			e	単独	童
122	馬場	家系図2-5	居士 大姉	50 74	1844 1867		0.865	e	夫婦	
123	馬場	家系図2-5	居士	23	1816			e	単独	
124	馬場								単独	
125	馬場		居士 大姉		1826 1805			e	夫婦	
126	馬場		信女		1870			e	単独	
127	馬場	家系図11-3	童子	4	1823			e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
教譽？信？ 見譽？隨信？	天明元？ 俗名馬場？	寛政十年年 十一月十？	
？	義 安永九寅子十二月十三日 寛政三辛(亥?)七月二十三日	馬場？之丞	
輝含善童子	？	明治(十?)七年十月十八日歿	
□山口□信士	？	？	
支秋善童子	安政二乙卯年八月十二日	馬場忠作□(せがれ)	
□譽邊順信士 音譽順調信女	？元二月二十二日	天保十三寅年(六?)月二十九日 馬場？兵衛 妻	
然譽前現信士 攝譽妙取信女	寛政十年年3月？ 馬場普曾八	嘉永三年戌十一月九日	
麗譽夏雲信女	明治四辛未四月二十二日卒	馬場六左衛門 俗名？行年 二十 二才	
冠光善童女	？	？	
旭室貞監信女	文化七庚午四月三日	馬場源左衛門娘	
游譽流證居士	寛政六申寅十二月二十五日	馬場善重郎	平成の建立
知雲善童子	義一 長男馬場一？ 二才	明治二十九年九月二十八日歿	
？			
教譽妙願大師 音譽自樂居士 練譽覺音大師	寛政五年癸丑 十一月二十三日	享和二子戌年三月十三日妻 馬場仲右衛門 明和二乙酉年六月二十八日妻	平成の建立
相譽貫好居士 興譽相順大師	寛政五癸丑十二月二十三日	？娘行年五十六歳(卒?) 馬場弥五左衛門知正後妻	
察譽智悦大師	明和三□年	八月五日 馬場？左エ門 妻	
馬場雄三郎之墓	明治六年酉十一月八日	？	
光譽道鮮居士 遊譽貞鮮大師	文化九壬申二月十五日 馬場源左 衛門行安 行年六十六歳	文政二戌年十月(十四?) 馬場行安 ？年？十六 土田源 衛？	
智迎理真信女	天明二(未?)年十二月十九日	馬場儀平治 妻	
祐心善童女	？明？	？	
恭譽良覚信士	文政三？年	馬場高右衛門	
求真院欣譽貞親妙浄大師	文(化?)二？ 三月三日	上田原村山浦五良兵衛娘 馬場政之右衛門 主？妻	
大興院縁譽親隨良詮居士	天保九戌戌年 六月四日	行年八十二歳 馬場政之右衛門 ？	
好譽相秋信士	文化三寅年七月二十日	馬場徳次郎	
量譽善道信士	文化十四丁丑天 二月十八日	馬場弥五郎	
寿泡童子	文化十四丁丑 正月上八日	□□？	
寂譽證隨居士 詠譽雪吟大師	天保十五甲辰年二月二十三日 馬場義右衛門	慶応三丁卯年十二月十七日	
利譽順乘居士	文化十三丙子七月朔日	二十三歳 馬場豊吉	
？靈	十二月十二日	馬場伊兵衛	
即譽光生居士 圓譽智教大師	文政九丙戌歳三月朔日 馬場□治(盛?)信	文化二？申？ 妻	
秋岳粉採信女	明治三年十月十三日 馬場太右衛 門娘	武塚榮？？塚良子 建立	
英教童子	文政六未天 五月十四日	馬場？政作□四歳	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
図3-10										
図4-9										
128	馬場		童子					e	単独	童
129	馬場		童子		1835			e	単独	童
130	馬場		童子		1808			e	単独	童
131	馬場		童子		1840			e	単独	童
132	馬場				1869			y	単独	
133	馬場		大姉	39	1826			e	単独	
134	馬場	家系図5-4	居士	73	1854		1.749	e	単独	
135	馬場	家系図14-4	信士	57	1828			e	単独	
136	馬場		童子		1798			d	単独	童
137	馬場				1841	1854		e	夫婦?	
138	馬場		童子					e	単独	童
139	馬場		信士		1820			e	単独	
図3-11										
図4-10										
140	馬場	家系図10-3	信士 信女	62 72	1835 1857		0.855	e	夫婦	
141	馬場		童子	4	1868			e	単独	童
142	馬場	家系図1-11		43 77	1835 1874		0.818	e	夫婦	
143	馬場	家系図16-3	大姉 居士 大姉	36 72 39	1835 1868 1841		0.979	e	複数	
144	馬場		信士 信女		1810 1831			e	夫婦	
145	馬場	家系図9-3	居士 大姉	75	1831 1835		3.352		夫婦	
146	馬場	家系図14-4	信士 信女	68	1830 1856		0.969	e	夫婦	
147	馬場		童女		1839			e	単独	童
148	馬場		信士					e	単独	
149	馬場	家系図12-2	居士	20	1849			e	単独	
150	馬場									
番号なし	馬場		童女					e	単独	童
151	馬場	家系図8-3	居士 大姉	64	1855			e	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
稚？童子		馬場保藤次 行？	
高然童子	天保六乙未年正月二十五日	馬場半右衛門 息男□□戊	
回□善童子 位	文化？五月十(五?)日	？	
？籍童子	天保十一年庚子 十月朔日	徳□□□ 馬場徳？	
馬場？太郎之墓	明治二年巳？月一日	？	
量譽寿光大姉	馬場源藏書居室 文政九戌二月二十六日 三十九歳而卒去 源左衛門行安四女也	？	
衆譽群道居士	嘉永七甲寅 年 三月二十九日	？野□ 矢島三郎兵衛男 馬場源藏 行年七十三歳 □？	
本室誓光信士	文政十一年子四月十一日	馬場林左衛門	
寛政十戌年 □善童子 ？(十六?)日			
真成實成信？ 養譽寿貞信？	真 天保十二年四月五日歿 嘉永七年三月？日	？	
□窓童子	？	？	
隨譽感光信士	文政三(丑?)年閏正月五日 馬場 市郎兵衛	？	
一譽自脱信士 光譽明照信女	天保六乙未年閏七月九日 行年六十二歳 馬場大藏	安政四巳六月八日 行年 七十二歳	
秀苗？童？	慶応四年 辰五月十八日	馬場弥平次四男 全 赤助墓 年 四歳	
？	天保六年七月四日 馬場？	明(治?)七年十一月八日 馬場□跡？ ？之郷田尾氏娘行年 七十七	
□譽稚女大姉 曉譽楓□居士 (乘?)譽麗光大姉	明治元戊辰年九月十一日 馬場弥五郎信治 享年七十二歳	照 天保六乙未年四月十二日 行年三十六歳理喜 (乘?) 天保十二辛丑年閏正月三 日 行年三十九歳澄世	
来安養全信士 養岳安明信女	文化七庚午歳七月十五日 馬場伊右衛門	天保二辛卯年十月二十日 松井氏里左子	
泰譽安念居士 安譽智念大姉	天保二卯月十九日 馬場伸右衛門	天保六未閏七月三日 馬場伸右衛門妻	平成の建立
一到来安信士 梅室寿光信女	文政十三庚寅行年七十一才 十二月？七日 馬場太右衛門	安政二乙卯年 正月四日行年七十八？	
秀倫童女	天保十亥年	十二月九日？エ門娘	
素月勇山信士	文？寅年三月十四日	馬場□？エ門	
濟譽雄心居士	嘉永二巳酉年 三月朔日卒	行年二十歳 馬場長作墓	
墓誌：省略			
？光善童女			
直譽俊道居士 俊譽智慧大姉	安政二乙卯四月二十九日卒 馬場興三郎信成	？	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
152	馬場								
153	馬場		信士 信女		1827		e	夫婦	
154	馬場	家系図9-5	大姉	44	1862		e	単独	
155	馬場	家系図9-5	大姉	39	1852		e	単独	
156	馬場	家系図9-5	居士	81	1892	1.133	e	単独	
157	馬場	家系図2-6	居士	28	1850	0.334	e	単独	
158	馬場		大姉	62	1912		y	単独	
159	馬場	家系図11-3	居士	22	1849		e	単独	
160	馬場	家系図8-2	居士 大姉	81 85	1836 1854	1.298	e	夫婦	
161	馬場		童子		1849		e	単独	童
162	馬場	家系図10-3	信士	70	1839		e	単独	
163	馬場	家系図17-2	信士 信女	58	1838 1842	0.005	e	夫婦	
164	馬場		童女	2	1895		y	単独	童
165	馬場		信士 信女		1832		e	夫婦？	
166	馬場		居士 大姉	82	1841 1857		e	夫婦？	
167	馬場	家系図15-3	信士 信女	54 72	1835 1863	0.45	g	夫婦	
168	馬場	家系図12-1	大姉 居士 大姉	58	1853 1855 1860	1.753	e	複数(夫婦)	
169	馬場								
170	馬場	家系図11-3	大姉	20	1850		e	単独	
171	馬場								
172	馬場	家系図5-5	居士 大姉	52 47	1854	1.759	e	夫婦	
173	馬場	家系図11-2	大姉	58	1856		e	単独	
174	馬場	家系図11-2	居士	83	1868	2.269	e	単独	
175	馬場	家系図9-4	居士 大姉	71	1855 1860	1.133	e	夫婦	
176	馬場	家系図9-6	居士	22	1857		e	単独	
177	馬場	家系図16-4	大姉	33	1857		e	単独	
178	馬場	家系図16-4	居士	77	1901		e	単独	
179	馬場	家系図16-4	大姉	83	1911		e	単独	
180	馬場	家系図12-2 家系図12-3 家系図12-2	居士 居士 大姉	22 58 77	1865 1921	1.753	e	家族	
181	馬場		大姉	17	1865		e	単独	
182	馬場	家系図10-4	信士 信女	43	1866	1.298	e	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
?			
(往?)徹?士 ?譽?信女	文政十?子十一月?	天保□未年 七月九日	
讚譽知照大師	文久元壬戌年十月十六日歿	馬場藤右衛門後妻 池田弥市長女 きそ行年四十四歳	
隨譽法順大師	嘉永五壬子年八月十四日	馬場藤右衛門妻	
尊譽親道居士	明治二十五壬辰年六月二日歿	馬場藤右衛門行年八十一歳	
俗譽嶺光居士	嘉永三庚戌十一月二十二日	馬場儀平治	
春譽浄□大師	明治四十五年五月十日	馬場勝享年六十二	
精譽雄進居士	嘉永二巳酉年 十二月二十七日	行年二十二歳 馬場岩次郎墓	
定譽精□居士 精譽貢進大師	天保七?十月(28?)日 馬場弥五左衛門 行年八十?	嘉永七甲寅年十一月七日(淳平?) 妻?上田原村山浦?女 行年八十五歳	
□夢童子	嘉永二庚戌年十二月十四日	馬場六左衛門	
津譽慧海信士	天保十亥年十二月一日	行年七十歳 馬場傳十郎	
霞山玄光信士 聲室流音信女	天保九戌一月(二十二?)日 馬場忠左衛門?	天保十三寅十一月十二日 ?妻	
琳吞善童女	明治(二十八?)三月十五日歿	俗名 馬場□□享年二才	
親譽道純信士 進譽智戒信女	天保三?申年十月二十三日 馬場?左衛門	?	
松譽道繁居士 連譽經□大師	天保?十二月十五日 ?(娘?)?	安政四丁巳天七月二日 行年八十二歳 馬場信元墓	
載乘明林信士 春空陽光信女	天保六未年十月十九日 馬場弥左衛門 行年五十一歳	文久三亥年正月十六日 ?子行年七十二才馬場弥左衛門妻	
倫譽栄春大師 徳譽直道居士 達譽徳興大師	安政二乙申年 六月十七日卒 行年五十八歳 馬場徳之丞(康清?)墓	嘉永六癸丑年 二月六日 行年四十九歳 上田原 山浦雄七衛門娘	万延元?年三月十二日 行年(十二?) ?
?			
桂譽光輪大師	嘉永三丑年八月六日	馬場半之丞娘行年二十歳	
?			
寂譽靜道居士 静譽惠豊大師	嘉永七甲寅年(六?)月十八日	馬場源左衛門 山崎茂三郎娘 行年四十七 妻	
是心院純譽運室□昌大師	安政三丙辰年九月二十九日卒	行年 五十八歳 馬場義矩妻	
慶雲院陽譽光岳春道居士	慶応四戊辰年正月十九日	行年八十三歳 馬場半之丞 義矩	
繁譽寿松居士 頼譽貞教大師	安政二丙辰年十一月五日 馬場伸右衛門 夫婦	万延元年十二月八日卒 馬場伸右衛門 行年七十五歳	
□譽念察居士	安政四丁巳年四月二日	行年二十二歳 馬場愛作□	
倫譽智峯貞照大師	安政四丁巳八月十三日卒	馬場信則妻むら 行年三十三歳	
親譽速成信則居士	明治三十四年六月十三日卒	馬場弥五郎信則 行年七十七歳	
淳譽妙元貞素大師	明治四十四年三月二十二日	信則後妻いえ 行年八十三歳	
積譽累本徳成居士 □譽精道義寛居士 覚譽徳光妙安大師	慶応元年八月十七日歿 馬場徳之丞 行年二十二才 明治二十四年十二月二日歿同 熊吉 行年五十八才	大正十年一月二十二日歿 馬場きい 行年七十七才	
冠譽紅玉大師	慶応元乙丑年九月七日	馬場忠作娘 のふ 行年十七歳	
範譽道□清信士 □譽貞範清信女	?	慶応二寅十二月十二日 馬場藤之丞妻 行年四十三	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
183	馬場	家系図11-3	大姉	30	1871			e	単独	
184	馬場	家系図11-3	居士	75	1909			e	単独	
185	馬場	家系図11-3	大姉	74	1911			e	単独	
186	馬場		居士 大姉	83 73	1872	1875		e	夫婦	
187	馬場	家系図8-3	大姉	59	1874			y	単独	
188	馬場	家系図8-3	居士	70	1881		1.406	y	単独	
189	馬場			36	1835			e	単独	
190	馬場		童女 童女		1859	1862		e	複数	童二人
191	馬場		童女	2	1862			e	単独	童
192	馬場	家系図6-4	大姉	67	1878			e	単独	
193	馬場	家系図6-4	居士	59	1861		1.528	e	単独	
194	馬場									
195	馬場		居士	18	1892			y	単独	
196	馬場		居士 大姉	59 43	1885	1901		e	夫婦	
197	馬場		大姉	77	昭和				単独	
198	馬場		居士	33	1885			e	単独	
199	馬場		童子	2	1898			y	単独	童
200	馬場		居士 大姉					e	夫婦	
201	馬場	家系図15-4	信士 信女	77 51	1876		0.45	g	夫婦	
202	馬場		童女	9	1911			y	単独	童
203	馬場		居士 大姉	51 76	1875	1913		h	夫婦	
204	馬場		大姉	35	1874			y	単独	
205	馬場		居士	78	1893			y	単独	
206	馬場		居士		1910			y	単独	
207	馬場		居士	68	1893			e	単独	
208	馬場		大姉	83	1912			e	単独	
209	馬場		居士	40	1890			e	単独	
210	馬場		居士 大姉	46	1903				夫婦	

図3-12

図4-11

1	原							h	家	
2	原							h	家	
3	原							g	家	

正面	左側面	右側面	背面
晶□院盤譽玉彩□大姉	明治四辛未年 正月二十五日歿	馬場政之右衛門長秋 妻行年三十歳	
奈雲院厚譽哀念清□居士	明治四十(二?)年五月(二十七?)日卒	馬場政之右衛門長秋 享年七十五歳	
審光院温譽智順妙相大姉	明治四十四年六月二十日卒	馬場政之右衛門妻 多賀 享年七十四	
天譽中心居士 慈譽妙雲大姉	明治八年乙亥一月初七日 馬場忠兵衛義豊 行年八十有三	明治五年壬申三月十九日 俗名 里以 馬場義豊妻 行年七十有三	
進譽(室?)香大姉	明治七年甲戌七月十八日	馬場信一妻 津加 行年五十?歳	
等譽天倫居士	明治十四年庚辰年巳第十一月八日	馬場信一	
?譽智?	天保六乙未年四月二十二日	馬場弥二郎妻 行年三十六	
(空?)兒童女 稚蓉童女	(空?)安政六巳年?五月六日	文久二壬戌八月十四 稚 馬場六左 工門娘	
稚脱童女	文久二戌八月十七日	馬場藤之丞娘 行年二才	
麗淨院□譽香雲大姉	明治十一年九月九日 馬場信房妻 すえ 行年六十七才		
得善院□譽自道居士	文久元年辛酉年八月二十一日 行年 五十九歳 馬場半右工門信房		
?			
良譽善明居士	明治二十五年三月五日	馬場六太郎 行年十八才	
進譽良傳居士 形譽妙光大姉	明治三十四年六月十九日馬場傳十郎 行年五十九才	明治十八乙酉年九月二十八日歿 馬場傳十郎妻 全名やす之藝 行年四十三才	
常節妙□秀大姉	昭和:省略	馬場藤右衛門妻つね 行年七十七才	
博譽弁純秀道居士	明治十八年十一月?日	俗名馬場藤右衛門 行年三十三歳	
花影童子	明治三十一年五月二十四日	馬場六左衛門五男 馬場五郎 行年二才	
立譽興雲居士 純譽妙正大姉	明? 三月十九日	俗名 馬場六右衛門 行年六十(五?) 同人妻?行年二十?	
□譽慈眼信士 鏡譽明信女	?四月?日 馬場金兵衛 行年七十七歳	明治九丙子年三月二十日 ?子五十一才 馬場金兵衛妻	
彩光善童女	?四十四年十?	馬場?長女?子 行年九?	
大赫院囉譽淳良居士 養興院聽譽貞察大姉	明治八年九月二十三日馬場藤四郎 義徳 行年五十一歳	大正二年七月二十七日 妻 たえ 行年七十六歳	
超譽貞倫大姉	明治七年九月十四日	武親之妻古登 工年三十五歳	
忍譽戒心居士	明治二十六年二月四日	馬場六兵衛武親 卒年七十八歳	
明治四十三年三月二十六日	寛譽順道居士 通称 馬場四郎		
瑞慶院(峯?)譽□順義修居士	維□明治二十六季十一月二十日卒	馬場忠兵衛 享年六十八歳	
□珠院相譽貞好□淳大姉	維□明治四十五年 三月三十日	馬場忠兵衛妻よし 享年八十三歳	
廣譽極西良圓居士	明治二十三年八月十一日歿	馬場弥平次 行年四拾歳	
隆紹院德譽香林奈忠居士 粧雲院節譽操心妙映大姉	明治三十六年六月三日馬場藤四郎 行年四十六才 昭和十六年:省略		
原宗家奥城			長文
原家之墓			平成の建立
原家奥津城			昭和の建立

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
4	原						g	家	
5	原						g	家	
1*1	原			25	1914				
1*2	原								
1*3	原		居	66	1868	1874	x	夫婦	
祠			大	66	1874				
1*4	原								
1*5	原		信士		1725				
1*6	西原		信士		1657			単独	
1*7	西原		信士		1625			単独	
1*8	原		童女	12	1871	1864		複数	童
台形の墓石			童子	27	1864 1884				
1*9	原							夫婦・奥城	
1*10	原			67 79	1886 1912	1912		夫婦	
1*11			大						
1*12	原	家系図1-10		69 73	1884 1885			夫婦	列1
1*13	原	家系図1-8 家系図1-8	居 大	67 47	1845 1835	1835	1.353	夫婦	
1*14	原	家系図1-7 家系図1-7	大 居	68 80	1819 1826		14.017	単独 単独	
1*15									
1*16			童子		1790			単独	童
1*17			童女		1831			複数	童
1*18	西原				1793			単数・塚	
1*19	原							単独?	
32a, b					1816 1769				
32-39	小岩井				1764 1812 1782 1742 1743 1839	1764 1836			
2*1	原	家系図4-5	居 大		1844 1836	1836		夫婦	
2*2								法経塔	
2*3	原	家系図4-4	信女		1786			単独	
2*4	原	家系図4-4	信士		1812		0.919	単独	

正面	左側面	右側面	背面
原家奥城			平成の建立
原家奥津城			平成の建立
原千種昌尚登城	長文…大正三年三月十一日死亡	辞世	
原理平之墓	長文	昭和の建立	
量譽?居士	慶應四(1868)戊辰年 八月十日	明治七(1874)甲戌年六月二十日	
?妙芳大師	原理兵衛昌友 享年六十有六	同妻 諱□壽 享年六十有六	
?			
享保十(五?)?天一(達?)?信土之位 三月十八日			
一達善空信士	明暦三(1657)子年	七月二十八日 西原惣左衛門	
春山自芳信士	寛永二(1625)卯年	二月十九日 西原逢左衛門	
中原家勝譽義宣居士	稚白蓮女善童女	幻譽白夢善童子	明治十七年(〇〇)三月四日没於北越堀之内
	明治四年(〇〇)六月二十三日没 原昌言長女壽女 年十二	元治元(1864)年十二月八日没 原 昌言三男甲子二郎昌之	客舎 原昌言二男為分家源十郎壽 昌嗣 原興九郎昌長
原昌道夫婦奥城			長文…昭和に没
賜 笛仙原昌言翁蠲蠲城			原興左衛門 明治十九年(〇〇)丙 戌五月五日没 年六十有七 室 小山氏諱佐乃 明治四十五 (〇〇)壬子年六月十二日卒 年七 十有九
譽妙慈(大師?)			
原昌翁管蠲之登城	通稱興左衛門 原昌言 行年六十有九	室堀内氏諱多仁 行年七十有三 明治十七年(〇〇)三月十二日没	列2
透譽頂雲綾義居士 桃譽羅〇尚後大師	弘化二(1845)乙巳年七月二十四日 原右馬允昌〇 卒年六十有七	天保六(1835)乙未年二月二十一日 安藤氏倫子 享年四十有七	
顯照院現譽貞寧大師 玄院開譽靜翁居士	文政二(1819)己?年?十一月?四 日卒	原興左衛門直昌享年六十有八 文政九年(1826)丙戌十二月十一日	
		原興左衛門直正昌 行年八十歳	
幼願童子 寛政二(1790)(乙酉?)十一月九日			
三?童女	三月初六日	天保二(1831)辛卯年	?
宗譽?	寛政(五?)(1793)癸丑七月十日	西原相三郎塚	?
光譽法受大師	原興…?	天保十?年正月九日	
光室明〇信女 物故 月光道秋信女	文化十三丙子天 明和六己?十一月	二月(二十四?)日?	
月光道秋信士 記原智唱信女 ?五?安信女 兜譽意雲居士 雲譽明光大師 強譽(照?)順大(姉?) 十念譽孝居士 光譽?怒大師 雲譽彈頃居士 峯譽知仙大師 典譽委仙居士 受譽仙明大師	(明和元?)甲申 文化九壬申年 天明二寅年 寛保三?(九月二十九日?) 俗名 古岩井?七 天保十二(または三)年(甲庚?)正 月二十日 ?兵衛(昌?)貞 行年七十	?二月十日 ?辰歳 (八月朔日?) 十月十二日 ?勘四郎妻 十二月朔日俗名小祝殿兵衛 寛保二(季?)戌十一月二十四日 明和元甲申 天保七年丙申正月二十五日 同妻 行年五十二	
典譽委仙居士 受譽仙明大師	天保十五年(1844)甲辰正月二十日 利兵衛昌定 行年七十	天保七年(1836)丙申正月二十五日 同妻 行年五十二	
法経塔	長文	長文	
雲譽理光信女	天明六年(1786)丙午十二月十一日	原理兵衛一則妻	
往譽(還?)入信士	文化九年(1812)壬申十一月五日	原理兵衛一則墓	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
2*5	原		信女		1744			単独	
2*6	原		信士		1703			単独	
2*7	原		信士		1777			単独	
2*8	原		信女		1785			単独	
2*9	原		信女					単独	
2*10	原		信女		1772			単独	
2*11	原		童子	2	1834			単独	童
2*12	原		信女						
2*13	原		信女					単独	
(嗣)									
(嗣)					1784				
3*1					1832				
3*2	原	家系図2-2 家系図2-2	信士 信女		1740 1776	1776		夫婦	
3*3		家系図5-2 家系図5-2	信士 信女		1788 1765	1765		夫婦	
3*4									
3*5									
3*6	原				1895		g	先妻・後妻	
3*7	原				1895		h		
3*8	原	家系図4-7 家系図4-7	居 大	61 76	1884 1893	1893	e	夫婦	
3*9	原		信女		1806		e ?		
3*10	原		童子		1843		e	複数	童
3*11	原		大						
3*12	原		童子						童
3*13	原		居		1905		g	単独	
3*14	原		大				e	単独	
3*15	原				1712		?	単独	
3*16	原		居				e	単独	
3*17	原		童子	3	1838		e		童
3*18	原		居 大		1799 1843	1843	g	夫婦	
3*19	原						g		
3*20	原		信士		1795		e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
寛保四(1744)甲子年 智玉妙尊信女 五月十九為?			
元禄十六(1703)未年 ?雲口道信士			
通譽岳湛信士	安永六(1777)丁酉口	六月十二日西原傳之(丞?)	
法譽妙意信女 ?享?寅天?信女	天明五(1785)丁巳歳	三月二十二日西原傳之丞妻	
明和九(1772)壬辰 雪光理口信女 十一月二十五日			
等隨童子 ?四丁?玉譽妙俊信女七月?十六日	天保五(1834)午年(十一?)月六日?	原政次年二才	
安譽?光? 思譽弁願信女 ?	?巳?初二日	?六?二月十三日西原傳?妻	
			天明四(1784)甲辰 二月二十四日
念道急夢?	?	天保三(1832)年	
實譽善眞信士 根譽妙善信女	元文五(1740)壬戌年七月二十二日二代 原惣八肅高 年と十支が合っていない	安永五(1776)丙辰年十一月十四日原惣八妻	昭和の建立
	天明八年(1788)十月十一日歿 勲應喜映信女 明和二年(1765)八月二十九日没 見壽映徹信士		原小兵衛信有(治是)、同妻冬の墓 碑 破損 平成七年再建
お墓なし			
お墓がなし			
原 あさ 多賀之墓	理兵衛妻 明治死亡 同後妻 大正死亡	昭和二十八年建立 原理兵衛	
原 □	長女 □ 大正死亡 行年十一歳	昭和二十八年建立	
馨徳院性譽眞海居士 至誠院西譽教順大姉	七世 原理兵衛昌之 明治十七年十一月二十九日卒 行年六十有一	妻 原氏諱いせ子 明治二十六年二月十一日卒 行年七十有六 ?原理兵衛昌實? 之	
理庵浣明信女 ?	文化三(1806)寅年	十二月六日原藤三エ門母	
智定清童子	天?十?(戌?)?六月二十八日	妙現清童女	
麗譽露消大姉	?善清童子	天(保?)十四(1843)辰年四月十四日	
浄譽清雪童子	?直?善童女	原宗兵衛?	
奉天院精譽勇心居士	勲八等	明治三十八年四月二十日清国	
法室妙薫大姉	?	?四戌年?	
	正徳二年(1712)辰七月七日		
聊譽静然居士 ?光雪童子	元?二?巳年 天保九(1838)戊戌年八月四日	原和五郎昌? 原昌之四男早世(三歳?)?	
禮?譽惠善居士 禮功?譽(善?)大姉	寛政十一(1799)己未年四月二十八日 原?兵衛	天保十四(1843)癸(卯)?	
原量家墓	昭和、平成死亡	昭和、平成死亡	
安往詳傳信士	寛政(七乙卯?)?(1795) 二月(十または二十)七日	西原(甚?)平墓	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
3*21	原		信女		1796		e	単独	
3*22							a		
4*1			大		1774		e	単独	
4*2	原		居		1746		e	単独	
4*3							?		
4*4							?		
4*5	原	家系図1-2	居		1723		f	単独	
4*6			大				d		
4*7	原		大	44	1773		e	単独	
4*8	原		居	65	1781		e	単独	
4*9	原		大		1743		e	単独	
4*10	原		翁蠟	70	1900		g	単独	
4*11	原		夫婦		1891 1908		g	夫婦	
4*12	原		信士		1784		?		
4*13	原						e		
4*14	原						?		
4*15	原		居		1724		d	単独	
4*16	原		大		1733		e	単独	
4*17	原		大		1797		e	単独	
4*18	原						e	夫婦	
4*19	原		ポーロ 童女	22			g h h e	単独	クリスチャン 童
4*20	原		信士		1784		e	単独	
4*21	原		大		1784		e	単独	
4*22	原	家系図7-2?	居		1757		f	単独	
4*23	原		大		1726		e	単独	
4*24	原		大		1739		e	単独	
4*25	原		居		1763		e	単独	
4*26	原				1881 1885	1885	e	夫婦 (先妻・後妻?)	
4*27	原						?		
4*28	原						?		
5*6	原		大		1895		g		
5*7	原		居 大	69	1883		e	夫婦	
5*8	原		言心・美彦命 寛霊良女命	56 52			h	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
祥空壽?信女	寛政八(1796)丙辰正月二十五日	西原甚平妻	
?			
(見または是)譽妙生大姉	安永三年(1774)十一月(十または二十)二日	?	
往譽生園居士	延享三年(1746)寅七月十二日	俗名 西原(傳?)兵衛	
(祠)			
(祠)			
浄譽道清居士	享保八(1723)癸卯年	霜月十二日俗名 西原興左衛門	
運譽妙清大姉			
□譽和仙大姉	安永二(1773)癸巳歳十二月六日歿	西原興左衛門直(胤?)坂(本または本?)宮山氏女 四十四歳	
光譽全居士	天明元(1781)辛丑年七月二十三日	西原興左衛門直胤 六十五歳	
陰譽智貞大姉	寛保三(1743)癸亥正月五日	原□茂兵衛娘みな?妻	
原袋駒翁繼之墓	明治三十三年原太市昌大 七十?		
原駒次郎夫婦之墓	明治二十四年六月十九日亡夫?	明治四十年?	
義山勇哲信士		天明四(1784)甲辰年 ?月朔日	
仏像型			
享保九(1724)辰天心譽呼?居士位			
安譽妙光大姉	享保十八(1733)年	?	
潮譽智海大姉	(寛政九丁巳?)年	正月二十六日	
原典平次妻 富代之墓	昭和に歿		昭和の建立
ホーロ原通之墓 ? □還童女	文化三(1806)寅	昭和に歿 原興平次長男 二十二歳? ??	
秋岸淳淳信(士?)		天明四(1784)甲辰年八月初四日	
秀譽智雲大姉	天明四(1784)甲辰曆三月二十四日	?長文	
德譽善秀居士	宝曆七(1757)丁丑 十月八日	俗名 西原又右衛門	
應譽樹林大姉	享保十一(1726)?年	正月十四日卒	
峯譽妙吟大姉	元文四(1739)己未卒	?	
眞譽愛徳居士	宝曆十三(1763)癸未六月五日	?	
故 原たけ 原壽太郎 之墓 原よし	明治十四年十二月二十日亡 たけ全 十八年七月十八日亡 壽太郎	?	
(小墓)			
(小墓) 小墓			
直昌院光室貞運大姉	明治二十七年(〇〇)六月十八日卒去		
文譽宗海居士 喚譽貞□大姉	明治十六(〇〇)癸未年十一月十五日 原太左衛門昌其 享年六十有九	明治八(〇〇)乙亥十二月十四日 ?	
言心美彦命 寛霊良女命 奥城	…原直道…明治四十三年(〇〇)五月三日 歿 五十六歳	…大正七年(〇〇)九月二十二日病歿 五十二歳…	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
5*9	原		夫婦					g	夫婦	
5*10	原		童子					e	単独	童
5*11	原		童子					g	単独	童
5*12	原		居 大	45 87	1840 1856	1856		g	夫婦	
5*13	原		居 大	81	1867	1836		e	夫婦	
6*1	原		信女		1807			e	単独	
6*2	原		信士		1799			e	単独	
6*3	原		大		1774			e	単独	
6*4	原		居		1801			e	単独	
6*5	原	家系図3-3? 家系図3-3?	居 大	41 80	1762 1798	1798		e	夫婦	
6*6	原		童女	2	1823			e	単独	童
6*7	原		童子		1837			e	単独	童
6*8	原				1799			e	単独	
6*9	原		居		1809			e	単独	
6*10	原		信女					e	単独	
6*11	原	家系図7-4 家系図7-4	居 大	79	1829		0.536	e	夫婦	
6*12	原	家系図7-5? 家系図7-5?	居 大	55 30	1855 1832	1832	0.089	h	夫婦	
6*13	原		童子		1747			e	単独	童
6*14	原		居 大	70	1801 1810	1810		e ?	夫婦	
6*15	原	家系図8-2 家系図8-2	居 大	68	1850		1.109	e	夫婦	
6*16	原	家系図8-3 家系図8-3	居 大	74	1899 1899			e	夫婦	
6*17	原	家系図2-9? 家系図2-9?	居 大	74 68	1885 1883	1883		e		
6*18	原		童子					e	単独	童
6*19	原		童女		1803			e ? ? ? ?	単独	童
6*31	原		居 大	23	1812	1858		e	夫婦	
6*32	原	家系図2-4 家系図2-4	居 大	79?	1829	1818		e	夫婦	
6*33	原		信女		1808			e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
原春樹夫婦之墓	1953年2月22日逝 六十七歳原太 左衛門春樹 1950年12月3日逝 五十二歳妻 定		
輝邊善童子	文政四(1821)辛巳年 六月六日	(西?)原武市	
實譽林浄善童子	西原?之助?	天明八(1788)戊申年七月二十九為	
静譽親道居士 證智智郎大師	天保十一(1840)庚子七月十日 原太左衛門 竹? 享年四十五歳	安政三(1856)乙卯年六月二十日 享年 八十七歳	
嚴譽伯陽居士 □譽□真大師	慶應三(1867)丁卯年九月十三日 原良司 甚厚 享年八十有一	天保七(1836)丙申十月十六日 ?	
喜譽歙向信女	文化四(1807)卯年 正月十有七日	?	
寂岸寧喜信士	寛政十一(1799)未十月二十六日	?	
演譽和音法雲大師	安永三(1774)午天三月十八日	?	
大悟軒法譽道雲居士	享和元(1801)酉天正月二十三日	原?(三郎?)	
清譽教運浄往居士 長譽妙薫清壽大師	宝曆十二(1762)壬午年七月十日 原喜右衛門宣貞 享年四十一歳	寛政十(1798)戊午年二月二十日 宣貞室 諱 千? 享年八十才	
徹泉童女	文政六(1823)未年九月(またはは 二十)九	原(信之丞?)女(またはは二また は三?)?	
秋光善童子	天保八(1837)丁酉歳九月?日	原昌?三男 同?四郎墓	
(遠?)譽順良法尼	寛政十一(1799)年?	?	
頓譽超翁居士	文化六(1809)己巳天正月二日	?	
三譽妙縁信女	西原善三郎泰知□	?	
頂譽漢道居士 黄譽壽林大師	文政十二(1829)己丑年正月九日歿 原又右衛門泰知 享年七十有九	?	
享譽祐元居士 黄譽智操大師	安政二(1855)乙卯年十一月二十三 日歿 原祐元 享年五十五	天保三(1832)壬辰年 八月十九日 歿 祐元 妻 ?峯 享年三十	
梅詠童子具位	延享四(1747)丁卯 稔	三?	
岐譽潔山居士 受譽智戒大師 英戸叟碑	享和元(1801)辛酉 12月18日 行歳七十(歳?) 原充裕	(文化七?)(1810)	
融譽通賢居士 安譽義壽大師	嘉永三年(1850)庚戌十一月二十五 日 未□臨俗名 原要右衛門 資昌 行年六十八歳		
温香庵量譽大禪開静居士 桂香庵瑞譽伴雲妙薫大師	…同年十月二十九日歿…	明治三十二年(〇〇)六月二十一日 歿 原要右衛門妻(加代?)享年七十四	
尋譽真良□常居士 □譽妙正貞順大師	明治二十一年二月十五日卒 原憲兵衛庸宗 行年七十四歳	明治十六年七月七日卒 庸宗之妻 萬世 行年六十八歳	
明譽慈光善童子	原伸二	文(化?)?	
禪譽稚静童女 (小墓) (小墓) (小墓) (小墓)	享和三(1803)癸亥年十一月晦日	?	
本譽智願清雲居士 明譽齋心輝光大師	文化九年(1812)壬申十月四日 行年二十三歳 原宗五郎昌之	?申?氏女 安政五(1858)年戊午十月?日	
開譽至山道意居士 放譽嚴光妙音大師	文政十二(1829)己丑年二月十一日 原宗兵衛昌	文政元(1818)戊寅年九月 ?林金??女	
智室願□信女	文化五(1808)辰年	?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
6*34	原		信士	29	1834			e	単独	
6*35	原							?		
6*36	原									
7*1	原	家系図5-3 家系図5-3	信士 信女	65 67?	1834 1838	1838	0.864	e	夫婦	
7*2	原		居 大	52 42	1839 1866	1848		g	夫婦	
7*3	原		大		1824			e	単独	
7*4	原	家系図3-6 家系図3-6	居 大	63 64	1855 1870	1870		e	夫婦	
7*5	原							?		
7*6	原							?		
7*7	原							?		
7*8	原		居 大		1883 1880			e	夫婦	
7*9	原	家系図7-1 家系図7-1	居 大	36 62	1838 1863		0.007	e	夫婦	
10はなし										
7*11	原		夫婦	63 53	1920 1909			g	夫婦	
7*12	原			4	1915			g	単独	
7*13	原							?		
7*14	原							?		
7*16a	原	家系図12-1 家系図12-1	居 大	37 66	1831 1865		0.75	e	夫婦	
7*16b	原		居	62	1853			e	単独	
7*16c	原				1898			h	兄妹	
7*16d	原							g	家	
7*16e	原	家系図6-5 家系図6-5	居 大	74 72	1898 1900			e		
7*16f	原			21	1912			h	単独	
7*16g	原		童女	3	1828			e	単独	童
7*18	原	家系図6-7?		71 77	1912 1922			h	単独	
7*19	原			26 27	1910 1911			g	家族	

正面	左側面	右側面	背面
聲譽拍天清信士 (小墓)	天保五(1834)甲午歳七月二十有九日	原虎之? 昌光十七歳	
盛譽明運信士 歿譽明喜信女	天保五(1834)甲午年二月六日 原和七昌一 享年六十五才	天保九(1838)戊戌歳十一月二十八日 同人妻 以? 年? 十七才	
精譽丹衷武平居士 勤譽酒屋於玉大姉	精 原武兵衛昌成 天保十(1839) 己亥年 三月二十二日歿 行 年五十有二 嘉永元(1848)戊 申年十二月二十二日歿 行年五十 有四	誠譽貫道居士	
馨譽慧香大姉	文政七(1824)甲申歳八月二十一日	原傳兵衛 □歳 (七または四?)十四歳?	
盛譽全居士 圓譽貞照大姉 (小墓)	安政二(1855)乙卯年八月十七日歿 原傳兵衛昌純 享年六十三	明治三(1870)庚午年十月?日歿 昌純□妻諱 奈加 享年六十四才	
地字? (小墓)			
(地藏)			
情譽素雄居士 念譽妙専大姉	情 明治十六(〇〇)年二月十二日 卒 念 明治十三(〇〇)年八月二十七 日 卒	原小兵衛夫婦之墓	
□譽清光居士 尋譽智馨大姉	天保九(1838)季三月二十五日 原兵吾昌也 行年三十六歳	文久三(1863)季四月二日 昌也室きお 行年六十二歳	
原惣五郎宗宏夫婦墓 (小墓)	大正九年(〇〇)十月十九日没 惣 五郎 行年六十三	明治四十二年(〇〇)九月十五日歿 諱 嘉津 享年五十三	
(地藏)	大正四年(〇〇)四月二十六日没	原孫三郎長男 四歳	
大譽智觀居士 休譽善善大姉	天保二(1831)辛卯年二月二十三日 原傳六昌則 行年三十七歳	慶應元(1865)乙丑年 七月二十三 日 享年六十六歳 諱きん 埴科郡金 井邑中村太郎右衛門娘	
俊譽義雄居士	嘉永六(1853)癸丑十二月十六日 行年六十二歳	常田箱山傳兵衛男 休譽後夫 原傳蔵	
原美康墓 原安久理墓	明治三十一年四月十三日歿 勝治息	明治三十?年三月五日歿 勝治娘	
原家之墓 墓誌あり 全て昭和以降歿			
定譽忠林居士 浄譽知辨大姉	明治三十一(〇〇)戊戌年七月三日没 埴科郡五加村内川 瀬石清吉八男 原佐忠次昌和行年七十四歳	明治三十三年(〇〇)庚子年六月六 日歿 昌和妻かづ 行年七十二歳	
原常(聖? 盤?)墓	大正元年(〇〇)一月六日没 勝治娘 行年二十一才		
文政十一(1828)戊子六月三日 秋光童女 原傳六娘美津 年三			
原昌秋翁壘堊域	大正元年(〇〇)十一月二十七日歿 原安重昌秋 七十有一歳	大正十一年(〇〇)十二月三十日逝 妻いそ 七十有七歳	
原諒多 原さい 墓	原安重昌秋二男 明治四十三年十二月二十日歿 享 年二十六才	原諒多 長男 昭和に歿 享年二十二才	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
7*20			居 大 童子 大 童女	19 57 36	1892 1888 1885 1868	1885 1868		e	家族	
7*21								?		
7*22	原		童子	4	1831			e	単独	童
8*6	原							h		
8*7	原							h	家	
8*8	原		童女 童女		1810 1805	1805		e	複数	童
8*9	原		童女		1755			e	単独	童
8*10	原		童女		1796			e	単独	童
8*11	原		禪定尼		1706	1774		d	単独	
8*12	原		童子		1772			e	単独	童
8*13	原							d		
8*14	原		信女		1725			e	単独	
8*15	原		童子		1800			e	単独	童
8*16	原							d		
8*17	原		童子		1747			a	単独	童
8*18	原		童子		1778			e	単独	童

図3-13

図4-12

1	春原							g	先祖代々	
2	春原				1849			e	単独	
3	春原		信士		1849			e	単独	
4	春原		信士 信女	39	1908			g	夫婦	
5	春原		童子					g	童子	童
6	春原	家系図4-3	居	80	1866			e	単独	
7	春原		大	46	1840			e	単独	
8	春原		居 大	91	1914 1921	1921		e	夫婦	
9	春原		居 大	75	1917			e	夫婦	
10	春原		居 大		1934			e	夫婦	
11	春原		禪定門					d	単独	
12	春原		居		1850			e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
演譽智辨居士 智譽妙勝大姉 覺夢童子 智相妙圓大姉 輝靈善童女			明治二十五年十一月二十六日發行年？ 原夢計 明治十八年十一月二十五日發行年十九歳 安重昌秋二女 ？二郎昌貴長男
(地藏)			
光會善童子	天保二(1831)卯二月二十七日	四才 原吉(作?)	
原拾三家之墓			
原家之墓			
智麗童女 清口童女	文化七(1810)午四月十八日 推順童女	? (文化二?)?十二月天	
智法童女	宝曆五(1755)乙亥年		
早世 短夢童女	寛政八(1796)丙辰天	四月?五日	
(宝永?安永?)三(1706か1774)? 口靈妙本禪定尼十月十九日?			
至幻童子	明和九(1772)辰年	?	
?			
喜保十? 掃去 恵順信女靈位 十月十一日			
諦幻童子	寛政十二(1800)庚午年	八月十七日	
?			
幻迎童子 延享四(1747)丁卯三月四日			
蘆舟童子	安永七(1778)戊六月八日	?	
先祖代々之墓			昭和に春原歳男建立
廓應常然?	嘉永二(1849)巳年九月十二日	春原利平?	
潭叟全龍信士	嘉永二(1849)巳年五月二十二日	春原九右エ門	
禪光徳船信士 觀法明照信女	明治四十一年四月十九日没 春原稲太郎 行年三十九才	昭和に歿	
隨輪康道童子		昭和に歿 十五才	
奇峰良音居士	慶應二(1866)丙寅十月十五日	春原儀左衛門利一 享年八十(?)歳	
口然正觀大姉	天保十一年(1840)庚子十二月四日	春原儀左衛門室 行年四十六歳 上五明村塚田彦五郎娘	
壽安長光居士 淨安妙光大姉	大正三年二月二十八日 春原儀左衛門父 春原儀八(事?) 九十一才	大正十年十二月一日 ?か	
鐵學壽翁居士 鐵齋壽昌大姉	大正六年十月九日 春原儀左衛門 七十五歳		
信傳明光居士 信晏為證大姉	昭和九年歿	?	
?保二? ?政山禪定門具位 正月?			
喚峰俊應居士	嘉永三年(1850)庚戌九月十四日	春原?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
13	春原	家系図3-4?	大		1811		e	単独	
14	春原		居	24	1929		e	単独	
15	春原		童子		1836		e	単独	童
16	春原	家系図3-4		92	1826		e	単独	
17	春原		居 大	70+	1855		e	夫婦	
18	春原		大		1800		e	単独	
19	春原		居		1786		e	単独	
20	春原		大				h	単独	
21	春原		居		1776		g	単独	
22	春原		信女	62	1863		e	単独	
23	春原		童子		1885		e	単独	童
24	春原		童子	9	1866		e	単独	童
25	春原		童女		1787		e	単独	童
26	春原						e		
27	春原		童子 童子		1878		e	複数	童
28	春原		童女 童女	3	1833		e	複数	
29	春原		童女		1733		d	単独	童
30	春原		禪定尼		1751		d	単独	
31	春原		童子		1760		d	単独	童
32	春原	家系図7-2	信士		1809		d	単独	
33	春原		禪定門				d	単独	
34	春原		童女		1716		e h	単独	童
35	春原		童子		1746		d	単独	童
36	春原		居		1891		e	単独	
37	春原		禪定尼				d	単独	
38	春原		童子		1797		e	単独	童
39	春原		童子		1801		e	単独	童
40	春原		信女				e	単独	
41	春原						a		
42	春原		大		1783		e	単独	
43	春原		居		1772		e	単独	
44	春原		大		1819		e	単独	
46	春原	家系図4-4	信士	49	1846		e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
月心良重大姉	文化八年(1811)辛未六月十六日	春原五左衛門妻	
虛白光雄居士	昭和四年歿 行年二十四才	建立 春原興治	
天保七(1836)丙申十二月二日 是?童子 春原(久吾?)			
圓徳正端?	文政九(1826)歲丙戌霜月十九日	春原五左衛門利重 行年九十二歳	
理山古道居士 花岸祖香大姉		花 安政二(1855)乙卯年二月六日 春原文左衛門妻 行年七十(?)歳	
日岩智芳大姉	寛政十二(1800)庚申歳 八月二十二日	春原文左衛門 妻	
金山智鞭居士	天明六年(1786)丙午十月十九日	?	
(無?)生妙紋大姉	? 癸卯年	十月二十八日 春原土左衛門	
浄月枯宗居士	安永五(1776)丙申(九?)月二十六日	春原八? 春原土左衛門	
眞添女□信女	文久三(1863)癸亥八月朔日	春原? 妻 行年六十二	
智誠禪童子	明治十八年(〇〇)六月五日	春原?	
玉泉童子	慶應二(1866)丙寅三月十一日	春原勇右エ門男 儀市九才	
妙成童女	天明七(1787)丁未天	正月七日	
?	宝曆? 四月二十一日	?	
智光童子 海音禪童子	明治十一年(〇〇)八月七日 明治十一年(〇〇)十月三日	?	
□陽童女 英眼童女	俗名 登之 行年三才 天保四(1833)癸巳正月十五日	?	
享保十八(1733)癸丑年 悉曇童女 七月二十八日			
寛延四(1751)辛未天 兼望? 善禪定尼 十月二十七日			
宝曆十(1760)庚辰年 ? 岸童子			
文化六(1809)巳九月(十二?)日 吉(岸?)寛祥信士位 春原平吉			
? 妙道禪定門之位			
正徳六(1716)未年 露真童女 四月十日			
延享三(1746)丙寅年 妙雲童子 三月十日			
轉相□□居士	明治二十四年(〇〇)二月十九日	春原(佐?)左衛門 行年□歳	
? 元? ? 是禪定尼			
滴葉童子	寛政九(1797)丁巳歳二月十四日	春原	
幻枝童子	享和元(1801)酉年	五月初七日	
女龍宗? 信女	? 月二十二日	春原?	
?	? 光? 度成就所	? 岳良海(居士?)	
(筥?)山惠龍大姉	天明三(1783)癸卯年	?	
梅岸一枝居士	明和九(1772)壬辰天九月二十七日	俗名 春原佐左衛門	
塘岡築池大姉	文政二(1819)己卯年 六月二日	春原□左衛門 市	
觀□知善信士	弘化三(1846)丙午歳 十一(一又は二?)月四日	行年四十九才 春原傳吉	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
47	春原		童子	4			e	単独	童
48	春原		信士 信女				e	夫婦	
49	春原	家系図7-2?	信女		1808		e	単独	
50	春原		大		1757		e	単独	
51	春原		信士				e	単独	
52	春原		信女	86	1803?		e	単独	
53	春原		信士		1808		e	単独	
54	春原		大	66	1876		e	単独	
55	春原		居	70+	1883		e	単独	
56	春原	家系図3-5	居 大	57	1833 1840	1840	e	夫婦	
57	春原	家系図3-6	居	51	1860		e	単独	
58	春原		大		1835		e		
59	春原		居		1824		e		
60	春原	家系図4-3 家系図4-3	居 大		1837 1837	1837	e	夫婦	
61	春原	家系図7-5	信士	39			e		
62	春原		信女		1798		e	単独	
63	春原		信士 信女		1690 1702	1702	e	夫婦	

図3-14

図4-13

1	春原							家	
2	春原							家	
3	春原		信女 信士 信女	22 42	1922			夫婦(複数)	
4	春原	佐次右工門8	信士 信女	72 48	1923 1903		g	夫婦	
5	春原								
6	春原						d		童
7	春原						d		童
8	春原						d		童
9	春原						d		童
10	春原						d		童
11	春原						d		童
12	春原						d		童
13	春原						y		童
14	春原							家	
15	春原	家系図3-4	居士 大姉	64 50	1908 1892		h	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
常光童子	(文政?)三庚辰天 四月四日	春原?久子 ?(四?)歳	
禪中妙琴信士 悟庵真心信女	位		
光室負照信女位	文化五(1808)戊辰天	三月三十日 春原祐右衛門母	
桂雲榮樹大姉	宝暦七(1757)(丁丑?)年	八月初七日 春原佐左衛門	
明堂恵玄信士	?戌?	七月二十九日	
放室智光信女	?化二?	春原(胤?織?)右衛門利宗妻 行 年八十六才	
月松恵載信士	文化五(1808)戊辰十月二十一日	春原(胤?織?)右衛門利宗	
萃月好心大姉	明治九(〇〇)丙子年十一月六日	實房山宮下新兵衛 春原只右衛門妻 行年六十六才	
桂海真空居士	明治十六年(〇〇)五月十二日	春原?右衛門 行年七十?	
祖岳良胤居士 黎堂禪智大姉	天保四年(1833)癸巳六月十二日 篠原孫兵衛利(成?)墓 行年五十 七歳	□天保十一(1840)歲庚子 十一月十八日 ? 淳子 春原周 (右衛門?)	
萬汰良生居士	萬延元(1860)庚申六月二十一日 春原孫兵衛祐利 年五十一	?	
(春?)室智道大姉	天保六(1835)年乙未七月十日?	春原佑左衛門妻?	
海岸玄珠居士	文政七(1824)甲申八月二十日	春原佑左衛門	
正□白志居士 絶溪秀奇大姉	天保八年(1837)乙酉四月二十七日 春原(奥または興)市右衛門?友墓	天保八年(1837)乙酉四月十七日	
頓外祖良信士	明治?戊午九月	春原勇右衛門墓 行年 三十九	
邁定智宗信女	寛政十(1798)戊午天	七月十二日	
善譽宗林信士 紅譽(秋?)安信女	元禄三(1690)午年 五月二日	元禄十五(1702)午年 八月十三日	
春原家之墓			平成の建立
春原家之墓			
桂月浄光信女 昌岳浄道信士 彩室妙雲信女	明治三十?年九月二日 妻?二十二才 大正十一年八月二十八日	昭和の建立	
春岳理性信士 恒聞妙法信女	大正十二年三月五日没 春原八百次郎 行年七十二才	明治三十六年六月二十七日没 春原?の 行年四十八才	
?			
?			
?			
雲?親?			
?			
?			
?			
?			
春原家之墓			
德應元隆居士 哲苗雄(金または金?)大姉	明治四十一戊申年? 春原元左衛門 行年六十四歳	明治二十五壬辰年十月四日 妻やそ 行年五十歳	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
16	春原		居士 大姉		1874			h	夫婦？	
17	春原									童
18	春原		信士 信女		1859			h	夫婦？	
19	春原		信士 信女		1860 1851	1860		h	夫婦？	
20	春原	家系図2-3	定門 定尼	79 67	1787		0.825	h	夫婦	
21	春原								家	
22	春原	家系図2-5	信士 信女	68 56	1821		1.017	e	夫婦	
23	春原		信女	78	1926			h	単独	
24	春原									童
25	春原		大姉		1818			h	単独	
26	春原				1789			h	単独	
27	春原		信士	29	1853			h	単独	
28	春原		定尼					d	単独	
29	春原		善男		1821			d	単独	
30	春原		童女		1812			e	単独	童
31	春原							e	単独	童
32	春原	家系図6-3	居士	60				h	単独	
33	春原		大姉					e	単独	
34	春原	家系図6-1	居士		1799		1.23	e	単独	
35	春原	家系図2-2	居士 大姉		1734			e	夫婦	
36	春原	家系図6-2	大姉		1794			e	単独	
37	春原		居士 大姉		1740			e	夫婦	
38	春原	家系図6-2	居士	65			1.652	e	単独	
39	春原	家系図6-2	大姉					h	単独	
40	春原		童女		1805			d	単独	童
41	春原		定門 禪尼		1784			d	夫婦？	
42	春原		童子	5	1851			h	単独	童
43	春原		居士 大姉	35 77	1852 1883			h	夫婦？	
44	春原								家	
45	春原		大姉	23	1863			h	単独	
46	春原							d		童
47	春原							d		童
48	春原		定尼					d	単独	
49	春原		童子					e	単独	童
50	春原		定門		1803			d	単独	

正面	左側面	右側面	背面
即應信心居士 具相慈然大姉	明治七年甲戌九月二十四日 春原武(武?)郎?門?行年四十有 才		
?			
本安道性信士 戒心明珠信女	安政六年七月十九日	?永?年八月十八日	
孤高奇峰信士 貞操常善信女	万延元年十二月十四日	嘉永四年九月?日	
一相□光蓮定門 遠室寿離禪定尼	天明七丁未年七月四日 春原久四郎	天?七?申年(八月?)	
春原家之墓			
紅泉即眼信士 光岳妙英信女	?	文政四?巳年 春原久藏?	
玄光知春信女	大正十五年一月十四日死去	春原□□行年七十八歳	
?			
法雲知光大姉	文政元戊寅年六月二十五日	春原五良兵衛妻	
心月淨光禪定?	寛政元酉年	九月上七日	
禪芳令?信士	嘉永六癸丑天	春原清作二十九才	
? 寒(庵?)良雪禪定尼	十二月十五日		
文政四巳?年二月	栄林青□善男 俗名源七		
勝顔童女	(文化?)九壬申歳七月五日	春原五良兵衛娘	
?童?			
?居士	?	春原勝兵衛 六十才	
六(本?)得?大姉	(寛?)?八月十二日	春原五郎三妻	
林岱峯智玉居士	林政十一年巳未二月九日	春原五郎三郎	
?定門居士 ?妙?大姉	? (保?)?	享保十九甲寅年四月二十三日 春原久之丞妻	
鐵山一峭大姉	寛政?甲寅歳 ?保科氏	三月二十日卒 春原宇右二門妻	
圓岩義?居士 ?妙?大姉		運 元文五年庚申六月十九日 春原助右衛門四室	
賢翁義哲居士	?五?午年二月十三日	春原宇右衛門 行年六十七	
無閔(慧?)大姉	?九?	二月十九日 宇右衛門後妻	
文化二乙午年 □光童女 四月十四日			
寛(延?) (元?) (六月四日?) 常心?定門 光?恵?禪尼 天明?四月?			
?峰童子	嘉永四寅年二月六日	行年五才春原松弥	
?佛居士 ?法普禪大姉	嘉永五壬子閏二月七日 行年三十五歳 春原保之助	明治十六年八月一日 行年七十七歳春原宇多	
春原家之墓			平成の建立
?大姉	文久三(四月?二日?)	行歳二十三年 俗名□い	
?			
?			
?靈定尼 九月?日			
恵香童子		春原五良兵衛男	
享和三?年 文適視長禪定門四月?日			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
51	春原		居士		1772			e	単独	
52	春原		童子						単独	童
53	春原							a		
54	春原								家	
55	春原			25	1916			y	単独	
56	春原								複数	
57	春原							b	単独	
58	春原		信士 信女		1630			e	夫婦?	
59	春原		大姉	77	1781			e	単独	
60	春原		居士 大姉	51	1915			h	夫婦?	
61	春原	家系図1-5	居士 大姉	71	1796		0.4	h	夫婦	
62	春原	家系図1-7	居士	34	1820			e	単独	
63	春原		童女 童子	5	1835			e	複数	童二人
64	春原		童女 童子	4	1839			e	複数	童二人
64a	春原		大姉	65	1850			e	単独	
64b	春原		居士 大姉		1778			e	夫婦?	
64c	春原	家系図1-8	居士	22	1862			e	単独	
64d	春原	家系図1-8	居士 大姉	38	1865		1.655	e	夫婦	
65	春原							d		
66	春原							d		
67	春原							d		
68	春原				1723			e		
69	春原	佐次右工門喜八1	居士	102	1816		1.173	e	単独	
70	春原	佐次右工門4	大姉	88	1815			e	単独	
71	春原		大姉	31	1815			e	単独	
72	春原		大姉	31	1848			e	単独	
72a	春原		居士	32	1815			e	単独	
72b	春原	佐次右工門5	居士 大姉	86 68	1847 1840	1847	1.353	e	夫婦	
73	春原		居士 大姉		1742			e	夫婦	
74	春原		居士 大姉		1689 1699			e	夫婦	
75	春原		居士 大姉		1726			e	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
寶山祖月居士	□明和九壬辰年 正月四日亥刻没	碑文：？	
□(=蚊)雲(童子?)			
？			
春原家之墓			
春原正?之墓	大正五年三月十六日歿 行年二十五才		
自性洞仙居士	昭和なので略	春原治左衛門夫婦之墓	
故陸軍軍曹春原富司之墓			
頓念慈了信士 □山玄柳信女	寛永七年丙寅八月上六日 春原氏□縁矣	？	
覺堂妙苑大師	行年七十有七才卒 春原治左衛門?	□天明元辛丑歲 六月二十六日□没	
黙翁良照居士 縁室智因大師	？	大正四年巳年正月十五日 行年五十一歳春原治左衛門利貞墓	
椿翁良照居士 智山慧明大師	春原治左衛門墳 行年七十一歳終 寛政八年丙辰五月十日	？	
大道圓覺居士	文政三年庚辰春二月春原勝太郎利 栄墓	？	
浄慧禪童女 白養禪童子	天保六乙未年□七月五日行年五歳 春原藤女	？	
澗及禪童女 泰徳禪童子	天保十年乙亥六月二十一日 四歳夭	？ 春原利(置?)女	
華道守繩大師	嘉永三庚辰(辰?)二月 享歳六十有五	？	
聽庭雪閑居士 鈴屋妙瀧大師	春原利置	安永(七?)戌?月十?日 ?	
雪屋穠窓居士	文久二年壬戌年十一月五日	春原利真 行年二十二	
徹通浄源居士 松室貞樹大師	慶応元乙丑年五月十一日 春原治左衛門利見行年三十八	明治?戊年九月十四日 春原?貞(子?)	
？			
？			
？			
？	享保(8?)十		
雲□女性居士	文化十三年(丑?)五月朔日	行年百二歳 春原喜八	
風岸智清大師	文化十二年亥正月九日	行年八十八 春原喜八妻	
明窓良了大師	文化十二年亥二月二十日	行年三十一 春原彦兵衛妻	
端室妙韻大師	嘉永元申年五月二日	行年三十一春原(茂?)右エ門妻	
(王?)居士	文化十二年?十一月?日	行年三十二 春原彦兵衛	
大庵祖圓居士 尤室智照大師	弘化四未年正月二十四日 行年八十?才春原佐次右工門	天保十一子年十月二十三日 行年六十八才春原佐次右工門妻	
岩明祐居士 ?慧?大師	？	寛保二壬戌七月五日 春原新?妻	
溪山露雲居士 ?峰負機大師	(元禄?)二巳巳年六月十八日 春原佐次兵衛	元禄十二巳卯歲十月九日 春原佐次兵衛妻	
性?居士 妙雲浄智大師	享保?三月二日 春原文?	享保十一丙午年九月十九日 春原文?妻	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
76	春原		信士 信女	81	1863		e	夫婦	
77	春原	佐次右エ門6	信士 信女	71	1855		e	夫婦	
78	春原		大姉	72			e	単独	
79	春原								童
80	春原	佐次右エ門5	信士 信女	80	1836 1827		e	夫婦	
81	春原							家	
82	春原		信女		1788		e	単独	
83	春原						e	単独	
84	春原				1778		e		
85	春原							家	
86	春原							家	
87	春原							家	
88	春原		孩児3人		1913	1920	y	複数	孩
88a	春原						a		
89	春原							家	
90	春原						x		
91	春原						y		
92	春原						d		童
93	春原		信女				d	単独	
94	春原		定尼				d	単独	
95	春原		善女				d	単独	
96	春原		定尼		1821		d	単独	
97	春原		信士?				d	単独	
98	春原		童子				d	単独	童
99	春原		信士		1783		y	単独	
100	春原		信女 童子		1729		e	複数	童・大人
101	春原		童女		1777		y	単独	童
102	春原		信士		1789		e	単独	
103	春原						y		
104	春原		信士		1775		y	単独	
105	春原	市左エ門六右エ門1	信士 信女	86	1785 1789	0.03		夫婦?	
106	春原		信女		1789		e	単独	
107	春原		信士		1777		e	単独	
108	春原				1783		e	単独	
110	春原		信士		1819		e	単独	
111	春原	市左エ門3		48	1821		e	単独	
112	春原		信女		1722		e	単独	
113	春原						d		

正面	左側面	右側面	背面
虚山是空信士 □林貞光信女	?元庚?年十月十七日 文久三亥年十二月十五日	行年八十一才 春原休治郎夫婦	
千峯月溪信士 朝光専往信女		安政二乙卯年九月九日 行年(二?)十一才春原廣吉(夫婦?)墓	
教室良訓大姉	?十一月十二日	行年七十二歳 春原久治郎妻	
?			
超山玄宗信士 過外洞絶信女	天保七申年十二月十?	文政二亥年八月十一日 春原佐兵衛夫婦	
春原家之墓			
?信女	天明八申?	春原?妻	
?心良?	安永?	春原久治郎	
?心良居士	安永七戌年 三月朔日	行年七十二歳 春原久治郎	
春原家?代之墓	明治から昭和まで六名		昭和の建立
春原家之墓			
春原家之墓			昭和の建立
法善孩児 蓮正孩児 ?孩児 玉 大嬰女	大正二年五月十五日亡幸治郎		
?			
春原家之墓			
?			
南無阿弥陀仏		昭和の建立	
?			
?信女 三月十八日			
?定尼			
?四? 壽?芳?善女五月初 四日			
文政四?巳年 鶴山□要禪定尼 ?月上一日			
?			
?童子			
?信士	天明三癸卯十月二日	春原幾八	
?信女	享保十四? 空幻童子 酉閏五月四日		
寒?童女	安永六丁酉年	十二月十七日	
?岳玄?信士	寛政元巳酉九月二十四日		
?			
一□釋乘信士	安永四卯未年	五月二十五鳥?	
??信士 山?信女	天明五巳歳?月二十三日 春原(六?)右衛門	(寛?)政元巳酉十二月?	
心□妙(慧?)信女	寛政元酉四月(八日?)	春原(伊?)右?妻	
?信士	安永六酉年	?	
?信?	(天?)明三癸卯七月?日	春原味助?	
? (信士?)	文政二年巳卯九月二十四日	?	
?	文政四辛巳歳七月朔日	春原安右エ門	
?	享保七?寅年 潮水?光信女正月十五日		
?			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
114	春原				1760		e	単独	童
115	春原								童
116	春原								童
117	春原								童
118	春原						d		
119	春原						d		
120	春原		定門 定門				e	複数	
121	春原						a		
図3-15									
図4-14									
122-131	春原		定尼		1787		e	単独	
123	春原		定門		1819		e	単独	
124	春原						d		
125	春原								童
126	春原		信士 信女		1806		e	夫婦?	
127	春原		居士	52	1847		y	夫婦	
			大姉	42	1852				
128	春原						d		
129	春原						d		
130	春原						d		童
131	春原		定門		1807		d	単独	
132	春原								童
133	春原						a		童
134	春原						a		童
135	春原								童
136	春原								童
137	春原								童
138	春原								童
139	春原								童
140	春原								童
141	春原		善女				e	単独	
142	春原		信士		1803		e	単独	
143	春原						b	単独	
144	春原	佐次工門廣吉2	信士(鹿藏)	74					家族
		佐次工門廣吉3	信士 (十七次)	73					
145	春原		孩女				g		童
146	春原				1898		h	夫婦	
147	春原		信士 信女	70	1923		g	夫婦	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
浄?童	宝曆十甲申天	二月?四日	
?			
?			
?			
?			
?	?六?十一月十八日 ?祖?禪定門 ??月十五日 ?道禪定門	?	
?			
幽山妙仙禪定尼	天明七丁未年	?二十日	
明?禪定門	文政二巳年十月二十七日	?春原政藏	
?			
?			
宗□祖?信士 栢□妙?信女	文化三丙寅天七月上三日? □?吉	二月二十?	
弘化四年丁未五月十九日行年五十 龍?祖?居士 關定兵衛 靈?大姉 同人妻 嘉永五 ?月十六日 行年四十二			
?			
?			
?春?			
文化(四?) ?定門			
?			
?			
?			
?			
?			
?			
?			
秋山?月善女十一月十 九日			
文?信士	享和三癸□稔 六月二十六日 (関?)長(藏?)	?	
故整備兵長春原福太郎之墓			
春原家之墓 墓誌:明治から昭 和まで 浄庵道極信士 明治二十八年三月 七日 鹿藏 七十四才			
妙誠孩女		春原豊長女 松枝	
春原鹿藏夫婦墓		明治三十一年十月二十三日歿	
法嶽寿雲信士 法林寿光信女		大正十二年九月十六日同人妻□ 行年七十才 植糠郡中之篠村 塚田三左エ門二 女	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
148	春原		信士 信女					夫婦？	
149	春原		信士 信女				y	夫婦？	
150	春原		信士 信女				e	夫婦？	
151	春原		定門？				e	単独	
152	春原		定門 定尼		1856		d	夫婦？	
153	春原		定尼		1806		d	単独	
154	春原						d		童
155	春原		童女		1756			単独	童
156	春原		定尼				d	単独	
157	春原		定門				d	単独	
158	春原						d		童
159	春原								
160	春原				1721		d	単独	童
161	春原		定門		1801		e	単独	
162	春原						d		
163	春原				1804		e		
164	春原	六助武兵衛6	居士 大姉		1925 1901		e	夫婦	
165	春原						e		
166	春原						e		
167	春原	六助武兵衛4	信士 信女	63	1857		e	夫婦？	
168	春原						e		
169	春原								
170	春原	六助甚七5	居士 大姉	65	1895	1.34	y	夫婦？	
171	春原	六助甚七4	居士 大姉	89	1892	1.34	y	夫婦？	
172	春原		居士 大姉		1925		g	夫婦	
173	春原		居士		1879		e	単独	
174	春原	六助甚七4	信士 信女	76 48	1869 1855		y	夫婦	
175	春原		信士				e	単独	
176	春原		信士				e	単独	
177	春原		居士		1811		e	単独	
178	春原		信女		1758		e	単独	
179	春原						e		
180	春原						e		
181	春原				1811		e		

正面	左側面	右側面	背面
大穆良仙信士 翠月妙照信女	昭和:略	昭和:略	
真?運?信士 ?屋靈樹信女	?	春原佐藏?婿墓	
法輪浄界信士 識想恵心信女		春原重五郎	
物故常休?門位十二月?			
靜中?禪定門 ?自照禪定尼	?正月三日 ?	安政三?辰八月二十三日	
文化三寅年	泊?玄如禪定尼 四月二日		
?			
宝曆六寅天	桂林童女 ?日		
?定尼			
(安永?)?放了性禪定門			
?			
石塔:妙法蓮華			
享保(六?)?天 □? 四月?日			
享和元?澄江智?禪定門 六月二十八日			
?			
?	(享?)和四		
通安(亮?)禪居士 (寿?)安?大姉	明治三十四年三月?春原嘉太郎行 年四十?才 大正十四年三月?日同人?□と行 年六十?才		
?			
?			
一提智圓信士 面室素目信女	安政四巳十一月十七日 春原□八	? ?二十四日	
?			
?			
露山秋光居士 慈昌慧光大姉	明治二十八年八月二十九日没 春原新作 行年六十五		
昌翁寿榮居士 昌室寿貞大姉	明治二十五年五月一日卒春原甚八 行年八十九		
吉豊良安居士 梅月春光大姉	昭和:略	大正十四年二月六日没 吉太郎 妻みよ	
自覺覚性居士	明治十二年十二月二十三日	?	
?	明治二?(卯?)四月九日行年七十 有六 春光明恵信士 春原林之助 覺常道禪信女 同人妻 安政二乙卯五月二十二日行年四十 有八	?	
雪光祖林信士	?	春原甚藏	
雄此了花信士	天保?	?	
雲外?(居士?)	文化八?未	四月初八日	
石雲玄確信(女?)	宝曆八戌寅天	六月十一日	
?			
?			
?	文化八?	?	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
182	春原				1833		e		
183	春原								
184	春原								
186	春原								
187	春原								
189	春原							家	
190	春原		信女2人 信士					複数	童 童
191	春原								童
192	春原								童
193	春原								童
194	春原								童
195	春原								
196	春原		信士	62	1920		e	夫婦(複数)	
197	春原		信女2人	31	1883				
198	春原								
199	春原						x		
a	春原						y		
b	春原								
c	春原								
d	春原								
e	春原		定尼					単独	
f	春原		童子		1723		a	単独	童
g	春原						y		
200	春原								
201	春原								童
202	春原								童
図3-16									
203	春原							家	
204	春原								
205	春原		居士		1829		e	単独	
206	春原		居士 大姉		1789		e	夫婦?	
207	春原						y		
208	春原						y		
209	春原						d		童
210	春原		童女		1805		e	単独	童
211	春原		居士 大姉		1691		y	夫婦?	
212	春原		居士 大姉		1697		e	夫婦?	
213	春原		居士 大姉		1744 1769		e	夫婦	
214	春原		童女		1800		e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
?	天保四年巳?		
?			
?			
春原家之墓			
梅岩妙香信女 (與?)道良傳信士 戒屋妙寿信女			
?			
?			
?			
?			
泰山香峰信女 朗然明?信士 金 真春須信女	明治十六年三月二日 妻?歿 卒 年三十一	大正九年八月十三日	
	明治二十七年十月十一日春原兼太 郎卒年六十二	?林太郎 女 ?代建立	
?			
石塔 ?			
?			
?			
?			
享保? ?禪定尼			
霜光禪童子享保八? 六月?			
真祐			
春原家累代之墓			昭和の建立
?			
?居士	春原?右衛門?文政十二年巳?三 月十七日		
一翁祖桂居士 放室妙□大師	安政十?十月上五日春原?右衛門 墓	寛政元年巳酉六月十八日 春原(宗?)右衛門	
?			
?			
?			
妙光(童?)女	文化二乙丑□	四月二十五日	
?原春宗居士 ?林妙勇大師	??月朔日	元禄四年辛未一月二十五日 春原?	
金?榮宗居士 慧岸妙春大師	?	元禄十年丑四月十四日 春原(金?)左衛門	
鹽山玄智居士 □室貞滄大師	延享元甲未年 春原空右衛門	明和六巳丑三月二十五日 春原空右衛門妻	
?淨童女	寛政十二庚申	正月二十四日	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
215	春原		大姉		1782		e	単独	
216	春原						e		
217	春原		童子		1778		e	単独	童
218	春原	善兵衛左工門 左左工門1		68	1808 1800	3.649	e	夫婦	
219	春原				1824		e		
220	春原	善兵衛左工門 左左工門2	居士 大姉	63 79	1830 1856	2.647	g	夫婦	
221	春原	善兵衛左工門 左左工門3	居士 大姉	62		1.2	e	夫婦	
222	春原		居士				e	単独	
223	春原		居士 居士	19	1843 1872		e	複数	
224	春原			44	1908		h		
225	春原						h	単独?	
226	春原		信女		1810		e	単独	
227	春原		定尼		1731		d	単独	
228	春原		童子				h	単独	童
229	春原		童女3人と 童子		1775		h	複数	童4人
230	春原	善兵衛左工門 左左工門2	居士 大姉	78	1860 1871		h	夫婦	
231	春原		居士 大姉	66	1909		h	夫婦?	
232	春原		居士 大姉	55 70	1909 1922		h	夫婦	
233	春原								
234	春原							家	
235	春原							家	
236	春原								童
237	春原								童
238	春原								童
239	春原								童
240	春原								童
241	春原								
242	春原								童
243	春原								童
244	春原							家	
図3-17									
860	塚田				1789		e		
861	塚田		禪定門				d		
862	塚田		信士 信女		1754		e	夫婦	
863	塚田		信女		1790		e	単独	
864	塚田		信士		1789		h	単独	
865	塚田		童女		1818		e	単独	童

正面	左側面	右側面	背面
絶? 津津大姉	天明二? 十月十日	春原空右衛門妻	
? 異?	(明和?)? 年?	十一月二十三日	
了芳童子	安永七年戌	十月二十六日	
?	文化五戌? 俗名春原空左衛門	寛政十二庚申二月二十三日 春原空左衛門妻	
?	春原空左衛門孫墳	文政七年甲申十一月十五日	
桂翁良把居士 ? 大姉	春原空左衛門? 文政三〇庚寅正月十日	安政三辰十月二十三日	
? 居士 容? 願大姉	(安政?) (二か三?) 年十一月二十九日 春原空左衛門	安政二乙卯年十月二十七日 同人妻	
箇中? 居士	明? 元年十二月十八日	春原空左衛門 行年七十(有?)	
一山照春居士 玄光理仙居士	明治五年壬申六月九日 春原祐(藏?) 行年? 才	天保十四癸卯年九月七日 春原三平 行年十九才	
?	春原イ? 行年四十四歳	明治四十一年五月十四日卒	
?	?	春原藤兵衛子	
(香?)? 禅信女	(文化?) 七庚午三月? 九	春原喜右衛門娘	
享保十六年	梅秀禪定尼之位 正月九日		
〇彩童子	天?	春原? 太(郎?)	
早世 祖源童女 織月童子 秀峰童女 智説童女	?	安永四末三月十七日 ? 三? 年十一月三日	
禅戒普外玄燈居士 禅? 花溪渾然大姉	万延元年庚申六月五日 春原藤兵衛和房行年七十八	明治四年甲未九月十四日 更? 郡平林? 出清吉長女俗名?	
禅戒秀道恵〇居士 戒秀光妙慧大姉	明治? 十四年? 春原?	? 安兵衛二女 明治四十二年六月十五日妻春原? 行年六十六	
禅戒慈藤大忍居士 禅戒慈室守忍大姉	明治四十二年一月五日卒 春原藤兵衛利恭 行年五十五歳	大正十一年三月一日卒 春掛吉郎兵衛三女 春原勢以行年七十歳	
禅戒賢峰智道居士	昭和:略	昭和:略	
春原家累代之墓	昭和:略		
春原家之霊			昭和の建立
?			
?			
?			
?			
?			
?			
?			
春原家	向かって右側:春原家累代之墓	碑文有り	
津? 祖梁信?	寛政元本? 酉	3月?	
宗〇禅定門(寛延?) 11月28日			
王? 信士 厭? 崇信女	宝暦4卯? 4月初4日	明和?	
勸室良法信女	寛政2? 年	37713	
浄源祖梁信士	寛政元〇酉	3月念又6日俗名 塚田源治	
良親童女	文政元寅年	塚田浪吉娘〇〇	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
866	塚田		信女	27	1820		e	単独	
867	塚田		信士		1823		e	単独	
868	塚田						e	単独	
869	塚田						?		
870	塚田						?		
871	塚田								
872	塚田		信女	51	1885		h	単独	
873	塚田						d		
874	塚田						d		
875	塚田				1819		e		
876	塚田						h	先祖	
877	塚田				1915		g	家代々	
878	塚田				1799		e	単独	
879	塚田		信女		1830		e	単独	
880	塚田	家系図権六-3	信士	73	1823	0.002	e	単独	
881	塚田		信士		1750		e	単独	
882	塚田		信女		1860		d	単独	
884	塚田		信士 信女	51	1843 1856		g	夫婦	
885	塚田						a		
886	塚田		信女	18			e	単独	
887	塚田		信女	75	1834		e	単独	
888	塚田		信士	73	1828		e	単独	
889	塚田		信女				e	単独	
890	塚田	茂左衛門1-6	信士	55?	1820	0.004	e	単独	
891	塚田	左治兵衛1-8	信士	71	1851	0.378	e	単独	
892	塚田		信士	36	1824		e	単独	
893	塚田						g	家	
894	塚田		信士 信女		1877		e	夫婦	
895	塚田		信女				e	単独	
896	塚田		信士	28	1861		e	単独	
897	塚田		信女	83	1871		e	単独	
898	塚田		信女	13	1893		e	単独	
899	塚田		信士 信女	69 82	1820 1824		e	夫婦	
900							?		
901	塚田						g	家	
図3-18									
図4-15									
744	小祝						e		
745	小祝						h		
746	小祝 古岩井	家系図2-5 家系図2-5	居 大	31 44	1807? 1862		e	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
日窓寛明信女	文政3寅辰6月2	? 田? 太娘? 27才	
空一超却信士	文政6癸未年	?	
? 徳信?	宝暦?	孝子塚田茂?	
?			
?			
?			? 乙亥年四
室徴(育?)信女	明治18年4月15日	美佐墓 行年51才	
享保?			
? 寛?			
□大日	文政2年	塚田?	
塚田家先祖之墓			
塚田家代々之墓	昭和の建立		
修一即法信?	寛政11巳未天	9月上10日塚田初□	
法室素伝信女	文政13年庚寅8月15日	塚田権右エ門妻	
さい外了溪信士	文政6癸未年	塚田権右エ門	
? 信士	寛延3	37658	
安政7? 年真寂? 光信女 正月22日			
大巧如拙信士 全室祖香信女	天保14? 塚田茂七墓	安政三丙申年9月24日 行年51才 ? 七妻 □□墓	
?			
空春屋? 道信女	?	塚田茂七? 行年18才	
桂堂原芳信女	天保5年甲午2月19日	塚田? 右衛門妻享年75才	
肖業池信士	文政11子5月18日	塚田国右衛門行年73才	
慧滄智海信女	天保?	塚田(茂?)左衛門妻	
冊光玄□信士	文政3庚? 正月9日	塚田(茂?)左エ門	
把山了住信士	安政4年? 辰(7月?)19日	塚田茂平 卒年71才	
九室勇亨信士	文政7甲申8月3日	行年36才	
塚田家之墓			
山應祖山信士 宗室慈徳信女	(宝永?) 塚田茂七 行年?	明治10丁? 年8月24日 塚田? 七妻 行年?	
月雪禅心信女	?	塚田茂右衛門 妻	
祖芳玄了信士	文久元二酉年7月24日	塚田茂作 行年28才	
秀岳妙香信女	明治4辛未年正月? 日	塚田茂平治妻 享年83才 山金井村宮嶋? 娘	
祖峯明園信女	明治26年3?	塚田茂平□娘 行年13才	
滄光院伝信士 大安良道信女	大正9年6月28日歿 塚田萬作 □ 行年69才	大正13年4月25日歿 妻 以勢 □ 行年82才	
?			
塚田家之墓			
泉明院澄誉貞光大姉	明治? 4年1月11日歿	小岩井歳三部長女 (注)茂三郎の間違いか 小岩井やす 行年49歳	
小岩井家之墓			
勝心庵哲誉道意居士 清勝庵浄誉妙意大姉	文化4年庚未9月30日 古岩井清作重明墓 30有1歳	文久2年壬戌12月8日 小岩井清作重明妻 俗名久女 行年40有4	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
747	小祝	家系図3-6 家系図3-6	居 大	24 35	1879 1891		e	夫婦	
748	小祝		信士		1725		e	単独	
749	小祝		信女		1728		d	単独	
750	小祝		信士 信女		1760 1766		d	夫婦	
751	小祝		信女		1797		e	単独	
752	小祝		居	21	1891		e	単独	
753	小祝		居 大		? 1877		e	夫婦	
754	小祝		居 大				y	夫婦	
755	古岩井		居 大	87 67	1864 1849	2.056	e	夫婦	
756	古岩井		童子		1847		e	単独	童
757	小祝		信士				y	単独	
758	小祝		信士				d	単独	
759							y		
760	小祝		大 居 大 居 大		1891 1914		e	夫婦 (先妻・後妻)	
761	小祝		居 大				g	夫婦	
762	小祝	家系図2-7 (茂三郎?) 家系図2-7 (茂三郎?)	居 大	79	1901		y	夫婦	
763	小祝	家系図5-1 家系図5-1	居 大	62 72	1854 1870	0.87	e	夫婦	
764	小祝		居		1870		e	単独	
765	小祝		童子 童子 童子 童子		1843 1845		e	複数(童子)	童
766	小祝		居	37			e		
767	古岩井		大		1862		e	単独	
768	小祝				1854~		g	家	
769	小祝						h	先祖代々	
770	小祝		童女 童子		1918		e	複数(童子)	童
771	小祝						h	家	
図3-18									
図4-15									
772	高遠		禪定尼				d	単独	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
琳清院良譽淳光放□居士 麗淨院晶譽見雲妙□大姉	明治12年3月6日没 小岩井幸次郎 行年24才	明治24年9月23日没 小岩井伊津 行年35歳	
享保10亥天 了蓮信士靈位 4月14日			
享保13申年 ?定?妙宗信女?位 7月6日			
宝曆10庚辰4月25日 盛林道光信士 □光妙林信女 明和3丙?4月朔日			
聽室秋音信女	寛政9巳年	37820	
修禪院?相露身居士	明治24年6月2日歿	碑文 小岩井徳藏行年21才	
勝譽法居士 □譽妙軼大姉	?	明治10年11月? 小岩井勝與 行年32才	
到勝院廣譽念純道居士 純走院蓮譽□非法忍大姉	明治?年	掘村 ?邊?右衛門次女 小岩井(成?)次郎妻 行年6?才	
□樹庵實譽樓閣居士 蓮乘庵貞譽智鏡大姉	元治元年甲子7月13日	嘉永2年歲龍巳酉12月14日 古岩井茂助重利妻 享年67才	
淨園童子	弘化4年	古岩井元之助	
隆岳良霞信士	?	?	
(宝曆?宝永?)?			?
?信?			
智照院誠譽清心貞勝大姉 福寿院廣譽徳光義道居士 廉良院榮譽妙覺順正大姉	小岩井利藤天	明治24年2月21日 利藤先妻俗名 くみ□ 行年40才 大正3年4月7日歿利藤後妻俗名 ? 行年50?	
廣徳院小親達乘禪清居士 積善院順厚貞然禪清大姉	昭和:略	昭和:略	
晚雲院相譽好然顯照居士 智光院好譽相室貞妙大姉	明治34年12月11日 小岩井茂太郎 行年79才		
順譽貞光居士 西譽妙向大姉	嘉永7年寅5月18日 行年62歳 小岩井清兵衛重秩	明治3年□3月10日 行年72才 小岩井清兵衛重秩妻	
□泉庵嚴譽浄井居士	小岩井清?重?之墓	明治3年之秋…碑文	
光林善童子 淵曉善童子 智宗善童子 婁雲善童子	光 文化? 源 天保?	智 天保14甲卯年4月10? 婁 弘化2乙巳年3月?	
香嚴院□譽寂?居士	?	?郡中村 宮城?左衛門次男 小岩井源三郎重行 行年37才	
織譽彩光妙善大姉 小岩井家之墓	文久2壬戌年7月?日	古岩井重明娘行年? 俗名美奈	
先祖代々之墓			
秋岸善譽童女 □容譽光童子	大正7年? 小岩井長久 ?	大正元年?	
小岩井家之墓			
?徳3?禪定尼			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
773	高遠		信士		1766		d	単独	
774	高遠		信士		1728		d	単独	
775	高遠						d		
776	高遠						d		
777	高遠						d		
778	高遠						x		
779	高遠		信女				破損	単独	
780	高遠		善女				破損	単独	
781	高遠						d		
782	高遠		信女		1718		d	単独	
783	高遠						d		
784	高遠						y		
785	高遠						h	家	
786			童子				h	単独	童
787	高遠	家系図1-6	信士 信女	64	1819 1830	0.673	e	夫婦	
788	高遠	家系図1-8	信士 信女	68 43	1895 1870		e	夫婦	
789	高遠		信女 信女	52 65	1909 1925		h	姉妹	
790	高遠	家系図1-7	信士 信女	68	1858	1.292	e	夫婦	
791	高遠		信女				e	単独	
792							y		
793	高遠		居 大				h	夫婦	
794	高遠		童女				y	単独	童
795	高遠						y		
図3-18									
図4-15									
841	別山崎						?		
842	別山崎						d		
843	別山崎		童子		1732 1751	1751	d	複数	
844	別山崎		禪定門?				d	単独	
845	別山崎		信士		1751		d	単独	
846	別山崎		信女				e	単独	
847	別山崎		信士 信女				d	複数	
848	別山崎						g	家	

正面	左側面	右側面	背面
明和3子年 教岳恵須信士 正月17日			
享保13甲天 正運達道信士 正月5日			
?			
?			
?			
?			
? 信女			
? 善女			
?			
享保3 空 理園信女 位 10月?			
?			
?	? 信士		
高遠家之墓			
正覚童子	昭和なので略		
祐覚勇照信? 照山現妙信?	文政2戌?年2月11日 高遠源六夫婦	文政13庚寅年10月19日	
透善禅明信士 誓善貞應信女	明治28年6月19日 高遠種吉 卒年68歳	明治3年6月22日 妻 高遠と□卒年43歳	
閑室妙淨信女 秋月妙剛信女	明治42年9月15日歿高遠種吉長女 きく52才	大正14年9月6日歿 高遠種吉貳女なか65才	
□雲慧海信士 誠至貞至信女	安政5年?歳?10月2日 高遠甚左衛門 行年68才		
?			
? 了室? 信女			
?			
□譽精道種徳居士 瑞譽精雲妙康大姉	昭和:略	昭和:略	
悦雲善童女		高遠熊次郎 長女悦子行年4才	
安□と平和に			
?			
?			
享保17?8月12日 日?稚童童子 寛延4未年2月?日 運了信□靈?			
? 定門?			
寛延四未年 寛法里園信士 3月22日			
春?智先信女 明和?			
? 辰年11月? 雲?詮信士 ?年?信女			
山崎家之墓	昭和、平成:省略		

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
849	別山崎	別系統半左衛門-4	信士 信女		1812		e	夫婦	
850	別山崎		信士 信女		1814		e		
851	別山崎			67	1925	1917	h	家族	
852	別山崎		信女		1795		e	単独	
853	別山崎						e		
854	別山崎						g	夫婦	
855	別山崎		信士 信女				e	夫婦	
857	別山崎			39 77	1884 1914		g	夫婦	
858	別山崎						g	家	
859	別山崎						h	家	
図3-19									
663	北澤		居	24	1935		g	単独	
664	北澤						h	累代	
665	北澤	家系図4-3	居	74	1865	1.789	e	単独	
666	北澤	家系図4-5	居	30	1870		e		
667	北澤						g	家	
668	北澤	家系図1-7	大	62	1852		e	単独	
669	北澤	家系図1-7	居	70	1860	1.318	e	単独	
670	北澤				1866		e	単独	
671	北澤		居		1867		e	単独	
672	北澤		信女		1677		y	単独	
	北澤		信女		1677?		y	単独	
673	北澤		大		1916		e	単独	
674	北澤	家系図1-9	居	31	1879		e	単独	
675	北澤		信士		1839		e	単独	
676	北澤						d		
677	北澤						y		
679	北澤		大		1854		e	単独	
680	北澤						x		
681	北澤						x		
682	北澤						x		
683	北澤						d		
684	北澤								
685	北澤								
686	北澤								
687	北澤								
688	北澤		童子	2			y		童
689	北澤		信士		1723		d	単独	
690	北澤		信士				y	単独	

正面	左側面	右側面	背面
光学明心信士 心月妙□信女	文化9? 酉年 ?	寛政? 年2月十? 日 山崎金六妻	
寶□葉信士 □寶花信女	文政?	文化11? 年4月16日 同人妻	
山崎?	夫 大正14年8月7日歿 67歳	4女 大正6年10月16日歿28歳	
春□妙松信女	寛政7乙卯年	正月初7日 山崎丈助妻	
?			
山崎袈裟次郎夫婦之墓	夫 昭和:省略		
覺譽隆戒信士 戒譽光順信女	?	?	
山崎初太郎 山崎たき 之墓	明治17年8月13日歿 39歳	妻 大正3年10月7日歿 77歳	
山崎家之墓			
山崎家之墓			
顯譽静雲良道居士	昭和10年没	行年24歳	施主 北澤
北澤家累代之墓	昭和から多数		
翁譽遊寛賢望居士	慶応元□巳年6月7日	北澤孫左衛門義直 行年74歳	
言譽齊真賢哉居士	明治3庚午年	北澤道太郎徳綱 行年30歳	
北澤家之墓			
星譽織雲大姉	嘉永5年壬子7月6日没	北澤? 妻	
春譽光雲居士	萬延元年庚申10月10日	行齡七十?	
樂譽?	慶応2年丙寅11月5日		?
澤譽映秀居士	慶応3年丁卯9月4日		?
延宝5年 真譽? 信女位 延宝? 東譽春哲信女			
誠譽妙安大姉	大正5年4月17日没		
任譽保真居士	明治12年11月16日卒	北澤彦一郎重雄 享年31歳	
松譽寿榮信士	天保10亥年正月朔日	?	
? 4年 元? 開信?			
?			
体譽盡柳大姉	安政元寅年12月23日	?	
?			
?			
?			
元(縁?)			
高? 崇□?			
?			
?			
延宝?			
明治35年4月3日 没想心童子 北澤 清香 行年2才			
享保8? 年 婦元秀□慧信士 10月29日			
頼了玄機信士位		? 日	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
図3-19										
691	菅沼	家系図2-5?	大 居 大	22 89 84	1827 1886 1890		0.771	e	夫婦 (先・後妻)	
692	菅沼		信女					d	単独	
693	菅沼		信士		1750			e	単独	
693A								y		
694								d		
695	菅沼		禪定尼		1767			e	単独	
696	菅沼		禪定門		1747			d	単独	
697	菅沼		信女					e	単独	
698	菅沼									
699	菅沼	家系図1-5?	信女		1810			e	単独	
700	菅沼		信士		1767			e	単独	
701	菅沼							x		
702	菅沼		童子		1656			d		童
703	菅沼		信?		1701?			y	単独	
704	菅沼		信女		1769			d	単独	
705								x		
706	菅沼		禪定門 禪定尼					y	夫婦	
707	菅沼		禪定門 禪定尼					破損	夫婦	
715	菅沼		信女		1849			y	単独	
716	菅沼	家系図1-7	信士 信女	54	1866		1.705	e	夫婦	
717	菅沼		居 大	58	1895			e	夫婦	
718	菅沼				1891 1904			e	夫婦 (先・後妻)	
719			信士		1765			e	単独	
720								x		
721	菅沼			2	1905			g		童
722								x		
723	菅沼		信士 信女		1747 1757			d	夫婦	
724	夫婦		信士		1790			e	単独	
725								y		
726	菅沼			7	1917			h		童

正面	左側面	右側面	背面
秋林淨姿大姉 觀翁龍眼居士 慈想妙眼大姉	明治19年7月18日没 菅沼定八郎 行年89才	文政10年9月22日没 先妻りん子 行年22才 明治23年12月13日没 後妻み□子 行年84才	
? 歳泰? 信女 2里文(?)4月?日			
真心了性信士	寛延9寅午天		
?		?	
?			
明和4丁亥年 随眼禪定尼位 8月11日			
延享4丁? □州慧泉禪定門6月初3日菅沼氏			
享保? 寅年 光園柱春信女 ?月13日			
菅沼小市之墓			
永林寿昌信女	文化7年午10月8日	菅沼平藏妻	
明和4丁(天道?) 禪翁慧寂信士 8月13日	?	?	
?	?	?	
明暦2丙申 ? 雙高天童子 7月27日			
元? 14 賢覚寿真? 2月18日	? 法?	平□普?	
明和6巳丑天 楚山妙顯信女 12月19日			
?		? 信女	
? 元禪定門 ? 秋? 禪定尼			
? 禪定門 ? 秋禪定尼 ? 7月30日			
哉屋□善信女	嘉永2年酉3月23日	菅沼(将?)治郎姉	
寒林祖永信士 至參智道信女	慶応2丙寅12月27日 菅沼平重 行年54	?	
顯峯山隠居士 順峯妙隨大姉	菅沼保三郎 行年58才	明治28年8月25日歿 妻かつ子 行年54才	
菅沼義宣夫婦墓	昭和 菅沼治郎右エ門	明治24年12月9日? 妻 恵□□ 享年47才 明治37年?月13日? 後妻恵□享 年27才	
明和2乙酉年 寶山慧空信士			
?			
菅沼四平之墓	明治38年4月20日歿行年2才	?	
?			
寛保4?月12 方山良園信士 秋山負輪信女 宝曆7?7月?			
南峯妙高信女 玄?	寛政2庚戌年	37704	
菅沼定□之墓	大正6年3月20日歿行年7才		

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
727	菅沼		信女		1791		e	単独	
728	菅沼	家系図1-5	信士	62	1811	0.755	e	単独	
729	菅沼		信女		1855		e	単独	
730	菅沼	家系図2-4	信士	74	1851	1.275	e	単独	
731	菅沼	家系図2-4	信女	30	1803		e	単独	
732	菅沼	家系図1-7?	信女	16	1830		e	単独	
733	菅沼		信士	30	1840		e	単独	
734	菅沼		居 大	57	1911		e	夫婦	
735	菅沼	家系図2-5	居 大	75	1887 1889		e	夫婦	
736	菅沼	家系図4-1	信士 信女	67	1892		e	夫婦	
737	菅沼		信女		1917		h	単独	
738							y		
739	菅沼				1935 1919		g	夫婦	
740	菅沼						h	先祖	
741					1920		e		
742	菅沼		居 大		1916		g	夫婦	
743	菅沼						y	単独	
図3-20									
796	小宮山						d		
797	小宮山		信士		1831?		破損	単独	
798	小宮山		禪定尼		1729		d	単独	
799	小宮山		信士				d	単独	
800	小宮山						x		
801	小宮山						d		
802	小宮山						d		
803	小宮山		禪定門 禪定尼				d	夫婦	
804	小宮山		童子				d	単独	童
805	小宮山						e		
806	小宮山						破損		
807	小宮山						d		
808	小宮山						y		
809	小宮山						d		
810	小宮山						破損		
811	小宮山						d		
812	小宮山						d		
814	小宮山		信士 信女		1860		e	夫婦	

正面	左側面	右側面	背面
普載妙？信女	寛政3辛亥10月22日	菅沼平？	
□岳明春信士	文化8未年	菅沼平藏	
諸堂玄明信女	安政2年乙卯2月初8日	菅沼定右衛門妻	
團□異頂信士	嘉永4辛亥歳	菅沼定右衛門44才	
満光慧？信女	享和3年癸亥4月22日	？本？町成澤善兵衛 行年？ 菅沼定？	
玄岳以戒信女	天保元寅年10月初6日	菅沼？衛門？	
無窓浄本信士	天保11庚子年正月20日	菅沼治郎右衛門行年30才	
禪戒秋光道海居士 禪戒寶光寿海大姉	明治44年9月28日歿 菅沼四作芳隆 行年57歳	菅沼四作妻もと	
祖岳禪弘居士 祖室明伝大姉	明治22年7月21日 菅沼定右衛門孝親 行年75	明治20年8月2日 碑文 菅沼孝規妻？う 行年68	
洞雲龍瑞信士 浄光妙雲信女	明治25年9月11日亡 菅沼庄五郎 行年67	？6月？5日歿	
青往白雲信女	4942	菅沼？	
禪戒超重一閑居士			昭和3年没
菅沼庄作夫婦之墓	11509 略	大正8年1月17日歿菅沼□勢 行年55歳	
菅沼家先祖供養塔			昭和の建立
玄岳良道信士 玄海機道信女	昭和なので略	6169 同人妻はる 行年47	
禪戒誠翁浄信居士 禪戒誠室浄念大姉	大正5年8月22日逝去 菅沼定右衛知之	昭和：略	
菅沼三ユ之墓	昭和：略		
？			
天明2？ □空□道信士 3月20日			
享保14年 妙輪禪定尼10月？			
？ 真？信士靈位 ？月9日			
？			
南無阿弥陀仏			
？			
？禪定門 智源禪定尼 享保？7月			
？8？年且□幻晝童子			
？	天(明？)？年	？	
？			
？			
？			
(宝？)			
？			
？			
？			
物故 一燈惠元信士 景林春光信女		安永7？正月二十？ 妻	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
815	小宮山	家系図1-9	信士 信女		1851		e	夫婦	
816	小宮山		信士		1762		e	単独	
817	小宮山		信女		1862		e	単独	
818	小宮山	家系図1-8 家系図1-8	信士 信女		1852	0.859	e	夫婦	
819	小宮山		信士 信女		1774		e	夫婦	
820	小宮山	家系図2-5	大	22	1800		e	単独	
821	小宮山		童子				e		童
822	小宮山	家系図4-2 (与助?)	信士		1780		e	単独	
823	小宮山		童子 童子		1915		d	複数	童
824	小宮山		庵主		1808		y	単独	
825	小宮山						y		
826	小宮山		禪定門 禪定尼		1757		d	夫婦	
827	小宮山						d		
828	小宮山		信女		大正?		e		
829	小宮山	家系図1-10 (記載無し)	童子	3	1846		e	単独	童
830	小宮山		信士 信女	55	1862		e	夫婦	
831	小宮山	家系図2-4	信士	82	1801	0.002	e	単独	
832	小宮山						a		
833	小宮山		大				e		
834	小宮山		信士 信女		1739		e	夫婦	
835	小宮山						g y	家	
836	小宮山	家系図5-2 (勝右衛門?)	信士	62	1907		e	単独	
837	小宮山	家系図4与平太-3	信士 信女	77	1830 1837		e	夫婦	
838	小宮山						y	家	
839	小宮山		居 大		1871 1878		e	夫婦	
840	小宮山		居 大		1920 1927	1927	g	夫婦	
図3-21									
1	山崎		信女		1791		d	単独	
2	山崎		信女		1776			単独	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
清岳貞眼信士 清室淨眼信女	嘉永4亥年7月8日 37821	小宮山彦太郎夫？墓 行年26才	
□江了然信士	宝曆12壬？	37968	
永屋量久信女	文久2壬戌年□8月20日	小宮山？太郎娘行年13才	
寒山智雪信士 雪星智寒信女	嘉永5壬子 37671	小宮山？夫婦墓	
？来園相大信士 ？空？大信女	天(明？)？	安永3申？天 37682	
清室貞心大師	寛政12庚申年7月？9日	八幡村大田弥兵衛娘小宮山重？元妻	
寛政？春芳童女	？	小宮山？娘	
蘭□玄杏信士	安永9寅子	小宮山与三	
明治？子年8月？ □涼？大師	明？14年？ ？明明童子	大正4年？ 法光？童子	
孤法了心庵主	文化5年	辰6月7日	
西(園？)法明	？		
宝曆？ □□栄機禪定門 妙勝禪定尼 宝曆？7月12日			
？			
月光要隣信？	？	大正？7甲申	
涼禪童子	弘化3丙午年5月25日	彦五郎粹 3才而去	
孝安宗心信士 梅慈恵心信女	文久2壬戌年8月18日 小宮山彦五郎 行年55才		
活宗了機信士	享和元年辛酉5月23日	行年82歳小宮山仙之丞墓	
？			
鶴林永昌大師	明治2？	小宮山直太郎	
大光陽全信士 大參利園信女	？	元文4？5月？2日	
小宮山家之墓			
秋巖喜峯信士	明治40年10月1日歿行年62	小宮山庄右衛門	
隨峯喜雲信士 隨□晴雲信女	天保元年？2月27日 小宮山久七 行年77歳	天保8丁酉年5月？ 小宮山？妻	
小宮山家之墓			
寿山長栄居士 輪法智英大師	明治11年8月？6日 小宮山？ 享年？十九	明治4年1月7日妻 智□ 享年？	
徳外良助居士 徳芳智月大師	大正8年8月23日歿 小宮山嘉蔵 行年67才	大正15年7月8日歿 妻 小宮山か □ 行年65才	
寛政三亥三月十七日 法室妙現信女 平二良治			
安永五？天 智(紀？)信女 八月十六日			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
3	山崎		信女				d	単独	
4	山崎		大姉	34	1876		g	複数 (夫婦2組)	
			居士	56	1898				
			大姉	43	1861				
			居士 大姉	63	1886				
5	山崎		童女		1796		e	単独	童
6	山崎		信士		1791		e	単独	
7	山崎		信士		1801		e	夫婦	
			信女		1822				
8	山崎		信女		1807		e	単独	
9	山崎						e		
10	山崎		信士	29	1813		e	単独	
11	山崎		信女		1802		e	単独	
12	山崎		信女		1767		e	単独	
13	山崎		信女		1838		e	単独	
14	山崎							家	
15	山崎		信女	19			e	単独	
16	山崎		信女				e	単独	
17	山崎		信女	59			e	単独	
18	山崎						a		
19	山崎		信女		1764		e	単独	
20	山崎								
21	山崎		信士				e	単独	
22	山崎		信士		1762		e	単独	
23	山崎		信士		1763		e	単独	
24	山崎								
25	山崎		信女				e	単独	
26	山崎		定尼				d	夫婦?	
			定門						
図3-22									
30	山崎		童子		1764		a	単独	童
31	山崎		童子	7	1851		g	単独	童
32	山崎		童女				d	単独	童
33	山崎		信女					単独	
34	山崎		童子		1760		d	単独	童
35	山崎								
36	山崎		童女				e	単独	童
37	山崎		童女		1833		e	単独	童
38	山崎		信女		1786		e	単独	
39	山崎		信女	39	1784		e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
延保三?年延保という年号無し。 間違いか。 宝月?信女 正月?日			
昭譽林光大姉 泰譽然良居士 康譽妙然大姉	安譽貴心居士 文久元年七月五日 歿 山崎長平四十三才 泰譽妙迎天姉 明治十九年八月八 日歿 長平妻そよ 六十三才	明治九年六月十日歿 栄之助妻 わか三十四才 明治三十一年八月二十六日歿山崎 栄之助五十六才 後妻は昭和なので略	
智證善童女	寛政八?	九月十日	
綜譽術道信士	寛政三亥七月五日	山崎平治?	
衆譽寶成信士 成譽寶實信女	俗名山崎□助行年五十四 享和改元□酉三月十七日	山崎□助□妻 文政五壬午五月十六日	
覺譽取正信女	文化四丁卯三月三十日	山崎□助妻	
?			
願譽本授信士	文化十癸酉年	行年二十九才 山崎(松?)五郎	
了譽妙説信女	享和二壬戌年 四月六日	山崎千次郎 後妻	
理?保信女	明和四寅天	四月二十日	
普光妙心信女	天保九戌三月二十日	山崎平次郎娘□□	
山崎家之墓 墓誌:明治から平 成まで			
衆譽玉安信女	三月?	山崎午助娘 行年十九歳	
一譽(道?)?信女	?	二月二十二日	
因譽?信女	?	行年五十九才 山崎奔助?	
?			
(明?)和(元?)申年 妙?元信女 ?			
?			
大雲智道信士		十一月十一日 山崎□丹	
正譽道閑信士	宝曆十二壬午年	正月七日山崎治右衛門	
?譽?信士	宝曆十三癸未五月(二十?)三日	山崎庄五良	
?			
明安威相信女	?三?十一月?	?田之?妻	
徳?全?禪定尼 靈?定門			
宝曆十四申三月十一日 了廓童子			
春桂童子	嘉永四年亥正月七日	山崎忠右衛門子 七才 安兵?	
?智岸童女 二月(十一または 十七)日			
?信女			
宝曆十辰天 具元童子 四月十二 日			
?			
玉法童女			
慈光童女位	天保四巳年	正月二十六日	
天明六年午 □譽妙雲信女 正月 十二日			
□譽梅散信女	天明(四?)?三月二日	半過村石井清左工門娘 山崎庄助 妻 行年三十九才	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦	貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
40	山崎		信女		1789		d	単独	
41	山崎		信士		1796		e	単独	
42	山崎		信士	82			e	単独	
43	山崎		童子		1775		d	単独	童
44	山崎		居士 大姉	45 47	1854 1861		e	夫婦	
45	山崎						d		
46	山崎						e		
47	山崎		居士	71	1839		e	単独	
48	山崎		定門				d	単独	
49	山崎		大姉	65	1846		e	単独	
50	山崎		童子		1781		d	単独	童
51	山崎								
52	山崎		信士 信女		1847		e	夫婦	
53									
54	山崎						e		
55	山崎		信士 信女				e	夫婦？	
56	山崎						a		
57	山崎						d		
58	山崎		信士 信女		1816 1818		e	夫婦	
59	山崎		信士 信女		1828		e	夫婦	
60	山崎		信士 信女	67	1872 1911		e	夫婦	
61	山崎		信女 信士		1690		d	夫婦？	
62	山崎				1757		a	単独	
63	山崎		信女		1800		e	単独	
64	山崎		信士	83	1906		y	単独	
65	山崎		童子	3	1897？		y	単独	童
66	山崎		信士				d	単独	
67	山崎		信士 信女				e	夫婦？	
68	山崎		信士		1783		e	単独	
69	山崎		善男	49	1863		e	単独	
70	山崎		童子				e	単独	童
71	山崎		信士 信女				e	夫婦？	
72	山崎				1725		f	単独	
73	山崎	家系図16-1	信士	81	1786		e	単独	
74	山崎		信士		1835		e	単独	
75	山崎		信女		1778		e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
寛政元酉年 春相妙讃信女 十月二十一日			
教如一青信士	寛政八辰天	十一月朔日 山崎要七	
根譽伯善信士	? ?月十日	八十二歳 山崎庄助	
安永四乙? 設音童子 ?四日			
樹譽浄高居士 寶譽樹光大師	嘉永七(午?)天 行年四十五才 山崎(忠?)右工門	文久元酉年四月朔日 行年四十七才 □下邑 町田兵右衛門娘	
覺?			
?			
全譽泰庵居士	行齡七十有一 山崎忠右工門	天保十? 九月三日	
? ?宗禪定門 四月十一日			
泰譽妙安大師	弘化三丙午年	山崎忠右衛門妻 行年六十五歳	
安永十?年 清夢童子正月二十二日			
清岳浄豊信士	昭和:略		
證譽智誠信士 春譽智生信女		弘化四丁未年正月二十七日 山崎森藏妻	
?			
還譽本了信士 立譽知般信女			
?			
?			
廣譽大見信士 桂譽材清信女 位	文化十三丙子年 山崎廣右衛門	文政元戊寅天 九月二十九日 同人妻	
往譽觀心信士 一譽妙相信女 位		文政十一壬? 十月上二日 山崎兵助夫婦墓	
隨岳成光信士 受法妙安信女	明治五年七月十七日 山崎? 享年?才	明治四十四年十月十五日没 全人妻ちか□ 享年六十七才	
元?六月二十七日 ?譽貞速信女 元禄三?午六月十一日 正譽速覺 信士 位			
宝曆七辰年 六月二十四日	?		
應譽知教信女	寛政十二? 五月上二日	山崎□惣妻	
得岸生往信士	明治三十九年?月二十三日	山崎駒次郎□	享年八十三才
博善童子	明治三十?	山崎博□ 享年八十三才	
? ?慈春信士 三月二十七日			
?信士 ?信女			
霜譽の湛信士	天明三年?卯 山崎(庄助?)	十月二十三日	
乘願智運善男	文久三?天 十二月十八日	山崎彦造 行年四十九歳	
?譽?生童子	?十二?年二月四日	山崎清五郎	
?定筈信士 ?信女			
善光寺四十八(度?)俱□?	享保十乙巳年十月?日	塩尻邑 山崎良右衛門	
隨光利達信士	天明六丙午年	十二月十七日 山崎儀之丞	
託遺信士	天保六未年		
?譽智達信女	安永七(戌?)年	閏七月二日逝 山崎儀之丞妻	

正面	左側面	右側面	背面
揚讃單道信士 安室妙心信女	文化？	天保三年辰二月十八日 新地村田崎宇右エ門娘	
？			
寂岸良藤信士 寂法良順信女	明治十？(三または五)月二？		
□譽周應信士 位 光(岸？)明周信女 位		寛政三年亥 十一月八日	
實譽諦道信士	宝暦？	七月二十一日 山崎榮藏 吉倫	
？			
？元？			
？譽實相信士 ？信女	？ 山崎磯次郎 ？ 戊年八月二十三日卒 山崎磯次 郎妻		
？			
(光？)岸明目信女位			
冷雲童子			
？元貞宗信女□位			
？明寒信女			
？			
？			
花？			
梅譽？	寛政八丙辰二月十？		
願譽梵海 海譽勝寿	文化十二壬亥十一月十八日 山崎？	文化十二乙亥 三月上五日	
□譽得順信士	？		
？			
寛保元戊戌 恵教童女 九月初二日			
諦雲聽周信士	安永八辰？	八月□鳥逝	
？天信士	明和六？	七月朔日	
新燐樂法？	？		
智光惠讃信女	天明？	八月十五日	
峰譽秋音信士	(嘉？)永三戌九月二日		
？			
？			
享？善良？			
？			
洞譽樹林信士 ？譽相光信女	？ 四亥四月二十三日 山崎銀十良墓	弘化二巳六月二十八日	
寛延三年十月朔日 秋達童女 覺 了童女 明和四亥二月朔日			
深譽存廣信士 享譽貞存信女	？	山崎四吉工門夫婦墓	
？光？天信士 法庵智？信女	？	文化八巳未九月二十八日	
？			
？			
？九月二十六日			
先祖代々之墓			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
本書で地図を作成しなかった墓石										
(東川原)										
松本家1	松本				昭和					
松本家2	松本				1712			d		
3	坂田				1718			d		
4	坂田							e		
5	坂田				1766					
6	坂田							d		
7	坂田				1774			d		童
8	坂田							a		
9	坂田				1729			a		
10	坂田							e		
11	坂田							y		
12	坂田				1777			e		
13	坂田							e		
14	坂田				1715			e		
15	坂田				1733			e		
16	坂田				1844			e		
19	坂田							y		童
20	坂田							e		
21	坂田							e		
22	坂田							e		
23	坂田							e		
24	坂田							e		
25	坂田				1929			e		
26	坂田				1917			h		童・大人
27	坂田				昭和					
28	坂田				昭和					
29	北澤							e	単独	
30	北澤		居 大		1864 1864			e	夫婦	
31	北澤		居 大		昭和			e	夫婦	
32	北澤		居	88	昭和			e	単独	
33	北澤		居 大	77 72	昭和			e	夫婦	
34	北澤		大		1845			e	単独	
35	北澤	家系図3-3	居	76	1835			e	単独	
36	北澤		大		昭和				単独	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
松本家之墓			
正徳二辰年 圓?禪定門 ?月十一日			
享保三天 覺?定門 二月六日			
無念一行仁士			
明和三□天 玄量禪□定尼			
明和? ?定門			
安永三年天? 聯□童女 六月?日			
享保十四年(酉?)五月五日			
	坂田九右衛門		
坂田てう之墓	明(靈?)十七年二月十五日 谷五郎長女行年十九才		
月山珠(簾?)信士	安永六丁酉天		
□室真心信女	天??天		
圓應良光信士	正徳五丙申年 六月十有一日		
?信女	享保十八癸丑年八月七日		
桂?高(旧字)?信女	天保十五甲辰三月(六?)日		
坂田新之助墓	19興吉長男 行年八才		
白雲□露信女	赤坂村宮下新平? 藤田谷五郎後妻 三十三		
□翁清心信士		坂田谷五郎	
鐵祖妙 □信女		坂田谷五郎妻	
(因?)外成□信女		?才	
眞當良右信士		坂田?	
坂田谷五郎夫婦之墓	昭和四年一月三十一日		
明信童子 禪(旧字)成法雲良識居士	大正六年十二月十七日		
禪(旧字)戒風外白峰居士	昭和廿四年一月廿二日 谷治六十八才		
坂田家之墓			
保(譽?)清□大姉		北澤昌信の妻 とめ	
(來?)譽雲居士 轉譽壽法大姉	?	元治(一?)千四年四月十四日 北澤善九郎妻	31
雄譽義進居士 瑞譽貞倫大姉	(昭和?)四年五月一日歿 北澤義雄□ 享年四十六歳	妻□□	建立北澤義昭
顯譽壽照良道居士	昭和二年九月二日歿		
征譽勲續文(旧字)全居士 念譽禮厚貞範大姉	昭和三十四年五月四日没 北澤次郎□	昭和二十七年一月五日落 北澤よね□	
?譽妙善大姉	弘化二乙巳年	?之丞妻	
?譽順海居士	天保六乙未年	北澤□之丞	
?譽隔住妙榮大姉	昭和二十?年十二月七日		

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
37	北澤		居 童		昭和			h	家族	童と大人
38	北澤		居 居		1899	1899		e	家族	
39	北澤		大		1882			e		
40	北澤				昭和				家	
41	北澤		信女	21	1785			e	単独	
42	北澤	甚之丞1-4 甚之丞1-4	信士 信女	86 87	1806 1828	1828		e	夫婦	
43	北澤		居 大		1786 1792	1792		e	夫婦	
44	北澤	家系図3-3	信女		1785			e	単独	
45	北澤		信女		1794			e	単独	
46	北澤				1908			h	先祖代々	
47	北澤		信士 信女		1745 1779	1779		e	夫婦	
48	北澤		信士 信女		1716 1725	1725		e	夫婦	
49	北澤		居		1814			e	単独	
50	北澤		信士 信女		1742	1757		e		
51	北澤		童女					d	単独	童
52	北澤							d	単独	
53	北澤		居		1781			e	単独	
54	北澤		信士					e	単独	
55	北澤		信女		1812			d	単独	
56	瀧澤		信士		1778			d	単独	
57	瀧澤									
58	瀧澤		信士		1738			d	単独	
59	瀧澤		信女					d	単独	
60	瀧澤		信女		1778			d	単独	
61	瀧澤				1868			y	先祖代々	
62	瀧澤							d	単独	
63	瀧澤		居	19	昭和			e	単独	
64	瀧澤	家系図1-5	信士 信女	68	1830			e	夫婦	
65	瀧澤		真?		1827			e	単独	
66	瀧澤							d		
67	瀧澤		信女		1812			e	単独	
68	瀧澤		信女		1779			d	単独	
69	瀧澤									
70	瀧澤		信女					e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
乗譽義明居士 昭岳雄光善童子		昭和十五年?月十? ?夫?	
□譽旭芳居士 旭譽□雲居士	明治三十二? 北澤?	明治三十二年?月二十九日 北澤源太郎	
禪(旧字)譽貞心大師	明治十五年壬午二月十二日卒	北澤?郎	
北澤家之墓			北澤 仁
心譽明?信女	天明五己年	八月四日	
戒譽貴定信士 雲 定譽貴戒信女	文化三年 北沢弥兵衛 寅八月十六日	文政十一年 北沢弥兵衛妻 子八月十九日	
在譽宣定居士 宜譽暢演大師	寛政四壬子年三(五?)月十三?	天明六丙午十二月十五日 北澤甚之丞	
(芳?)譽智仙信女	天明五乙巳年	二月二九日	
運雪如庭信女	寛政六寅(星?)		
北澤□先祖代々之墓	明治四十一年三月二十一日建立		
善譽法山信士 法譽了善信女	延享二丑永月七	安永八亥三月八日	
正譽忌念信士 一進 秋譽妙急信女	□主 享保元申正月二十七日	享保十己十月八日	
乘譽淨圓居士位	文化十一甲?八月八日	北澤治五右衛門	
覺譽(正?)受信士 一進 ?譽妙受信女	同? 寛保二??月二十四日	宝曆七甲八月朔日	
(全?)(面?)童女			
?			
?居士 靈位	?一月?	天明元?六月?初?日	
通譽智恵信士	?(十四?)年	?五月廿六日	繁吉はなし
文化九酉年 明合信女 二月上(六日?)			
安永(七?) ?静感信士 八月七日			
?			
元文三戌年 □?休玄春信士			
?信女 二月七日			
安永七戌天 進應?信女 七月(十一日?)			
瀧澤榮重、等多数の名前 先祖 墓			
?			
忠元實道居士	昭和七年九月十?歿	瀧澤元博	
?觀廣信士 ?宗正傳信女	天保(元か九)年?十一月二十三日 ?	瀧澤勝右エ門	1-5の勝右衛門
?	?	文政十亥十月十五日	
文政?			
□了譽明念信女	文化九?二月六日	(徳?)治郎妻	
安永八?天? ?喜信女 三月八日			
?			
□譽智光信女			

正面	左側面	右側面	背面
文化八未年 見了信土位 十一月五日			
文政四巳年 法月? 栄信? 八月初〇日			
?			
境譽明圓大?	慶應?	北澤平之丞娘	
享保十七壬子年 ? 信? 靈位			
雪光照夢童子 (宝永?)? 法空妙信女		十一月十二日	
高遠家之墓	昭光院朗譽勇心仁良居士 香心院定譽清修妙忍大師		
觀譽順察信士 因譽英順信女	宝曆二十五年三月〇日(二十日か) 高遠伊助	明和二乙酉十月〇一日(二十一日か) 高遠伊助妻	
明譽音光信女	天保三壬辰年 十一月朔日	明 高遠?	
深譽妙廣信女	天保十巳亥年 十月十有三日	高遠喜代五(郎?)妻享年四十才	
禪? 童子(四月?)八日			
(感?)? 進?	文政八乙酉年十二月廿一日 高遠喜代五郎? 行年三才?		
皆譽智〇信女	文化十三丙子五月十八日 高遠伊助妻		
圓譽貞鏡女?	天保十四年癸卯年七月五日	高遠喜代五郎 娘 宇良 享年二十五才	
? 譽髓(合?) 信士	天保十丙申年二月	高遠伊助 享年八十二才	
英譽利達詳道居士 願譽妙請大師	昭和二十六年一月二十七日歿 高遠英利	昭和四十九年五月七日歿 高遠?	
勝善童子 心念嬰女	大正十三年五月二十二日 高遠長次郎二男 勝善 行年三才	?	
高遠房次夫婦之墓	明治三十年一月二十日 高遠房次 行年四十?	大正九年?	
故近衛砲兵上等兵高遠喜八之墓	遼陽院虞譽忠益良修居士		
高遠松次夫婦之墓		大正拾年	
高遠家之墓			昭和三十八年九月
高遠家之墓			昭和四十六年八月 高遠 昇
誠忠院殉譽定雄居士			
高遠家			
陸軍軍曹? 高遠照吉之墓			
高遠家之墓			
秋姻善童女	大正五年九月廿五日歿	高遠? 長女	
顯譽良脩居士 教譽貞(悠?)大師		明治二十九年二月十五日没 高遠入次郎 妻 上田町山口金四郎 長女 行年? 十二才	
高遠家之墓			昭和四十二年九月
?			
專譽智? 信士			
善山悦雲信士 專譽智清信女	文化二乙丑 正月十九日	文? 乙? 四月十八日 高遠久永右衛門	
? 女			
正月十八日			

正面	左側面	右側面	背面
はん(漢字がない)相卓栄信士位 心相栄受信女 静屋信士位	天明六丙午十一月二日	寛政五癸丑正月?日 高遠?次右衛門 天保六未歳 六月初四日	
?			
麗光院應譽妙英心念大師	明治三十一年八月二日卒	小諸町小林甚兵衛三女	
前譽現道居士 栄譽妙光大師		明治二十六?年 六月一日 妻 小林? 行年八十二歳	
天明四甲辰年 智秀童女位 正月?			
?入?			
慶徳院達譽間法至道居士 紫雲院法譽妙照貞純大師		昭和 略	
宝暦六子天 寒想應吟信女 十一月十一日			
?			
高遠政次一家之墓			
高遠家之墓			
高遠家之墓		昭和なので略	
坂田家之墓			昭和四十三年四月
安永二癸巳年 石峯祖竿禪定門 三月六日			
天明七年 寒兵清棲禪定門 ?三月十八日			
?			
?室?信士 ?信女			
文化十二年亥 橋庭妙香禪定尼 三月三日			
文化九申? 随堂妙喜禪定尼 十一月□二日			
?			
坂田家之墓			平成二年 十月 坂田文雄建立
勤譽山洋盡精居士		昭和二十二年七月二十九日歿	昭和二十五年三月
文政十二丑年 印往得恩信士正月二十四日 坂田政吉			
元禄十二年 □空妙春禪定尼墓 二月六日			
?禪定尼 ?位			
?			
?南無阿弥陀仏 □四月三日			
值秋慧泉信女	坂田茂吉 先妻	文政三辰 九月二十二日	
浄屋巖莊信女	坂田庄治郎 妻	文化十癸酉年 二月二一日	
享保九歳辰正月(十七?)日 正樹□(念?)信士 秋(屋)信女享保十年十月?日			
?			
?			
?			
?			

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
141	北澤		居 大	72 78	1906 1918	1918		e	夫婦	
142	北澤		大 居 大		1920	1927		g	夫婦 (先妻・後妻)	
143	北澤									
144	北澤									童・大人
145	北澤		童女		1920			y		童
146	北澤		信女		1812			e	単独	
147	北澤		居		1703			d	単独	
148	北澤		大		1704			d	単独	
149	北澤				昭和					
150	北澤									
151	北澤		信士		1781			e	単独	
152	北澤	家系図1-6	居		1832		1.01	e	単独	
153	北澤		信士 信女		1795 1802	1802		e	夫婦	
154	北澤		大					e	単独	
155	北澤		定尼		1724			d	単独	
156	北澤		禪尼		1758			y		
157	北澤		定尼 定尼		1745 1752	1752		d	複数	
158	北澤		信士 信女		1815 1827	1827		e		
159	北澤		信女		1823			e		
160	北澤		定門 信女		1745 1764	1764		d		
161	北澤				昭和				家	童・大人
162	北澤		居 大		1919			e	夫婦	
163	北澤		信士		1828			e		
164	北澤	家系図4-2	居		1823			e	単独	
165	北澤				1855			e	単独	
166	北澤		居 大	60 73	1875 1902	1902		e	夫婦	

正 面	左 側 面	右 側 面	背 面
安譽至道居士 專譽壽称大姉	明治三十九年十二月廿六日歿 北澤仁四郎 七十二歳	大正七年六月三十日歿 北澤仁四郎 妻(おかの?)	
唯譽妙圓大姉 正譽直道居士 雲譽松月大姉	昭和二年五月二日歿 以下省略	大正九年一月三十日歿 延七先妻 北澤□う 行年四十六歳 昭和十六年五月十三日歿	
雲譽遊法大姉	昭和十五年三月十一日歿		
澄雲心光信士 北澤梅次郎 行年 (七三?)歳 潤法善童女 全 はつ 行年 四歳 念法善童子 全 寅重 行年 三歳 柳相妙青信女 全 みよ 行年 十八歳			
彩心善童女	大正九年二月三日		
願譽善貞信女	文化九壬申年	十一月二十五日 北澤 喜平治 妻	
元禄十六年 道譽誠應居士 三月二十三日			
元禄十七年 妙譽智春大姉 二月十?			
北澤家 ?			昭和四十八年二月建立
運譽魯善信士	天明元丑八月四日	北澤喜平次墓	
超譽即生居士	天?	行齡八十歳 北澤喜七墓	
清?信? 自光子智信女	寛政七乙卯 十月(または二十?)四日	享和二壬戌年 二月二十九日	
進譽勇心大姉	天保?二月(十五?)日	中嶋村足立用兵衛之娘 北澤喜七 妻	
(享保九?)甲辰年 浸空(貞室?)定尼三月二日			
妙榮禪尼宝曆(八?)寅?妙永比丘 尼?			
延享二丑?二月三日 妙?禪定尼 榮(春?)禪定尼 宝曆?二月(十 一?)日			
春了智香信士 随意妙前□女	文化十二?正月三十日 山崎仙吉	文政十丁亥十一月朔日	
理圓妙善信女	文政六未正月十五日	山崎仙吉娘	
(延?)享二乙(丑?) 念?禪定門 ?雪?信女 明和元甲?二月三日 北澤家之墓			
崇譽淨道居士 淨譽妙清大姉	大正八年五月十八日歿 北澤(貞?)重	令人 妻 史さ	
莊譽嚴淨信士	文政十一子?十一月十九日	八十(二?)歳 北澤彌八墓	
本譽光願居士	文政六未極月十六日	俗名 北澤彦四郎	
嶺譽貞?	?	安政二乙(卯年?)八月?日 行年四十 北澤(彦?)左エ門ノ?	
魁譽嶺山居士 昭譽妙融大姉	明治八年?(二月二十二日?) 北澤彦左エ門 六十才	明治三十五年二月六日歿 彦左エ門 妻 はつの 行年七十 三才	

正面	左側面	右側面	背面
有譽淨徳信士 徳譽淨相信女	明治十五年十月三十日歿 山崎房次	大正十五年丙寅二月十八日歿 妻たま	
?			
正譽成念信士 往譽願生信女	文化三年寅四月朔日 北澤(文吉または丈吉?)大姉	天保(二?)?	
轉譽法輪信女	天保二年辛卯年二月廿三日	北澤(文吉か丈吉?)妻	
齡譽順了大姉	? 戌年二月?	? 年八十九歳 北澤彦四郎妻	
明譽雲光信女	文化四年丁卯十月十五日	北澤喜平治娘北澤彌八妻	
寛政三年辛亥年 妙□童女 正月廿五日			
泰譽運周信女		寛政(三?)年? 九月二十五日 北澤彌八母	
周譽泰山信士	寛政九年丁巳十一月二十九日	北澤市郎右衛門	
?			
法譽是生大姉	?	北澤元右衛門利勝 妻	
彌譽自性居士	明和(七?)? 月十三日	北澤元右衛門利勝	
迎雲善童女	文政?	北沢孫左衛門	
淳譽貞孝信女	?	北澤彦左衛門	
邇譽染水信士	天保四? 七月?	(五十三?)北澤彦左衛門	
?			
享保十二丁未 歸去秀圓信士靈 正月七日			
?			
青山知覚信士 ? 岸妙泉信?		嘉永五子四月五日 同 □(勢?)	
周室妙□信女	文政八四年二月四	瀧澤与兵衛妻	
祖清徳善信士	文政十丁亥年	十月二十二日 瀧澤繁治	
松山道春信士 春相妙周信女	明和八卯□月? (瀧澤?)寅八嘉	文政三庚辰三月十一日	
?			
滝澤家の墓			昭和四十四年八月吉祥日
生屋玄利信士 靈峰妙□信女	生 明和九壬辰年 四月二十日瀧澤(源)助夫婦		
(寛政?)十二申七月十八日 智周童女 ? 童女 享和三?			
? 譽春了信女 願譽馨圓信女	享保十九寅正月十九日	享保五子八月朔日	
盛林道栄信士	(寛政二庚戌歳?)	正月二十九日 俗名 瀧澤金平	
? 信士			
花山常因信士位	明和二月酉年	三月初四日 □沢□之丞	
安? 花光童子 三月			
松山道春(信?)士			
臨?	天明元辛丑年		
元文二? ? 月蓮如信士			
法山妙華信女	明治二十年三月?		
真應自照居士			
智喜(嗣?)意大姉 位	文政(九?)? 五月十五日	文政十亥年十月十日 瀧澤源助夫婦	
清水家の墓			昭和以降建立のため省略

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
204	清水									
205	清水				1748 1775	1775		e	夫婦	
206	清水		信士		1754			d	単独	
207	清水		信女					e	単独	
208	清水	家系図13-3	信士		1797			e	単独	
209	清水				1932			e		
210	清水				1921			e	単独	
211	清水				1870			e		
212	清水		童女	4	1928			y	単独	童
213	清水		童女		1914			y	単独	童
214	清水		童女		1914			e	単独	童
215	清水		童女		1926			y	単独	童
216	清水	家系図18-1	居 大	73 89	1887 1913	1913		y	夫婦	
848	山崎							g	家	
849	山崎	別系統半左衛門-4	信士 信女		1812			e	夫婦	
850	山崎		信士 信女		1814			e		
851	山崎			67 46 28	1925 1910 1917	1917		h	家族	
852	山崎		信女		1795			e	単独	
853	山崎							e		
854	山崎							g	夫婦	
855	山崎		信士 信女					e	夫婦	
857	山崎			39 77	1884 1914			g	夫婦	
858	山崎							g	家	
859	山崎							h	家	
860					1789			e		
(弥勒堂)										
532	香掛	家系図1-8	大 居 大	49 65 54					夫婦 (先妻・後妻)	
533	香掛		居 大	66	1878			e	夫婦	
534	香掛		童女		1805			e	単独	童
535	香掛		童女					e		童
536	香掛	家系図1-6	大	41	1802			e	単独	
537	香掛	家系図1-6	居	56	1811		2. 703	e	単独	

正面	左側面	右側面	背面
清水貞雄家之墓		昭和以降のため省略	昭和以降建立のため省略
(清?)眼? 横讀妙天?	延享五戊辰? 三月十一日	? 安永四未四月十二?	
宝暦4?六月十七日 真松岳良(園?園?)信士			
秋岳良照信女	文?	清水権左エ門妻	
山外自陽信士	寛政九丁巳閏七月十六日	清水権左衛門	
清水志げ之墓	昭和以降で省略	昭和以降の建立のため省略	
清水興吉之墓	清水勝?建立	大正六年三月十六日逝去	
花(願?)?	明(治?)三年十一月七日		
清水豊子之墓	昭和三年没	妙豊全童女 享年四歳	
泰真善童女	大正三年六月十八日歿		
教雲善童女	大正三年十一月十三日歿		
澄心善童子		大正十五年九月八日死亡	
禪戒一應諦念居士 禪戒清運寿光大姉	明治二十年亥五月一日? 清水新右衛門幸徳	大正二年?九月十日歿 清水幸徳妻ゆき	
山崎家之墓	昭和、平成:省略		
光学明心信士 心月妙□信女	文化9?酉年 ?	寛政?年2月10?日 山崎金六妻	
寶□葉信士 □寶花信女	文政?	文化11?年4月16日 同人妻	
山崎? 山崎? 之墓 山崎?	夫 大正14年8月7日歿 67歳 妻 明治43年4月1日歿 46歳	4女 大正6年10月16日歿28歳	
春□妙松信女	寛政7乙卯年	正月初7日 山崎丈助妻	
?			
山崎袈裟次郎夫婦之墓	夫 昭和:省略		
覚譽隆戒信士 戒譽光順信女	?	?	
山崎初太郎 山崎たき 之墓	明治17年8月13日歿 39歳	妻 大正3年10月7日歿 77歳	
山崎家之墓 墓誌:昭和から平成			
山崎家之墓 墓誌:昭和から平成			
津?祖梁信?	寛政元本?酉	3月?	
錦樹庵 嶺譽映香喬大姉 徳樹庵□譽實成良詮居士 祐光庵順譽信念妙照大姉	沓掛重厚 明治四十二年十一月二十三日歿 行年六十五才	妻沓掛ゆくの 明治三十年十二月 十八日歿 行年四十九才 後妻沓掛たか	昭和の建立
穩譽快安樂歳居士 快譽諒安意妙大姉	明治十一年戌寅八月二十五日 沓掛喜三郎 行年六十六才		
寶林明光童女	文化二丑?	四月十九日	
智蓮童女	?	沓掛氏?	
照譽明光大姉	享和二戊四月二日	沓掛吉郎治妻	
林譽明照居士	文化八戌年?	行歳五十五 沓掛吉郎治	

番号	家名	家系図	居士・大姉	享年	西暦		貫高	墓形		成人・童子の区別 童のみ記す
538	香掛		居 大 童子 童子 童子 童女						家族	童・大人
539	香掛		信女		1794			e	家族	
540	香掛		信士 信女		1778			e	夫婦	
541	香掛		信士		1754			d	単独	
542	香掛		信女		1720			d	単独	
543	香掛		信士		1708				単独	
544	香掛		信女					b	単独	
545	香掛		信士		1697			b	単独	
546	香掛							y		
547	香掛							y		
548	香掛		童女 童子 童女		1838 1855	1855		e	複数	童三人
549	香掛		大		1846			e		
550	香掛		居	10	1849			e	単独	
551	香掛	家系図1・7	居	50	1835			e	単独	
552	香掛	家系図1・7	大	45	1836			e	単独	
553	香掛	家系図1・7 家系図1・7	居 大	44 80	1836 1878	1878	1.03	e	夫婦	
(東福寺裏山)										
井谷家となり								d		
3	佐藤		居	70	1884			e	単独	
4								d		
8	佐藤		童子		1875			e		童
9	原田		大	37	1889			g	単独	
10	丸山		信士 信女		1857	1854		h	夫婦	
11	近藤		信女	27	1873			e	単独	
12			信士		1880			e	単独	
13	中山		童女	2	1917			g	単独	

正面	左側面	右側面	背面
尚功庵釋譽風雲繞散居士 慈照庵影譽光月乘雲大師	知照良善童子 T4. 4. 22春掛源 行年十四 旭芳善童子 M38. 7. 2春掛誠三 行年当才 □□善童子 T5. 12. 24春掛賢郎 行年当才 心□善童女 M32. 5. 2春掛文代 行年当才	昭和 春掛吉郎慈 昭和 妻ゆづ枝	
嘆譽妙讚信女	寛政六年甲寅?		
法山性覺信士 寒江利真信女	安永七戌?	十月十有四日	
宝曆□四甲申(天?天?) □水道清信士 五月十二日			
享保五子□ 秋□信女 八月二十八日			
宝永五子(天?天?) □室籠空全信士 四月?日			
?甲 ?栄信女 十月八日			
元禄十丁丑年 春山順清信士位 正月二十日			
丸い石塔			
丸い石塔			
智玉善童女 春岳善童子 稚愛善童女	智春 天保九戌?七月三十日 天保?	稚安政二卯年十一月四日	
光譽智海大師	弘化三年八月?日	春掛吉郎?後妻 行年?	
淨譽智生居士 10才で居士?	嘉永二巳酉七月一日	春掛弥太郎 行年十歳	
津譽梁海居士	天保六年?五月二十三日	春掛吉郎治重 (男?) 行歳五十才	
圓譽智鏡大師	天保七丙申年正月二十九日	春掛吉郎治妻 行歳四十五歳	
本譽自性居士 專譽直念大師	天保七年?十四 春掛吉平 行年七十五年	明治十一戊寅年三月二十日 春掛吉平妻 行年八十年	
すべて?		行年16年2月	
桂山臨應居士位	明治17甲申年 11月初2日	佐藤周藏国康 行年70才	
?			
峰紅童子	明治8乙亥年	佐藤周一郎長男	
冬覚妙恵大師	明治22年12月7日死	群馬県…原出澤太郎妻 □37才	
釋 國教信士位 □廣信女	安政4年巳年?月 丸山重吉男新藏?	嘉永7甲寅年3月11日 丸山重吉妻	
仙岸妙貞信女	明治6?酉4月9日	近藤東吉妻依 行年27	
仙岳道芳信士	明治13年8月18日死亡	?	
中山家之墓	昌庵直道□居士 妙?善童女 大正6年	?	

正面	左側面	右側面	背面
文叢良善信士 文室妙松信女	明治31年8月8日歿 中山文次郎 行年77歳	?	?
覚弘明慈信士	?	明治28年1月9日歿中山□次郎 行 年18才	
?			
?			
?			
須良? 信士			
? 譽貞心信女			
春應妙盛信女		中村莊藏妻都留子	
大塚家之墓			
善光寺百五十度供養塔	延享2? 梅應妙香大姉 2月18日	宝暦3癸酉天 觀相妙智大姉 10月朔日清水キ□	
觀祥妙祐大姉	文化八辛未歳	? 月21日清水万四郎妻 行年56歳	
鐵開義塔居士	安政6巳未年8月19日	行年85歳 清水彦太□	
清觀智淨居士	文久3癸亥年	行年56 清水半六	
因室妙緑大姉	文政5年午8月26日	行年44歳 清水半(爾?)妻	
皆山得道大姉	文政13庚寅年 7月上2日示滅	青柳宿 久保田清左衛門娘 清水 半之□妻行年18歳	
龍岸生雲居士 虎月□風大姉	弘化2乙未年2月2日 行年90歳 清水万四郎墓	天保11庚子年6月19日 同人後妻	
清應道林居士	寛政11巳未年	清水半四郎	
真應壽讚大姉	文化4丁卯年	9月上4日	
源理浄心居士 □? 蓮大姉	元禄4辛未年4月9日	享保16亥4月30日 清水彦?	
秋光妙薫大姉	寛保元辛酉年	清水半六妻	
寛阿道智居士	明和元甲申年	37976	
徳顔妙貞大姉	嘉永寅年	行年17歳 清水半六娘	
元? 連雪? 寒信女 11月13日			
全空童男	享和3? 年5月8日	清水菊四郎	
延享2巳 梅應妙大信女			
□妙連信女			
? 信女			
? 女			
清水家累代之墓		大正から昭和	明治から昭和
?			

[編者略歴]

たかはし もとやす

高橋 基泰 Motoyasu Takahashi, Ph. D

1962年茨城県生まれ

東北大学大学院経済学研究科博士課程修了

博士（経済学）

愛媛大学法文学部教授（西洋経済史）

Professor, Western Economic History, Faculty of Law and Letters, Ehime University

e-mail : moto@LL.ehime-u.ac.jp

主要業績

『村の相伝：近代英国編－親族構造・相続慣行・世代継承－』刀水書房、1999年（1999年度日本村落研究学会研究奨励賞受賞）

'Family Continuity in England and Japan', *Continuity & Change*, 22/1 (2007, May)

Village Inheritance in Early Modern England : Kinship Structure, Inheritance Customs and Generation Continuity (Matsuyama, 2003)

(Margaret Spufford との共著) 'Families, Will Witnesses and Economic Structure in the Fens and On the Chalk : Sixteenth and Seventeenth-Century Willingham and Chippenham' *Albion*, 28/3 (1996)

'The Number of Wills Proved in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Graphs, with Tables and Commentary', in G. Martin and P. Spufford eds., *The Records of the Nation* (Woodbridge, 1990)

日英村落共同墓地史の対比研究

2015年 3月31日

31 March, 2015

編者 高橋 基泰
Motoyasu Takahashi

発行者 愛媛大学法文学部総合政策学科
Faculty of Law and Letters,
Ehime University

印刷者 セキ株式会社
Seki Co., Ltd.
松山市湊町7丁目7-1

非売品